国士舘大学審査学位論文

「インドネシアの国民形成期におけるカルティニの思想とその政治－日本の津田梅子との比較を手がかりとして－」

ミヤ・ドゥイ・ロスティカ

氏　　名	ミヤ ドゥイ ロスティカ
学 位 の 種 類	博士（政治学）
報 告 番 号	甲　第３６号
学位授与年月日	平成２８年３月２０日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
学 位 論 文 題 目	インドネシアの国民形成期におけるカルティニの思想とその政治的役割　－日本の津田梅子との比較を手がかりとして－
論 文 審 査 委 員	（主査）教授　柴田　德文 （副査）教授　鈴木　裕之 （副査）教授　砂田　恵理加

博士論文

博士論文題目

インドネシアの国民形成期におけるカルティニの思想とその政治的役割　－日本の津田梅子との比較を手がかりとして－

氏　　名　　ミヤ ドゥイ ロスティカ

博士論文

インドネシアの国民形成期におけるカルティニの思想とその政治的役割

―日本の津田梅子との比較を手がかりとして―

Kartini's Philosophy and Her Political Role During the Formation of Indonesian Nation: In Comparison with Umeko Tsuda in Japan

ミヤ・ドゥイ・ロスティカ

Mya Dwi Rostika

目次

はじめに―問題意識の所在― 1
第一部　オランダ領東インドにおけるカルティニの思想 6
第 1 章　19 世紀末のオランダ領東インドとカルティニの誕生 9
第 1 節　インドネシアにおけるジャワの政治的位置とジャワの古代王国 9
第 2 節　オランダ領東インド帝国の成立とその政策 24
第 3 節　ジャワ社会の歴史的変容とカルティニの誕生 36
第 2 章　カルティニの書簡とオランダ 42
第 1 節　植民地主義政策の転換とカルティニ 42
第 2 節　カルティニとオランダ倫理主義派の交流 48
第 3 節　カルティニの書簡集の出版について 61
第 3 章　カルティニにおける祖国観 66
第 1 節　カルティニとヒンドゥー・ジャワ的伝統 66
第 2 節　カルティニとイスラム 79
第 3 節　カルティニの結婚観 82
第 4 章　カルティニの思想とオランダ植民地政策 85
第 1 節　カルティニと西欧近代思想 85
第 2 節　カルティニの思想とオランダ植民地政策批判 91
第 3 節　カルティニとオランダの倫理政策 92
第 5 章　カルティニの女子教育観 94
第 1 節　オランダ領東インドにおける教育事情 94
第 2 節　カルティニから見たジャワ伝統社会における女性 97

第 3 節　カルティニと女学校設立課程 100
第二部　19 世紀末日本における津田梅子の思想 104
第 1 章　津田梅子のアメリカ留学の背景 104
第 1 節　明治政府の誕生と女子教育政策 104
第 2 節　明治新政府の女子留学事業 111
第 3 節　津田梅子とアメリカ留学の背景 115
第 2 章　津田梅子の思想 129
第 1 節　津田梅子の日本観 129
第 2 節　津田梅子の宗教観 133
第 3 節　津田梅子の結婚観 138
第 3 章　津田梅子の女子教育観 142
第 1 節　津田梅子から見た日本女性 142
第 2 節　津田梅子の女子教育観 146
第 3 節　津田梅子と女子英学塾の設立 151
第三部　国民形成期のインドネシアにおけるカルティニの業績に関する評価―津田梅子との比較を手がかりとして― 158
第 1 章　カルティニの時代背景 158
第 2 章　現代インドネシアにおけるカルティニの位置づけに対する論争 159
第 3 章　女性の地位をめぐるカルティニの思想と行動　―津田梅子との比較を通して― 163
第 4 章　カルティニと民族意識の芽生 171
参考文献 176
付録

はじめに—問題意識の所在—

カルティニ(R.A. Kartini)は女子教育、婦人解放の先駆者としてインドネシアでは高く評価されてきた。1964 年にスカルノ大統領は、彼女を国家英雄に列し、その誕生日（4 月 21 日）を、カルティニの日（婦人解放の日）としてインドネシアの祝日にした。カルティニは国家的英雄として、インドネシアの小・中・高の歴史の教科書に取上げられているだけではなく、その名前は道路名、学校名、広場名、病院名などに頻繁に使用されている。これはインドネシアに限らず、オランダにもカルティニ通り（R.A. Kartinistraat）が設けられる程、インドネシアにとっても、インドネシアを支配したオランダにとっても重要な人物とみなされている。

図 1.カルティニ

J.H. Abendanon, ed. *Door Duisternis Tot Licht: Gedachten Over en Voor Het Javaansche Volk van Wiljen Raden Adjeng Kartini*. (‘s-Gravenhage: Luctor et Emergo, 1912), no page.

カルティニ(図１)は 1879 年 4 月 21 日、ジャワのプリヤイ(Priyayi—貴族階級)の家庭に生まれた。当時のプリヤイの慣習（adat）では女子を家の外へ出すことは固く禁じられており、ましてや子供といえども婚前に男の子達と接触することなど

論外であった。しかし、父のソスロニングラト(Sosroningrat)は開明的人物であり、カルティニや彼女の妹達を、息子たちと同様にヨーロッパ小学校（ELS）へ入れた。カルティニはこの小学校で西欧の自由な教育を体験し、オランダ語を通して自らの能力を開花させる基盤を形成することになる。

しかし、ソスロニングラットの開明性にも限度がありカルティニは 12 歳になると当時ジャワにおける貴族階級の子女の慣習としての義務であったピンギタン（Pingitan―婚前蟄居、以下ピンギタンと称する）の生活に入るため、学校を辞めさせられた。こうして、カルティニは屋敷内に閉じ込められて外の世界から完全に切り離された。この不自由な生活を送る中でカルティニは次第にジャワの慣習に批判的な考えをもつようになる。このピンギタンの時期こそがカルティニに自らと自らの祖国を見つめ直し、独自の思想を誕生させることになったと言えよう。

このピンギタン期においてカルティニはオランダ語の様々な新しい思想の雑誌、新聞や本を読みあさり、さらに彼女の能力を高く評価する倫理派のオランダ人達との文通を通じて自らの思想を深め、オランダへの「留学」という夢を抱くようになった。しかし、カルティニのあまりに明晰な頭脳とオランダ植民地政策に対する鋭い批判が彼女の留学の道を閉ざしてしまうこととなる。その結果、カルティニは自らの夢を次の世代に託し、ジャワの女性達の解放を教育によって実現するために私立の女学校の設立を決断する。

1903 年ジュパラの知事邸で設立されたカルティニの学校はオランダ領東インドにおける最初の女学校となる。この学校の設立はオランダ倫理主義者達にも大きな影響を与えるようになる。しかし、1904 年、カルティニは父の強い勧めと彼女が設立した学校への協力の申し出を受けて、レンバン知事と結婚（後に知事には正妻がいたことが解る）することになるが、次の年の 1904 年出産を終えた数日後に突然産褥熱のために夭折した。

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのオランダ領東インドにおいて、カルティニ

という少女が生き抜いた 25 年間という短い生涯はインドネシアの歴史の中で大変革を生み出す時期でもあった。それは単にオランダ植民地政策の転換期であったというだけではなく、ヒンドゥー・ジャワの古代王国誕生以来の長い歴史と伝統とイスラム・マタラム王国の伝統を含めた再編成に向う時代でもあった。このような時代に生き、そして苦しんだ彼女の思いはオランダ人の友人への書簡として数多く残されている。この書簡集は彼女の死後『闇を通して光へ―ジャワ人についての、ジャワ人のための故ラデン・アジェン・カルティニの思考― (Door Duisternis Tot Licht: Gedachten Over en Voor Het Javaansche Volk van Wiljen Raden Adjeng Kartini)』として原文のオランダ語で出版された。それ以降、カルティニの書簡集は様々な言語に訳された[1]。

本論文はインドネシア研究の「古典」[2]ともいわれるこの「書簡集」を通して、インドネシアでのカルティニの業績を改めて再検討することによりその業績を再評価することを目的としている。カルティニについては、彼女が女性の地位と女子教育の重要性を強く主張し、そのための女子学校を設立した業績により、インドネシアにおいては女性解放の先駆者として高く評価されてきた。しかし、近年彼女のこの評価に対異論が提起されはじめている。イスラムの立場から強い批判が出されると共に、カルティニは独立戦争で戦った英雄と比較してその貢献が少ないという批判もある。また、カルティニはオランダの倫理派と交流があったため、オランダによって作り上げられた英雄とみなす人も多い。これも、当研究を行う動機のひとつとなっている。　カルティニの書簡集で述べられている内容は単に女子教育や女性の地位の問題に限定されない。そこからは西欧の近代自由主義思想、植民地政策、人種差別、ジャワの伝統と慣習、イスラムの在り方、「原住民」[3]社会の問題など、19

[1]カルティニの書簡に関して第一部 2 章の 3 節に詳しく後述する。
[2]土屋健治、『カルティニの風景』、めこん、1996 年、77 ページ。カルティニの書簡集はインドネシア研究の「引用の宝庫」として、引用者によってそれぞれの意味づけ与えられていくのである。
[3]支配者であるオランダは現地に住んでいる人を差別的に「原住民(Inlander)」と呼んだ。しかし、

世紀末のジャワ、ひいてはインドネシアが抱えた多様な問題に対するカルティニの思想を読みとることができる。そのため、カルティニの業績について幅広い視点からの検討を試みる。

カルティニの業績をより客観点に評価するために、19 世紀後半というほぼ同時代にカルティニと変わらない幼少期にアメリカに留学し、西欧教育の洗礼を受けた日本の女子教育の先駆者である津田梅子を比較の対象として取り上げる。

カルティニも津田梅子も共にアジアという「遅れた」地域にあって、女性の地位の向上のために学校を開設した。その点で西欧教育を他の人に先立って受けることができたアジア人女性としての共通点がある。

しかし、彼女達が設立した学校は全く異なった経路をたどった。なぜそのようなことになったか、特にカルティニの学校設立への意識とその実現への経過を、津田梅子の場合を参考しながら検討する。そして 19 世紀から 20 世紀にかけて生み出されたカルティニの書簡集『暗黒を越えて光明へ』[4]の背景にあるインドネシア特有の歴史と文化についても現代的視点から分析を試みる。

使用文献について

本論文で使用し、また参考した主な文献は以下の通りである。

カルティニのオランダ語版の書簡集（1912 年、2 版）を中心とし、適宜、インドネシア語、日本語、英語の翻訳を参考にしつつ分析を行った。本論文で使用したカルティニの書簡集は次の通りである。

英語では、最新版の Joost Cote(ed./trans.) *Kartini; The Complete Writings 1898-1904*(1st ed., 2014, 838 pages)を使用している。これ以前の英訳は、アベン

まさしくその「差別されている」という意識と共に、「差別する」側の言語や思想を身に付けた知識人のアンビバレントな立場を明確にするために、本論文では、敢えて「原住民」という言葉をそのまま使用する。

[4]土屋健治による訳。土屋健治、前掲書、149 ページ。

ダノン編集のオランダ語版の書簡集を底本としているが、アベンダノン版では書簡のうちオランダの植民地支配に対する都合の悪い部分がかなり編集され、完全なものではなかった。Cote 版は書簡そのものを底本としているため、最も充実したものである。カルティニが亡くなった後の状況に関しては、Joost Cote(ed./trans.) *Realizing the Dream of R.A. Kartini: Her Sisters' Letters from Colonial Java*(2008)を使用している。本文献はカルティニの妹達の書簡集である。

インドネシア語版の書簡集は、,アベンダノン編オランダ語版の第４版と第５版を底本とした、Sulastin Sutrisno(trans.)*Surat-surat Kartini: Renungan tentang dan untuk Bangsanya*(2nd ed., 1981)、および F.G.P. Jaquet (ed.) *Kartini: Brieven aan meuvrow R.M. Abendanon-Mandri en haar echtgenoot met andere documenten* を底本とした同編訳者の *Kartini: Surat-surat kepada Ny. R.M. Abendanon-Mandri dan suaminya*(3rd ed., 2000)を使用した。そして、カルティニが亡くなった後に関しては、Frits G.P. Jaquet が編集したカルティニの妹たちの書簡集をインドネシア語訳した、Mia Bustam(trans.)*Surat-surat Adik R.A. Kartini*(2005)を参考にした。

日本語の書簡集は牛江清名と早坂四郎の訳書を主に使用したが、両者共、インドネシア語版からの翻訳である。また Siti Sumandari Suroto, *Kartini: Sebuah Biografi* の日本語訳（舟知恵・松田まゆみ）の『民族意識の母カルティニ伝』も使用した。

第一部　オランダ領東インドにおけるカルティニの思想

現代インドネシアの国土は、西はスマトラ島から東部はパプア州（ニューギニア島西部）に至る東西 5200km という広大な領域に広がる。インドネシアは世界最大の群島国家であり、350 以上の民族を抱える世界有数の多民族国家である。この地域は、他の世界にない多様な自然物産に恵まれていたため、海が穏やかなジャワ海を中心に中国やインド西方世界を結ぶ通商路（海のシルクロード）として世界の文明の交流地でもあった。そのため、紀元前２～３世紀にはインドシナ半島よりドンソン文化が伝えられ、紀元後にはインド文明が伝えられて、各地に王国が誕生するようになる。

当論文で取り上げるカルティニが誕生したジャワ島では、土地が豊かで稲作にも適していたため、古マタラムやマジャパヒト（Majapahit）など高い文明を築いたヒンドゥー・ジャワ古代王国が繁栄した。14・15 世紀にはイスラムの流入により、イスラム・マタラム（Mataram）王朝がヒンドゥー・ジャワの伝統の強いジャワの内陸部（コタグデ）に誕生する。しかし、このイスラムはペルシアやインドで体系化されたスーフィズム（イスラム神秘主義）の影響が強かったため、それ以前のジャワ・ヒンドゥの理念とも容易に結びつく形で重層的に受けとめられた。

イスラムのジャワ進出とほぼ同時期、インドネシアの各島々ではポルトガル、スペイン、イギリスなどの西欧列強の力が及ぶようになる。17 世紀初頭に入ると、オランダ東インド会社（オランダ東インド会社、De Vreenigde Nederlandse OostIndishe Compagnie、以下は東インド会社と略す）がこの地域全体の交易の独占を目指して、この地域全体を間接的に支配するようになる。

19 世紀に入ると東インド会社が植民地経営の失敗で破産し、オランダ本国による直接植民地経営が始まった。1830 年代に始まったオランダの植民地政庁による強制栽培制度と徴税請負制という収奪体制はジャワの農民に苛酷な労働を強いた上、彼

らをさらに貧困な状態に追い込むこととなり、農民層からの反対運動が激化するようになる。

こうして莫大な利益を得たオランダは、植民地支配を深化させるため、バタヴィア（現在のジャカルタ)、スマラン、スラバヤなど、ジャワの北部海岸の植民地都市を中心に道路、鉄道、住宅街などのインフラ整備を行った。また、オランダ本国は、東インド会社が交易の独占を図っていたインドネシアの各地を直接に植民地として支配することにより、オランダ領東インド帝国の成立を目指した。この植民地国家完成の過程は、ヒンドゥー・ジャワ王国の伝統の強い内陸部と国際主義的性格の強い北部海岸地方という二つの異なった政治的・文化的世界を解体し、オランダ領東インド帝国という新しい政治空間に再統合するという過程でもあった。この新しい空間で始まった人々の移動・交流・文化の流通は、オランダ語で modern（モデルン、近代的）と呼ばれた新しい時代のスタートであった。しかし、ジャワの原住民は強制労働と極貧の状況に置かれたままであった。

19 世紀の後半、ヨーロッパで自由主義の風潮が広まるようになると、オランダの植民地政策に対する批判が強くなる。その結果、20 世紀に入るとそれ迄よりは原住民に対して植民地政策の範囲内ではあるものの一定の配慮をした、倫理政策と呼ばれる政策に転換される。しかし、農民の立場には本質的な変化はなかった。それにもかかわらず、この倫理政策の登場は、結果としてオランダの意図（植民地体制の安定と強化）とは全く逆の方向でインドネシアの民族意識を目覚めさせる機能を果たすことになった。まさに、この歴史的な大転換期に、転換を体現する先駆者として登場したのが、ジャワの貴族の娘であったラデン・アジェン・カルティニという少女であった。

カルティニは、女性は無知の中に取り残されないように教育を受けねばならないと考え、ジャワで初めての女学校を設立した。しかし、カルティニは出産後、の産褥熱のため突然亡くなってしまう。彼女の死とその時代の社会環境のため、その後

の学校の発展は望めなかった。しかし、彼女の行動と努力は現代インドネシアで高く評価され、カルティニは女性解放の英雄としてインドネシア女性全体のシンボル的な存在となっている。カルティニが行ったオランダ植民地政策に対する鋭い批判を考慮すれば、彼女の死の直後に誕生したインドネシア最初の民族主義団体であるブディ・ウトモ(Boedi Oetomo)に先立って、インドネシアで最初の民族意識を持った存在として重要な意味をもつものと考えられる。

第一部では、カルティニが生まれた時代背景や、彼女の思想と行動及びその意味について論じる。また、教育や文通を通じた自由主義的な西欧文明との接触が彼女の思想―宗教観、祖国観、結婚観、西欧観―にどのような影響を与えたのか、あるいはその教育観にどのように反映したのかについて西欧中心主義思想の関連で分析を行う。最後に彼女が女子教育の先駆者として社会で果たした役割について論じる。

第１章　19 世紀末のオランダ領東インドとカルティニの誕生

第１節　インドネシアにおけるジャワの政治的位置とジャワの古代王国

第１項　インドネシアという国名の誕生とその政治的意味

学術用語という出自を持つインドネシアという言葉[5]が後に国民国家の名称として用いられるような新しい政治的な意味を獲得するのは、1922 年、オランダ領東インドからオランダに留学していた学生の団体が、それまでの Indische Vereeniging（東インド協会）[6]という団体名を Indonesische Vereeniging（インドネシア協会）と改めたことに始まる。その後 1924 年になると東インド各地の青年団体の間で、「プルヒンプナン・インドネシア（Perhimpunan Indonesia―インドネシア協会）」というムラユ語（インドネシア語、ムラユ語などを含むオーストロネシア語の一言語）の用語が幅広く使用されるようになる。そして、オランダの植民地であった東インド全体を統一して示すものとして「インドネシア」が理解されていく。

とくに「インドネシア」という用語は民族運動の指導者であったスカルノによって、1927 年、インドネシア国民党（PNI-Partai Nasional Indonesia）設立の演説で、「サバンからメラウケまで」[7]という有名な表現と共に使われたことで、広大な

---

[5] 今まで研究された限りでは、「インドネシア」という語は西欧が最初に使用されたのは、1850 年、イギリス人類学者 J.R.ローガン（J.R.Longan）であったとされる。その後、1884 年、ドイツの人類学者バスティアン（Bastian）によって「インドネシア」という用語がオランダ領東インドの領域を示す用語として使われることにより、より一般化された。また、考古学者 N.J.クロム(N.J Krom）が *Hindou Javaanesche Geschiedenis*『ヒンドゥー、ジャワの歴史』で、「インドネシア」を使用するようになる。しかし、当時はまだインドネシアという名は、政治的な意味を持たず、純粋に学術的な性質から歴史学者など、少数の人々に限って使われていたに過ぎなかった。SitisoemandariSoeroto, *Kartini Sebuah Biografi*(Jakarta: Djambatan, 2001), 6.

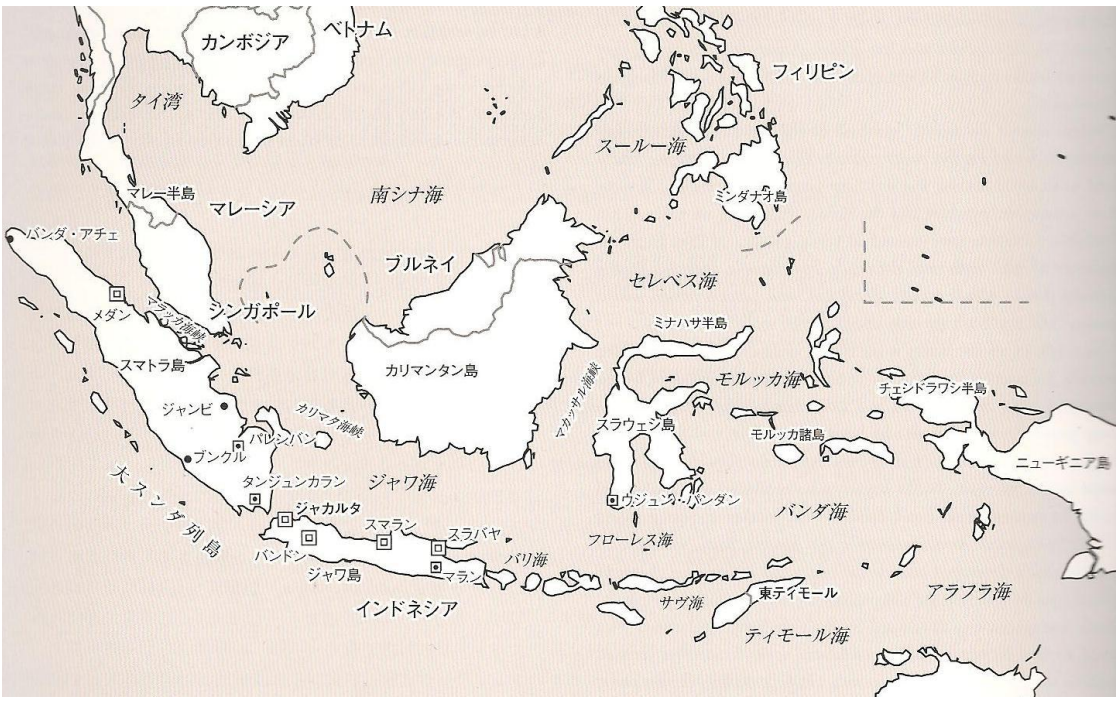
[6]オランダ語では自国から遠近を基準にインド亜大陸を「前インド」(Voor-Indie)、そこより東を「後インド」(Achter-Indie)と呼んだが、モルッカ諸島やジャワ島に根拠地を置くようになると、後インドの方が圧倒的に重要になり、単に「インディエ」と言えばこの地域をさすようになってしまった。つまり、日本語では「インド」と訳さず、普通は「東インド」と訳す。永積昭、『インドネシア民族意識の形成』、東京大学出版会、1980 年、4 ページ。

[7]サバン（Sabang）はインドネシアの最西端の都市であり、インドネシアの０キロメートルと言われている。マラウケ（Merauke）は最東端東部のイリアン・ジャヤ（ニューギニア）の都市である。5200km 離れたこの二つの都市の名前を並べることにより、スカルノは一般の人々に母国インド

東インドの領域に散在していた数百の民族世界にも浸透していった。

このインドネシア[8]の歴史はジャワ島を中心として文化的、経済的な発展を遂げてきた。

図 2. インドネシア全図



出典：戸津正勝、『インドネシア更紗のすべて―伝統と融合の芸術』、朝日新聞会社、2007 年、214 頁。

図 2 のインドネシア全図で見られるように、ジャワ島は西先端から東先端まで東西 1040 キロメートル、南北 300 キロメートルにしか過ぎない小さな島である。ジャワ島の面積はわずか 132,000 平方メートルで全国土面積の 7%であるにもかかわらず、この島にインドネシア総人口の約 60 パーセントの人口が居住している。2010 年におけるインドネシア中央統計局の統計調査によると、ジャワ島の人口は約 1 億

ネシアの全領土をイメージさせた。

[8]この論文ではインドネシア共和国の成立以前についても便宜的にインドネシアという呼称を用いる。

3千7百万人[9]で、この数はインドネシアの総人口の3分の2を占める。この人口の多さはジャワがインドネシアにおいて政治的、文化的中心であることを意味している[10]。

ジャワ島は東部から西部にかけて東西に連なる火山群があり、これらがジャワ島に農業に適した肥沃な火山性の土壌をもらしている[11]。ジャワの山々の裾野からはゆるやかにいくつもの平野が広がり、そこに、モンスーン気候[12]によってもたらされる豊富な水が河川や水路などを通じて供給される。このような自然環境はジャワ島が水田耕作に適していることを示している。その結果、ジャワでは定住農耕社会が発展し、その歴史のなかで固有の文化が育くまれ、アダット（Adat－慣習法）を基盤とした独自の社会構造が成立した。このことはまたジャワにおいていち早く古代王国が誕生した背景でもある[13]。

第2項　ジャワにおける古代王国の誕生とその特徴

オランダの植民地になる以前のインドネシアでは、各地域に数々の王国が存在していたが、他の島の王国が主に貿易を基盤としていたのに対し、ジャワ島の諸王国

---

[9]ジャワ（西ジャワ、中部ジャワ、東ジャワ、ジョグジャカルタ、バンテン、ジャカルタ特別州）の正確な人口は136,610,590人である。インドネシア中央統計局、2010年のデータによる。Biro Pusat Statistik Indonesia, 2010.（2012年7月9日更新）www.bps.go.id/linkTabelstatis/view/id/1267

[10]Denys Lombard, *Nusa Jawa Silang Budaya 1: Batas-batas Pembaratan*(Jakarta: Gramedia Pustaka, 2005), 23.

[11]Ibid., 21-22. B.M. Vlekke,*Nusantara*.（Jakarta: Gramedia, 2008), 13.

[12]モンスーンとはもともとアラビア海に半年交代で方向を変えた吹く風につけられていた呼び名であるが、後々は季節によって風向を変える風を総称として用いられるようになった。

[13]Clifford Geertz, *Agricultural Involution: The Process of Ecological Change in Indonesia*（Berkeley: The University Press of California, 1963）, 32-37.

は農業を基盤としている点が特徴的であった。

紀元１世紀から３世紀にかけて、ジャワやスマトラを中心に、インドから宗教（ヒンドゥー教・仏教）、言語（サンスクリット語）、文学、美術、建築、統治制度などがもたらされた[14]。それは、ジャワ島西部のジャカルタ近郊やボゴールに近いチセダン川流域で発見された石碑から推測できる。その石碑に書かれているパラウィ（インドネシア語では Palawa）という文字の形と書き方から、約紀元４世紀頃と推測されている[15]。

石碑に記述された諸王国はインドネシア土着の権力によって成立していたが、南インドの国々との貿易を通じて発展を遂げたものと思われている。その国の王は、南インドから来たバラモン教（Brahmanism）[16]の知識人や宗教指導者からの影響によって、宗教上の儀式、国の形態や組織など国の体制を整備していったとされる[17]。その結果、ジャワの古代王国のなかで言語（サンスクリット語）、宗教（ヒンドゥー教・仏教）を中心に多くの分野でインド的な価値観がジャワの土着の価値観と融合

---

[14]G. Coedes, *The Indianized States of Southeast Asia*(University Press of Hawaii, 1967), xvi-xvii.

[15]クンチャラニングラット、加藤剛・土屋健治・白石隆訳、『インドネシアの諸民族と文化』、めこん、1980 年、37 ページ。

[16]バラモン（Brahmanism）は古代のヴェーダの宗教とほぼ同一の意味で、インドの各種の民族宗教・民間信仰が加えられて、徐々に様々な人の手によって再構成されたのが現在のヒンドゥー教である。バラモン教という名前は後になってヨーロッパ人がつけた名前で、仏教以降に再編成されて出来たヒンドゥー教と区別するためにつけられた。ヒンドゥー教という名前もヨーロッパ人によってつけられた名前であり、特にヒンドゥー教全体をまとめて呼ぶ名前もなかった。バラモンとは司祭階級のこと。正しくはブラーフマナというが、音訳された漢語「婆羅門」の音読みから、日本ではバラモンということが多い。バラモンは祭祀を通じて神々と関わる特別な権限を持ち、宇宙の根本原理ブラフマンに近い存在とされ敬われる。最高神は一定していない。儀式ごとにその崇拝の対象となる神を最高神の位置に置く。階級制度である四姓制を持つ。司祭階級バラモンが最上位で、クシャトリヤ（戦士・王族階級）、ヴァイシャ（庶民階級）、シュードラ（奴隷階級）によりなる。また、これらのカーストに収まらない人々はそれ以下の階級パンチャマ（不可触賤民）とされた。カーストの移動は不可能で、異なるカースト間の結婚はできない。

[17]G. Coedes, *The Indianized,* 23-32.

していくことになる[18]。

この時代、ヒンドゥー教・仏教の文化は東南アジアのほぼ全域に強い影響を与えた。特に、国家の形成において大きな影響を与えたのは身分制度（階級制度）についての考え方である。この考え方によると、国家は多様な集団から構成されるが、全ての集団は王の下に位置づけられる[19]。王は神の子孫とみなされ、その存在は神聖なものとされ、国の全ての頂点に位置づけられた。また、神は全宇宙の中心に存在すると考えらた。このような価値観は現代のジャワ社会においても、基層文化として大きな影響力を有している[20]。

ジャワでは、8 世紀半ばにジャワ島中部でマタラム王国が誕生しプランバナンを始めとするヒンドゥー寺蹟群を建立した。また、同じくジャワ島中部ではスリウィジャヤの影響の下でサイレンドラ（Sailendra）王朝が成立し、ボロブドゥール寺院を建立した。その後、ジャワではマジャパヒト王国（1293 年―1520 年頃）が全盛期を迎えるまで、ヒンドゥー王国の伝統が続いた[21]。

これらの王国の中で、マジャパヒト王国はジャワ島における最大の古代王国として大きな発展を遂げた。マジャパヒト王国の中心は東部ジャワ内陸部に位置し、1293 年にラデン・ウィジャヤ（Raden Wijaya、1293～1309 年在位）によって建国され、その勢力はジャワ島外にまで及んだ。14 世紀後半にマジャパヒト王国はハヤム・ウルク王の下で最盛期を迎える。当時マジャパヒト王国の勢力の範囲はほぼ現在のイ

---

[18]クンチャラニングラット、前掲書、37－38 ページ参照。

[19]ジョン・D・レッグ、中村光男訳『インドネシア歴史と現在』、サイマル出版会、1984 年、13 ページ。

[20]ベネディクト・アンダーソン、中島成久訳『言葉と権力－インドネシアの政治文化探求』、日本エディタースクール出版部、1995 年、51－54 ページ参照。

[21]青山亨、「シンガサリーマジャパヒト王国」、石澤良昭編、『東南アジア史　第 2 巻東南アジア古代国家の成立と展開』、岩波書店、2001 年、198 ページ。

ンドネシアと同じ領域であったともいわれる。マジャパヒト王国はジャワの歴史上、最後で最大のヒンドゥー王国であった[22]。

15 世紀、マジャパヒトが衰退していく時期にマレー半島のマラッカ、北スマトラ先端のアチェ、西ジャワのバンテン、中部ジャワ北部海岸のデマック、そして南スラウェシのゴワなどの諸王国が登場した[23]。これら諸王国はイスラム教の影響を大きく受けて成立した。イスラム教の最初の波はペルシアあるいは南インドのグジャラートから到来し、拡大したものである。その他、当時メッカやメディナを巡礼してインドネシアに帰ってきた人々によって拡大した。このようなジャワにおけるイスラムの普及は北部海岸に始まり、ジャワの内陸部にも広がることとなる。それは、宗教指導者（Wali）影響によるものが大きかった。まずヒンドゥー文化の影響が比較的小さかった地域の人々の日常生活の中にイスラム教の影響が浸透していった。たとえば、スマトラ島北部のアチェ、ジャワ島の北部海岸のバンテン、デマック、スラウェシ島南部のゴワなどの地域である。一方、ヒンドゥー・ジャワ文化に強く影響されたジャワ島中部や東部のような地域ではイスラム教がヒンドゥー・ジャワ文化に影響された「ジャワの宗教」に変形し、独特な文化が誕生したのである[24]。

このことは 1575 年、ジョグジャカルタ郊外のコタグデに誕生したイスラム・マタラム王国に典型として見られる。内陸部ジャワにおけるヒンドゥー・ジャワ文化を基盤にしたマタラム王国に力を及ぼすようになったイスラムは、ヒンドゥー敵

---

[22]同上書、216-221 ページ参照。

[23]Sartono Kartodirdjo, *Pengantar Sejarah Indonesia Baru: 1500-1900, Dari Emporium sampai Imperium Jilid 1*（Jakarta: PT. Gramedia, 1988）, 28－60.

[24]クンチャラニングラット、前掲書、40－41 ページ。

神秘主義と親和性の高いスフィーズムの色合いが濃かった[25]。その結果、誕生したイスラム・マタラム王国によってジャワの伝統的文化はより多様な展開を遂げていく。ジャワの王宮文化はヒンドゥー・ジャワ文化とイスラム文化の融合した独自の文化が発展することになる[26]。

イスラム・マタラム王国は中部、東部ジャワを中心に、ヌガラアグン（Negaragung—内領）、マンチャヌガラ（Mancanegara—外領）、プシシル（Pesisir—北部海岸）、タナー・サブラン（Tanah Sabrang—外島）の４つの領域を支配した。また、ヌガラアグンには、王宮（Kraton）、王都（Kota Kraton）、と王侯領（Vorstenlanden/Daerah Kraton）が存在した[27]。

上記のようなジャワ王国の構成と王の存在の意義に関する概念はジャワの内陸部に位置するヒンドゥー・ジャワ古代王国の伝統として農民層に幅広く受け継がれていった。他方、商業的、イスラム的影響の強い北部海岸地方においては身分制に基づいた価値観よりも、平等主義的傾向が強く見られる[28]。

第３項　「野の世界」の文化とその性格

ジャワ島にはジャワ人が中心的民族として存在し、ジャワ語を中心に社会が形成され、ジャワ文化が古代ヒンドゥー・ジャワ文化に基づいた価値観によって独自の

---

[25]M.C. Ricklefs, *Polarizing Javanese Society: Islamic and other visions (c. 1830-1930)*, (Singapore: NUS Press, 2007), 3.

[26]戸津正勝、「バティック・インドネシアの成立過程—多民族国家における国民文化形成の一類型—」『インドネシア更紗のすべて—伝統と融合の芸術』、朝日新聞社、2007 年、167 ページ。

[27] Denys Lombard, *Nusa Jawa Silang Budaya 3: Warisan Kerajaan-kerajaan Konsentris*, (Jakarta:Gramedia Pustaka, 2005), 99.

[28]クンチャラニングラット、前掲書、38 ページ。

発展を遂げてきたが、その中心的な地域はジャワ島の南部の内陸部地域である[29]。一般に、貿易を生活の中心とする「海の世界」と対比して、濃厚を生活基盤とするこの世界は「野の世界」と呼ばれる。その範囲にはスラカルタ（ソロ）、ジョグジャカルタといったクラトン(王宮)を中心とした都とその周辺に広がるバニュマス、ケドゥ、マディウン、マラン、クディリといった地域が含まれる[30]。古代からジャワの村落共同体で発展を遂げてきた神秘主義的な土着文化と紀元後に入ってきたヒンドゥー・仏教文化、さらに 14 世紀以降に入ってきたイスラム神秘主義文化が融合し、今日の独特なジャワ文化を形成するに至った[31]。

現在、この地域にジョグジャカルタ王家とスラカルタ王家が存在しているが、各王家は「マジャパヒトの伝統を継承する中心的な世界」[32]として今なお重要な役割を果たしており、そのため「ジャワ核芯域」（Kejawen）[33]となってきた。従って、野の世界というのは、王宮を中心とし、王宮から発信された文化を基盤とする世界といえる。王は神の子孫として崇拝され、神聖とみなされ、国（クニ）のすべての上位に位置する。また、王はジャワ宇宙の中心に位置するとみなされてきた。その意味は王宮がすべての価値ある文化の発信源であると考えられるところにある[34]。

野の世界たるジャワ社会では、王は最上位の身分に位置づけられ、プリヤイと呼ばれる王族および貴族層が支配層を形成して、一般庶民であるウォン・チリ（wong

---

[29] 土屋健治、『インドネシア―思想の系譜』、勁草書房、1994 年、7 ページ。一方、クンチャラニングラトは「クジャウェン（ジャワ核芯域)」という表現を使用している。土屋健治、「ジョグジャカルタ―中部ジャワにおける〈みやこ〉の成立の展開」『東南アジア研究』21 巻 1 号、1983 年、18 ページ。

[30]同上書、 397 ページ。

[31]M.C. Ricklefs, *Sejarah Indonesia Modern*(Jogjakarta: Gajahmada University Press, 1981), 3-6.

[32]Selosoemardjan, *Social Changes in Jogjakarta*(Cornell University, 1962), vi.

[33]Clifford Geertz, 42.

[34]クンチャラニングラト、前掲書、38－39 ページ参照。

cilik―庶民）と区別される[35]。ジャワ社会はこのような身分制によって成り立ってきた。身分制の特徴は公私にわたっており、上の身分の者が下の身分の者に命令をすることが当然とされる。このように野の世界における伝統的社会では出自、血縁に基づいて身分が階層的に形成され、プリヤイは上層、ウォン・チリは下層に位置付けられてきた。

ジャワ社会における王宮文化の特徴は、プリヤイと呼ばれる王族あるいは貴族階級特有の価値観にある。プリヤイはウォン・チリと違って、物質的な欲望を抑え、より高貴な精神の獲得を目指した内面的な価値の追求を人生最大の目的とすることが求められる。そのため、世の中の神秘性を理解できるように精神的な訓練が必要とされ、絶対的な自己抑制を行うように務める。このような行動によって、「アルース（Alus）」という王宮文化を支えるもっとも重要な価値観である規範が生み出される。アルースというのは、一般に上品という意味であるが、内容は純粋、洗練、高雅、丁重、精巧、霊妙、微妙、開明、平穏、調和というものすべてが含まれている。この規範は、たとえば礼儀作法、食事、化粧などの身だしなみ、言葉づかい、人間関係など王候貴族の全ての生活分野に及ぶとされる。王宮内で行われる伝統的儀式の他、誕生会や結婚式も当然にその対象となる[36]。それはまた、服飾としてのバティック（ジャワ更紗）、クリス（刀）、金・銀細工のアクセサリーや家具類、木彫を始めとした装飾品といった多様な工芸品、あるいは舞踊、ガムラン（伝統の

[35]Kuntowijoyo, *Raja Priyayi Dan Kawula*(Jogjakarta: Ombak, 2004), 1-13.
[36]Clifford Geertz, *The Religion Of Java*(Illinois: The Frees of Glencoe, 1960), 287.

楽器）、音楽、ワヤン・クリット（影絵劇）を始めとする芸能もその重要な構成要素であった[37]。

一方、チョチョク（Cocok－適正）という価値観もプリヤイ文化のなかの重要な規範である。異質な要素がうまく調和してひとつの和音を成すとき、それは「適正」であった結果であり、「適正」の産物はすべて望ましい状態であると考えられる。望ましい状態を得るために、空間、時間、人間の動機などのすべての要素も自然の形において「適正」であらねばならない。プリヤイにとって「適正」であることこそ自然の究極的秩序である。この観念を土台にして、ジャワの宗教体系は、内的に相互依存の関係にある次の三つの部分から構成される。すなわち、(1) スラマタン（Slametan）またはクンドゥレン（Kenduren）と呼ばれる共食儀礼、(2) 精霊信仰、(3) ドゥクン（Dukun）または、ウォン・ピントゥル（Wong Pinter）と呼ばれる治療に関する伝統的知識ならびに呪術である。その他、経済的側面では、利益を追求するより、和合を保つことが強調され、利益を犠牲にしても、社会からの要望に合致することが重要であると見なされることとなる[38]。プリヤイのこのような態度は一般庶民においても村での問題の解決や会議の上も大きな影響を及ぼしている。現在でもジャワでは激しい議論や感情的な対立などは極力避け、適切な妥協による「合議」（Musyawarah）を通じた全会一致（Mufakat）に達するような問題解決が理想とされる。そのため、意見や感情の対立のない場合、社会はルクン（Rukun－和合）の状態にあるとされる[39]。ルクンの状態を保つ上において強調されるのは、他者に「ク

---

[37]戸津正勝、前掲書、 167 ページ。

[38]Clifford Geertz, *The Interpretation of Cultures: Selected Essays*(New York: Basic Books,1973), 126-141.

[39]Hildred Geertz, *Indonesian Cultures and Communities*(New Haven: Southeast Asia Studies, Yale

ルマット」（Kurmat または Ngajeni-敬）をもって接する態度である。特に年上の人や上の地位にある者に対して「敬」の態度が重視される。行為の正直さよりも不和を見せないことによって、表面的な和合を保つことのほうが望ましいとされる[40]。ジャワにおける伝統的な支配である「長老支配」はこのような価値観の上に成立していた。

この「敬」を支える態度には、さらに「イシン」（Isin―恥）、「ウェディ」（Wedi―畏れ）、「スンカン」（Sungkan―慎み）という三つの価値観がある[41]。「恥」は、恥ずかしい、決まり悪い、罪などを意味し、裸を人に見られたときに感じるのもイシンである。イシンは克己心を持つためのもっとも重要な要素であり、それによって互いに対立を回避できる[42]。「畏れ」とは、社会的意味においてある人が行った行為の不愉快な結果に関する懸念を意味する。たとえば、親に怒られるおそれや幽霊に対するおそれなどである。「慎み」は、目上の人や未知の人の前に自己を統制することを知ることであり、それを優雅におこなうことは「慎み」を知ることでもある[43]。

ジャワにおいて、クラトン（王宮）の存在を支えているのは、ジャワ語であり、支配の内向性がもっとも制度化されているのも、この言語空間である。ジャワの世界はジャワ語の世界とも言える。この言語空間において敬語体系が大変に重視され

University, 1963), 46-47.

[40]Niels Mulder, *Individual and Society in Java- A Cultural Analysis*(Jogjakarta: Gadjah Mada University Press, 1992), 22-26.

[41]Hildred Geertz, 110-114.

[42]Niels Mulder, 26.

[43]口羽益生、「ジャワ人の世界観」『東南アジア研究』、２巻１号、京都大学東南アジア研究センター、1964 年、8 ページ。

ており、非常に複雑である。最高位のジャワ語は王が神に語るジャワ語であると理解されており、その言葉を理解できる人は王以外誰もいないと信じられている[44]。

ジャワ人は日常生活で、ジャワ語を使うことによってジャワ人になると言われる。ジャワ語で話すことによって自然的な形で人々はジャワ語が内包する複雑な価値観を身につけるようになるということである。たとえば、ジャワ語を使う時、話す相手の身分を、その人の年齢や社会的地位によって区別しなければならない。それは、ンゴコ（Basa　Ngoko）とクロモ（Basa　Krama）の二種類のジャワ語があるからである。ンゴコは、親しい人、あるいは年少の人とか社会的地位の低い人に対して使用され、クロモはあまり親しくない人で年齢や地位が同じ人、あるいは年上の人や高い地位にある人に対して用いられる[45]。

また、クラトンの権威のシンボルであったプリヤイの価値観やそこから来るアルース文化はジャワ社会の中でもっとも重視すべき高いレベルの価値を意味している[46]。このような価値を身につける努力をすることこそ、ジャワ庶民の理想の姿であり、そこから身につけられた倫理観こそがジャワ一般庶民の共通の価値観となっている。

第 4 項　「海の世界」の文化とその性格

以上論じてきたジャワの伝統社会特有の政治的価値観を基礎とした野の世界とは別に、ジャワにはもうひとつの別の価値観を基盤とした世界が存在している。こ

---

[44]土屋健治、「ジョグジャカルター中部ジャワにおける都の成立と展開」、『東南アジア研究』、第 21 巻 1 号、24 ページ。
[45]クンチャラニングラト、前掲書、397 ページ。
[46]同上書、6 ページ。

こは、海によって、インドネシア各地の人々と物質が往来し、また、古来、中国、インド、ペルシャ、アラブ、ヨーロッパの世界と結びついた国際色豊かな「海の世界」である[47]。このネットワークを通じて国際的な交易品が流通し、その拠点として海岸や河川沿いに港が造られた。

一方、マラッカ海峡沿いをはじめ、東南アジアの海域の各地に小国家が成立した。これらの国家は一方では交易活動をめぐる権益の争いがあり、他方では共通の文化が広がり、一つの文化圏域がそこに成立していた[48]。

古来から海のシルクロードとして交通の要衝であったジャワ海に面したジャワの北部海岸地域では国際色豊かな文化が形成されてきた。この地方の都市は外来の言語、宗教、文化が流通し、様々な人々がこの地域を行きかい、港とその周辺に様々な民族が存在していた。従って、港は国際都市であり、異なる人に対する寛容と開放性をもった文化や価値観が形成されることとなった[49]。その意味では、港は交易活動の拠点であるとともに、外来の文化を受容する窓口としての役割を果たした。海の世界のなかで、回流する情報が各地の王族あるいは貴族の間だけでなく、各地の社会集団の間にも徐々に広がっていた。とくに、さまざまな集団の間で用いられる共通語として、スマトラ南部を起源とするムラユ語が広まっていったことは非常に重要であった[50]。

---

[47]Denys Lombard, *Nusa Jawa: Silang Budaya 2- Jaringan Asia*(Jakarta: Gramedia Pustaka, 2005),29-34.

[48]土屋健治、『インドネシア―思想の系譜』、前掲書、8ページ。

[49]戸津正勝、「インドネシアにおける民族文化と国民統合―BATIKの変容過程を中心として―」『国士館大学教養論集　第28号』1989年、60－61ページ参照。

[50]土屋健治、前掲書、 12ページ。

15 世紀の最盛期にマラッカ王国は東南アジア海域世界の交易ネットワークの中心となるとともに、この世界のイスラム化の過程で中心的役割を果たしてきた。この時期以降、ジャワの海の世界の交易拠点にはイスラム王権が成立した。イスラム教浸透の最初の波は、ペルシアあるいはインドのグジャラートから到来した神秘主義的なイスラム教であったため、ジャワの北部海岸諸国家の信仰したイスラム教も同じような要素を含むものであった[51]。

他は、階層的な社会構造、儀式に対して信心深さの強調、神に対して個人の自由がなく、キヤイというイスラム指導者に絶対的に従わなければならないなどはこのイスラム教の特質であった[52]。この神秘主義的な教えのイスラムがジャワの北部海岸地方に広がっていった。ジャワの民間神話の中でワリ・ソンゴ（Wali Songo、九聖人）とよばれ、民間信仰の中で聖人と崇められる布教者が広めた宗教もこのような性質のイスラム教であった。これらの布教者の活動によってイスラム教はジャワの北部海岸地域だけでなく、内陸部地域にも広がっていくようになる[53]。

17 世紀に始まるジャワにおけるイスラム教の第二の浸透の波は北部海岸地方を中心に非ジャワ的なイスラム教徒を生み出すようになる。この純粋なイスラム教徒はメッカとマディナを巡礼し、ジャワに帰ってきた人々がもたらしたのである[54]。

この歴史過程において、ジャワへのイスラムの浸透はイスラム原理により忠実なサントリという社会的文化的階層をもたらした[55]。このサントリ文化は宗教的、社会的、政治的に重要な影響を及ぼした。

---

[51]Sartono Kartodirdjo, *Pengantar Sejarah*, 25-26.

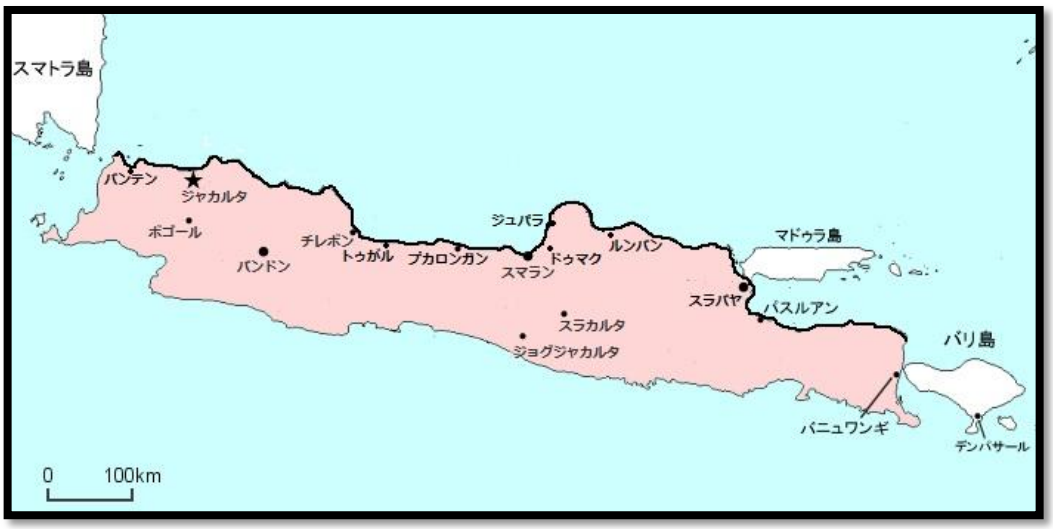
[52]W.F. Wertheim, *Masyarakat Indonesia dalam Transisi*(Yogyakarta: Tiara Wacana, 1999), pp.151-152.

[53]Sartono Kartodirjo, 23-25.

[54]M.C. Ricklefs, *Polarizing*, 47-49.

サントリとはもともとプサントレン（pesantren）[56]に滞在し、ウラマー（ulama－イスラムの学者）やキヤイ（Kyai－イスラムの指導者）の下にイスラム教を学んでいる生徒という意味である。サントリは常にモスクとキヤイの自宅の近くのポンドク（pondok）という共同寮に住む。このサントリ、モスク、キヤイとポンドクは強く結ばれて、サントリ文化のアイデンティティやシンボル、あるいは伝統文化として機能している[57]。独立後、サントリは地方的保守層のナフダトゥール・ウラマ（Nahdatul Ulama）政党に参加した。それに対してそのうちの都市の進歩層は、ムハッマディヤー（Muhammadiyah）といったイスラム近代派とされる組織やマシュミ（Masyumi）のようなイスラム近代派政党などの支持基盤となった。

図 3. ジャワ島における「野の世界」と「海の世界」の地図



出典：筆者作成

---

[55]Clifford Geertz, *The Religion of Java*, 386.

[56]Pesantren はジャワ語の pasantrian（パサントリアン）から由来し、サントリが集まる場所という意味である。

[57]Djoko Suryo, “Tradisi Santri dalam Historiografi Jawa”(Makalah Seminar Pengaruh Islam dalam Budaya Jawa, 30 Nopember 2000), 2-4.

19 世紀に入ると古くから海による国際交易の拠点となった北部海岸の各町は植民地化の中で都市として近代化し発展するようになる。都市の間に道路、鉄道など建設されたため、港町、工業地帯、避暑地や別荘地となった地区や商業地区などに変化した[58]。

上記（図 3）で表示されたのは「野の世界」と「海の世界」の地域である。「野の世界」の地域はジャワ島の中部に位置するジョグジャカルタとスラカルタである。一方、地図で表示された「海の世界」の地域は西から東へ、バンテン、チレボン、トゥガル、プカロンガン、スマラン、ジュパラ、ドゥマク、スラバヤ、パスルアンと延びる海岸線である。

第 2 節　オランダ領東インド帝国の成立とその政策

第 1 項　オランダ領東インドにおける間接支配とジャワの社会

オランダは国内の領土が狭く、資源にも恵まれないため、海業や海運によって活路を見い出そうと東南アジアに進出するようになる。そのため、オランダは商船事業に国力を注入するようになる[59]。

オランダ商船がはじめてジャワ海にやってきたのは、1595 年のことである。1602 年にはアジア貿易を独占する目的で特許会社「オランダ東インド会社」が設立され、総督 J.P.クーンの下で 1619 年にバタヴィア[60]（Batavia）を会社の本拠地とした。

東インド会社は、香辛料・森林産物・熱帯特産物などの貿易の独占を目的としていた。株式会社であるにもかかわらず、会社の権限は、条約締結・自衛戦争の遂行・

---

[58]Peter J.M Nas, “Kota di Indonesia” dalam *Kota-Kota Indonesia: Bunga Rampai*(Jogjakarta: Gajah Mada University Press, 2007), 305.

[59] M.C Ricklefs, *Sejarah Indonesia,*37.

[60] バタヴィアの語源はオランダのラテン語名のバタヴィである。現在の首都であるジャカルタ（Jakarta）の起源は 300 メートル四方のバタヴィア要塞であった。

要塞の構築･貨幣の鋳造などを含み､あたかも独立国家のように強大なものであり、国家の中の国家ともいうべき存在であった[61]。東インド会社は、「オランダ領東インド」（Nederlandsch Oost Indies）つまりインドネシアを交易という目的を達成するために間接的に統治した。その統治はもっぱら経済的なものであり、文化・社会・政治の領域には踏み込んでこなかった。したがって、インドネシアは、この後、350年の長きにわたってオランダに支配されるのであるが、最初の約200年間は主に貿易独占による経済的支配によって半植民地状態に置かれた。

しかし、17世紀後半に入ると、初めは領土に関心のなかったオランダは次第に領土の支配に対する野心を増大させていく。当時、マタラム王国はスルタン・アグン（在位1613年～1645年）の治政下にあった。王は1628年～1629年、二度にわたってバタヴィアを攻撃した。この試みが失敗に終わり、マタラム王国はジャワ海沿岸部の地域から次第に内陸部へと後退せざるを得ない状況となった[62]。オランダ東インド会社の直轄地が拡大するに従い、東インド会社の支配はバタヴィアという点からジャワ島内陸部という面に拡大し、経済活動は商館交易から領域支配に変質した[63]。

17世紀、マタラム王国はスルタン・アグンの治政下でジャワのほぼ全域を支配していた。その後、王国は地方領主の反乱や後継者の争いによる内紛、さらに宗教の抑圧を繰り返していった。この過程で、王はオランダ東インド会社との協定によって反乱や対立を行う集団を抑えるため、調停役としてオランダに頼り、その見返りとしてマタラム王国はオランダにその領土を次第に縮小していった。1678年、北部海岸の貿易港スマランは東インド会社に掌握され、西ジャワの貿易国バンテン王国は1682年に征服された。また、東インド会社は1705年にチレボンを掌握して、1743

[61]永積昭、『オランダ東インド会社』、講談社、2007年、68ページ。
[62]ジョン・D・レッグ、前掲書、133－134ページ参照。
[63]土屋健治、「ジョグジャカルタ…」、前掲書、21-22ページ参照。

年にはほとんどのジャワ島北部海岸は完全に東インド会社の支配下に入った。その後、1755 年にオランダの強力な武力の下にギヤンティの和議[64]が結ばれ、強大な勢力であったマタラム王国はジョグジャカルタのスルタン家とスラカルタのススフナン家に分裂させられ、さらに 1757 年にはススフナン家からマンクヌガラが分離し、また 1813 年にはジョグジャカルタからパクアラムが分離させられた[65]。このようにして、19 世紀初頭には、マタラム王国の系譜に連なる 4 王家が分離することになる。このマタラム王国の分裂によって、ジャワの王宮の政治的な力はさらに弱体化することになった[66]。また、オランダによって軍事力を封印された王宮は「正統なか達のジャワ文化」を維持することで、王宮の権威と正当性の維持を図らざるを得なくなる。これ以来ジャワの政治的対立は、武力争いや反乱ではなく、ジャワの伝統的な文芸復興運動をはじめとする各王家間の文化的対立となっていった[67]。

第 2 項　オランダ領東インド帝国の成立とジャワの社会

1789 年のフランス革命によって東インド会社は東インド諸領域を間接的な支配からオランダ本国による直接的な支配へとその方針を転換した。オランダ本国は、1795 年、フランスの支配下に置かれた。1800 年に、破産状態となった東インド会社はオランダを占領したフランス革命軍によって強制的に解散させられた。そのため、オランダ東インド会社の支配領域は 1800 年以降、「オランダ領東インド」(Nederlandsch Oost Indies)として、オランダ本国の植民地となった。これ以来、約 150 年間、この地域に対するオランダの支配は直接支配へと転換されることになる。その統治がオランダ政府による直接統治になるに従って、その支配は各地域の

---

[64]1755 年にマタラムとオランダ東インド会社との間に結んだ条約である。マタラム王国はジョグジャカルタのスルタン家とスラカルタのススフナン家に分裂させられ、その後またさらにススフナン家からマンクヌガラが分離し、そしてジョグジャカルタからパクアラムが分離した。

[65]M.C. Ricklefs, *Sejarah Indonesia,* 149-150.

[66]Denys Lombard, *Nusa Jawa Silang Budaya 3,*63-65.

[67]土屋健治、「ジョグジャカルタ…」、前掲書、18 ページ。

伝統的な社会制度や政治構造にまで及ぶようになった。植民地からの収奪を第一とするオランダの政治機構は住民に対する封建的権力の強化を図り、ジャワの伝統社会の組織はオランダ植民地支配の目的に合致するように変質させた[68]。

その結果、ジャワの政治的対立は、武力闘争や反乱ではなく、ジャワの伝統的な文芸復興運動をはじめとする文化的な競合へと転換していく。戦闘集団としての機能をなくした各王国の家臣団は、後に官吏として給与生活を送るようになった。この階層は原住民社会から後に植民地原住民官僚になっていくことになる。各王侯領の実質的な統治者はオランダ人の理事官であった[69]。

19 世紀に入ると、オランダ植民地政府は更なる利益の拡大を目指してジャワにおける植民地政策を大きく転換するようになる。その一大事業として推進されたのが、1808 年総督のヘルマン・ウィレム・ダンデルス（Herman Willem Daendels - 1808－1811 年就任）による「郵便道路 de Groote Postweg」（Jalan Raya Pos ）の建設であった。後にこの道は 「ダンデルス道路」（Jalan Daendels）として有名になる。ダンデルス道路はジャワ島西端のアンイェル（Anyer）から最東端のパナルカン（Panarukan）まで約 1000 キロに広がり、1809 年に完成した。

ダンデルス道路の完成はジャワ島における交通革命であり、伝統的な社会に様々な変化をもたらした。ダンデルス道路の開通により、ジャワ島東西間の旅が短縮され、馬車によってジャワ各都市が結びつけられて行った。ダンデルス道路は、ジャワ島北部海岸沿いの町のあり方も大きく変化させた。この道路が作られる前は、運

---

[68]Sartono Kartodirdjo, “Kolonialisme dan Nasionalisme di Indonesia pada Abad 19 dan Abad 20,” *Lembaran Sedjarah,* No.8 (Juni 1972), 1-3.

[69]土屋健治、「ジョグジャカルタ....」、前掲書、19－20 ページ参照。バタヴィアは 1619 年、西ジャワの西部プリアンガンは 1677 年、スマランには 1678 年、東部プリアンガンのチレボンは 1706 年、ジャワ北部海岸の地域には 1743 年にオランダの直轄地となった。Denys Lombard, *Nusa Jawa: Silang Budaya 1*, 105.

用通路として川と海が使用されていた。この川に沿って住宅が建設されたが、ダンデルス道路ができたあとは、船が使われなくなり、住宅建設も道路に沿って建設されるようになった[70]。

ダンデルス道路は新しい住宅街や市場や商業地をもたらし、また、新しい都市も誕生した。それまでのジャワの町は王宮を中心とするジャワの伝統的宇宙論に基づいて建設されていた。この道路の完成後、植民地の発展を目指した都市が各地域に次々と建設されるようになった[71]。

オランダ東インド会社時代から扱ってきた香辛料が供給過剰に陥るとヨーロッパでの需要は減少するようになり、香料は次第に重要性を減じていった。そこで新たな商品作物として砂糖やコーヒーなどの熱帯作物の生産が拡大するようになる。これらの熱帯作物を確保するために実施されたのが、1830 年にオランダ領東インドの総督として派遣されたヨハンネス・ファン・デン・ボス[72](Johannes van den Bosch)によって導入された「強制栽培制度（Cultuurstelsel)」であった。この制度はジャワ農民に農地の 20%に指定作物を植えさせ、政府は指定価格で買上げるというものである[73]。植民地政府が指定した栽培作物は、コーヒー・砂糖きび・藍・茶・煙草・綿花・胡椒などである。これらの熱帯商業作物は大量にヨーロッパへ輸出され、オランダに莫大な利益をもたらした[74]。

しかし、ジャワでは強制栽培制度が導入されたため米作は後回しになり、

---

[70]Peter J.M Nas, Pratiwo, “Jawa dan de Groote Postweg, La Grand Route, The Great Mail Road, Jalan Raya Pos” dalam Peter J.M Nas (ed) *Kota-Kota Indonesia: Bunga Rampai* (Jogjakarta: Gajah Mada University Press, 2007), 268-269.

[71]Ibid.,272-274.

[72]Johannes Van den Bosch（1780－1844 年）はオランダ領東インド総督であった。若いときに軍人となり、一時西インドにも派遣されたが、1830 年に第 43 目の東インド総督に任じられ、ジャワ戦争（1825－1830 年）による政府の窮乏を補うため、強制栽培制度を制定した。1834 年に帰国し、1840 年まで殖民相を勤めた。

[73]Robert van Niel, *Sistem Tanam Paksa di Jawa*, (Jakarta: LP3ES, 2003), 140－141.

[74]Ibid.,183-186

1843-1848 年には中部ジャワで米不足によって多数の死者を出すに至った。このような植民地の悲惨な状況に対してオランダ本国内からも批判が生じた。ムルタトゥーリ[75]が自らの植民地官僚としての経験を基に植民地における収奪の実体を暴露した『マックス･ハーフェラール』という小説は、オランダ本国のみならずヨーロッパの有識者に衝撃を与えた。1870 年にスエズ運河が開通すると、ジャワ島北部海岸の港町は更に大きな変容を遂げ始める。最初に海によって交易の中心拠点であった港町は植民地都市に変化していく[76]。これらの植民地都市は西欧的な都市として、経済の中心地あるいは行政の中心地として建設され、居住する人々の住宅地は民族あるいは人種によって区画整理された。植民地都市は王宮とカンプンと呼ばれる原住民の集落、商店街と華人の町、要塞や西欧館を中心とした西欧街の三つの区分から形成されていた[77]。このような都市構成が植民地都市の特質である[78]。

この植民地都市が発展するようになると、都市はインドネシアの各地から様々な民族が集まる空間となった。また、そこではオランダ人、アラブ人、インド人、そして中国人が重要な構成員となった[79]。

中国人（以下古くからのインドネシアへの移民者を華人と呼ぶ）がいつインドネシアにやってきたのははっきりしないが、オランダ商船がバンテン港に来たときにすでに中国人は住みつき、商売をしていたようである。現在、ジャワに居住する華

---

[75]エドワード・ドウウェス・デッカー（Eduard Douwes Dekker）（1820－1887 年）は『マクス・ハフェラール（Max Havelaar)』（1860 年）書いたときムルタトューリ（Multatuli）というペンネームを用いた。1940 年彼は西ジャワのバンテン（Banten）にあるレバク（Lebak）の副理事官であった。しかし、「マクス・ハーフェラール」というオランダによる強制栽培制度に対する告発本を書いたため、オランダ政庁によってオランダ本国に帰国させられた。

[76]Peter J.M Nas, 305.

[77]ある都市では要塞のかわりに副理事官（Asisten Residen）の住居であり、王宮のかわりにブパティ（県知事）の住居があった。

[78]Peter J.M Nas,306.

[79]Peter Carey, *Orang Cina, Bandar Tol, Candu dan Perang Jawa: Perubahan Persepsi tentang Cina 1755-1825*, (Jakarta: Komunitas Bambu, 2008), 14.

人の多くは福建、広東両省出身の人々が中心である。これらの中国からの移民は、各々の出自による中国各地方（主として南部）の異なる言語と異なった文化をジャワに持ち込んだ。

ジャワの華人は少なくとも福建人、広東人、潮州人、客家人によって構成されているが、それはまた、インドネシア人からみればトトック（totok）とプラナカン（peranakan）という二つの集団に分類される[80]。プラナカン（Tionghoa peranakan）とは何世代も前からインドネシアに移住していたため、中国の言葉も話せなくなり原住民化した華人や、その華人とインドネシア人女性との通婚から生まれた子供達のことである。そのため、彼らの日常語はムラユ語かジャワ語である。一方、トトック（Tionghoa totok）とは自分達の出身地である中国の地方語と文化にアイデンティティをもつ新しい移民者のことである。これは単なる生まれに基づくだけではなく、華僑のインドネシア文化に対する適応と文化変容の水準にも係わっている[81]。

19 世紀の半ば頃には、華人の大部分はジャワ島に住んでいた。これは、当時インドネシアでジャワ島北部海岸にあった商業都市が栄えていたからであり、彼らの大半は都市部に居住していた。現在にいたるまで、インドネシアの華人の大部分は商業によって生活しており、これはジャワにおいて特に著しい。

ジャワの中華街では普通、商店街にそって家々が向かい合って並んでおり、その一画は、プチナン（Pecinan－中華街）とよばれる。プチナンには必ず廟（中国寺院）がある。その建物には各種の伝統的な中国式の彫りものが施されている。廟には出

[80]トトックとプラナカンは中国人とオランダ人の生粋と混血の人達に言う言葉である。
[81]クンチャラニングラット、前掲書、 425－427 ページ参照。

身地域ごとで華人が様々な目的で集まり、各自各々の利益や、子供が生めることを望み、感謝をすることなどを願って守護神に香をたく[82]。

その結果、プチナンを中心に美しい風景画、クロンチョン（Kroncong）音楽、民衆演劇、ムラユ語大衆小説など新しい大衆文化が生まれていった。そしてそれはジャワ島の海の世界全体に広がっていた。このような歌と演劇はムラユ語（インドネシア語）で表現されたため、ムラユ語はとくにジャワ島北部海岸に広まっていった。さらに、洋服、読書や交信、映画、などの外来文化としての生活様式や慣習もこの世界に浸透してきた[83]。

表 1. ジャワ・マドゥラにおけるオランダの統治と行政

総督 (Gubernur Jendral)		
省 (Gubernur)		
直轄領の原住民官僚	オランダ人官僚	特別地区の原住民官僚
	レシデント (Resident―理事官)	フォレスト (土候)
レヘント (Regent―県知事)	アシステン・レシデン (Assistent Resident―副理事)	パティ (Patih―宰相)
パティ (Patih―県知事補佐)		
ウェダナ (Wedana―郡長)	コントロルール (Controleur 監督官)	ウェダナ (Wedana―郡長)
アシステン・ウェダナ (Asisten Wedana― 副郡長)	アスピラント・コントロるール (Aspirant Controleur― 監督官見習)	アシステン・ウェダナ (Asisten Wedana― 副郡長)
各種マントリ (Mantri―属官)		各種マントリ (Mantri―属官)

出典：永積昭、『インドネシア民族意識の形成』、東京大学出版会、1980 年、xi ページ、と戸田金一、「カルティニ R.A.―そのインドネシア教育史の地位について―」、『日本教育史学』９、1966 年、52 ページ参照して**作成した。**

表１のジャワ・マドゥラにおけるオランダの統治制度で見られるように、19 世紀のオランダ領東インドのジャワでは、オランダ本国から派遣された総督（グベルヌ

[82]同上書、 432-433 ページ。
[83]土屋健治、『インドネシア....』、前掲書、30 ページ。

ル・ジェンドラル）を中心に統治が行われた。ジャワ・マドゥラ直轄地は３省（Gouverneur）そして、19 の理事州（レシデンティー、Residentie）[84]に分かれ、オランダ人の官僚と原住民の官僚がそれぞれの官僚システムをもつという 2 本立てのシステムを形づくっていた。原住民官僚には直轄地（オランダが直接支配している地域）と特別地区（ある程度の自治を許されている地域、ここでは王宮）の二つに分かれた。

総督から直接指示を受けたのは、オランダ人の官僚である理事官（レシデント―Resident）であった。ただし、旧マタラム王国であるスラカルタとジョグジャカルタの土侯領は「特別地区」として、一定の自治が認められていた。土侯は理事官と同じ立場にあった。理事州はさらに 79 の県に別れ、原住民の権力者であるブパティ（県知事―bupati）は旧地方領主が任命され、プリヤイ（原住民官僚）を束ねていたものの、オランダ人副理事官による指導監督を受けていた。ブパティは、本来、副理事官より格が上とみなされており、プリヤイ（貴族階級）の中では最高位であったが、19 世紀になると世襲の権力者としての地位を失い、オランダ政庁から給料をもらって生活する官僚となった。給料生活者になるにつれて、ブパティに対するオランダ人の副理事官の権限は強くなっていったのである[85]。

オランダ人の官僚制では、さらに部下として監督官（Controleur―コントロルール）がいた。この官職はオランダ人官僚として最も下位の官僚であった。オランダ領東インドに着任したオランダ人は、まず監督官見習（Aspirant Controleur―アスピラント・コントルール）として勤務し、そこから運が良ければ昇進した。監督官以下の原住民の官僚として、郡長（Wedana―ウェダナ）[86]、副郡長（Asisten Wedana

[84]永積昭によれば理事州の数は 20 理事州であった。永積昭、前掲書、14 ページ。
[85]同上書、14-15 ページ。
[86]郡の総数は 391 郡であった。戸田金一、「カルティニ R.A.―そのインドネシア教育史の地位について―」、『日本教育史学』９、1966 年、52 ページ。

―アシステン・ウェダナ）[87]の他、各種属官が存在していた。副知事を置かない地区も存在した[88]。

植民地体制下のオランダ領東インドでは、名目的には原住民を各行政レベルの長としつつも、実質的にはオランダ人が支配階級として君臨し、一般のインドネシア人は原住民と称され、オランダ人によって差別的に支配されていた。

オランダ人の中にもオランダ本国からやってきた生粋のオランダ人である「上流オランダ人」と、オランダ人と原住民との結婚から生まれた混血の「ユーラシアン」（インドネシアではこの階層のことを「インドー」と呼んでいる）が存在し、異なった身分であった。ジャワ在住のユーラシアンは 1815 年当時で 1,750 人、1854 年当時で 14,000 人、1860 年当時で 44,000 人、1905 年には 95,000 人に達したという[89]。

オランダ本国で生まれた生粋のオランダ人（インドネシアではトトク―Totok という）は、オランダ領東インドで生まれたオランダ人（プラナカン）[90]より地位が高かった。それは、オランダ領東インドで生まれたオランダ人は、原住民の乳母に育てられるため、現地化されていたからである。つまり、オランダ語ではなくムラユ語やジャワ語という土地の言葉で育てられていたのである[91]。

ジャワの伝統的な社会におけるインドネシア人の身分は、大別すると貴族階級であるプリヤイ（Priyayi）と庶民階級であるカウラ（Kawula）の二つに分かれていた[92]。プリヤイは、支配階級であるオランダ人とカウラの中間にいた。彼らは、オラ

---

[87]分郡の総数は 1386 分郡であり、その下に 20,834 村（Dessahoofd）があった。同上書、52 ページ。

[88]同上書、15 ページ。シティスマンダリ・スロト(著)、舟知恵・松田まゆみ（訳)、『民族意識の母カルティニ伝』、井村文化事業社、1982 年、5 ページ参照。

[89]土屋健治、「カルティニの心象風景」、『東南アジア研究』、22 巻 1 号、1984 年、60 ページ。

[90] 同上書、71-72 ページ参照。土屋健治はオランダ領東インドに生まれたオランダ人は「クレオール」という。「クレオール」という言葉はスペイン語の「クリオーリョ」に由来する。南アメリカ各地を支配したスペイン人の内、スペイン本国で生まれ育ったスペイン人を区別して、血統上は両親ともにスペイン人であっても、植民地で生まれ育ち、植民地の文化によりなじんでいる人々を指す言葉であった。

[91] 同上書、71 ページ。

[92]Kuntowijoyo, *op. cit*, p.25. ジャワの伝統社会は貴族階級とされるプリヤイ（Priyayi）とカウラ（Kawula）という一般庶民に大別できる。Priyayi は語源によると Para-Yayi（パラーヤイ）と

ンダ人の指示に従って一般庶民のカウラを支配し働かせていた。

オランダ領東インドには中国人も住んでおり、重要な位置を占めていた。彼などの地位は、ジャワのエリートであるプリヤイと対などであり、ピラミッドで示すとオランダ人と原住民との中間にあった。カウラは人口の大多数を占めたが、最下層に位置づけられた[93]。

中国人がいつ頃からインドネシアに移民者として来たかについては既述したようにはっきりしない。1619 年には中国人はバタヴィア（Batavia）の経済の実権を握っていたと言われる。1740 年のバタヴィアには、2500 世帯の中国人が存在した。バタヴィアとその周辺の中国人の人口は約 15,000 人であり、全体の 17%を占めていた[94]。

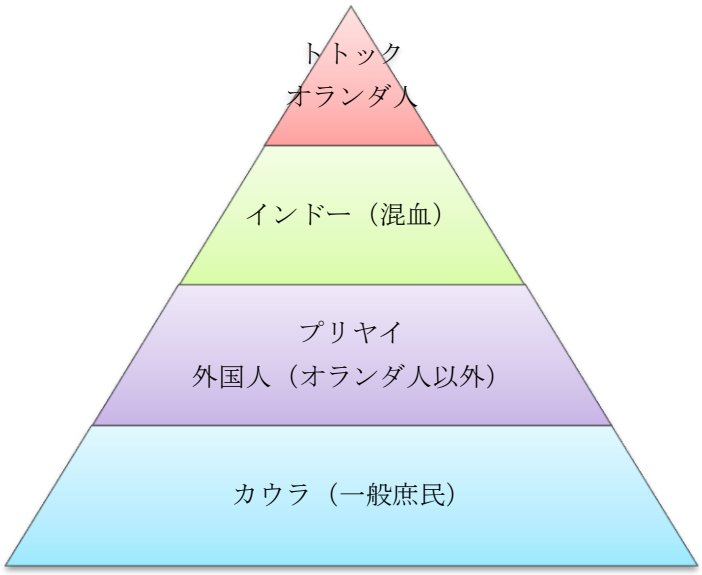
いうジャワ語で、王様の兄弟という意味である。さらに、クントウィジョヨ（Kuntowijoyo)によると①グスティ（Gusti―王様）②プリヤイ③カウラという 3 層に区分されている。グスティは最上層の王とされ、プリヤイという層の中に含まれてない。プリヤイは王宮内に居住し、その中に王様の家来達も含まれているが、カウラは王宮外に居住し、まったく王宮の政治と関わってない一般庶民としている。

[93]Heather Sutherland, “The Priyayi”, *Indonesia,* No. 19, (April 1975): 69.

[94]M.C Ricklefs, *Sejarah Indonesia,*138.

オランダ領東インドの社会構成を図示したのが、下記の図である。

図 4. オランダ領東インドにおける社会構成



19 世紀前半にジャワでは、マタラム王家に由来するプリヤイが、植民地官僚[95]としてオランダの植民地支配の構造の中に組み入れられていた。つまり、植民地体制下のプリヤイはオランダによって給料の支払いを受ける官吏として位置づけられたのである。このような変化は王侯領の外部であるジャワ島の北部海岸（沿海域―Daerah Pesisir）地方でに最も顕著だった。沿海域のプリヤイは、伝統的な王宮文化を護持しつつも、バタヴィアに由来する新しい西欧風の生活様式を身につけていた。原住民官僚は、オランダ人のような住居や服装を取り入れ、食生活の面で西欧化を行ったのである。これは、彼らがオランダ語の教育を受けることができるようになるという過程とほぼ重なり合う。その結果、プリヤイがオランダ人とオランダ語で交流する状況が生み出されていく[96]。

---

[95]植民地支配においてプリヤイ（貴族層、地方領主）が果たした役割は、プリヤイが原住民官僚としてオランダオランダと一般庶民をつなぐ結節点となることが期待されていた。プリヤイはオランダ人官僚従属し、農民から生産物と労働力を収奪することがその役割であった。小林 寧子、「プンフルの植民地官僚化」『アジア研究』、(Vol.37 No.3)、29 ページ。

[96]土屋健治、前掲書、55-56 ページ参照。

第 3 節　ジャワ社会の歴史的変容とカルティニの誕生

19 世紀末以降、とくに 1870 年にスエズ運河が開通してから、多くのオランダ人が家族を連れてオランダ領東インドにやって来るようになった。彼らは支配者として植民地のオランダ領東インドでオランダ本国にいるときよりもはるかに贅沢な生活を送ることが可能であった。広い敷地の大邸宅と多くの召使いに囲まれた生活は当時のオランダ人にとっては支配者として当然のことであった。そのため、オランダ領東インドにやってくるオランダ人の家族はますます増え、それに伴ってオランダ人住宅街が各地で形成されていった[97]。新しい都市を中心に西欧的住宅街、娯楽施設、スポーツ施設というコロニアル・スタイルの生活空間が拡大するようになり、それは更に植民地社会の上層階層（ジャワで言えば、インドー、中国人、プリヤイ）に広がっていた。

オランダ領東インドにやってくるオランダ人の多くは貴族階級ではなく一般庶民階級（オランダ領東インドに派遣された官吏を除く）であったため、彼らの中には現地人の貴族階級の生活様式などに憧れ、模倣する者も出てくるようになった。一方、インドネシアの貴族階級もオランダ人との交流や新しい都市空間を通してオランダ領東インドに新しく入ってくる西欧文化に強く魅せられてそれに大きな影響を受けるようになっていく。

ジャワ島北部海岸地域、つまり「海の世界」に住むプリヤイは、伝統的なジャワの王宮文化を維持しつつも、オランダの植民地都市であったバタヴィアに広がった新しい西欧風の生活様式を一刻も早く身につけたいと望んだ。本論文で取り上げているインドネシアにおける女子教育の先駆者であったカルティニも少女時代に、まさにこのような時代の雰囲気の中で西欧化の洗礼を受けたのである。

---

[97]Cor Passchier, “Arsitektur Kolonial di Indonesia”, in *Masa Lalu dalam Masa Kini: Arsitektur di Indonesia*, editor Peter J.M. Nas,(Jakarta: PT. Gramedia, 2007), 130.

図 5. カルティニの父 R.M.A.A ソスロニングラト

出典：Kartini. *Kartini The Complete Writing 1898-1904*. ed and trans by Joost Cote,(Australia: Monash University Publishing, 2014), No Page.

カルティニは 1879 年 4 月 21 日、マヨン（Mayong）というジュパラ[98]にある小さな町に生まれた。当時、マヨンの郡長（Wedana）をしていた R.M.A.A ソスロニングラト（図 5—Raden Mas Adipati Aria Sosroningrat）の第 5 子として生まれた。ソスロニングラトはその後ジュパラ県の知事になった。

カルティニの家系は、代々ジャワの北部海岸地域を領有するプリヤイ（貴族階級）であった。生地は海岸沿いに位置したため、ジャワの中でもいち早くオランダの植民地となった地域である。カルティニの家系はカルティニから数えて五代前の祖先から、オランダ植民地の原住民高級官僚として、スラバヤ(Surabaya)、パティ(Pati)、デマック(Demak)、クデゥス（Kudus）などの県知事を務めていた。

カルティニは 1899 年に文通相手のステラ[99]に次のような内容の書簡を出している。

1899 年 8 月 18 日、ステラ宛（抜粋）

[98]ジュパラは北部の中部ジャワに位置し、現在の人口は 1,037,000 人である。ジュパラは彫刻で有名な町である。

[99]ステラ・ゼーハンデラール（1874～1936 年）はカルティニの最初のヨーロッパの文通相手である。彼女は社会民主労働者党の党員でもあった。人物について詳しく第 2 章 2 節に記述する。

あなたに言われるまで、自分があなたの仰言るような高貴な生まれだなんて考えてみたこともありませんでした。私が王女様ですって？とんでもない！あなたと同じ、普通の人間です。父方は先祖を遡っていくと、最後の王様は、もう25 代も前に当るのです。母[100]はまだマドゥラの王家に直接の血の繋がりがあります。母の曽祖父は現に王様として統治していましたし、その娘に当る母の祖母には王位継承権がありました。（舟知恵・松田まゆみ訳）[101]

この友人に宛てたカルティニの書簡では、彼女は自分が貴族階級に属していることについての戸惑いの気持を述べているが、彼女は古代ジャワ最大の王国を形成したマジャパヒットの王であるブラウィジャヤの直系の子孫であった[102]。

図 6. カルティニの母

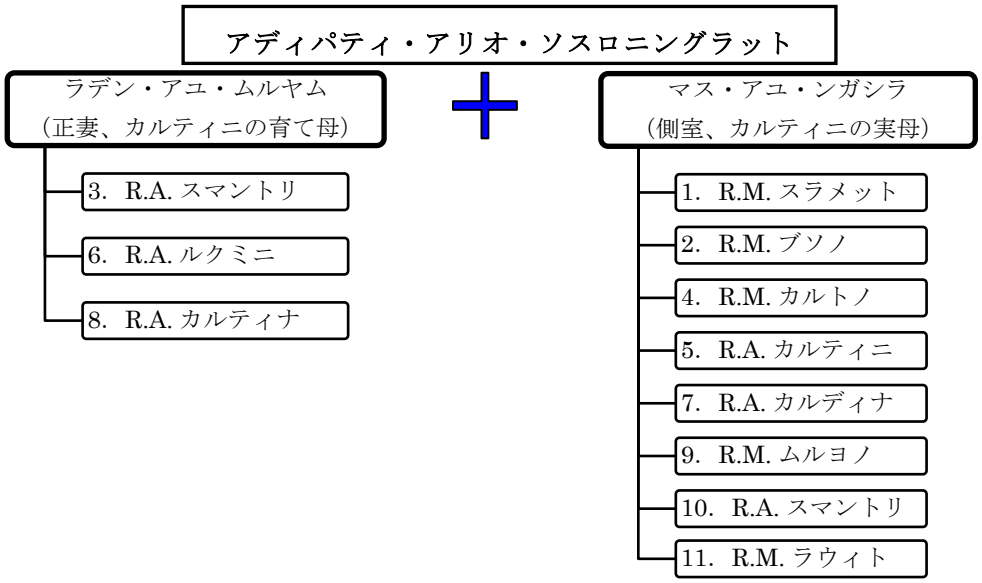
（左）マス・アユ・ガシラ（父の側室でカルティニの実母）
（右）ラデン・アユ・ムルヤム（父の正妻でカルティニの育て母）
出典：Kartini, *Letters from Kartini An Indonesia Feminist 1900-1904.* ed. and trans. by Joost Cote, (Australia: Monash University, 1992), 384-385.

[100]父の正妻であり、カルティニの育て母のラデン・アユ・ムルヤムのことである。
[101]シティスマンダリ・スロト、前掲書、13 ページ。
[102]同上書、13 ページ。Sitisoemandari Soeroto, 8.Kartini, Joost Coote trans. *Kartini The Complete Writings 1898-1904.* (Clayton, Victoria: Monash University Publishing, 2014), 75.

R.M.A.A ソスロニングラトは二人の妻があった。最初の妻とは、彼がまだマヨンの郡長であったとき、1872 年に結婚した。それが庶民の出マス・アジェン・ンガシラ（Mas Ajeng Ngasirah、結婚後はマス・アユ・ンガシラ—Mas Ayu Ngasirah と称する）で、ジュパラのテルク・アウル村で知られたイスラム導師の娘であった。

彼は更に、まだ郡長在任中の 1875 年に、プリヤイの息女と結婚した。その婦人はマドゥラ王家直系の子孫であり、またソスロニングラトの前のジュパラ県の知事の息女、ラデン・アジェン・ムルヤム（Raden Ajeng Muryam、結婚後はラデン・アユ・ムルヤム—Raden Ayu Muryam）である。この 2 番目の妻がやがて令夫人（Raden Ayu）として正妻（Garwa Padmi）となる。一方第 1 夫人のマス・アユ・ンガシラは側室（Garwa Ampil）の地位を得た。カルティニは側室の一人の娘であった。

表 2. カルティニの家族



備考：番号は年齢順を示した。R.M.（Raden Mas）で表示されたのは男子であり、一方女子は R.A.（Raden Ayu/Raden Ajeng）で表示した。

表 2 で見られるようにカルティニの父は正妻の間に 3 人の娘をもうけた。一方、側室との間には 5 人の息子と 3 人の娘をもうけて、その中にカルティニがいた。ジ

ャワの伝統においては家に暮らせるのは父、正妻と、母親が正妻であるか側室であるかを問わず子ども全員であった。側室は家の裏部屋に暮らし、自分が生んだ子どもと会うことが許されるが、一緒に暮らせないという慣習であった。つまり、カルティニは側室から生まれたため、実母に育てられず、正妻が育て親であった。

カルティニの祖父のチョンドロネゴロ 4 世[103]は、自分の子女に西欧教育を受けさせた最初のインドネシア人として有名であった。1861 年、チョンドロネゴロ 4 世は直接オランダから C.S.van Kesteren という先生を呼び、子供達に対して男女を問わずに自分の家でオランダ語による教育を施し、オランダ風の生活様式などを取り入れようとした[104]のである。その影響で父のソスロニングラトも自分の子供達をヨーロッパ小学校（Europeesche Lagere Schoolen、略称 ELS）[105]に入学させた。

カルティニは 1885 年、6 歳の時、ジュパラにあるヨーロッパ小学校に入学した。そこに 6 年生になるまで通った。カルティニが通っていた学校は、その大半が混血階層（インドー）の子供達であり、純粋のオランダ人は極めて少なかった。カルティニの通った学校がヨーロッパ小学校のどのレベルであったかについては、不明である。しかし、その学校が小さな町のジュパラにあり、生徒のほとんどが混血のインド階層のオランダ人であることなどから推測するに、「第二ヨーロッパ小学校」（Tweede Europesche Lagere School）ではないかと思われる[106]。

カルティニは、学校で最も進歩の早い、最も賢い生徒のうちに入っていた。彼女はオランダ人の子供達と肩を並べて学んでいた。学校に来客があると、そのクラスで彼女ひとりだけが原住民であったので、いつも注目されていた。早くからオランダ語を使用する機会のあった彼女は、オランダ語を流暢に話した。加えて、彼女は

---

[103]1836 年にクデゥスの県知事となり、1850 年から 1866 年にかけてはデマックの県知事に任命されていた。Sitisoemandari Soeroto, 14-15.

[104] 1899 年 5 月 25 日、ステラ・ゼーハンデラール宛のカルティニの書簡。Ibid., 16.

[105]オランダ領東インドにおける学校の種類に関しては、第５章の１節に詳しく説明する。

[106]1900 年 1 月 12 日ステラ･ゼーハンデラール宛のカルティニの書簡。Kartini, *Surat-Surat Kartini Renungan*, 30.英語版では 1900 年 1 月 13 日付になっている。Kartini, *Kartini The Complete*, 99.

読むことが大好きだった。父から沢山の読物や、オランダの新聞までも与えられていたので、幼い頃から新聞の記事を読むのが当たり前となっていたのである。オランダ人の視学官がやってきて、子供達に作文を書かせたが、彼が地方を巡視し検閲した作文の中で、カルティニの作文が最も優れていた[107]、と評価を受けた程である。

カルティニが住んでいたジュパラはジャワの北部海岸に位置した港の町であり、交易が盛んな国際的な性格をもった都市であった。様々な外来文化がこの北部海岸を通して入ってきたのである。19 世紀の西欧化もまた、この海の世界から始まった。この地域に住むプリヤイは、伝統的なジャワの王宮文化を維持しつつも、オランダの植民地都市であったバタヴィアに広がった新しい西欧風の生活様式を一刻も早く身につけたいと望んだ。カルティニも少女時代に、まさにこのような時代の雰囲気の中で西欧化の洗礼を受けて、西欧の世界と出会ったのである。

[107] Sitisoemandari Soeroto, *Kartini Sebuah Biografi* (Jakarta: Djambatan, 2001), 42.

第 2 章　カルティニの書簡とオランダ

第 1 節　植民地主義政策の転換とカルティニ

ヨーロッパにおける自由主義の興隆の影響を受け、オランダ領東インドにおける植民地政策として、1870 年ごろから「自由主義政策」がそれまでの強制栽培政策の失敗に代わって実施されるようになる。これは自由企業の競争の原理の下に、自由貿易によって現地の住民の生活環境の向上と、東インド経済の利益を高めることを目的としたものであった。この政策転換によってインドネシア経済は大きく前進したが、その利益の恩恵を受けていたのはオランダ人と中国人だけであり、オランダ領東インドの原住民は困窮したままであった。また、不効率な税システム（Batig Slot）によって行政コストが圧迫されたため、次第にこの政策に対する反発が強まっていった[108]。

1880 年代に始まった自由主義政策により莫大な利益を得ていたオランダ人農園主に対して、それを不当利得だとする人々から抗議が起きるようになる。これに関して、後に首相になる A・カイパー（A. Kuyper）は、オランダ政府はオランダ領東インドの住民の福祉のため道徳的な政策を採用するべきであると主張していた[109]。

またこれに並行するようにして、 聖職改革者の一団からは人道主義的サービス、一般市民の保護を訴える運動が、1880 年代にヴァン・コール（Van Kol）の指導のもとで出現した社会主義者達からは、東インド諸島におけるすべての人々の平等を訴える運動が起こるようになる。このように 1880 年代に入ると、さまざまな政治・思想・宗教団体から東インド原住民の利益を追求する訴えが起こっていた。

そんななか、最も決定的な影響をもたらしたのは、1899 年、人道主義派議員であ

---

[108]Kartodirdjo, Sartono, *Kolonialisme...,* 17.

[109]Hall, Daniel, G.E., *"A History of South-East Asia",* 4th edition. Macmillan Education, 1981, 789.

る C. Th. ヴァン・デフェンテル（Th. Van Deventer）によって発表された「名誉の負債」の考え方であった。彼は、オランダが強制栽培の時代から東インド諸島の莫大な富を奪い取ったことに対して、名誉にかけてそれを返済するために、オランダの国庫より植民地に援助を与え、植民地住民の福祉問題を見直そうという「倫理政策」の考え方を主張した[110]。

この「倫理政策」が正式に表明されたのは 1901 年の議会開院式におけるウィルヘルミナ女王の演説においてであった。この中で女王は「東インド諸島の住民に対して道徳上の義務を持つ」と述べた[111]。1901 年に当時オランダの政権を担っていた自由党は、キリスト教党と社会民主党との連合によって倒され、A・カイパーがオランダの首相になり、倫理政策が実行されることが可能となった。オランダの財政的援助は具体的には農業部門を開発することによって、原住民のために保健と教育サービスを提供することであった[112]。

倫理政策には 3 つの目標があった。第 1 の目標は西欧の企業による社会資本への資金注入によって国の発展を図るという経済的な目標である。第 2 の目標は村制度を通してオランダ領東インド原住民の利益を追求するというものであった。自由主義政策による経済的自由が村の結束を弱めたということを踏まえて、倫理的改革によって村の結束を強め、それによって物質的生産物を増やすだけではなく、社会的幸福を高めるという社会的な目標である。第 3 の目標は、地方自治いわゆる権力分散を促進しようという政治的な目標であった[113]。

村落レベルでは、農業指導の各業プログラムによって経済的刺激が促進されるよう図られた。それまで存在しなかった行政的および技術的技能をもった官吏が供給

---

[110]ジョン・D・レッグ、『インドネシア歴史...』、前掲書、158 ページ。
[111]永積昭、『インドネシア民族...』、前掲書、65 ページ。
[112]ジョン・D・レッグ、『インドネシア歴史...』、前掲書、159 ページ。
[113]同上書、160－162 ページ参照。

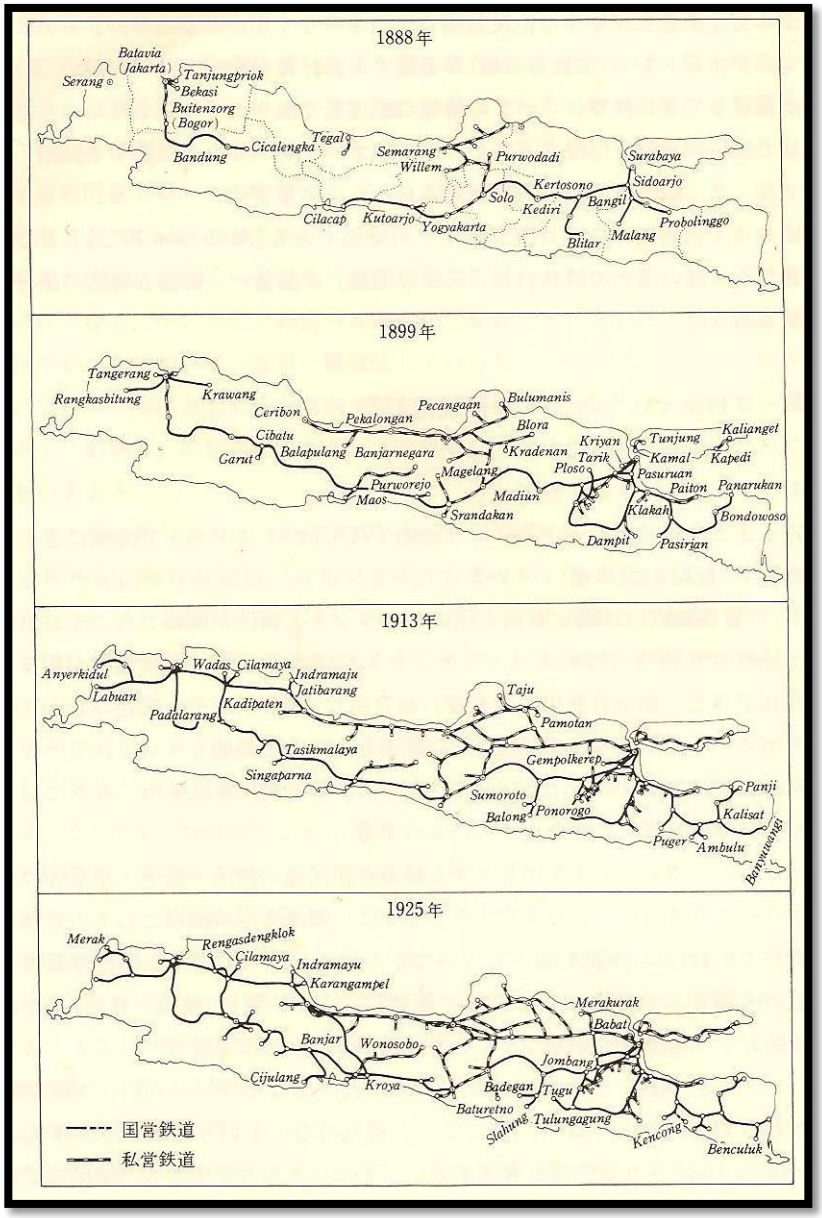
されるようになった[114]。孤立村や孤立地をなくすため、新しい道路が建設され、灌漑組織も拡大され、村落学校や診療所などが建設された。社会福祉を充実達するため村レベルを基盤とするべきであるというのがオランダ政府の考えであった[115]。

都市の機能は領域支配の拠点としてますます大きくなっていった。植民地の政治・経済・社会的のネットワークをうまく結節するため、バタヴィアを始め、ジャワにおける植民地都市が建設され、交通インフラは従来の船舶による交通路に加えて、道路や鉄道など整備された。さらに、郵便制度を中心とする通信網が都市と都市を結びつけるようになった[116]。1880 年代にジャワ島を中心にオランダ領東インドにおける鉄道網は 1000km 程度であったが、1900 年までには約 1600km に達した。更に、1920 年頃には 4000km に拡大し、ほとんどのジャワ島における都市間が繋げられた(図 7)[117]。

---

[114]同上書、159 ページ。
[115]Ricklefs, *Sejarah Indonesia,* 235.
[116]土屋健治、「インドネシアの社会統合」『アジアにおける国民統合』、東京大学出版会、1988 年、159 ページ。
[117]同上書、161 ページ。

図 7. ジャワにおける鉄道網の拡大（1888 年～1925 年）



出典：土屋健治、「インドネシアの社会統合」、『アジアにおける国民統合』、東京大学出版会、1988 年、160 ページ。

オランダの大規模私企業は東インドにおける開発の主要な担い手として大きな役割を果たした。東インド経済の面では、農村指導事業によって、灌漑制度の改善や新農地の開拓や新作物の導入などが可能となった。新しい交通・通信網によって、

より広範な商業上の接触の機会が拡大した。しかし、この時代に東インド諸島における領域がジャワ島以外にも拡大する傾向が生まれ、民間企業の投資と輸出はスマトラやカリマンタンなどの外島に中心的に行われるようになる[118]。その結果、倫理政策を実行するための財源の調達が困難になって行った[119]。

教育分野においては、それまでの植民地政策になかった目標が考えられた。教育は西欧文明の恩恵をインドネシアにもたらすための手段となるものとの確信を倫理主義者がもっていたため、初等教育を中心として教育拡充の政策がとられた[120]。HIS－Hollandsch-Inlandsche Scholen（オランダー語原住民学校）が各地に設立された。入学できる学生は裕福な家族やエリート層の子どもに限られていたたが、この学校は植民地における学制の始まりとなった。さらに、選ばれた少数のエリートに対しては、東インドあるいはオランダにおいて AMS－Algemeene Middelbare School 普通高等学校に相当する学校や HBS－Hoogere Burger School（高等市民学校）などの高等教育に進学することが可能となる[121]。

しかし、このように教育政策が転換された最大の理由は直接支配、という植民地政策を遂行して大きな経済利益を上げるためには、官吏の数を増やす必要に迫られたということにあったためであった。

また政治的改革において倫理政策の支持派にとっての中心的な目標は、権力の分散ということにあった。それまでは植民地の重要な事項は全てのオランダ本国で決定され、それがバタヴィアの総督に伝達されていたのであるが、以後は総督の行政権限を拡大し、また従来総督が決定したことはその重要度に応じて各地域の行政機関に移譲されるようになった。そのため、それまでのヨーロッパ人官僚の管轄であった業務の一部を原住民官僚に移管することも、この政策の一環として行われるこ

---

[118]Ricklefs, 228-231.
[119]Ibid.,232.
[120]ジョン・D・レッグ、前掲書、167 ページ。
[121]Ricklefs, 239.

ととなった[122]。具体的に、1904 ～1905 年に主要都市に都市議会が設立された。1930 年代末まで、少なくとも 32 の都市議会が設立され、その内に 19 議会がジャワ島の都市に設立された。また、ジャワは 76 県に区分され、各県に県議会が設立された。中央において Volksraad（国民参事会）が設立された。ただしこれらの議会は、あくまで総督などの諮問機関に過ぎず、議決機関ではないことには注意が必要である。発足当時の議員の割当てはヨーロッパ人 20 名、原住民 15 名、外来アジア人（華僑）3 名であった。しかし、これらの議会の権力はヨーロッパ人と中国人に握られていた[123]。

このようにして倫理政策は実施されるようになるが、しかし結局従前から低下しつつある福祉水準を止めることができなかった。教育の分野においては、原住民の識字率は依然として低いままであった。高等教育にまで辿りつけた者の数はごく少数の者に限られた。原住民技術者と行政官吏とを十分に養成することができなかったという事実は、植民地政策の主要な失敗の一つであった。さらに 1930 年代初期に発生した世界大恐慌が経済混乱を引き起こしたため、大農場で働く農民達の大量解雇をもたらし、オランダ領東インドの農村社会に大きなダメージを与えた[124]。

このような時代背景の中で、ジャワのプリヤイ階層は学校教育や日常生活を通じてオランダ語とオランダ風の生活様式を盛んに取り入れるようになる。20 世紀に入ると、この階層から新しい民族主義思想と民族解放の運動が生み出されるようになるが、カルティニはそれ以前に「西欧」の生活を取り入れる中で、オランダの植民地支配について強い疑問を表明していた。

カルティニは前述のように 1885 年、6 歳の時、ジュパラにあるヨーロッパ小学校に入学した。カルティニの父がカルティニを学校に入学させた理由はオランダ語、

---

[122]永積昭、『インドネシア民族意識の形成』、前掲書、65 ページ。
[123]Ricklefs, 243.
[124]ジョン・D・レッグ、前掲書、167-168 ページ参照。

西欧式の礼儀作法を習わせたかったということにあった[125]。ある日、カルティニはオランダ人（混血）の友人のレッツィー（Letsy）から「自分は先生になりたいが、ニー（カルティニが幼い頃の愛称）は何になりたいのか」と質問され、それに答えられなかったことがあった。このこと父に話したところ、父はお前の将来は「ラデン・アユ（Raden Ayu―結婚した貴族階級の称号、すなわち貴族の妻）になることだ」と答えた[126]。ジャワの社会では貴族階級の女性は貴族階級の男性と結婚するのが当然とされていた。カルティニの父は娘達が将来結婚したらオランダ式の礼儀作法がわかり、オランダ語が話せて、オランダ人のお客様を歓迎できるような良い妻（ラデン・アユ）になれるようELSに入学させた。

子供をヨーロッパ人学校に通わせるということはジャワのアダット（慣習）に鑑みて非常に珍しいことであった。このようにカルティニの父は先進的な考えをもった人物であった。この点ではカルティニが西欧的な価値観を形成するようになった最大の貢献者は彼女の父であったといえる。

第2節　カルティニとオランダ倫理主義派の交流

開明的な父の計らいで、6歳になったカルティニはヨーロッパ人小学校に入学したのだが、12歳になると当時ジャワの貴族階級の娘に対する慣習であった「ピンギタン」（婚前蟄居）の生活に入らなければならないため、学校を止めさせられた。ピンギタンとは、初潮を迎えたプリヤイの少女が正式な結婚の申し出がくるまで、結婚に向けての花嫁修業を行う期間のことであり、女性はこの間家の外に出ることを禁じられていた。ヨーロッパ人小学校で特別に優秀な成績を収め「西欧」の自由な世界について理解を深めたカルティニにとって、ジャワのこの古い慣習は牢獄に閉じ込められることと同じであった。カルティニは当時ヨーロッパで流行し始めた自

[125]1900年8月13日付、アベンダノン夫人宛の書簡。Kartini, *Surat-Surat Kartini Renungan,*50.
[126]1900年8月付、アベンダノン夫人宛の書簡。Ibid.,48.

由主義思想についてオランダ語の雑誌を自由に読めるようになっていた。彼女はその当時の雑誌や新聞を夢中で読む少女であった。しかし、カルティニは当然のこととしてジャワのプリヤイの慣習による義務である「ピンギタン」によって外の世界から完全に切り離された。牢獄の中のような不自由な日々の生活の中でカルティニが唯一自由とることができた時間はオランダから届く新しい自由主義思想を掲載した雑誌や書物を読む時間であった。その結果カルティニは次第にジャワの伝統的慣習やその思想に批判的な考えをもつようになる。ピンギタンでカルティニの自由が奪われたこの時期こそカルティニの思想を誕生させた時期と重なっていると言ってよいのである。

さらに、カルティニはヨーロッパ人と文通していた。カルティニの書簡は 21 歳であった 1899 年 5 月 25 日に始まる。そして、彼女の最後の書簡は彼女の出産数日後の 1904 年 9 月 7 日付のものであった。次表はカルティニが文通相手に送った年別の書簡の数である[127]。

[127]表は著者の作成による。文通相手の順番はオランダ語版の書簡集（2 版）を参考した。

表 3. カルティニが書簡を送った相手とその数（年別）

宛先	1899年	1900年	1901年	1902年	1903年	1904年	合計
ステラ・ゼーハンデラール	3通	2通	4通	5通	1通	―	15通
マリ・オーフィンク・スール	1通	5通	―	2通	1通	―	9通
アントン教授	―	―	1通	1通	―	1通(9)	3通
アドリアニ博士	―	―	2通	1通	2通	―	5通
ヒルダ・デ・ボーエイ	―	―	3通(1)	3通	―	―	6通
ファン・コル	―	―	1通	3通	1通(5)	―	5通
ネッリー・ファン・コル	―	―	―	5通(3)	3通	―	8通
ロサ・アベンダノン	―	7通	27通(2)	31通(4)	22通(6)	7通	94通
アベンダノン	―	―	1通	―	11通(7)	(1通)(10)	12通
エディ・アベンダノン	―	―	―	4通	2通	―	6通
その他	―	―	―	―	2通(8)	―	2通
合計	4通	14通	39通	55通	45通	8通	165通

(1)デ・ボーイ宛の書簡を含む。
(2)はがき3通を含む。
(3)その他に編集者宛のネッリ・ファン・コールの書簡もあるが、書簡の数に入ってない。
(4)はがき4通を含む。
(5)ファン・コール夫妻宛のカルティニの書簡
(6)はがき3通を含む。その他にルクミニと一緒に書いた書簡(ルクミニによる書簡)は2通あるが、書簡の数には入ってない。
(7)3通のアベンダノン夫妻宛の書簡を含む。その他にアベンダノン宛のソスロニングラット書簡は1通あるが、書簡の数にはいってない。
(8)政府とSijthoff理事官宛の書簡はそれぞれ1通。
(9)アントン夫妻宛の書簡
(10)カルティニが死去してから、アベンダノン宛のカルティニ夫のジョヨ・アディニングラットの書簡。数の中に入ってない。

出典：最新の英語版（Kartini, Joost Coote trans. *Kartini; The Complete Writings 1898-1904*. Clayton, Victoria: Monash University Publishing, 2014）を基に作成。

文通相手は倫理政策派のオランダ人達であった。そのオランダ人達は以下の通りである。

1. ゼーハンデラール（E. H. Zeehandelaar）

ゼーハンデラール（しばしばステラ-Stella Zeehandelaar として書かれている）（1874～1936 年）はカルティニの最初のヨーロッパの文通相手である。カルティニはピンギタンから解放された 1 年後の 1899 年 3 月 15 日付の *De Hollandesche Lelie* という雑誌に文通相手を求めるという記事を出したところステラがそれに応じて、二人の文通が始まる。これを進めたのは 1892 年からジュパラに派遣されたオランダ

副理事官夫人であるオーフィンク・スール(後述)であった[128]。ステラはカルティニより５才年上であり、彼女のことをカルティニは最初の書簡で牛江清名訳では「新しい時代の乙女」[129]として記した彼女はカルティニが“modern meisje”[130]と呼ぶ人達の代表である。

1899 年 5 月 25 日、ステラ宛の書簡（抜粋）

> わたしはなんとかして『現代的な若い女性』と―勇気のある人、心底から好き　になれる人、すばしこい足どり、ほがらかな気持、いつも喜びと情熱を持って人生の第一歩を踏み出す人、自分ひとりの幸福だけを願わず、広く大きな社会の福祉のために骨を惜しまない人、全人類に幸福を齎そうと心がける若い女性と―お近づきになりたいと思います。(早坂四郎訳）[131]

ステラは医者の娘であり、彼女は様々な社会主義フェミニスト団体の積極的なメンバーであった。文通していた頃には、彼女はアムステルダム郵便・電信サービスで働いていた。同じ職場で働いていたハートサルト（Hartshalt）と結婚した。彼らはユダヤ教徒であった。ステラは貧困層や失業者のための職業訓練を推進の活動をし、1897 年からは「女性保護組合（Vereeniging Onderlinge Vrouwenbescherming)」のメンバーであった[132]。

結婚して 1900 年 5 月以降､彼女はいくつかの婦人団体の幹部として積極的に活動するようになる。また彼女は社会民主労働者党（Sociaal Arbeiders partij-- The

---

[128] Tempo, *Gelap- Terang Hidup Kartini*. Edited by Leila S. Chudori (Jakarta: KPG bekerjasama dengan Majalah Tempo, 2013), 74.オーフィンク・スール夫人に関して次のページに詳しく説明する。

[129]カルティニ、牛江清訳、『暗黒を越えて若き蘭印女性の書簡集』、日新書院刊、15 ページ。

[130] Kartini, *Door Duisternis Tot Licht Gedachten Van Raden Adjeng Kartini*. (‘s-Gravenhage, 1912), 1.

[131]カルティニ（早坂四郎訳)、『光は暗黒を越えて』、河出出版、1955 年、8 ページ。

[132]Kartini, *Kartini The Complete,*19. Kartini, *Surat-surat Kartini Renungan*, 403.

Social Democratic Worker's Party）の党員でもあった[133]。

2. オーフィンク・スール（M. C. E. Ovink-Soer）

オーフィンク・スール（1860～1937 年）は、1891 年から 1899 年までジュパラに派遣された副理事官の妻である[134]。彼女ははフェミニストとして知られ、オランダの雑誌の女性ライターでもあった。後に彼女は児童書の作者として有名になる[135]。

カルティニはオーフィンク夫人のことを「母」と呼び、カルティニ姉妹は彼女に美術を習い、またオランダ語も習うことになる。彼女はカルティニに様々な書籍を貸し与え、オランダの女性運動についてカルティニに教えたりもした[136]。このことからカルティニの女性に関する考え方はオーフィンク夫人による影響が大きいものと思われる。オーフィンク夫人は子供がいないため、その愛情をカルティニ姉妹に注いだ[137]。

オーフィンク夫人宛にカルティニが初めて送った書簡は1899年11月付であった。当時、すでにオーフィンク夫人はオランダに帰国していた。その書簡ではオーフィンク夫人と一緒にいる時間の楽しさ、また彼女の帰国を悲しんでいたカルティニは次のように書簡を書いている。

1899 年 11 月、オーフィンク・スール夫人宛の書簡（抜粋）

> お母様、あなたはわたしの心の中心です。わたしはお母様の懐へ帰りたくてたまりません――お母様の子達（カルティニ姉妹―早坂訳）はお母様を慕っているのです。いつかの日の思い出が目に浮かびます。お母様のお部屋でご一緒に腰をおろし、何時間も何時間も楽しく幸福感に浸り、いつもわたし達の間に漠然

---

[133]Ibid., 9.

[134]Sulastin Sutrisno によればジュパラに派遣されたのは 1894 年からであった。Kartini, *Surat-surat Kartini Renungan*, 404. Kartini, *Kartini The Complete*, 21.

[135] Kartini, *Kartini The Complete,* 21.Kartini, *Surat-surat Kartini Renungan,*404.

[136] Kartini, *Kartini The Complete,* 21.

[137]Kartini, *Surat-surat Kartini Renungan,* 404.

と浮き上がって来る問題についてくり返しくり返し議論を交えたあの懐かしお母様の居間で、心おきなく読書をさせていただいたことを、思い出しています。くつろいでお母様とお話をしたり、胸の中で触れてみたいいろいろの考えや、じっとしていられない胸の奥の感情をなにもかもお母様に打ち明けたあの時のことを、思い出しております。（早坂四郎訳）[138]

3. アントン教授（Prof. Dr. Gustav K. Anton）

アントン教授（1864～1924 年）はドイツのイエーナ（Jena）大学の政治学の教授であった。アントン教授はアドリアニ博士とアベンダノンと同じくバタヴィア芸術・科学協会（The Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen）のメンバーであり、また彼は国際植民地研究所（Internationale Koloniale Instituut）の重要人物であった。彼は、アベンダノンからカルティニについて知らされた。彼はジャワに訪れた際、オランダ人の妻と一緒にジュパラを訪問した[139]。

アントン教授宛のカルティニの書簡は 3 通が記録されている。1901 年（6 月 10 日付）、1902 年（10 月 4 日付）と 1904 年（4 月 10 日付、この書簡はアントン教授夫妻宛）にそれぞれ 1 通である。アントン教授は、カルティニとはお互いに興味のある専門的問題について書簡のやり取りをした。

4. アドリアニ博士（Dr. Nicolaus Adriani）

アドリアニ博士（1865～1926 年）はクリスチャンであり、東インド（オーストロネシア）諸言語の学者であった。彼は聖書の訳者としてキリスト教のミッションのために 1895 年からスラウェシ島の中部のポソに来た。彼は妻と一緒にポソ河口に住んでいた。彼はポモナ（Pamona）の人々の伝統工芸品を 1898 年の女性博覧会に展示

[138]カルティニ（早坂四郎訳）、前掲書、22 ページ。
[139]Kartini, *Kartini The Complete*, 24. Kartini, *Surat-surat Kartini Renungan,* 406.

し、またスラウェシの言語に関する論文を 1900 年に発表して有名になった。彼はバタヴィアにあるアベンダノン宅に開かれたディナーの席で、カルティニに出会う[140]。

カルティニはアドリアニ博士に 5 通の書簡を送っている。それは、1901 年に 2 通（3 月 19 日と 8 月 10 日付）、1902 年に 1 通（9 月 24 日付）、そして 1903 年に 2 通（6 月 27 日と 7 月 5 日付）である。

アドリアニ博士とはカルティニは宗教についてあるいは彼の任務であるミッションについてあるいはその他の文化について書簡で意見の交換を行った。

5. ヒルダ・デ・ボーエイ ・ボイスベーン（Hilda Gerarda de Booij-Boissevain）

ヒルダ・デ・ボーエイ ・ボイスベーン（1877～1975 年）はカルティニが直接会ったステラとは別のタイプの「modern girl」であった。ヒルダは、著名な国際的な家族出身の洗練された「現代的な若い女性」である。彼女はチャールズボイスベーン（Charles Boissevain）という文学者で『アルゲメン・ハンデルスブラト（Algemeen Handelsblad）』という有名な新聞の編集長の娘であった。彼女の夫は、海軍のヘンドリック・デ・ボーエイ （Hendrik de Booij、1867～1964 年）であり、新しく任命された総督のウィレム・ロースブーム（Willem Rooseboom、1899～1904 年任命）の副官であった。デ・ボーエイ 夫妻は生粋のオランダ人であり、植民地社会の階層では最上級に位置していた。デ・ボーエイ は、オランダリベラル連合（Dutch Liberale Unie）というオランダ議会において植民地改革を支持した革新的且つ自由な政治グループの一員であった[141]。

カルティニの父がバタヴィアで新しい総督とその側近に会った機会に、カルティニはボイテンゾーグ（Buitenzorg、現在のボゴール）でヒルダに出会う。ヒルダはその後生涯を通してカルティニのファンとなった。ヒルダは後にカルティニ財団と

[140]Kartini, *Kartini The Complete,* 23.
[141]Ibid., 19-20. Kartini, *Surat-surat Kartini Renungan,* 405.

カルティニ学校の設立に応援した人物でもある[142]。

カルティニはバイテンゾルフへの旅が忘れられない様子を書簡に記している。その旅はカルティニのピンギタン期に行われたため、特に強い印象として残ったと思われる。不自由な生活をしていたカルティニはこの旅で特別に外出が許されたのである。その喜びが書簡に現れている（1901 年８月 19 日と 1902 年 3 月 21 日付の書簡）。

デ・ボーエイ 夫妻宛のカルティニの書簡は、1901 年の 6 月 6 日付、7 月 12 日付と 8 月 19 日の 3 通と 1902 年の 3 月 21 日付、5 月 26 日付、と 6 月 17 日付の 3 通の計 6 通が残っているが、その内の 7 月 12 日付けの 1 通はデ・ボーエイ 宛の書簡であった。ヒルダ宛のカルティニの書簡は、1901 年 6 月 6 日付であった。その書簡ではカルティニはヒルダの第 2 子の誕生のお祝いを述べ、ヒルダの息子に有名な詩人の詩を書いて贈った。

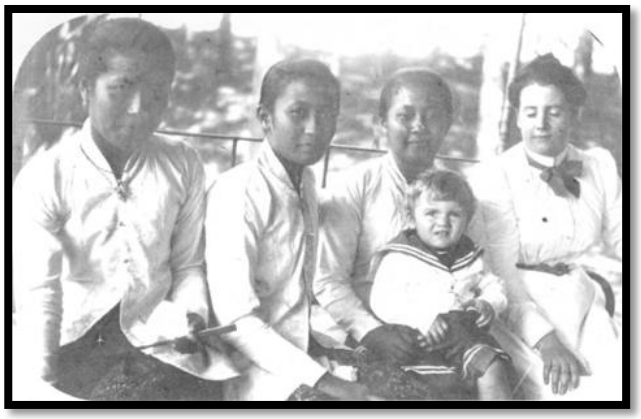
1901 年 6 月 6 日、ヒルダ宛の書簡（抜粋）

ヒルダ様、

まず、わたしは、また姉妹に代わって、あなた方二人に次男の誕生を祝福したいと思います。彼はお兄さんのように健康的で、あなた方が誇りになれるような少年に成長できることをお祈りします。… （省略）[143]

[142]Kartini,*Kartini The Complete,* 20.
[143]Ibid., 201.

図 8. ヒルダと会った時のカルティニ姉妹



出所：シティスマンダリ・スロト(舟知恵・松田まゆみ訳)『民族意識の母カルティニ伝』、井村文化事業者、1982 年、177 ページ。

他の書簡ではカルティニはジャワの美しさとその文化の素晴らしさについて熱を込めて書いた[144]。また、ヒルダはカルティニの妹の結婚に対して祝福のことばを贈ったが、それに対してカルティニはその結婚式の様子を書簡で知らせた[145]。

書簡ではヒルダはまたカルティニをボイテンゾーグに招待していたが、自分がピンギタン期の女性であることで、外出を禁じられているため行きたくても行けないだということを 1901 年 8 月 19 日付の書簡で述べている。

デ・ボーエイ 夫妻はオランダに帰国してから芸術、社会、人道分野で活動していた。また、彼女は後にカルティニ財団（Kartini-Fonds）の理事になり、オランダでカルティニの思想についてよく話をしたという[146]。

6. ヘンドリカス・フーベルトゥス・ファン・コル　(Hendrikus Hubertus van Kol)

ヘンドリカス・フーベルトゥス・ファン・コル（1852～1925 年）は当時、植民地

[144]1902 年 5 月 26 日付の書簡。Ibid.,370-374.
[145]1902 年 3 月 21 日付の書簡。Ibid., 337-339.
[146]Kartini,*Surat-surat Kartini Renungan,* 405.

改革の政策作成で最も重要な人物と見なされた。彼は社会民主労働者党のリーダー及び議員であり、植民地政策の改革を強く出張した人物であった。1896 年に彼は自分の植民地改革の考えを『ジャワの土地と人々（Land en Volk van Java)』として出版した。オランダは、長い間、植民地への道義的責任を無視してきたため、植民地住民への倫理的責任と道徳的義務があると書いている[147]。

ファン・コルはオランダ政府がカルティニのオランダ留学を支援するように働きをかけた。また、彼は国会でカルティニの留学の奨学金を確保するようにアベンダノンを説得している。その結果、ジャワのオランダ人コミュニティはカルティニの名を意識するようになる。

7.　ネッリー・ファン・コル（Nellie van Kol）

ネッリー・ファン・コル（1851～1930 年）はヘンリ・ファン・コルの妻である。ネッリー自身は結婚する前の 1880 年代の頃既にジャワに家庭教師として滞在していた。彼女は初期のフェミニスト運動における影響力のある人物であり、また長い間『女性(De Vrouw)』という影響力のある女性誌の編集者をしていた。後に、児童教育書で有名となり影響力のあるライターとして知られていく[148]。

カルティニと書簡をやり取りしていた際、彼女はキリスト教福音主義運動にますます関与するようになり[149]、そして救世軍に参加している。そのことから、カルティニとネッリーは書簡ではよく宗教を話題に意見交換をした。宗教に関する話題はロサ・アベンダノン宛の書簡には全く見られなかった。

オランダの国民にカルティニを紹介したのはネッリーだった。最初はオランダの国民の関心を東インド諸島に向けることを目的に 1902 年 7 月の『東と西（Oost en

[147]Kartini, *Kartini The Complete,* 22.
[148]1901 年 8 月 19 日付ヒルダ宛のカルティニの書簡。Ibid., 22.
[149]Ibid., 22.

West)』という雑誌でカルティニを紹介した。また、1903 年には「自身の暖炉（Eigen Haard)」というオランダで人気あった女性雑誌の読者にカルティニを紹介するために、ネッリーは記事と写真を雑誌社に提供した[150]。

ネッリー・ファン・コル宛のカルティニの最初の書簡は 1901 年 8 月付の書簡[151]だった。その書簡ではカルティニはなぜ女性に教育が必要のか、またジャワ女性の現状とその教育の必要性について様々な意見を述べた。

8. ロサ・マンドリ・アベンダノン（Rosa Manuela Abendanon-Mandri）

ロサ・マンドリ・アベンダノン（1857～1944 年）はアベンダノンの 2 番目の妻であり、英語教育を受けたスペイン人である。アベンダノンとは 1883 年スペインで結婚した。1886 年オランダ領東インドに来た時には彼女はオランダ語を習ったばかりであった[152]。

ロサ・アベンダノンはカルティニと 4 回対面した。アベンダノンの用務に伴ってカルティニの自宅を訪問したのが 2 回で、その他カルティニ一家がバタヴィアを訪れた時に一回、そしてカルティニが結婚してからレンバン[153]で一回会っている。

カルティニの書簡の数は、アベンダノン夫人宛が最も多い。カルティニは彼女のことを「母」と呼び、自分の考えや気持ちなどをひんぱんに書簡に綴っている。アベンダノン夫人宛のカルティニの最初の書簡は 1900 年 8 月 13 日付の書簡である。この書簡はアベンダノンが 1900 年 8 月 8～9 日ジュパラに訪れてからの数日後であった[154]。

上記、カルティニの文通相手とその書簡の年代別分類表（図３）で見られるよう

---

[150]Ibid., 22.
[151]Ibid., 223-227.
[152]Ibid., 20.
[153]レンバン(Rembang)県はジャワ島中部に位置する北部海岸の町である。
[154]1900 年 8 月 13 日付アベンダノン夫人宛のカルティニの書簡。Kartini, *Kartini The Complete Writings*, 116-117.

に、アベンダノン夫人宛のカルティニの書簡は 103 通も及んだ。1911 年アベンダノンによって出版された書簡集にはその書簡が選択された。

9. ジャック・ヘンレイ・アベンダノン（Jacques Henrij Abendanon）

ジャック・ヘンレイ・アベンダノン（1852～1925 年）はオランダ領西インドにあるスリナム（Suriname）のパナリボ（Panaribo）でユダヤ人の家族に生まれた。アベンダノンはオランダで教育を受け、その後植民地の官僚（Koloniaal Ambtenaar）になった。彼は、倫理政策実施を準備するために、1875 年からオランダ領東インドに派遣された。1876 年から法務省の秘書官としてキャリアを築いたのち、1900 年から 1905 年にかけてオランダ領東インド政府教育文化省長官を務めていた[155]。

彼は植民地法学会の会長であり、また彼は「バタヴィア芸術・科学協会」と「在オランダ東インド協会（Indisch Genootschap)」のメンバーでもあった。その他には、彼は「オランダ領東インドにおける法律（Het Recht in Nederlandsch Indie)」と「法律にめぐるインドの週刊誌」(Indisch Weekblad van Het Recht)」という法律の雑誌の編集長を務めていた。彼は長官としての任務に就いたばかりの頃、妻のロサ・マンドリと共にジャワを訪問し、ジュパラで初めてカルティニと出会った。アベンダノンがカルティの名前を最初に知ったのはカルティニが関わった 1898 年の「女性勤労全国博覧会（Nationale Tentoonstelling van Vrouwenarbeid)」からであった。アベンダノンは倫理政策を実施するためにカルティニに対してジャワの女子のための教育を指導して欲しいと願っていた[156]。

アベンダノン夫妻は 1900 年８月にジュパラを訪ねて、初めてカルティニと会った[157]。

---

[155] Ibid., 20. 土屋健治、前掲書、50 ページ。
[156]Ibid., 220-221.
[157]土屋健治、前掲書、50 ページ。

10. エディ・アベンダノン（Eduard C. Abendanon）

エディ・アベンダノン（1878～1962 年）はアベンダノンの次男で、ロサ・アベンダノンの義理の息子(アベンダノンが 1 番目に結婚した女性との間の子供)である。エディはオランダに留学したカルティニの実兄カルトノ（Kartono）のことを知ったことから、カルティニはエディのことを「お兄さん」と読んだ。エディは書簡を通してカルティニに現代の西欧社会、植民地社会などのことを提供した。カルティニと書簡のやり取りしている間に彼は、工学の勉強を終え、後にスマトラにあるオンビリン(Ombilin)炭鉱に働いた。後に彼はスラウェシの開拓地の地理調査で有名になる[158]。

カルティニは彼と 1902 年 8 月 8 日から 1903 年 1 月 31 日の 1 年弱にわたって 6 通の書簡を交わした。

カルティニの書簡をもらった上記の 10 名のヨーロッパ人の背景を見てみるとどのようにしてカルティニに影響を与えるようになったのかということが良く理解できる。

まず、ステラとヒルダ・デ・ボーエイ はカルティニと年齢が近いということもあり、カルティニにとってヨーロッパの現代女性像であった。カルティニは女性観、西欧自由主義などをこの女性らから強影響を受けていた。そして、最もカルティニと長い付き合いがあったオーフィンク・スール夫人と、カルティニが最も多く書簡を送った相手であるロサ・アベンダノンは、カルティニにとっては全ての感情や考え方を述べることができる母親のような存在であった。また、この二人はカルティニに様々な知識を提供し、特にジュパラに住んでいた頃オーフィンク夫人はカルティニのオランダ語教育に重要な役割をもった人物であった。ファン・コル夫妻とア

[158]Kartini, *Surat-surat Kartini Renungan,*21.

ベンダノンはカルティニに留学という夢を抱かせた人物であり、カルティニをオランダ領東インドにおける政治に巻き込んだ人物であった。

カルティニはアントン教授とアドリアニ博士という二人の学者と様々な興味のあることを共有し合ったため、文化などの知識面においてカルティニは彼らから大きな影響を受けている。書簡の中ではイスラム教徒であるカルティニはしばしばイスラム以外の宗教についても書いているが、それはネッリー・ファン・コルとアドリアニ博士の影響によるものと思われる。そして、オランダに留学していた兄（カルトノ)の像をアベンダノンの息子であるエディ･アベンダノンにカルティニは見た。

第 3 節　カルティニの書簡集の出版について

カルティニは 1899 年から 1904 年に死去する数日前にかけての約 6 年間にわたって上記の 10 名と文通を重ねた。カルティニが亡くなってから数年後の 1911 年にアベンダノンはカルティニの書簡集を出版した。この書簡集は『闇を通して光へ―ジャワ人のための故ラデン・アジェン・カルティニの思想― (Door Duisternis Tot Licht: Gedachten Over en Voor Het Javaansche Volk van Wiljen Raden Adjeng Kartini)』として原文のオランダ語で出版された。

このカルティニの書簡集は様々な言語に訳されて出版を重ねているが、その主要な書簡集は以下の通りである。

1. オランダ語版

（1）Abendanon, J.H, ed. *Door Duisternis Tot Licht: Gedachten Over en Voor Het Javaansche Volk van Wiljen Raden Adjeng Kartini*. ‘s-Gravenhage: Van Dorp, 1911.（初版）

Abendanon, J.H., ed. *Door Duisternis Tot Licht: Gedachten Over en Voor Het Javaansche Volk van Wiljen Raden Adjeng Kartini*. ‘s-Gravenhage: Luctor et Emergo, 1912. （2 版）

第３版は 1912 年に、第４は 1923 年に第２版と同じ出版社から出版された。
Abendanon, J.H., ed. *Door Duisternis Tot Licht: Gedachten Over en Voor Het Javaansche Volk van Wiljen Raden Adjeng Kartini*. Amsterdam: Nanbrink, 1976. （5 版）

（２）Jacquet, F.G.P., ed. *Kartini: Brieven aan meuvrow R.M. Abendanon-Mandri en haar echtgenoot met andere documenten*. 1987.

2. 英語版

（１）Symmers, Agnes Louise, trans. *Letter of a Javanese Princess*. 1920. （序文：Louis Couperus、オランダ語からの翻訳）

（２）Symmers, Agnes Louise, trans. *Letter of a Javanese Princess*. New York: Norton, 1964. （編集と紹介：Hildred Geertz、序文：E. Roosevelt。1976 版は Malaysia: Heinemann Educational Books によって出版された。）

（３）Symmers, Agnes Louise, trans. *Letter of a Javanese Princess*. Kuala Lumpur, Oxford University Press, 1964. （紹介：Sartono Kartodirdjo）

（４）Cote, Joost, trans. *Letter from Kartini; An Indonesian Feminist 1900-1904*. Clyton, Victoria: Monash Asia Institute, 1992.
（Jacquet, F.G.P., ed. *Kartini: Brieven aan meuvrow R.M. Abendanon-Mandri en haar echtgenoot met andere documenten*. 1987.からの翻訳）

（５）Cote, Joost, trans. *Realizing the Dream of R.A. Kartini; Her Sister's Letters from Colonial Java*. Leiden: KITLV Press, 2008.

（６）Cote, Joost, trans. *Kartini; The Complete Writings 1898-1904*. Clayton, Victoria: Monash University Publishing, 2014.

3. ムラユ語

Saudara, Empat, trans. *Habis Gelap Terbitlah Terang; Boeah Pikiran*. Weltevreden: Balai Pustaka, 1922.

4. アラビア語

Beiroet, trans. *Alhajat Alkadimat Walruh Alhadissya; Bikalam Raden Adidjin Kartini.* 1926.

5. スンダ語

Satjadibrata, R, trans. *Ti noe poek ka noe tjaang; Seseratan Raden Ajeng Kartini*. Weltevreden: Balai Poestaka, 1930. (序文：Abdoerachman)

6. ジャワ語

Sasrasoegonda, R, trans. *Mboekak Pepeteng; Isi Pethikan saking serat-seratipun Raden Adjeng Kartini*. Soerabaja, 1938 年. (序文：R. Soetama, R. Sasrasoeganda)

7. インドネシア語

（1）Pane, Armijn, trans. *Habis Gelap Terbitlah Terang.* Djakarta: Balai Poestaka, 1938. (2 版：1949 年、3 版：1951 年、4 版：1962 年、5 版：1963 年、6 版：1968 年 7 版：1972 年、8 版：1978 年、9 版：1979 年、10 版：1983 年、11 版：1985 年)

（２） Sutrisno, Sulatin, trans. *Surat-surat Kartini; Renungan tentang dan untuk Bangsanya*. Jakarta: Djambatan, 1979.

(オランダ語の Door Duisternis Tot Licht の第４版と５版から翻訳され、2 版は 1981 年、３版は 1985 年に出版された。)

（３）Sulastin, Sutrisno, trans. *Kartini: Surat-surat kepada Ny. R.M. Abendanon-Mandri dan suaminya*. Jakarta: Djambatan, 1989.

(Jacquet, F.G.P., ed. *Kartini: Brieven aan meuvrow R.M. Abendanon-Mandri en haar echtgenoot met andere documenten*. 1987. から翻訳され、2 版は 1992 年、３版は 2000 年に出版された。)

（４）Bustam, Mia, trans. *Surat-surat Adik R.A. Kartini*. Jakarta: Djambatan, 2005.

8. 日本語

（１）牛江清名『暗黒を越えて―若き蘭印女性の書簡集―』、日新書院刊、1940 年。

（２）早坂四郎『光は暗黒を越えて―カルティニの手紙―』、河出新書、1955 年。

9. フランス語

Damais: L. Ch., trans. *Lettres de Raden Adjeng Kartini : Java en 1900.* Paris, La Haye: Mouton, 1960.

これらの本の出版後、この書簡集はインドネシア研究文献の中で重要な資料として位置づけられるようになる。

英語による研究だけでも、Gouda, Dr. Frances, *Dutch Culture Overseas: Colonial Practice in the Netherland Indies 1900-1942*. Amsterdam University Press, 1995.、Stuers, Cora Vreede-de, *The Indonesia Women: Struggles and Achievement*. Mouton & Co s' Gravenhage, 1960.、Anderson, Benedict R. O' G. *Language and Power: Exploring Political Cultures in Indonesia*. Cornell University, 1990. などが挙げられる。これらの文献のほとんどはインドネシア語にも翻訳されている。

日本語文献では、書簡集の翻訳以外では、永積昭(『インドネシア民族意識の形成』東京大学出版会、1980 年)、土屋健治(『カルティニの風景』めこん、1991 年)がある。その他カルティニの研究者としては、別技篤彦（ラーデン・アジェン・「カルティニの思想における国土と民族--インドネシア民族運動史の序章」、『史苑 24 巻 2 号』、1963 年、87-109 ページ）日本の教育学者である戸田金一（「カルティニ R.A.--そのインドネシア教育史上の地位について―」、『日本の教育史学９号』、1966 年 9 月、49-72 ページ)、またシティスマンダリ・スロト著の『カルティニ伝』(1977 年)を訳した舟知恵・松田まゆみ(『民族意識の母カルティニ伝』井村文化事業社、1982 年)、そして現在のカルティニの代表的な研究者といえる富永泰代などがいる。

インドネシアにおける研究では、カルティニの妹であるカルディナー(Kardinah)をはじめ数多くの研究者やジャーナリストがカルティニについて著作を著している

が、オランダの文献を参考している、カルティニの代表的な研究者は、シティスマンダリ・スロト（Sitisoemandari Soeroto, *Kartini Sebuah Biografi*, Gunung Agung, 1977）[159]、スラスティン・ストリスノ（Sulatin Sutrisno, *Surat-surat Kartini: Renungan tentang dan untuk Bangsanya*, Penerbit Djambatan, 1979 年)、プラムディア・アナンタ・トゥール（Pramoedya Ananta Toer, *Panggil Aku Kartini Saja*, Nusantara, 1962)、そしてカルティニの義理の孫にあたるハリヤティ・スバディオ（Haryati Subadio）[160]などである。また最近、Dri Arbaningsih は自分が書いたカルティニについての博士論文を基本に（Dri Arbaningsih, *Kartini dari Sisi Lain* を出版した。

数多くのオランダ人、特に直接カルティニと関わっているオランダ人であるアベンダノン（J.H. Abendanon)、ヴァン・デヴェンテル（C.Th. van Deventer)、オーフィンク・スール（M. Ovink-Soer)、ヴァン・コール（H. van Kol）はカルティニに関する研究をオランダ語で発表している。

[159]後に Gunung Agung から Penerbit Djambatan に出版社が変わった。

[160] Haryati Subadio はスハルト時代の社会福祉大臣（1988-1993 年任務）であった。カルティニについて本を出版してないが、カルティニに関する論文や記事を書いていた。

第３章　カルティニにおける祖国観

第１節　カルティニとヒンドゥー・ジャワ的伝統

第１項　ジャワの慣習とカルティニ

1892 年 4 月カルティニは 12 歳になったため大人の女性になったと見なされた。娘達を学校へ入れるのには進歩的だったカルティニの父も、貴族社会のアダット（慣習）のすべてに抵抗することはできなかった。カルティニはすでに慣習に服するのに充分な年令になったと判断され、外部の世界との連絡が閉ざされることになった。定められた男性が彼女を妻とする申し込んでくるまではカルティニは家の中に閉じ込められることとなった。初等学校を卒業したばかりのまだ幼いカルティニは突然「ピンギタン（婚前蟄居）」の慣例に従うことが義務付けられた。

カルティニはこのピンギタン生活についてまるで「箱」（英語版の書簡）または「檻」（日本語版、インドネシア語版）に入れられた鳥のようだとステラに宛て最初の書簡に書いている。

1899 年 5 月 25 日、ステラ宛の書簡（抜粋）

> わたし達若い女性は今もなお旧い慣習に束縛されて、教育の進歩から生まれる幸福などをほとんど享けていないのが現状です。わたし達女の子が学校へ通ったり、毎日家の前へ出たりする――――ということだけで、それがもう甚だしく慣習に反することだといわれます。わが国の慣習が女の子の外出を厳禁していることはご存知の通りです。私は十二歳の年にあしどめを命ぜられました。――――「檻」に入らなければならなかったのです。わたしはただひとり外界から隔離されて、寂しく家の中に閉じ込められました。もはやわたしは、両親がわたしのために選定し、わたしにめあわせようとする、見知らぬ一人の男性――――つまりわたしの夫といっしょでなければ、二度と再び世の中へ出ることがで

きなくなってしまいました。・・・(早坂四郎訳)[161]

カルティニはピンギタン期に入ることで大好きだった先生、友達と別れなければならなくなった。彼女は初等学校を卒業した後、兄達のように中等学校(HBS)に進学する希望をもっていた。しかし、いくら父にそのことを願いしてもそれは強い拒否ではね返された。

カルティニはこのピンギタン期に入った悲しみについて第三人称を使ってアベンダノン夫人への書簡で次のように述べている。

1900年8月、アベンダノン夫人宛カの書簡(抜粋)

学校から最後の家路を辿る幼い心の中には、様々な感情が渦巻いていました。目から熱い涙がポタポタと零れ、胸は激しく波打ち、小さい唇は泣き出すまいとして震えていました。学校を去るということは、あれほど愛していた様々なことと別れるのだということがよく解っていたからです。大好きだった先生、お別れの挨拶に行った時、優しい言葉をかけて下さった先生、涙をためて別れの握手を求めてくれた友達、幸せな日々を過ごした場所を去るのは、たまらなく気が重かったのです。しかし、そんなことは勉強を続けられない悲しみに比べれば物の数ではありません。彼女は勉強が大好きでした。初等学校を終えてからも学ぶべき事は限りなくあるということを知っていたのです。彼女は野心に燃えていました。「学力」の面で、いずれヨーロッパに帰って勉強を続ける事ができる白い肌の友達に負けたくなかったのです。

彼女は泣きながら兄達のようにスマランのHBSで学ぶことが許してくれるよう父上の前に頼みました。力いっぱい勉強します。お父様を失望させるようなことはありませんから・・・と。彼女は父上の前に跪いてじっと息をつめ、心配そうに返事を待って父上の顔を見つめました。父上は愛情をこめて彼女の髪

[161]カルティニ、『光は...』、前掲書、10-11ページ。

をやさしく撫でました。しかし、返事は「否」だったのです。(早坂四郎)[162]

上記の書簡に出てきた「白い肌の友達」とは、カルティニの友人であるレッシーを指した。レッシーはヨーロッパ人との混血児であり、ヨーロッパに行けるようにするために一生懸命勉強をしていた。校長先生がカルティニにレッシーと一緒にオランダ行って勉強を続けないかと質問した時に、カルティニは「行きたいかどうかという質問ではなく、行くことが許してもらえるかどうかと質問して下さい」と答えた。つまり、当時のジャワの女性の意志が無視され、定められた道を歩まざるを得ないという存在であった。

図 9.カルティニ３姉妹

左からカルティニ、カルディナ、ルクミニ

出典：Kartini. *Kartini The Complete Writing 1898-1904*. ed and trans by Joost Cote,(Australia: Monash University Publishing, 2014), No Page.

カルティニは６年間のピンギタン期間（1892 年～1898 年）に入った。最初の４年間の 1892 年から 1896 年まではたった一人で、その後の 2 年間は妹達（ルクミニとカルディナ）と共に３姉妹（図 9）揃って過ごした。この６年間のピンギタン生活

[162]Kartini, *Kartini: Surat-surat Kepada,*13-14. シティスマンダリ・スロト、舟知恵・松田まゆみ訳、『民族意識の母…』、前掲書、45 ページ。

においてカルティニは数回父と共に外出が許されただけであった。

1900 年８月、アベンダノン宛の書簡（抜粋）

> 半年前から妹の一人がこの牢獄の仲間入りいたしました。でもブミ[163]は得をしました。というのは、ニ[164]はこの妹と同い年の時にはもはや長い間、高い壁で仕切られた囲いの中に監禁されていたのですが、ブミはその頃自由に遊ぶ事ができ、散歩にでることもでき、ニには禁止されていたことがなんでもやれたからです。ブミが 14 歳６ヶ月になった時、姉が結婚いたしました。ブミと後日やはりあしどめをさせられたもう一人の妹ウィ[165]といっしょに、ニはこの姉の部屋をもらいました。（早坂四郎訳）[166]

ピンギタン期においてカルティニの世界は知事邸の厚い壁の内側のみとなり、それまでカルティニが過ごした楽しかった子供時代の生活とは全く異なったものであった。ピンギタン期とは、花嫁修業のための期間であり、貴族階級のお姫様（大人の女性）のような態度も取らなければならなかった。例えば、優雅で穏やかな話し方、結んだ唇だけで微笑み、大笑いしてはいけない、静かに歩く、年長者が通るたびに腰をかがめ顔を下げねばならない、格好よく膝行する（ドドック―dodok）ことができなければならないことなど､様々な礼儀作法を身に付けることが求められた。西欧の自由な思想に憧れたカルティニは上記のような作法に上手く自分を適合させることは非常に困難であったため、そのルールはしばしば破られた。カルティニはピンギタン生活で感じた悲しさと失望をステラに宛てた書簡で次のように述べる。

---

[163]カルティニの妹ルクミニの愛称である。日本語版の書簡集にはブミと書かれているが、インドネシア版の書簡集にはベミと書かれている。

[164]カルティニ自身（自分のこと）の呼び名である。

[165]カルティニの妹カルディナの愛称である。

[166]カルティニ『光は...』、前掲書、39 ページ。Kartini, *Kartini: Surat-surat*, 24-25.

1899 年 11 月 6 日、ステラ宛のの書簡（抜粋）

わたしが四方厚壁の中に閉じ込められた事の起こりが何かというお質問でしたが、ほんとに檻かなにかの中へ入れられたと思っていらっしゃるようですね。実はそうではないのですよ、ステラさん、私の牢獄は周囲の広い、ただそのまわりの高い壁のある庭園のついた大きな住宅なのです。その壁が私の牢獄になっただけのことです。わたしの家や庭がいくら広くても、いつもその中におらなければならないとしたら、息苦しく感ずるのは当然でしょう。限りない失望と悲嘆のために、常に閉じ込められているこの扉に、この冷酷な石の仕切りに、くり返しくり返しいく度この身を投げづけたことか―わたしは一々はっきり記憶しています。どちらを向いて進んでも決まって石の壁か鍵のかかった扉のために、行くてを遮られてしまうのでした。（早坂四郎訳）[167]

ピンギタンというジャワの古くから伝わる悪しき習慣（因習）によって女性の自由と自立が奪われることを強く批判したカルティニは、それ以外の様々なジャワの伝統的な価値観を否定するようになる。

とくに彼女は父親も含めたジャワ人の運命主義的で自分の意見を明確にしない態度を強く批判するのである。

1902 年 10 月 27 日、アベンダノン夫人宛の書簡（抜粋）

呪われた運命に耐えているとはいえ、容易になくなりそうもない、ジャワ人の忍従生活の実情を、お聞き及びのことと思います。『神さまの思召だから！』といって、自ら慰め、辛抱しているのです。人間はこの世に生まれる以前から、各人の運命は決定しております。幸か不幸、生前から神の思召が決まっているのです。神の思召によるものを、排除し得る人間はない筈です。しかし災難の降りかかる前に、真剣にこれを払いのける手段を講じなければならない義務が

[167]カルティニ『光は...』、前掲書、18-19 ページ。

ございます。しかもなお降りかかって来たとすれば、それは神の思召なのです。ところで神の思召、この世における彼以上に力のあるものではございません。従ってわたしのなすべきことはなんでしょうか、奥様、おわかりになりますか？固い決心をもって、自分の目的を達成するためひたむきに努力することなのです。そして将来起こることは起こることに委せるほかはございません。彼らは柔順にそれを甘受し、「神様の思召とあれば仕方がない！』というでしょう。

もしまだ実現していないとすれば、わたしの力で断然防止しなければなりません。もしまたすでに実現したとすれば、それは神の思召と考えられ、彼もまた服従するばかりです。神よ、わたしに力を授けて下さい！（早坂四郎訳）[168]

また、ジャワ人の欠点は見栄っ張りだとカルティニは考えた。ジャワの貴族は黄金の傘を伴わないものを全て見下すような態度を取った。カルティニは別の書簡ではジャワの伝統的な悪しき慣習が自分達民族の発展を阻害していることに誰も気付かないことを強く批判する。とくに貴族階級であるプリヤイ階層が自分達の利益のことにしか関心がないことが最大の問題で障害だと批判する。

1900 年元日、オーフィンク・スール夫人宛の書簡（抜粋）

ジャワ人のもつ悪い癖のうちで僕滅しなければならぬものの一つは驕慢心です。これはなくすることはジャワの繁栄のために非常に助けになるでしょう。この悪癖も道義の教育施することによって容易になくしてしまうことができます。

国土と民族のために役立ち、またこれに恩恵を齎すことができるとかんがえられているにもかかわらず、持主達の驕慢心と尊大心がその活用を好まないばかりに、けっきょく使われないままに放置されている力がどんなにたくさんあることでしょう。貴族の人々は、貧しい人々の生活を改善することを好まず、むしろ彼らを貧しいままに留めておきたいのですが、しかしたとえ貴族にとっ

[168]カルティニ、『光は...』、前掲書、175-176 ページ参照。

ては賤しいことであろうとも、羨望の位階を示す金色の日傘[169]をさしかけられずに、金色の日傘の陰に入らずに、働かなければなりません。わたしは今のうちに自分の家庭の中に横たわる最大の障害を取り除かなければなりません。・・・(早坂四郎訳)[170]

このようにカルティニはプリヤイ階層に根付いた慣習が貴族階級だけのための自己中心的なものであって社会(祖国)の発展にとって大きな障害だと考え、彼女自身はそれを取り除くための闘いを決意している。

第2項　ジャワの伝統工芸とカルティニ

1898年にカルティニ三姉妹はオランダのデン・ハーグで行われた「女性勤労全国博覧会」に協力し、芸術作品を出品した。出品したのは絵画、刺繍、それに数枚のバティックと様々な工程順に分けたバティックの染色見本の作品などであった。

展覧会場の中の「東印度―インスリンデ」はオランダ領東インドからからの出品を扱う部門で、ルカルディ(Lucardie-Daum)夫人が主任として運営に当っていた。ウィヘルミナ女王とエマ太后がその展覧会を訪れたときにカルティニ三姉妹の出品に対して大きなの関心を示された。またこの時、王女と太后はカルティニからの書簡も読まれている[171]。

1902年3月14日、ステラ宛の書簡(抜粋)

オランダで全国夫人技芸展が開かれた折には、私達も何点かの作品を王女様にお送りました。エマ太后様は秘書を通じて東印度部門主任に、私達の送った作

---

[169]金色の日傘とはお供の従者にさしかけさせる長い柄の傘。身分の高い者ほど模様の金筋の数が多い。

[170]カルティニ『光は...』、前掲書、31-32ページ参照。

[171]Maria Grever and Berteke Waaldjik (translated by Mischa F.C. Hoyinck and Robert E. Chesal), *Transforming the Public Sphere: The Dutch National Exhibition of Women's Labor in 1898*, (Duke University Press, 2004), 160.

品についての説明を求められたそうです。また主任のご案内で会場を回られた折に、私達の書簡の何節かを読んでほしいと仰言ったということです。[172]

展覧会の出品全部を記載した目録の中にあったカルティニ三姉妹が送った品目は以下の通りである。

二四〇番　板に書かれた風景画二枚、浮彫りの額録付き

二四一番　壁飾り、サテン地に描かれ達ューリップの花、竹製額付き

二四二番　壁飾り、サテン地に描かれた小鳥、竹製額付き

二四三番　サテン地に描かれた絵二枚、びろうどの額付き

二四四番　ガラス盆に描かれた絵

二四五番　掛物二本

二四六番　サテン地に描かれた絵、ロココ風額付き

二四七番　彩画した貝殻二枚

二四八番　模造皮に描かれた絵、スタンド付き

二四九番　浮彫りを施した竹六本

二五〇番　飾帯（プランギ）六枚、及びその織布に必要な道具と製作過程の見本

二五一番　更紗染（バティック）の道具一式―蝋で模様を下描きした原布四枚、まだ蝋を落とさない状態のバティック一六枚、完成した布（カイン）二枚、チャンティン[173] 4個、蝋鍋一個、架台二個、焜炉一個、錘り二個[174]

カルティニが出品したもの中で、二五一番のバティックが特に人類学者達の関心

---

[172]Kartini, *Kartini: Surat-surat*, 99-100.シティスマンダリ・スロト、『民族意識の母…』、前掲書、86ページ。

[173]チャンティンとは溶かした蝋を小さな細かい口から垂らしながら模様を描く道具である。

[174]Kartini, *Kartini: Surat-surat Kepada,* 100.シティスマンダリ・スロト、『民族意識の母...』、前掲書、87ページ。

を集めた。このバティックコレクションには、バティックの作り方のオランダ語で説明が添えられていた。展覧会の運営委員であるルカルディ夫人はカルティニが出品したバティック全工程の作品とその説明文を G.P.ローファール（Gerret Pieter Rouffaer）及び H.H.ヨインボル（Hendrik Herman Juynboll）博士に渡し、この説明書は後にバティック模様の絵図と染色用具とを併せて収載した標準書『蘭領東印度における更紗美術とその歴史』（De Batikkunst in Nederland Indie en Haar Geschiedenis）（G.P.ローファール及び H.H.ヨインボル博士著）の第１章の主要な部分になった。カルティニの兄であるカルトノは写真の用意などを手伝った。この本の序文には、「女性勤労全国博覧会」から得た協力のうちでも特に価値のあるのはジュパラ知事の令嬢達から送られて来たものであることが記されている。彼女の染色技術の工程作品とその説明文は彼女自身が実際に作業をし、経験を積んだからこそ細かいところまで説明できたものである[175]。

シティスマンダリ・スロトによる『民族意識の母カルティニ伝』[176]によれば、『蘭領東印度における更紗美術とその歴史』は 2 回出版された。初版は 1900 年 H.クレイマン社から、第 2 版は 1914 年、A.オストフック社（ユトレヒト）からである。内容は二つの部分から成り立っており、文章の部分と絵からなる図版であった。文章の部分はオランダ語とドイツ語で書かれ、各ページ対照になっている。図版は 100 枚の挿絵からなるものであり、各地方のバティック制作の中心地域毎に、それぞれ特徴のある模様見本を載せていた。

このようにして、カルティニが出品したバティックとその作り方の説明文によって世界にジャワの伝統が広く知られることとなる。

カルティニが住んでいたジュパラは現在では木彫産業で有名な町であるが、この

---

[175]Maria Grever and Berteke Waaldjik, 160. Kartini, *Kartini: Surat-surat Kepada,* 101-102. シティスマンダリ・スロト、前掲書、88-89 ページ参照。

[176] Kartini, *Kartini: Surat-surat Kepada,* 101-103.シティスマンダリ・スロト、前掲書、88-89 ページ参照。

分野でもカルティニは大きな役割を果たしている。

現在チーク材の美しい模様を掘った家具などについては国内及び国外においてもジュパラ製作品が優れていることが広く知られているが、古くからジュパラは木彫技術で知られていた。その発祥の地はブラカン・グヌン村（Desa Belakang Gunung ―字義通りには「山の裏」村）であった。

村の名前の由来は村の位置が昔のポルトガル砦の山の後ろにあるため、村はブラカン・グヌン（山の裏）と名付けられた。村人の多くは代々の木彫師か家具職人として、工房経営者でもあった。カルティニ姉妹は幼いころから知事である父と一緒にこの村をよく訪れた。

その美しい木彫工芸を製作する熟練した技術があるにも関わらず村人達はひどい貧困状態におかれていた。そのため、カルティニはどうすれば村人の生活が仕事によって保証されるようになるかを考えた[177]。

「女性勤労全国博覧会」開催の後停滞しているオランダ領東印度の手工芸を再興させる目的で「東西協会」（Oost en West）という組合が設立され、オランダ本国において何回か展示会を開き、成功をおさめた。そしてカルティニは職人を知事邸に集め、最も頼りにしていたシンゴウィリヨ親方を指導者として指名した。作られた製品が「東西協会」を通してバタヴィアやスマランの顧客に送られた[178]。

第３項　祖国愛とカルティニ

ジャワの慣習の多くは悪しき因習であると強く批判したカルティニであるが、他方で、ジャワの伝統工芸や伝統芸能といった伝統文化については高く評価した。カ

---

[177]Kartini, *Kartini: Surat-surat Kepada,* 104.シティスマンダリ・スロト、前掲書 91 ページ参照。

[178]1902 年 8 月 24 日付、アベンダノン夫人宛のカルティニの書簡。Kartini, *Kartini The Complete,* 445-447. 1902 年 8 月 15 日付、エディ・アベンダノン宛のカルティニの書簡。Ibid., 427.

ルティニは当時の人々から「西欧かぶれ」として批判される傾向が強くあったが[179]、この点に関してはカルティニはジャワ社会に強い愛着をもっていた。

例えば、カルティニはアベンダノンに宛てた書簡の中でジャワの伝統芸能の素晴らしさを誇らしげにジャワの祭りで見たワヤン（Wayang）[180]を例にあげて次のように述べている。

1903 年 6 月 7 日、アベンダノン夫人宛の書簡（抜粋）

> すばらしいワヤンの踊りを見て感激いたしました。優れた踊り手の一挙手一投足から目を放すことができませんでした。ひじょうに優美なりっぱな踊りでした。踊り手は女ですが、男に扮装して踊ったのです。
>
> ほんとうにきれいな踊りでしたこの踊りは男性の勇猛果敢な性格を物語るものですが、表現はいかにも音律的で優雅なものでした。全体の身振りにおいても、一つ一つの動きにおいても、辛抱強さと音律とがよく現れていました。これこそわたし達の芸術の美しさです！・・・野外ではガムランの音楽が人の心をそそり立てますし、なんともいえぬ美しい歌声が耳もとに流れて来るのですもの。とうとうまどろむこともできませんでした。・・・（早坂四郎訳）[181]

また、カルティニはジャワの一般庶民の生活態度と魂がヨーロッパ白人社会の庶民に比べるとはるかに詩的で美しいものであり、礼儀正しい存在であることを次のように強調している。

1902 年 8 月 15 日、ステラ宛の書簡（抜粋）

> ステラさん、下層社会の人々の口から聞く美しい思想―わかりやすい、口調のよい、日常の話ことばで表現される、崇く美しい思想―がずいぶんたくさんご

[179]現代インドネシアにおいてもカルティニをこのように批判する人が少なくない。
[180]ワヤンはワヤン・クリとして影絵人形劇が有名であるが、ここで述べられているのは俳優による古典舞踊劇のことである。
[181]カルティニ、『光は...』、前掲書、200 ページ。

ざいます！ヨーロッパ人のあなたにわたし達の民族の魂がおわかりになったら、あなたはきっとわたしに同情を寄せてくださるにちがいありません。さらに突っ込んで事の本質に近づいてみますと、崇い思想といっても決して人々の理解しにくいものではございません。平凡な言葉でしかも韻律と声調がなんともいえないほど美しいものです。

わが民族の魂の海の底に沈潜すればするほど、その魂の程度はいよいよ高いに思われてまいります。ヨーロッパ人の間では知恵と文才のある人といえば常に一、二の階級の出身者に限られ、礼儀作法は中堅の一、二の階層の間に保持されているだけです。大多数を占める庶民は―こんなことばを使って失礼ですが―粗野です。もちろん庶民階級の間にも思慮分別のすぐれた者があるにはありますが、その数は果たしてどれぐらいあるでしょう？それはわたしよりもあなたがよくご存知のはずです。

ところがいま試みにわたしの周囲をそぞろ歩き、村や部落に足を入れ、極貧の人々の茅屋に立ち入り、彼らの語ることばや彼らの考えに耳をかたむけてみましょう・・・一人として学校教育を受けた者はないのですが、彼らの口ずさむ歌の詩はあたかも木の葉を撫でるそよ風の歌声にもたとうべく、美わしい霊感に満ちた、いかにも美しいものです。礼儀正しい、穏健な、謙虚な気持ちです。

彼らの中には実に多くの文士や芸能家がおります。そして一民族が、人生にとって至上の美である詩というものへの感覚をもち合わせるようになった暁には、その民族は霊の礼儀作法の点において低俗に甘んずるものではございません。

人間の生活においておよそ清らかな美しいもの、それは詩です。愛、犠牲、誠実、信頼、繊細、その他親切を施し、清らかさと善さと美しさをあたえるもの、それは詩です。そしてジャワ人は詩をもってその生命を編んでおります。

ジャワ人は下層のどん底にあるものにある者でも優美な感覚、詩的感覚身につけています。・・・（早坂四郎訳）[182]

以上のようにカルティニはジャワの伝統芸能や伝統工芸を深く愛しただけではなく、ジャワの貧しい庶民の人々の生き方そのものにも強く魅せられると共に、深い共鳴を感じていた。

プリヤイのお姫さまの立場にあるカルティニがジャワの貧しい庶民にこのような深い共鳴の感情を抱くようになったのは、おそらく次のような理由によるものと思われる。

第一に、すでに述べたように、ヒンドゥー・ジャワ古代王国時代から王宮の中で形成された王宮文化の洗練された伝統（アルースとチョチョクの価値観）が広くジャワの庶民にも受け入れたことによって、共通の理解が親しみをもって形成されたことによると考えられる。第二の理由はインドネシアを植民地支配下においていたオランダ人を中心とした白人支配者が一部の倫理派に属する人以外は原住民に対して横柄な人種差別的態度を取ることが一般的であったことと比較しての評価と思われる。とくにカルティニも強く指摘している通り、ジャワに来た平均的な白人の多くは教育のないジャワ人から見ても粗野で礼儀正しくない態度が多かったようである。

そのため、カルティニは様々なオランダ人との接触の中で逆に祖国に対する愛着を強めることとなったと思われる。

1899 年 11 月、オーフィンク・スール宛の書簡（抜粋）

事実、欧州人がただわたし達の笑いものになっているばかりです。彼らは、わたし達がわが国の慣習に従って原住民社会の頭といわれる人々に敬礼をしなければならぬと同じように、彼ら自身に対して敬礼をさせようと考えているので

[182] 同上書、150-152 ページ参照。

す。...（早坂四郎訳）[183]

1899 年 11 月、オーフィンク・スール夫人宛の書簡（抜粋）

オランダ人はわたし達ジャワ人の愚かさを笑いものにするのがすきですが、いざわたし達が自分達の向上を図ろうとする段になると、彼らの態度一変してわたし達を脅しにかかるのです。...（早坂四郎訳）[184]

そして、カルティニは、ジャワの貴族（プリヤイ）達が単にその地位にあるという理由だけで庶民に膝を屈して彼の足に接吻をさせるような慣習は止めるべきだと主張する。貴族の権威は国民のための実践を行うことによってのみ「国民から正当な敬礼を受けなければならない」と警告する。（1899 年 8 月 18 日ステラ宛の書簡、1902 年 8 月 15 日、E.C.アベンダノン宛のカルティニの書簡）カルティニの祖国への愛は、自らが属するプリヤイ階層に対しても正面から鋭い批判を向けたのである。

この書簡の内容が意味していることは、土屋健治が指摘しているようにカルティニが「ヨーロッパ人」からも「ジャワ人」からも等距離の位置で客観的に観察していることである。彼女は支配者であるオランダ人を「狂気の沙汰」と評価することで、その支配下に置かれていた「愚かなジャワ人」と人間として全く変わらないレベルの低い存在と見なしている。カルティニは当時のオランダ人には理解不能な原住民の高い知性の持主であった。

第 2 節　カルティニとイスラム

カルティニは、オランダの友人に送った書簡の中でイスラムを信仰していることを述べたが、一方数多くのイスラム批判を展開している。カルティニは、自分がイスラム教に帰依しているのは、祖先がイスラム教に入ったという理由にしか過ぎな

[183]同上書、27 ページ。
[184]同上書、26-27 ページ。

いと述べる。

1899 年 11 月 8 日、ステラ宛の書簡（抜粋）

ステラさん、イスラム教のことについてはお話申し上げることができません。イスラム教は信徒が異教徒へその内容を洩らすことが禁じているのです。それにまたわたしがイスラム教に帰依しているのは、実はわたしの祖先がイスラム教に入っていたという理由からに過ぎません。自分でも知らないのに、知ることもできないのに、どうして自分の宗教を愛することができましょう。

（早川四郎訳）[185]

さらに彼女は、コーランは聖なるものであるという理由で、アラビア語以外の言語に翻訳することが許されていないにもかかわらず、当時のジャワではアラビア語の分かる人は全くいないことに強い疑問を抱く。彼女が教えを受けた人々はコーランを読めたが、意味が全く分かっていなかった。読み方だけ教えられて、意味と内容を教えられないこのような信仰は「まったく狂気の沙汰」（1899 年 11 月 8 日付け、ステラ宛の書簡）[186]だと強く批判している。大事なのは「正しい心」をもつことと彼女は考えた。その書簡は以下のようにである。

1899 年 8 月 18 日付、ステラ宛の書簡（抜粋）

コーラン（聖典）はまことに神聖なもので、一切の各国語に翻訳することを許されません。当地にはアラビア語のわかる人はおりません。こちらで教えを受けた人々は、聖典を読むには読みますが、自分で読んだものの意味内容を教えられないなんて、まったく狂気の沙汰です。・・・聖人になれないとしても、心の正しい人になることはできるでしょう。そうではないでしょうか、ステラさん。

[185]同上書、20 ページ。
[186]同上書、20 ページ。

そして「正しい心」こそ何よりも大切です。（早川四郎訳）[187]

また、彼女は別の書簡では同じような内容を述べた。

1902 年 8 月 15 日、E.C.アベンダノン宛の書簡（抜粋）

・・・もはやコーランを読んだり、意味のわからぬ外国語の聖典を読もうとは思いません。わたしだけがわからないのではなく、大かた教える先生にも、男にも女にも意味のわからぬようなものなんかを。「ほんとうの意味を説明して下さい、それがわかればどんな事でも勉強したいと思います！」わたしは罪を犯しています−この神聖な書物は、あまりにも神聖過ぎて、わたしのような者には意味が掴めないのです。（早川四郎訳）[188]

また、カルティニは宗教の仮面をかぶった人々が、愛の精神をもたずに行動する姿を、余りにも多く見せつけられたため、そのことがカルティニを宗教から背けさせた原因だという。

1902 年 12 月 12 日、アベンダノン夫人宛の書簡（抜粋）

一般国民の階級に属する友人達から、わたしは大きな期待をかけられています。宗教の仮面をかぶった人々が、愛の精神をもたずに行動する姿を、あまりにも多く見せつけられたので、それが長い間わたしを宗教から顔をそむけさせた原因だったのです。その後、愛の精神をもたないのは宗教そのものではなく、かえって元来害であり聖であるものを腐敗堕落させるものこそ人間なのだ、という事実にようやく気がつきました。（早坂四郎訳）[189]

カルティニはジャワ人に宗教を教えようとするなら、キリスト教徒、イスラム教

[187]同上書、19−20 ページ参照。
[188]同上書、156 ページ。
[189]同上書、181 ページ。

徒、仏教徒、ユダヤ教徒を含めた全ての人間に共通する唯一の神を知ることが重要であると述べる。

第 3 節　カルティニの結婚観

ジャワのプリヤイ階級の慣例に従ってピンギタン（婚前蟄居）に入ったカルティニは外部の世界から全く切り離され、「神によって定められた」男性が彼女を妻としたいという申し出が来るまで家庭内に閉じ込められることになった。カルティニは両親が選定した見知らぬ男性の申し出がなければ、2 度と外界に出ることが許されないというこの制度によって女性を男性の所有物としてしか見ず、人間として認められないことに強い怒りを持った。

ジャワのプリヤイ伝統では、結婚はもともと神の命令によるものとされ、女性は相手（夫）を選ぶ権利は認められない。父や伯父や兄によって決められた相手の男性は一般的に既婚者である場合が多く、他の女性の子供がいる場合でも女性の気持、意志や希望などは問題にされず、ただ夫に服従するように強制されるのである。女の結婚とは家族の男性の利益を獲得するための取引の材料にしか過ぎないのである。

1901 年 8 月、ファン・コル夫人宛の書簡（抜粋）

> ジャワの乙女達、特に家がらの乙女達のたどるべき道はただ一つ、結婚があるだけです。
>
> もちろん、結婚はもともと神の命令であり、清静な女性の生活の目標となるべきものではございますが、因襲久しい習慣と成り果てた今日においてはどんな有様でしょうか？結婚が生活の希望とならなければならぬことは申すまでもございませんが、今日ではそれが猟奇の眼、生計の源に堕してしまいました！そしてああ、自己を賤視し自己を卑下する契約や条件をもって報償を払わなければならないジャワ女性が数限りもないのです！父や伯父や兄の命令のままに、娘はまったく見も知らぬ一人の男性に隷属する心構えをしなければなりません。

その男性が既婚者であったり、子供のある場合さえまれではございません。本人の意志や希望などは問題にさえすれず、ただ服従を強いられるばかりです。結婚の時にも、娘本人は出席する必要がなく、娘の出席を許す必要もない。(早坂四郎訳)[190]

一方、イスラム教では、アラーの神（イスラム教唯一の神）が女性の存在意味を男性の伴侶になることにあると定めた結果、女性にとって人生の目的は結婚することになってしまったという。カルティニは結婚が「男性と女性と平和な、調和の取れた共同生活」にあると考えたが、それは現実の結婚制度とはほど遠いであったものであった[191]。

イスラムによれば夫を持たない、あるいは結婚しないイスラム教徒の女性は犯罪を犯したものとされ、そのためジャワの社会においてはそのような女性はその家族の恥になると考えられた。彼女はこのような考え方に強く反発する。

1899 年 5 月 25 日、ステラ・ゼーハンデラール宛の書簡（抜粋）

しかし、結婚――わたし達はけっきょく結婚をしなければなりません、ぜがひでも！夫をもたないということは、イスラム教徒の女にとってこの上もない罪悪とされております。わたし達の社会の少女とその家族にとって最大の恥辱とされているのです。(早坂四郎訳)[192]

また、彼女はイスラム教の「一夫多妻」の掟に対しても強い批判を行う。イスラム教では、男性は 4 人まで妻を持つことが許される。圧倒的多数者がイスラム教徒であるジャワの社会においては、男性が複数の妻を持つことは長い間当然とされて

---

[190]同上書、88-89 ページ。Kartini, *Kartini The Complete*, 223.

[191]1900 年 8 月 23 日、ステラ・ゼーハンデラール宛の書簡。カルティニ、『光は…』、前掲書、、45-46 ページ参照。

[192]同上書、12 ページ。Kartini, *Kartini The Complete*. 70.

きたが、カルティニはその行為は罪悪であると断定する。

1899 年 11 月 6 日、ステラ・ゼーハンデラール宛の書簡（抜粋）

どうしてもわたしは愛することができません。まず尊敬の念がなければならないと思いますが、わたしにはジャワ人の青年を尊敬することができないのです。一度結婚して父親となっておりながら、子供の母親〔妻−訳者註〕との結婚生活に厭きて、別の女性−−−イスラム教〔回教またはマホメット教。インドネシア国民の大半はイスラム教に帰依している−訳者註〕の戒律に従って正式に結婚した第二の女性を家庭へ引き入れるような男性に対して、どうして尊敬が払うことができましょう。このような行いはしない人があるでしょうか。このような行いをしないわけがあるでしょう。それは罪悪でも過ちでもないですもの。イスラム教の戒律は、男性は四人の妻をもつことを許しております。イスラム教の戒律に従って四人の妻をもっても罪悪ではないのだと、世間の人々は千回もくりかえして申しますけれども、わたしはいつもそれは罪悪であると断言いたします。（早坂四郎訳）[193]

西欧と異なって、ジャワの女性は何百年という長い期間イスラム教のこのような考えを疑いもなく制度として受け入れ、黙々として忍従し、なすこともなく屈服するばかりであった。カルティニから見ればそれは、女性が聡明さと知識をもたない無知な存在であるためであり、言い換えれば女性に教育がないためにこのような悪習がいつまでも続くのである。

[193]Ibid.，80. カルティニ、『光は…』、前掲書、、17 ページ。

第 4 章　カルティニの思想とオランダ植民地政策

第 1 節　カルティニと西欧近代思想

カルティニの名には「ラデン・アジュン(Raden Ajeng)」という称号がついている。それは、未婚の貴族女性を示すプリヤイ階層（王族・貴族）の称号であり、彼女の階級の高さを表している。彼女の父アディパティ・アリオ・ソスロニングラト（R.M. Adipati Ario Sosroningrat）はレヘン（インドネシア語では Bupati、現在の行政で言えば知事）であった。

前述したようにカルティニの父は原住民の行政体系（一般地区）において最高官であり、その祖先は代々ジャワの北部海岸地域のジュパラを領有するプリヤイ（貴族階級）であった。ジュパラは海岸沿いに位置したため、ジャワの中でもいち早くオランダの植民地となった地域である。カルティニの祖先はマジャパヒト王族の家系であり、後にオランダ植民地の原住民高級官僚として、スラバヤ（Surabaya)、パティ（Pati)、デマック(Demak)、クドゥス（kudus）などの県知事を務めていた。

祖父のチョンドロネゴロ 4 世は、既述のように、自分の子女に西欧教育を受けさせた最初のインドネシア人として知られている。1861 年、チョンドロネゴロ 4 世は直接オランダから家庭教師を呼び、子供達に対して男女を問わずに自分の家でオランダ語による教育を施し、オランダ風の生活様式などを取り入れようとした[194]のである。

カルティニの父はチョンドロナゴロ 4 世から進取の気性を受け継ぎ、男女を問わず子供達みんなを学校に入れた。当時のプリヤイの慣習（Adat）では女子を家の外へ出すことは固く禁じられており、ましてや毎日登校して男の子達と接触することなど論外であった。しかし、父のソスロニングラトは、カルティニと妹達も ELS へ

[194]1899 年 5 月 25 日付、ステラ・ゼーハンデラール宛のカルティニの書簡。Kartini, *Surat－Surat Kartini Renungan,* 2.

入れた[195]。

カルティニはオランダ教育を受けたことで西欧の知識教育の重要性を理解し、倫理派のオランダ人達の新しい自由思想に大きな共感をよせていた。カルティニは無知と戦うために一般の原住民に対しても教育を与えられねばならないと考えていた。

カルティニは、西欧の近代帝国主義植民地政策がジャワ社会を衰弱させ衰退させていることを鋭く見抜いていた。しかし一方で西欧の近代的自由主義の思想が、ジャワ社会のどうしようもない旧弊、イスラムの制度、封建的な貴族制度に覚醒を与え、進歩を促すための大きな可能性を持っていることを理解していた。そこにこそ「檻」に入れられた彼女を自由にさせる鍵があると考えた。ピンギタン生活の中でカルティニにとって唯一外部の世界をつながる手段がオランダ語の書物であった。彼女は、オランダ語の新聞、雑誌、本を通じて 19 世紀末のヨーロッパにおける新しい自由主義思想や女性解放思想の大きな影響を受けたのである[196]。

---

[195]1900 年 1 月 12 日付、ステラ・ゼーハンデラール宛のカルティニの書簡。*Ibid.*, p. 30.
[196]富永泰代「カルティニの（世界認識）の形成過程―カルティニの書物体験についての一考察―」『南方文化第 18 号』1991 年、33 ページ参照。

以下はカルティニが読んだ文献である。

カルティニの読書リスト―オランダ語出版物

（※空欄にはデータ不明）

	分野	作者名	題目（出版年）	備考
1	文学	Bebel, August (1840-1913)	Von Bebel : Die Frau und der Sosialismus	『女性と社会主義』という題目でブルジョア的な結婚に対しての反発についての本
2		Borel, Henri (1869－1933)	Het Jongetje (1899)	代表作『少年』はその成長過程を教養小説として写実的に描いた作品。
			De Laatste Incarnatie	
			Een Droom van Tosari	
3		Browning, Elizabeth (1806-1861)	Aurora Leigh	該博な古典の知識と思索を重ね19世紀イギリス詩壇で一世を風靡し，女性解放思想の旗頭ともなったエリザベス・ブラウニングの代表作の一大叙事詩
4		Couperus, Luis (1863-1923)	De Stille Kracht (1900)	不可視であるがジャワの内なる世界に秘められた力とその影響力を主人公のオランダ人の目を通じて描いた作品
5		Cremer, Jacobus Jan (1827-1880)	De Lelie van s-Gravenhage	『ハーグの百合』
6		de Genestet, P.A. (1829-1861)	Tooneelspelers	『俳優』
			Terugblik	巧みな表現力とメランコリックな作風で多くの読者を魅了した詩人。
			Een Meikindje	
7		de Savornin-Lohman, Anna (1868-1930)	De Hollandsche Lelie の中の作品など	女性解放をテーマとした小説やエッセイを書き、Hollandsche Lillie の編集もした。
8		de Wit, Augusta (1864-1939)	Orpheus in de Dessa (1902)	『デサの中のオルフェウス』は、東洋人と西欧人との人間関係における疑問を発議した代表作。作者はスマトラ生まれ、バタヴィアで教師をした後帰国、新聞記者をした後、作家となった。
			Java-Feiten en Fantasien (1898)	
9		Dunne, Mary Chavelita（仮名 Egerton, George, 1859-1945)	Grondtonen	イギリス詩人。

10		Eliot, George（本名 Mary Ann Evans, 1819-1880）	Adam Bede（1859）	ヴィクトリア朝を代表する作家の一人で、心理的洞察と写実性に優れた作品
11		Hamerling, Robert (1830-1889)	Aspasia（1876）	オーストリア出身の詩人。『アスパシア』は古代ギリシアを背景にする小説。
12		Harraden, Beatrice (1864-1936)	Voorbijgaande Schepen in een Donkere Nacht（1893）	英語の著者、女性の参政権のための活動家。
13		Jonathan（本名 Hasebroek, Johannes P., 1812-1896 ）	Waarheid en Droomen（1896）	『真実と夢』
14		Huygens, C. L. (1848-1902)	Barthord Meryan（1897）	社会主義の視点から婦人問題、結婚問題をテーマにした代表作。
15		Kipling, Rudyard (1865-1936)	Het Licht dat Verging (1890)	イギリスの小説家、詩人で、イギリス統治下のインドを舞台にした作品、児童文学で知られる。
16		Maeterlinck, Maurice（1862-1949）	Wijsheid en Levenslot (1898)	ベルギー出身の作家。神秘的な考え方の散文作品。
17		Marx-Koning, Marie (1864-1926)	Van't Viooltje dat weten wilde	19 世紀末のオランダの女流作家。
18		Multatuli（本名 Eduard Douwes Dekker, 1820-1887）	Max Havelaar（1860） Gebed van de Onwetende (1860) Minnebrienen（1861） Vorstenschool（1875） Bloemlezing	『マックス・ハーフェラール』は作者の西ジャワのルバックで副理事官としての体験をもとにブパティのカルタ・ナタ・ナガラの実態を描き、植民地政策の欠陥を風刺弾劾した作品。その文体もオランダ文学に大きな影響を与えた。
19		Ovink-Soer, M. C. E. (1860-1937)	De Hollandsche Lelie の中の作品など	1894-1899 年レヘント婦人としてジュパラ滞在。カルティニの文通相手。
20		Perk, Jacques (1859-1881)	Gedichten	オランダ主要の詩人
21		Potgieter, E. J. (1808-1875)		文芸雑誌 Gids の主導者でオランダ文学の振興につとめた。
22		Prevost, Marcel (1862-1941)	Moderne Maagden（Les Demi Vierges, 1894）	フランスの作家。女性解放をテーマとしてフランスのブルジョワの結婚における葛藤を描く。
23		Reuter Fritz (1810-1874)		ドイツの作家。あらゆる困難に打ち勝っていく楽天主義が不幸から救って人生の成功へと推し進めるという作風。
24		Smiles, Samuel (1812-1904)	Plicht（1880）	英国の作家、医者。

25		Sylva, Carmen (1843-1916)	Deficit	作者はルーマニアのカルロス1世の王妃エリザベト、ルマニアの文芸復興ににつくした。
26		Sienkiewics, Henryk (1846-1916)	Quo Vadis (1895)	ポーランドの作家。ネロの時代、古代異教徒的世界とキリスト教世界との抗争を描く、キリスト教の発展歴史的な小説。1905年にノーベル文学賞。
27		Tegner, Esaias (1782-1846)	Frithjof Sage (1882)	スウェーデンの作家、本作を通じて、スウェーデンの現代詩の父と言われた。
28		Tennyson, Alfred (1809-1892)	Idyllen van de Koning (1892)	イギリスの詩人。この作品はスラ・ラナ（本名 van Isaac Esser jr.)が『Idylls Of the King』から訳し、De Gids 雑誌に載せたアーサー王について語る叙事詩であった。
29		Tolstoj, Leo (1828-1910)	Opstanding (1899)	トルストイの晩年の長編小説で、若い貴族とかつて恋人だった女の、贖罪と魂の救済を描き、それを通じて社会の偽善を告発する。
30		van Eeden, Frederik (1860-1930)	De Kleine Johannes (1887)	主人公ヨハネス少年のこころの成長過程を描いた自叙伝的小説。
31		van Kol, Nellie (1851-1930)	Wat Zullen de Kinderen Lezen? (1899)	代表作『子ども達は何を読むべきか』。カルティニの文通相手。
32		van Limburg Brouwer, Petrus (1829-1873)	Akbar (1872)	東洋小説
33		van Beek en Donk, Cecile de Jonk Gekoop (1866-1944	Hilda van Suylenberg (1897)	主人公のヒルダが球体依然とした社会とたたかい自立しようとする苦悩を描き、当時のオランダ社会で話題を及んだ作品。
34		Vosmaer, Carel (1826-1888)	Amazone (1880)	
			Inwijding (1888)	『就任』（未完成の小説）
35		Wallace, Lew (1827-1905)	Ben Hur (1880)	アメリカの作家。主人公ベン・ハーの苦難の半生のなかに、ローマとユダヤの対立、キリスト教を描いた作品。1899年ウィリアム・ヤングが劇化して以来、声価を世界的に高めた。
36		Ward, Humphery (1851-1920)	Marcella (1894)	英国の女流作家
			Robert Elsmere (1888)	
37		Zaugwill, Israel (1864-1926)	Droom van het Ghetto	ユダヤ系イギリス人の小説家劇作家。
38		Jacobs, Aletta	Het Doel der Vrouwen	『婦人運動の目的』

		(1854-1929)	Beweging.	
			Wat is the Taak der Nieuwertsche Vrouw?	『新しい女性の役割は何か』
39		van Riemsdijk, Jeanette	Moderne Vrouwen	『新しい女性』フランス語から翻訳。
40	論評	von Suttner, Bertha (1843-1919)	De Wapens Neergelegd (Die Wapen Nieder, 1899)	オーストリア出身の作家、1905年ノーベル平和賞受賞。『武器を捨てよ』
41		Adriani, Nicolas (1865-1926)	Bijdragen tot de Taal-, Land en Volkenkunde のなかの作品	スラウェシの言語・文化について。カルティニの交通相手。
42		Fielding, H. (1859-1903)	De Ziel van een Volk (1901) (The Soul of People	英国出身の作家。ビルマの人々・生活・宗教について
			Buddhisme	
43	地歴・文化・宗教	Lyall, Eduna (1857-1903)	Wij Beiden (We Two, 1884)	英国出身の作家。この本はローマの独裁に対してのキリストの運動であった。
44		Mulder, Lodewijk (1822-1907)	De Vaderlandsche Geschiedenis	オランダの歴史について
45		Ortt, Felix (1866-1959)	Naar het Grote Licht	キリスト教について
46		Ritter, Dr. P.H. (1851-1912)	Paedagogische Fragmenten (1888)	教育心理についての本
			Ethische Fragmenten (1896)	倫理について
47		Tonnet, Martine	Wayang Orang (1899)	ワヤン・オラン（人間芝居）を中心にジャワとその芸術、ジョグジャカルタ王宮についての De Gids 雑誌の記事
48		Veth, Pieter Johannes (1814-1895)	Java: Geographisch, ethnologisch, historisch	ジャワの地誌や歴史について
49	古典	—	Grieksche Mythologie	ギリシア神話
50		—	De Verhalen van Duizen en Een Nacht	千夜一夜物語

参考：
富永泰代「世界認識の形成過程—カルティニの読書体験についての一考察—」『南方文化』第18、1991年11月。

こうした西洋思想を学び、受容して、旧い世界の束縛を嘆きつつも、カルティニは新たな世界に踏み出す勇気を未だ持てずにいた。

1899 年 11 月 6 日、ステラ宛の書簡（抜粋）

わたしはいよいよ多くの戦いを覚悟しておりますが、来るべき時代を展望して動揺を感ずることはございません。旧い環境へ逆行することはできないが、さればといって一歩前進して新しい世界へ活躍することもできず、無数の糸がわたしを旧い世界に固く縛りづけております。・・・（早坂四郎訳）[197]

第 2 節　カルティニの思想とオランダ植民地政策批判

カルティニはオランダ教育を受けたことで西欧の知識教育の重要性を理解し、倫理派のオランダ人達の新しい自由思想に大きな共感をよせていた。彼女は無知と戦うために一般の原住民に教育が与えられねばならないと考えていた。しかし他方では、彼女は帝国主義的な人種差別の強い西欧思想に対して、批判的な態度をとっていた。彼女はジャワの伝統を反文明的あるいは野蛮であるとして否定する西欧中心主義に強く抵抗するのである。

カルティニは、ステラ宛の書簡で、アントン教授は未開人のジャワ人が人間であることを認めても、ジャワ人の肌の色や服装だけを見るばかりで、「別の人間」と見做すようになっただけだと述べている。その書簡文は以下の通りである。

1901 年 1 月 9 日、ステラ宛の書簡（抜粋）

なかば未開人に属するわたし達も普通の人間であることに変わりはない、と教授は考えておられます。ただ教授の目に映るものは、皮膚、の色や服装やその他わたしの周辺の事物ぐらいのものですが、それがごくあたりまえの事までも珍寄に見せる結果になるだけに過ぎない。（早坂四郎訳）[198]

---

[197]カルティニ、『光は…』、前掲書、、16 ページ参照。

[198]同上書、68 ページ。

1899 年 11 月 6 日、ステラ宛の書簡（抜粋）

ジャワ人は愚かであるかもしれませんが、あなたと同じ考えもつ限り、だれでも全人類と同じ観方をしている筈で、神によって教養の高い人々と同列に置かれているにちがいありません。（早坂四郎）[199]

彼女はジャワの伝統文化の中に、西欧にはない人間的で素晴らしい価値を発見する。彼女はジャワ人がオランダ人になったり、半オランダ人になったりすることを望んでいなかった。ジャワ人は、ジャワ人としての誇りもった高い文化を保持しなければならないと考えた。

第 3 節　カルティニとオランダの倫理政策

カルティニは倫理政策派のオランダ人達と交流があった。

また、彼女はファン・コルに具体的な留学計画と援助を正式に申し出た。その内容は、正教員免許及び看護婦免許を取得するためオランダ本国において教育を受けたいということであった。留学費の全額負担（オランダへの往復旅費、学費、滞在費など）と留学後は、原住民のプリヤイの女子達のための寄宿学校を設立する機会を与えて欲しいという 2 点を希望した[200]。

彼女に留学することを強く勧め、そのための支援を申し出たのは、20 世紀初頭から始まったオランダ倫理主義派に属した大物政治家や高官、学者などであった。しかし、カルティニはオランダへの留学の夢を実現することが出来なかった。カルティニが留学を断念したのは、それまで彼女をバックアップした倫理派のアベンダノンの提案を受けたからだと思われる。そのことについては、1903 年 1 月 25 日付の

[199]同上書、16 ページ。
[200]1902 年 6 月 21 日、ファン・コル宛の書簡。シティスマンダリ・スロト、前掲書、214-215 参照。

アベンダノン宛の書簡[201]とその2日後アベンダノンの息子に宛てられた書簡[202]の中に書かれている。アベンダノンは、彼女がオランダに留学すると時間がかかり、彼女の最大の目的である女学校の設立が遅れるので、バタヴィアで教育を受けた方が、早く女学校が設立できると提案した[203]。

この提案の背景には、カルティニの頭脳があまりに明晰であり、彼女がオランダの植民地政策に対して鋭い批判をしていたことで植民地政庁が大きな危機感を抱いたことがあった。結局カルティニの留学の道は閉ざされてしまう。

カルティニは書簡に以下の通り記した。

1900年1月12日、ステラ宛の書簡（抜粋）

> オランダ人はわたし達の愚かさを嘲笑していますが、いざわたし達が自分達の向上を図ろうとする段になると彼らの態度は一変してわたし達を脅しかかるのです。（早坂四郎訳）[204]

1902年10月27日、アベンダノン夫人宛の書簡（抜粋）

> あるとき父がこんなことを申しました。「ほんとうにお前を愛するヨーロッパ人がたくさんあるなどと思い込んではいけません。そんな心持人（ママ）は一人か二人に過ぎないだから。（早坂四郎訳）[205]

---

[201]Kartini The Complete, 553-555.
[202]1903年1月27日、エディ・アベンダノン宛の書簡。Ibid., 556-558.1903年1月31日、エディ・アベンダノン宛の書簡。Ibid., 559-563.
[203]1903年1月27日付、E.C.アベンダノン宛の書簡。Ibid., 558.
[204]カルティニ、『光は…』、前掲書、、26-27ページ参照。
[205]同上書、173ページ。

第５章　カルティニの女子教育観

第１節　オランダ領東インドにおける教育事情

19 世紀の前半、オランダ領東インドでは、植民地政庁による教育はオランダ人の子供達のみを対象としていた。最初のオランダ人の学校（ヨーロッパ小学校 Europeesche Lagere Schoolen、略称 ELS）は、1817 年 2 月 24 日にバタヴィアで創設された。この学校は全てオランダの小学校を基本としていた。オランダの植民地経営が間接支配から直接支配に転換していく中で、ジャワのオランダ人の数が急激に増加するに伴い、1820 年には学校の数は 7 校に増加した。バタヴィアに 2 校、チレボン（Cirebon）、スマラン（Semarang）、スラカルタ（Surakarta）、スラバヤ（Surabaya）、グレシック（Gresik）にそれぞれ 1 校ずつ開設された[206]。

1830 年代になるとオランダ東インド政庁は、強制栽培制度と徴税請負制による収奪体制の強化によって植民地体制の再編成を図るようになった。これは、原住民農民層の大きな犠牲の上にオランダ本国に莫大な利益をもたらすこととなった。しかし、この事業を継続するためには、多くの優秀な官吏を必要とした。その官吏のすべてをオランダ本国から呼び寄せることは莫大な費用がかかり、非常に困難であった。そのため、ジャワ人のプリヤイ（貴族階級）の子供の中から優秀な官吏を育てる必要が生まれた。しかし、東インド政庁は 19 世紀半ばの時期までは、原住民に対する教育については全く無関心であった。

1848 年の植民地政庁の教育予算に 25,000 ギルダーが原住民の教育費として計上され、1851 年にスラカルタ（Surakarta）に初めて官吏を養成するための学校が開かれたのは例外であったが、それ程官吏の数が足らなかったということでもあった

[206]Djohan Makmur et al., *Sejarah Pendidikan di Indonesia Zaman Penjajahan*（支配期におけるインドネシアの教育史）(Jakarta: Depdikbud, 1993), 60.

[207]。採用された原住民の官吏はプリヤイ階級であったが、支配者であるオランダ人と原住民の間を結ぶ役割をもっていた。スラカルタはジャワ文化の中心的な町であるという理由で官吏養成学校の設立地として選ばれた。また、スラカルタではジャワ語研究所が設置され、オランダの研究者が在籍していた（当時、在籍していた研究者は Wilkens, Winter, Mounier, Gericke と Cohen Stuart であった)。その学校の生徒は研究者達の教科書作りという役割も担った。教育用語はジャワ語であったが、この時代では止むを得なかったと思われる[208]。

1856 年にスマトラのブキットティンギ（Bukittinggi）に、続いて 1866 年バンドン（Bandung）とプロボリンゴ（Probolinggo）に官吏養成学校が設立された。教育用語はそれぞれムラユ語、スンダ語とマドゥラ語であった[209]。

これらの学校では教員も養成された。設立時の生徒は 15 人であったが、1863 年に 32 人に増加した。また、バリ（Bali)、バンジャルマシン（Banjarmasin)、バンドンからの聴講生も存在していた。1871 年には生徒数は 130 人に増加し、63%（82 人）の生徒が卒業することが出来た[210]

表 4. 1873 年以降における学校の発展の統計

	学校数		教員数		生徒数	
	1873 年	1883 年	1873 年	1883 年	1873 年	1883 年
ジャワとマドゥラ	82 校	193 校	223 人	582 人	5,512 人	16,214 人
その他の地域	117 校	284 校	188 人	659 人	11,276 人	18,694 人
合計	229 校	477 校	411 人	1,241 人	16,788 人	34,908 人

出典：Sartono Kartodirjo, *Pengantar Sejarah Indonesia Baru: 1500-1900 Dari Emporium Sampai Imperium Jilid 1* (Jakarta: Gramedia, 1988), 353.

[207]竹井十郎、『インドネシア』、岡倉書房、1941 年、324 ページ。
[208] Sartono Kartodirjo, *Pengantar Sejarah Indonesia,* 349-350.
[209]Ibid.,350.それぞれ現地の言語である。
[210]Ibid.,351-352.

1870 年に土地法が制定され、それまでの統治方針は植民政策に転換された。新しい教育の方針としてオランダ領東インド政庁は各地に原住民のための学校を開いた。1893 年、地方に第一級小学校（De Schoolen der Eerste Klasse）と第二級小学校（De Schoolen der Tweede Klasse）という二種類の小学校が設けられた[211]。

第一級小学校は 5 年制の小学校であり、商業や工業などで盛んな町や県庁がある地域に設けられた。この学校に入学できるのは貴族階級の原住民であった。この学校の教育用語ははじめの頃ムラユ語で行われたが、後にオランダ語に変わった。この学校は下層官僚の子弟を教育するために作られた小学校であり、読み、書き、算数、歴史、地理学などが教えられた[212]。

一方、第二級小学校は 3 年制の小学校であり、小さな町に設けられた。この学校は一般庶民のための小学校であり、授業の内容は第一級学校と異なって読み、書き、算数のみであった[213]。

20 世紀に入るとそれまでの過酷な収奪体制に対する反省がオランダ国内から起こったため、原住民への一定の福祉を目的とした「倫理政策」と呼ばれる植民地政策が新たに採用されることになる。倫理政策と原住民への教育の普及（Educatie)、農作用の灌漑(Irigatie)、移民（Emigratie）である。しかし、オランダ語による西欧的教育は原住民の下層官僚の養成のみとしていたため、オランダ語の原住民への流通範囲はなおジャワのプリヤイや歌人メスティーゾーの一部の子弟に限られたものであった。オランダ植民地政府はイギリスと異なり、オランダ語を原住民に普及させなかった。オランダ語による学校設立は、一部の原住民エリート階層（プリヤイ）にオランダ語の教育を実施して、彼らを民族語世界にいる原住民と切り離し、

---

[211]竹井十朗、前掲書、327 ページ。

[212]Sri Sutjiatiningsih, Sutrisno Kutoyo, *Sejarah Pendidikan Daerah Istimewa Yogyakarta*, (Jakarta: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, 1982), 34-35.

[213]Denys Lombard, *Nusa Jawa 1*, 84.

植民地支配体制側の立場からオランダの利益を高めるためであった[214]。

これらの学校は男性しか入学できなかった。女性は特別の許可がない限り入学が許されなかった。カルティニは数少ない女性の一人としてオランダ人と同様にヨーロッパ人学校に通っていた。まだこの時期には女子教育を目的とする学校は存在してなかった。

第 2 節　カルティニから見たジャワ伝統社会における女性

カルティニは前述の文献を読むことを通じて、世界に関する知識のキーワードが「言語」であることに気づいた。言語を勉強することによって伝統的な世界から出られ、西欧の思想に入り込める。カルティニは言語取得によってジャワ人がオランダ人と同じ立場になれるではないかと考えた。そのためにオランダ留学が適当と考え、以降オランダへ留学したいという夢を持つようになった。

しかし、カルティニはジャワの女性であったためにオランダへ留学という夢を実現することは困難であった。ジャワの女性は伝統的な習慣によって外国どころか家さえ出られなかったのである。

カルティニが受けたそれまでのオランダ式教育は彼女の思想の形成に大きな影響を与えていた。このピンギタン生活の中でカルティニが受けた伝統的な教育価値観とオランダ式教育による西欧化が大きく衝突した。ここでカルティニは自分の経験を基にして、ジャワの女性の教育を考えはじめた。彼女のように進学できなかったジャワ女性達にも教育が必要だとは考えたのである。

カルティニはオランダ政府が原住民に対して教育を受けさせない理由に注目した。なぜオランダはジャワ人に教育を受けさせないのか？なぜジャワ人はオランダ語を

[214]戸津正勝、カルティカ・ハンダヤニ・アンバリ、「インドネシアにおける国語の形成過程―ムラユ語からインドネシア語へ―」『国士舘大学教養論集』、第 63 号、(2008 年 3 月)、3-4 ページ参照。

話せないのか？[215]

オランダはジャワの支配を続けるためには原住民に教育を受けさせないということがカルティニには次第に解ってきた。その結果、カルティニは次のような考えに達した。

第1にジャワ人を教育するために先にやるべきことは貴族階級を教育するべきである。ジャワの伝統的な社会の中に貴族階級が中心でおり、民衆は貴族階級の命令に従うという社会の構造が成り立つため、貴族階級に教育を受けさせることによって、民衆にまで波及すると考えられる[216]。

第2に、女性に教育が必要であるとカルティニは考えた。女性は子どもが出会う最初の指導者である。社会で活躍する人達を生み出すためにはまず母親の教育が必要である。そのために母を教育するべきである[217]。

オランダ留学を諦めた四日後の1903年1月30日、カルティニと妹のルクミニがアニ・グラサー[218]（Annie Glaser）を通してスリゲンベーグ（J. Sligenberg）から質問状をもらった。その書簡に載っている質問の内容は以下の通りである。

> ジャワ人を発展させるためにどういう行動が適当なのか。どうちらの方向に教育をなおし、あるいは拡大するのか。ジャワを発展するために政府があまり注目していない女性はどういう役割を持つのか。ジャワの女性達の地位や知識を向上させるために何から始めれば良いのか。貴族階級か普通階級かそのどちらからなのか。そして、それはあなた達の文化や習慣に反しないのか。[219]

---

[215]1900年01月12日、ステラ宛の書簡より。

[216]1903年に「ジャワ人に教育を」というカルティニが書いた書簡である。Kartini, Surat-surat Kartini, 367-385.

[217] Ibid.367-385.

[218]Annie Glaser はジュパラでカルティニなどを教えていた女性の先生であり、ブテンゾーグ(Bogor)に転職された。

[219]Dri Arbaningsih, 88.

これら質問に答えるために早速カルティニとルクミニは下に述べるような内容のメモをスリゲンベーグ宛に「ジャワに教育を」と題して提出した。

カルティニが理想とした教育方針。①ジャワ社会を発展するためには学校だけではなく、家族の役割も大きいのである。特に母の役割が重要である。②良い女性を教育するためには学校に所属する先生は責任を持つべきである。③オランダ政府は一つの学校と寮を一緒に創立するべきである。④教育はオランダ語で行い、母語のジャワ語も第2言語として教えるべきである。⑤人格の育成は必要である。⑥読書を通じて教育を行うことである。⑦オランダや西欧を多く知るためには知識が必要であるため、その教育を実施するためにオランダ人の教師も必要である。⑧ジャワの伝統社会においては宗教を変える人は低く見られるため、宗教は教育と区別するべきである[220]。

カルティニの教育に関する考えにこたえてアベンダノン[221]（Abendanon）はカルティニが女学校を設立する道を考えた。アベンダノンはカルティニの考えに基づいて1900年10月20日日付第15336回覧状に女学校の設立計画を提出した。その回覧状の内容は次の通りであった：

1. 文明化の時代に最も重要な人物は女性である。
2. 女性という存在を忘れると国の知性的な発展かつうまくいかないと考えらる。
3. 女性は国の文明化を背負う。[222]

しかし、ジャワの高官達はその回覧状を積極的に受け入れようとはしなかった。

---

[220]Sitisoemandari Soeroto, 274-278.

[221]Jacques Henri Abendanonは倫理主義者であり、1894年ジャワの裁判所に勤めた。1900年に教育と工芸大臣になり、ジュパラへ訪れたときにカルティニ一家と知り、後カルティニの文通の友人担った。

[222]Dri Arbaningsih, 92

オランダ政府はジャワには女子教育は重要ではないと判断したのである。

第3節　カルティニと女学校設立課程

カルティニはジャワで初めての女学校を設立したのだが、それを実現するためにはより高い教育を受ける必要があると考えて、オランダ留学を強く望んでいた。

彼女に留学することを強く勧め、そのための支援を申し出たのは、前述したように、20世紀初頭から始まったオランダ倫理主義派に属した大物政治家や高官、学者などであった。しかし、カルティニのあまりに明晰な頭脳とオランダ植民地政策に対する鋭い批判が彼女の留学の道を閉ざしてしまうこととなった。そのため、カルティニは東印度政庁の協力なしに独力で私立の女学校設立を決断する。彼女が望んだ学校の教育課程はそれまでの東印度政庁による教育課程とはかなり異なるものであった。カルティニの目指した学校は女性が自立できるための職業教育であり、自らの力で考えられるようになる幅広い人間を教育することであった。そのことによって、男性と結婚するしか生きる道のないジャワ女性が古いジャワの封建的因習から自由になる高い能力を持った女性となるよう育成することであった。

1903年ジュパラの知事邸に設立された学校は、オランダ領東インドにおける最初のジャワ人女学校となる。女学校の教育方針はオランダ政庁が決めた方針とは異なり、カルティニの考えに基づいて行われた。オランダ政庁が決めた方針で学校を設立すると特定の規則に従わなければならなかった。彼女の教育方針は、知的教育よりも道徳教育をより重視した。つまり、母が子供を教えるように教育をすることに重点が置かれたのである。それはプリヤイ家庭の慣習で、彼女が実の母と全く接触できない環境で育てられたことの影響があったように思われる。その学校の教育方法では一般の学校と異なって、皆それぞれがお互いに愛情で結ばれ、お互いに教え合う、一つの大きな家庭であることが目指された。先生は真の意味の母であり、子供達の全人格的な指導者であるとされたのである。(1903年1月27日付、E.C.アベ

ンダノン宛の書簡）[223]

最初は生徒 1 名のみであった。それは周辺の地区に住んでいるプリヤイの娘であった。彼女の 5 歳ぐらいになる妹も一緒に学校を通う事になった。その後、収入官と副収入官の娘、そしてカリムン・ジャワの裁判官の娘も次々と預けられた。彼女達の全てがプリヤイ階層の子供達であったが、遠い地方からの生徒は食費を払って他人の家に寄宿した[224]。

1903 年 7 月 5 日付アドリアニ博士に送った書簡では女学校の生徒は 7 人となり、さらにジュパラ外の地域から 3 名の生徒が入学することになったという[225]。また、アベンダノン夫人の書簡では以下のように書いている。

1903 年 7 月 7 日、アベンダノン夫人宛の書簡（抜粋）

> 明日は九人の生徒を教えます――これがわたし達二人の何よりの慰めです。新たな入学願書がたくさん着ましたが、その中にマライ人（外国人―訳者註）からの申込みがございます。これこそ一つの勝利です！（早坂四郎訳）[226]

学校は週 4 回に開かれ、授業は午前 8 時から 12 時半までであった。学校で教えられた授業は読み・書き・図画・料理・家庭教育などである。カルティニが実際行った教育法は普通の学校で行われた方法と異なり、ジャワ人の子供の好むがままに勉強をさせるという方法がとられた。生徒達が話す言葉は高級ジャワ語（プリヤイ階級の言葉であるクロモ）だったが、クラスでの交流はクロモによっても順調に行われたという様子が書簡に述べられている。

1903 年 7 月 4 日、アベンダノン夫人宛の書簡（抜粋）

> 子供達は週に週に四日間、八時から十二時半まで登校します。そして書き方、

---

[223] Kartini, *Surat-surat Kartini,* 305-308.
[224] 1903 年 7 月 4 日付、アベンダノン夫人宛のカルティニの書簡。Ibid., pp.328-329 参照。
[225] Ibid., 331.
[226] カルティニ、『光は…』、前掲書、209 ページ。

読み方のほか、お料理の勉強もいたします。わたしの教育法は学校に普通に行われている方法には依らないで、わたしの考えの及ぶ限り、ジャワ人の子供達に好むがままに勉強させる方法をとっています。

ああお母様ご主人様も、この子供達の様子をご覧になれば、きっと満足なさるにちがいありません。彼らはさっぱりとした着物着て時間通りにやってまいります。誰も彼もうれしそうな様子で、とても朗らかで清浄無垢です。しかも子供に自由ににさせるわたしの仕事はとても楽です。・・・そして子供達の社会は実にりっぱです。彼らの話すことばは高級ジャワ語（クロモ―早坂四郎による脚注）ですが、もちろん硬くなって話しているわけではございません。（早坂四郎訳）[227]

図 10. カルティニがジュパラで設立した女学校

出典：Elisabeth Keesing, *Betapa Besar Pun Sebuah Sangkar Hidup, Surat dan Karya Kartini*, trans. Mien Joebhaar (Jakarta: Djambatan, 1999), 167. （写真：J.E.Quartero Leentvaer）

1903年7月半ば、女学校が設立された直後、オランダ留学を諦めたカルティニは、

[227]Kartini, *Surat-surat Kartini*, 329. カルティニ、早坂四郎訳、前掲書、205-206ページ。

父の薦めでにレンバンの知事のラデン・アディパティ・ジョヨ・アディニンラット（Raden Adipati Joyo Adiningrat）の結婚申し出を受け入れた。しかし、後になって結婚相手の知事にはいない筈の側室がいたということが判明した。

カルティニがレンバンに引っ越す前になってもプリヤイ達が娘をカルティニに預けようとした[228]。カルティニは生徒達をレンバンに連れて行くことを望んだが、結局彼女の結婚後ジュパラの女学校は妹のルクミニに委ねられた。1904 年 4 月 10 日の記録ではジュパラでの女学校の生徒は 22 人まで達していた[229]。

レンバンはカルティニが別の学校を設立しようと試みた様子が 1903 年 12 月 11 日付のアベンダノン夫人宛に綴られた書簡に見られる。彼女は 1904 年 1 月に小さな学校を設立する予定であった。当時、2、3 人の親達が娘をカルティニに預けたいと既に申しいれていた。カルティニは女性の先生を募集した。先生が見つかるまでは自分で教える予定だった[230]。記録によればカルティニの学校は 4 月に開設した。最初の生徒は彼女の義理の娘であった[231]。

カルティニは 1904 年 9 月 13 日に出産した 4 日後の 17 日に突然この世を去った。レンバンでの学校についての最後の記録は 1903 年 4 月 10 日付、アントン博士とアントン夫人に宛てられた書簡に書かれている。彼女は亡くなるまでに 6 通の書簡（6 月付 2 通、7 月付 1 通、8 月付 2 通、9 月付 1 通）を送ったが、学校に関する記録は全くなかった。

現在、その学校の建物は、レンバンのボーイスカウトの中央事務所として使われている[232]。

---

[228]1903 年 8 月 25 日付、アベンダノン夫人宛の書簡。Kartini, *Surat-surat Kartini*,344.
[229]1904 年 4 月 10 日付、アントン博士とアントン夫人宛の書簡。Ibid.,355.
[230]Ibid.,350.
[231]1904 年 4 月 10 日付、アントン博士とアントン夫人宛の書簡。Ibid., 355.
[232]2006 年 9 月の現地調査による。

第二部　19 世紀末日本における津田梅子の思想

第 1 章　津田梅子のアメリカ留学の背景

第 1 節　明治政府の誕生と女子教育政策

第 1 項　明治新政府の目標と教育政策

江戸時代においては、人々には「藩」という意識があっても「日本」という国家意識や「日本人」という国民としての自覚はなかった。日本が発展していくためには、それまでの「藩」を超えた国家意識の形成と日本という国家に所属する国民としての自覚が不可欠であった[233]。

こうして近代日本の教育は近代化を推進するための異文化受容と国家統合に必要な国家意識を持った国民の育成でスタートした。そのため中央政権が作られた 4 日後の 9 月 2 日(旧 7 月 18 日)には、早速文部省が設けられ、積極的に国民を教育する責任を果たさなければならないとした。具体的な政策としての第一歩が明治 5 年（1872 年）9 月 5 日（旧 8 月 3 日)、全国への「学制」[234]の発布であった。太政官の「学制」の公布に先立て「学制布告書」(「学事奨励に関する被仰出書」太政官布告第 214 号）を出した[235]。そこでは、「学制」の基本精神を明らかにしたものであり、以下のような「学制」の教育理念を明示したものである。

（1）立身出世主義的な教育制度の確立

---

[233]小川哲哉、小川精一、佐喜本愛、勝山吉章、『日本教育史概論』、青簡舎、2008 年、13 ページ。

[234]当初は「学制」は 109 章からなり、内容は大中小学区ノ事、学校ノ事、教員ノ事、生徒及試業ノ事、海外留学生規則ノ事、学費ノ事に分かれている。明治 6 年（1873 年）には、「学制二編」(海外留学生規則、神官僧侶学校ノ事)、「学制追加」(賃費生規則)、「学制二編追加」(外国語学校、専門学校）が後に追加され、全 213 章になった。

[235]当時は「学制序文」と呼ばれている。国立教育研究所、『日本近代教育百年史 3』(学校教育 1)、文唱堂、477－479 ページ参照。

（2）教育における四民平等の理念

（3）実利主義的な学問の確立[236]

第１の理念は「学問は身を立るの財本」であるとする立身出世主義的な教育確立である。それは、身分制を廃した新しい時代で財産、地位など社会的価値観の配分は個人の資質と努力によるものであり、学校に行くことが将来の立身出世へとつながる有効な手段であるという教育観である[237]。

第２は、教育や学問が「一般の人民華族士族農工商及婦女子」のすべてに平等に開かれることである。あおのため明治期において旧身分制度が廃止された。藩主は公家と共に「華族」、藩士や旧幕臣は士族となり、「農工商」の百姓・町人は平民となった。教育の面だけではなく、江戸時代に武士だけが苗字を持つことを許されたに対して、明治期になってからこの四民平等によって平民にも苗字の使用や華・士族との結婚を許されるようになった。つまり、この時代においては同じ権利義務を持つ国民が形成されるようになったのである[238]。

第３は、教育は日常生活に必要な「日用常行言語計算」の習得を基本として、実際に役に立つような学問を重視する実利主義的な考えが重視された[239]。

日本最初の統一的近代学校制度を規定した「学制」（全 213 章）は、行政面ではフランスの中央政権的な制度を採用し、学校体系・内容面ではアメリカの影響を受けたものであった。この「学制」とは江戸時代からの諸学校の普及を基盤とし、さらに欧米諸国の教育制度を参考として日本の学校教育制度を創始するために起草されたものある。これによって、維新後進められた教育の近代化が、国の教育制度の下に急速に推進され、展開されることになった。この教育革命は、明治維新による政治及び社会全般の革命の一環をなすものであったが、同時に近代日本を建設する基

[236]同上書、479 ページ。
[237]文部省、『学制百年史資料』、帝国地方行政学会、1981 年、124 ページ参照。国立教育研究所、同上書、479 ページ。
[238]文部省、前掲書、125 ページ参照。国立教育研究所、同上書、479 ページ。
[239]国立教育研究所、同上書、479 ページ。

礎としての重大な意義を持つものであった。また当時の教育政策は明治新政府の基本政策として掲げられた富国強兵、産業興業、文明開化などと深い関連をもって展開された[240]。

日本の近代教育は江戸時代の文化と教育を基盤とし、その伝統の上に成立した。明治維新後において、日本の近代化が急速に進められ、短期間に高度な近代社会を成立させることができた。その背景に幕末の日本の文化と教育が西欧諸国と比較しても、識字率や算術などですでに高い水準にあったことがあげられる。

政治の中心が東京に移るとともに、明治政府の学校計画は東京を中心として進められた。「学制」の第 1 章によれば、全国の教育行政は文部省がこれを統轄することが明示されしている。文部省設置以前は諸藩、府県が個別に教育を統轄していたことから見て、このことは当時においてとくに重要な意義を持っている。次に、学校の設立管理のために「学区」制を設けることについて規定している。全国に 8 大学（翌年 7 大学に改正）を置き、1 大学区を 32 中学校区、1 中学校区を 210 小学校区に区分し、それぞれの学区に大学校、中学校、小学校を各 1 校設立するものとしているのである[241]。

上記のように学制は、学区制に基づいて学校を設立し、全国の学校を小学校・中学校・大学校の 3 段に編成し、武士・庶民の区別なく全国を統一する制度である。さらに、明治 3 年 2 月には、欧米の学校制度を参照して学校制度が立案し、これが「大学規則」ならびに「中小学規則」となった。

---

[240]梅根悟（監修）、世界教育史研究会（編）、『世界教育史大系 34 女子教育』、講談社、1977 年、220−221 ページ参照。

[241]地方の教育行政機関として大学区には「督学局」を設けて、そこに督学をおき、また中学区には「学区取締」をおいて小学校の設立管理、就学の督励などにあたらせることとしている。大学については、「高尚ノ諸学」を授ける専門教育の学校とし、学科をあげているが、年限については定めていない。国立教育研究所『日本近代教育百年史 3』（学校教育 1）、文唱堂、1974 年、469 ページ。中学校も下など中学（3 年）・上など中学（3 年）の 2 段とした[241]。中学校は「普通の学科」を教える所としているが、このほか「工業学校」・「商業学校」・「農業学校」も中学校の種類とし、中等教育機関を総称して中学校としている。国立教育研究所、前掲書、470 ページ。

文部省は学制の立案にあたって、日本の教育を今後どのように進めてゆくかの基本方針を以下の学制に先立っての学制実施順序の 9 か条に示した。

一　厚ク力ヲ小学校ニ可用事
一　速ニ師表学校ヲ興スヘキ事
一　一般ノ女子男子ト均シク教育ヲ被ラシムヘキ事
一　各大学区中漸次中学を設クヘキ事
一　生徒階級ヲ踏ム極メテ厳ナラシムヘキ事
一　生徒成業ノ規アルモノハ務テ其大成ヲ期セシムヘキ事
一　商法学校一二所ヲ興ス事
一　凡諸学校ヲ設クルニ新築営繕ノ如キハ務テ完全ナルヲ期スル
一　反訳ノ事業ヲ急ニスル事[242]

上記の 3 条までが、学制における初等教育重視の方針を示している。

第 2 項　明治期における女子教育

明治期の教育において、女子は男子と同じように学校教育を受けるべきだという考え方は、学制においてはじめて明記された。それは学制実施順序の 3 条であり、女性の地位による教育を受けることとして次のように記している。

「人間ノ道男女ノ差アル事ナシ男子己ニ有学女子学フ事ナカル不可且人子学問ノ端緒ヲ開キ其以テ物理ヲ弁フルユエンノモノ母親教育ノ力多キニ居ル故ニ博ク一般ヲ論スルハ其子ノ才不才其母ノ賢不賢ニヨリ既已ニ其分ヲ素定スト云ヘシ而シテ今日ノ女子後日ノ人ノ母ナリ女子ノ学ヒサル可ラサル義誠ニ大イナリトス故ニ小学ノ教

[242]同上書、482 ページ。

ヲ敷キ従来女子不学の弊ヲ洗ヒ之ヲ学ハシムル事務テ男子ト並行セシメンヲ期ス是小学ヲ興スニ就第一義トス」[243]

ここでは、女子には学問が無用であり、女性は家事裁縫など身につければ十分であるといった従来の伝統的な女性観を改め、教育における女性の地位を主張している。これに加えて、母親の教養がその子供の将来を左右することを強調し、男女の区別なく小学校義務教育を実施することの重要性を述べている。1873 年（明治 6 年）の女子就学率は男子 39.9%に対して、わずか 15.1%に過ぎなかった[244]。

江戸時代の社会は武士社会の主従関係に基礎を置いていたが、さらにこれが家庭内にも及び、親子の関係、夫婦の関係も主従の関係と同様にみなされていた。家の後継者を得ることが優先され、女性は男性に対して従属する立場に置かれていた。そのため、女子教育は、このような人間関係を基礎とし、男子の教育とは区別されていた。男女の教育についてのあり方は地域や身分によって異なっていた。地域によっては女子が手習い塾に通うことがさほど珍しくない地域もあれば、手習い塾を通う女子を見て驚くような地域もあった。全体として、この時代の女子教育は低調だといわれるが、それが積極的に行われた場合であっても、女性は一般に婚家の家風に適応するように教育されることが求められ、男性と同じような学問と教養は必要とされなかった[245]。

女子教育の重要性を訴える書物は江戸時代の初期には出現していたことといわれる[246]。当時の女子教育においては、女子の実生活に必要な読み・書きを手習い塾で学ぶと共に裁縫などの技術の取得を行うことが重視された。12、13 歳頃には手習

[243]同上書、483-484 ページ参照。
[244]同上書、484 ページ。
[245]R. P. ドーア、松居弘道訳『江戸時代の教育』、岩波書店、1971 年、58－59 ページ参照。
[246]梅根悟監修、世界教育史研究会編、前掲書、209－211 ページ参照。

いをやめて、お針子として裁縫師匠[247]へ出入りするのが一般的であった[248]。しかし、女子の教育は主として家庭内で行われ、またお屋敷奉公や女中奉公を通じて行儀作法などを学ぶことも重視された。その内容は知的・道徳的・実用的・芸能的なものの４方面にわたったが、一般的にいうと道徳的・実用的教育が重んじられ、知的教育は軽視された。また、芸能の稽古は、一般に裕福な家庭の娘に限られていた。経済的に余裕のある上流町人の娘は稽古所に通い、さらに上品な言葉や行儀作法を身に付けるために武家邸や大商家に寄宿させる行儀見習いといった慣行もあった[249]。

江戸時代には封建社会の道徳を教えるための教訓書も数多く出版された。江戸時代の教訓書で注目されることは女子のための教訓書が極めて多いことである。庶民の女子をとくに対象としたものではないが、武家の女子をも含めた女子一般の教訓書が数多く出版された。女子教訓書の中には、「女大学」をはじめ、「女論語」・「女訓孝経」・「女今川」・「女実語教」などのように、当時有名な教訓書にとくに「女」の語を冠したものが多いことも、女子の教育を男子の教育と区別して独自なものと考えていたこと物語っている。このような女子教育観は明治維新以後も継承され、近代の学校教育の中にも根強く残されたといわれる[250]。

以上が江戸時代の教育一般的傾向であるが、幕末には寺子屋に学ぶ女児が次第に増加し、また女子のための独自の教養施設も設けられるようになった。しかし、寺子屋への女児の就学者は男児に比べてかなり少なく、また女子教育内容は、裁縫、茶の湯・活花あるいは礼儀作法などの女子的教養が中心であった。しかし、女子が家庭の外で組織的な教育をうける形態が次第に発達たことは、この頃の教育形態が近代の学校教育に近づいたことを示すものといえる[251]。

---

[247]「御針屋」と呼ばれた。
[248]桜井役、『女子教育史』、日本図書センター、1981 年、6 ページ参照。
[249]名倉英三郎編著、『日本教育史』、八千代、2000 年、65 ページ参照。
[250] 海後宗臣・中新・寺崎昌男、『教科書でみる近現代日本の教育』、東京書籍、1999 年、22 ページ。
[251] 文部省、『学制百年史』（記述編、資料編共）、帝国地方行政学会、1981 年、73-74 ページ参照。

表 5. 寺子屋の男女別

寺子屋数	男女共に通学していた寺子屋	8,636 校
	男児のみ通学していた寺子屋	5,180 校
	総　数	**13,816 校**
寺子屋に通学男女数	男児総数	592,754 人
	女児総数	148,138 人
	総　数	**740,892 人**

出典：国立教育研究所、『日本近代教育百年史 3』、(学校教育 1)、文唱堂、1974 年、158 ページ。

全国的にみれば、女児の数が男児と比べて著しく少なかった寺子屋ではあるが、江戸、京都、大阪などでは、寺子屋での女児の割合も多く開設されている。とくに、江戸では男児の 100 に対して女児 89.5 にのぼり、ほぼ男女同数となる状況が現出している[252]。

このように女児の就学率が高かったのは以下のような理由による。

(1) 江戸時代における商業活動が、とくに、小商売の発達によって、女子の労働力への要求が高まったのである。

(2) 町人など庶民の生活水準が向上するようになるとともに、女子にも教養を身につけさせる必要と欲求が生まれるようになった、ことがあげられている[253]。

しかし、江戸時代の女子教育に比べて明治期における女子教育は著しく改善されたと言える。これは文部省の統計にも見られるが、明治 8 年（1875 年）小学校における女子在学者の割合は 24.1%、それが明治 13 年（1880 年）には 25%になり、明治 18 年（1885 年）には 30.4%にもなった[254]。

[252]国立教育研究所、前掲書、159 ページ。
[253] 同上書、159 ページ。
[254]文部省、『日本教育統計　明治―昭和』文部省、1971 年、17－18 ページ参照。橋本紀子、『男女共

以上のように、明治 12 年までの学制期には、女子教育の欧化が奨励され、英語教育を主とした女子教育施設も多く設置された。この時代においては女性の地位の視点から江戸時代から続いてきた茶道や生花といった女子教育特有の伝習については強い関心をもたれなくなっていた。しかし、この時代における女子教育は、高など小学教育までが前提となっていた[255]。

第 2 節　明治新政府の女子留学事業

「学制」が発布される前から、明治新政府はすでに女子教育の必要性を認識していた。これは「学制」施行に先立って行われた 5 人の女子留学生の派遣の事業にみられた。この事業は北海道開拓使の事業の一つであった。新しい国家の確実な進路もまだ見えず、教育制度なども定められなかった中で、新政府は、1870 年（明治 3 年）に官費によって 10 年間という長期のアメリカに留学する少女達を募集した。

北海道開拓使は明治新政府が最初に計画した大事業の一つであった。1870 年（明治 3 年）5 月に開拓使長官としては東久世（ひがしくぜ）通禧、次官は黒田清隆が任命された。黒田清隆は開拓事業の視察のため、1871 年（明治 4 年）1 月に渡米した。

アメリカを視察した際、短い滞在中黒田はアメリカ女性の高い地位とその恵まれた環境に大きな感銘を受けた。彼は「それはこの国の女性が教育を受け、最高の配慮で扱われ、人間性のあらゆるすべてが高い品質の男性と平等であると見なされる」と述べている[256]。

黒田は日本の女性がアメリカ女性の置かれた状況と比較して、大きな格差があることにショックを受け、日本の女性の教育の必要性を痛感した。

また、津田梅子達を引き受けたランマンによれば、森有礼との会話の中で、黒田

学制の史的研究』大月書店、1992 年、30－31 ページ参照。

[255]関口敦仁、中村修也監修、「学校教育と伝統化」『文明開花の日本改造』淡交社、2007 年、68-79 ページ参照。

[256]Charles Lanman, *The Japanese in America*(New York University Publishing Company, 1872), 45.

は日本の国民を良くするための近道は日本人が外国人と国際結婚することが必要であると考え、森有礼にアメリカ女性と結婚するようにと薦めた[257]。

帰国後、黒田は教育の建議書を政府に提出した。この建議書の中で、具体的な二つの提案を行った。それは、開拓使のための女学校の設立と女子留学生を欧米へ送ることであった。

黒田によれば、開拓を行うためには人材が必要であり、そのために人材の育成教育が必要となる。欧米の諸国において子供を教育することが容易なのは、母親がすでによく教育され、この教育に基づいて行動し、その子供達を同環境で同じように教育するという教育的循環ができているからである。従って、北海道を開拓するためには、女子学校を設けさらに幼い女子を選んで、欧米に留学させることが急務であり、その学費は開拓使が負担する必要があるという点であった[258]。

このような考えの下でして北海道開拓と女子教育が結びついた。

この提案に右大臣である岩倉具視が賛成したため、北海道開拓使は、早速国費留学生としてアメリカへ留学を希望する女子の募集を開始した。留学期間は 10 年間であり、旅費、学費、生活費、さらに小遣いまで明治政府が負担し、年間 800 ドルの奨学金が支給されることが決定された。

しかし、第 1 回の募集には応募する者がなかったため、第 2 回の募集が行われた。この募集に応じたのは 5 名であり、応募したのは全てその保護者であった。応募した者は全員明治維新の「敗者」側の立場にあったという共通点を持っていた。選ばれた 5 人の女子留学生[259]は次の通りである。(彼女達の本名には「子」が付いていない)

1. 上田悌、東京府貴族士族外務省中録の上田俊の娘である。

(1855 年生まれ、16 歳)

---

[257] Ibid., 45.
[258]高橋裕子、『津田梅子の社会史』、玉川大学出版部、2003 年、24 ページ参照。
[259]山崎孝子、(日本歴史学会編集)『津田梅子』、吉川弘文館、31-32 ページ参照。

2.　吉益亮、東京府貴族士族同府出仕の吉益正雄の娘である。

（1857 年生まれ、14 歳）

3.　山川捨松[260]、青森県士族の山川与七郎（後に大蔵と改名）の妹である。

（1860 年 1 月 23 日生まれ、11 歳）

4.　永井繁、静岡県士族の永井久太郎の養女である。

（1861 年 3 月 20 日生まれ、10 歳）

5.　津田梅、東京府貴族士族の津田仙弥の娘である。

（1864 年 12 月 31 日生まれ、6 歳）

しかし、年長の二人（吉益・上田）は渡米 10 ヶ月足らずで帰国することになった。上田は個人的理由であり、吉益は眼を痛んだという理由で帰国した。吉益は帰国後の 1885 年（明治 18 年）に英語塾を開いたが、その直後コレラにかかって死去した。もう一人の上田は医者と結婚した。残り 3 人の女子留学生（津田梅子・山川捨松・永井繁子）は自分達のことを英語で「ザ・トリオ」（The Trio）と称した[261]。

ザ・トリオの最年長である山川捨松（1860－1919 年）は、父が会津仕藩に仕えた士族であった。彼女は二男五女の末娘として、会津若松に生まれた。彼女が誕生する前に父の山川尚江が亡くなったため、母唐衣と祖父重英に育てられた。会津戦争後、陸奥の斗南に移り住んだ山川家は財政の悪化のため、捨松は函館で宣教師としてギリシア正教を布教していた沢辺琢磨に引き取られ、その後フランス人の家庭に預けられた[262]。

母唐衣は教育に積極的であったため、捨松は日本で初めて大学を卒業し、学士号を取得する。山川家では彼女のみならず、長男の山川大蔵は後に東京高など師範学校校長に､次男の山川健次郎は開拓使の留学生として捨松より 10 ヵ月ほど先にイェール大学に留学し、後に東京帝国大学総長になった。捨松を北海道開拓使の女子留

[260]結婚してからは大山捨松になった。
[261]高橋裕子、前掲書、28 ページ参照。
[262]同上書、28 ページ参照。

学に応募させたのは長男であった。母は娘が留学で別れる時に、彼女の幼名「咲子」を「捨松」に改名した。母は彼女を捨てたつもりで、彼女が学問を身に付けて、帰国するのを待つという思いで改名したという[263]。

山川捨松はアメリカ留学から帰国後の 1883 年（明治 16 年）に参議陸軍卿・伯爵であった大山巌と結婚した。その後彼女は津田梅子の女学校設立の重要な協力者となる。

永井繁子（1861 年－1937 年）は、佐渡奉行属役・益田孝義の四女として東京の江戸本郷猿飴横町（現在、東京都文京区本郷である）に生まれた。益田家で長男の益田孝と彼女のみが育ち上がった。繁子は 5 歳の時に幕府の軍医である永井玄栄の所に養女に出された。長男益田孝は幕府の騎浜頭を務めていた時に永井玄栄と同じ寄兵隊の仲間であった。益田孝は、1856 年（安政 2 年）ハリスが日本滞在中、幕府の命令でアメリカ公使館に勤務の経験を通して、アメリカ人と早くから直接接触する機会があった。彼は繁子が北海道開拓使の女子留学に応募することを強く希望し、そのことを永井玄栄に説得した。永井繁子は 1881 年（明治 15 年）海軍大将の瓜生外吉男爵と結婚した後、瓜生繁子として津田梅子が女学校の設立時に協力者になった[264]。

この 3 人の女子留学生に共通している点について、高橋裕子はその著作『津田梅子の社会史』の中で以下のようにに分析している。

（1）3 人の少女が北海道開拓使女子留学に応募したのは本人ではなく、親族によるものであった。津田梅子の場合は、父の仙が、捨松と繁子は長兄がその応募を決めた。

（2）応募した親族達は外国と交流の経験があった。梅子の父は、1867 年に渡米し、捨松の次兄は 1871 年使節団の留学生としてアメリカへ、そして長兄は 1867 年

[263]同上書、28 ページ参照。
[264]同上書、28－29 ページ参照。

にロシア及びヨーロッパ諸国を視察した経験があった。繁子の長兄は外国人と早くから直接交流の機会があった。先に帰国した吉益と上田の親も、共に外務省に勤務した人物であった。

(3) 3 人の家族の背景はともに明治維新の「敗者」の立場にあった。彼らを応募させた親族（親と兄）は旧幕臣で明治維新という社会の大変動により、社会的な地位が下降せざるを得なかった。しかしながら、彼らは教育を受けていたため、下級官史として採用されたのである。新政府はこの少女達の親族が明治維新で敗者の下級官史であったため、彼女達が犠牲になるという危険性を心配することなく、国益のために未知の西欧社会を探る実験台として選んだと考えられる[265]。

第 3 節　津田梅子とアメリカ留学の背景

1871 年(明治 4 年)11 月 12 日に 5 人の女子留学生は岩倉使節団と共に渡米した。5 人の女子留学生の中に本論文に取り上げている津田梅子がいた。津田梅子は最年少であり、アメリカに出発したときには 6 歳[266]であった。

図 11. 開拓使令書

出典：津田塾大学『津田梅子と塾の 90 年』、学校法人津田塾大学、1990 年、10 ページ。

[265]同上書、29 ページ。

[266]津田梅子は 1864 年 12 月 31 日生まれのため、彼女がアメリカへ出発した時の 1871 年(明治 4 年) 11 月 12 日にまだ誕生日を迎えてなかったため、日本の年齢の数え方でいえば、津田梅子の年齢は当時 6 歳であった。

図 12. 留学免許状

出典：津田塾大学、『津田梅子と塾の 90 年』、学校法人津田塾大学、1990 年、12 ページ。

津田梅子（図 13）は 1864 年 12 月 31 日（新暦）、津田仙（図 14 左）の次女として江戸牛込南御徒町で生まれた。彼女の名前の由来は、男の子を欲しがった父は長女琴子についで生まれたのがまた女の子という事実を知り、大変に失望したためお七夜を過ぎても仙は梅子に名前をつけようとしなかった。困った母の初子は枕元の盆栽の梅が 2、3、輪ほころびているのを見て、それに因んで「むめ」（梅）と名づけた。「梅子」と現代風に改めたのは 1902 年になってからである[267]。

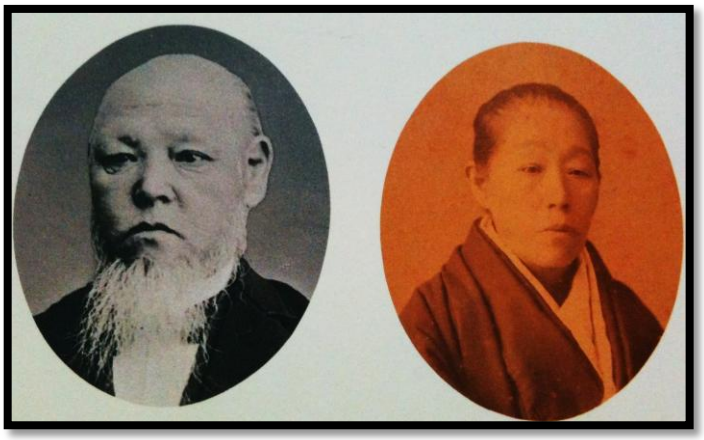
図 13. 津田梅子

[267]古木宜志子、『津田梅子』、清水書院、1992 年、27 ページ参照。

出典：Furuki, Yoshiko, *The White Plum a Biography of Ume Tsuda: Pioneer in the Higher Education of Japanese Women*, Weatherhill, 1991.

梅子のアメリカ留学については彼女の父である仙の役割が大きかった。梅子が 3 歳になった 1867 年に仙はアメリカを訪問する機会に恵まれた。このアメリカ訪問が仙に大きな影響を与えた。

図 14. 津田梅子の父母



出典：津田塾大学『津田梅子と塾の 90 年』学校法人津田塾大学、1990 年、8 ページ。

このアメリカ訪問中において、仙はアメリカの国の軍事・産業・学術などのあらゆる面にわたって感銘を受けたが、彼はとくに農業に惹かれた。帰国後、仙は「ホテル館」で働くこととなった。「ホテル館」は外国人居留地であった築地に 1869 年完成した東京における唯一の洋風ホテルであり、外国人の宿泊施設を兼ねた交易所であった。この職が仙の興味をひいたのは、ここが外国に向けて開かれた日本の窓であり、外国との交流の接点という重要な役割をもった場であったからである。彼は、滞在客に食事に対して缶詰ではなく、新鮮な西欧野菜を提供することを思いつき、野菜、果物の栽培を始めた。トマト、アスパラガス、オランダのいちご、アメ

リカのりんご、グーズベリーなどを日本にはじめて導入した[268]。

その他に仙のアメリカ訪問は梅子の教育にも大きな影響を与えることになる。アメリカ訪問の間に仙は自由なアメリカ女性達の活躍を見て女性観を変えるようになったものと思われる。それが理由となって、仙は梅子に早期の教育をはじめさせた。そのことは仙が妻に送った書簡の中に娘達に教育を与えたいと述べていることからも明らかである。その書簡の内容は以下の通りである。

> お梅には読物初めさせ候ふ様いたし度、毎朝夕時刻を定め、御教へ下されたく候お琴も同様いたさせ度、谷町へも御通じ下され度候[269]

北海道開拓使の事業の一環としての女子留学の募集の話が出たのは、アメリカの農務局長であったケプロン（General Horace Capron）が来日した時であった。ケプロンは北海道開拓使の開拓次官である黒田清隆に開拓顧問として招かれた。ケプロンが来日した 1871 年（明治 4 年）の夏には仙はすでにホテル館をやめ、北海道開拓使の嘱託となっていた。ケプロンの来日の歓迎パーティには岩倉、木戸、などの政府高官に混じって、仙は唯一の民間人として招かれた。北海度開拓使の事業の女子留学生募集はこのパーティの出席において聞いたものと思われる[270]。

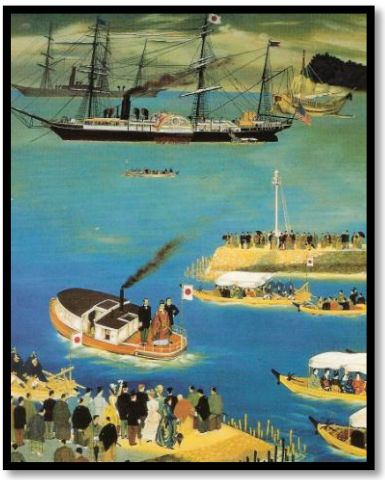
この女子留学事業は、文明開化の光が女性にもさしはじめたことを示していた。そしてそのような動きは地方に住む女性達にも新しい時代の到来として敏感に受けとめられていた。

彼女達は、1871 年(明治 4 年)11 月 12 日に太平洋郵船会社(Pacific Mail Steamship Co.）の蒸気船アメリカ号でサンフランシスコに向けて横浜を出港した。出航した様子は図 15 に見られる。

---

[268]同上書、29 ページ参照。山崎孝子、前掲書、20－24 ページ参照。
[269]1868 年 8 月付、津田梅子の母初子宛の仙の書簡である。古木宜志子、同上書、28 ページ。
[270]同上書、28-29 ページ。

図 15.アメリカへ出発時の光景



出典：津田塾大学『津田梅子と塾の 90 年』、津田塾大学、1990 年、13 ページ。

岩倉使節団は 5 人の女子留学生を除いて全て男性だったのため、岩倉使節団と同じ船で帰国したアメリカの代理公使デロング（Charles E. Delong）の夫人に女子留学生の世話が依頼された。

津田梅子はその 5 人の中で最年少の女子留学生であった。当時の梅子は「イエス」、「ノー」、「サンキュー」といった単語を教えられた程度であったという。父の仙は梅子に『英語入門書』*English Primer* と『英和小辞典』*A Pocket Edition of Japanese Equivalents for the Most Common English Words* を持たせた[271]。

日本からアメリカまでの船旅は 23 日間がかかった。使節団は 1 月 15 日（新暦）サンフランシスコに到着し、盛大な歓迎を受けた。宿泊先はグランドホテルであった。東海岸行きの汽車が雪で運行ができなくなったため、2〜3 日の滞在予定は 1 週間に伸びた。留学生達は 1 月 31 日にサンフランシスコから出発し、サクラメントで下車した。続いて、2 月 4 日にソールト・レーク（Salt Lake City）に到着した。雪が深く、汽車が通れなくなったため、その後は、シカゴを通り、2 月 29 日ようや

[271]山崎孝子、前掲書、44 ページ。吉川利一『津田梅子』、1990 年、54 ページ。

くワシントンに到着した[272]。

ここで5人の留学生達は使節団と別れることになる。吉益亭子と梅子は郊外のジョージタウン（Georgetown）の日本弁務使館書記官チャールス・ランマン（図 16 左―Charles Lanman）が預かり、他の3人は近くの家に引き取られた。この旅は横浜を出てから70日間もかかった。

このアメリカへの旅や生活について、梅子は「日本の家と太平洋横断の旅」という題の自分が書いた作文に述べた。

> 約三〇日後に私達はサンフランシスコのゴールデン・ゲートを見た。一〇日遅れて着いた。カリフォルニアに着いたとき、とても奇妙に思えたが、家はどこか日本の家に似ていた。日本からは遠くはなれていたけれど、私は陸地についてとてもうれしかった。私達は「グラン・ホテル」というところに滞在し、そこに約二週間いた。ほとんど外出しなかった。
>
> 私達はそこから列車に乗った。冬期であったため列車は遠くは進めず、たくさんの場所で停車した。最初に停車したのはサクラメントであったが、ただ一泊しただけで、次に私達が留まったのはソルトレイクシティであった。そこでは雪に閉じこめられて一か月滞在したが、出発できるようになるとすぐに出発した。列車では食事は別の車両でした。あるとき、一つの車両から別の車両へ行こうとして、別の車両に一歩足を踏み出した途端、列車がトンネルに入り一瞬真っ暗になり、その時は本当にびっくりした。車両のドアに手をかけていなかったら、私達は転がり落ちていただろう。列車で眠るのは非常に快適だった。朝起きると川や山や平原が見え、私達はそれを楽しんだ。ある日雪が降り、山が一面雪で覆われているのを見た。とても高い山で、非常に美しかった。
>
> 私達は次にシカゴと呼ばれる街へ行った。美しい街のように見えたので、私

[272]津田塾大学、『津田塾六十年史』、中央公論事業出版、1960年、17ページ参照。

達がホテルで喜んだ。そこでアメリカのドレスを買ってもらった。それから私達はワシントンへ来て、私はランマンさんのところで一冬過ごすために、ワシントンに近いジョージタウンにいてスティーブンソン・スクールへ通っている。（亀田帛子訳）[273]

図 16. 津田梅子のホスト・ペアレント

(左)チャーレス・ランマン
（右）アデリン・ランマン
出典： Yoshiko Furuki, *The White Plum a Biography of Ume Tsuda: Pioneer in the Higher Education of Japanese Women.* (Weatherhill, 1991), 116.

ランマンは 1819 年 6 月 14 日、ミシガン州モンロー (Monroe) のレージン河 (River Raisin) に生まれた。父はイェール大学で法津を学び、その後モンロー大統領にみとめられてミシガン州の収入役になった才人であった。母、マリー・ジェーン・ギー（Marie Jeanne Guie）は、アメリカン・インディアンとフランス人の混血であった。祖父はコネチカット州で判事を勤め、上院議員に選ばれたエリートであっ達ャールスをコネチカット州のノーリッチ（Norwich）にあるプリマス・アカデミーへ入学させたのもこの祖父であった。コネチカット州のプレインフィルド(Plainfield)の専門学校を卒業してから、16 歳のチャールスは仕事を求め、ニューヨークに行き、

[273]亀田絹子、『津田梅子－ひとりの名教師の軌跡』、双文社出版、2007 年、44-45 ページ。

東インド貿易商会に採用された。彼は会計事務として約 10 年間働いた。1845 年、彼は故郷へ戻り、書籍を深く愛するランマンは『モンロー公報』(Monroe Gazette)の編集者となり、その後シンシナティの『オハイオ新聞』(Ohio Chronicle)、さらにニューヨークに帰ってからは、『エクスプレス』Express の記者として活躍した。1849 年陸軍省の司書官となり、国務省・内務省・国会などの図書館の整理にもしていた。梅子が渡米した 1871 年、ランマンは日本弁務使館の書記官(Secretary of the Japanese Legation)を勤めていた。そして、彼は当時在留していた日本人の原稿をまとめて、1872 年に『米国在留日本人』(The Japanese in America)を出版した[274]。

ランマンの妻アデリン(図 16 右―Adeline)はフランシス・ドッジ(Francise Dodge)の娘であった。彼はニューイングランド移民の一人で、ジョージタウンにおいて最も成功した実業家で西インド貿易業者であった。アデリンは 1826 年に生まれ、ジョージタウンにある女学校で教育を受けた。1849 年ランマンが陸軍省の司書官になったときにアデリンと結婚した[275]。

5 人の女子留学生の世話を引き受けたのは森有礼であった。森はワシントン市内コネチカット街に一軒家を借り、5 月 1 日、5 人をまとめて移した。5 人にまず必要なことは、言葉を覚えさせることであった。森は教師を雇い、英語の勉強を始めさせた。その勉強とは、1 日 2 時間会話の勉強をするだけの単調な生活で、少女達は広い家で自由にのんびり過ごした。

津田梅子の当時ののんびりとした日常生活の様子は母の初子宛に梅子が書いた書簡に次のように記されている。

御めで度申上参らせ候　先づ先づ御皆々様御揃ひあそばし　御機げんよくいらせをられ候御事御めで度ぞんじ上参らせ候　私事もきげんよくをり候まま御あん志ん

[274]津田塾大学、前掲書、18-19 ページ参照。山崎孝子、『津田梅子』、前掲書、52-53 ページ参照。
[275]津田塾大学、同上書、19 ページ参照。山崎孝子、同上書、55 ページ参照。

被下度ねがい参らせ候　せんだつて申上候とうり皆々様と御い志よにワシントンにおり参らせ候

ミスロヲレンと申人にまなびい候ところ此人はふるさとかいり候につきほかのせんせいがまいり十時より十二時までけいこいたしており参らせ候　ただいまおり候ところはミストルランマンのところより十三町ほどにてをりをりミスランマンさんもまいり候まま御あんしん被下度候おりやうさんよりもおへんじさし上ぐはづに候へどめよろしからずけいこもやす候ままおへんじさし上げかね参らせ候とお申し候まま私より申上参らせ候　ほんわ初めてのおよみい参らせ候　チキウのほんの初めおよみい参らせ候　手ならびひもいたしをり参らせ候　御あんじ下さるまじくねがい参らせ候

梅より

御母上様　かへすがへすじこう御いとひ遊ばし候やうぞんじ参らせ候めで度かしこ[276]

梅子は他に週 2 回、ピアノのレッスンに通っていたが、勉強が少ないために 5 人の留学生の生活を見ていた森は、このままの教育方法ではあまりいい成果が出ないと考え、５人の少女を別々の家庭に預け、米国の良い家庭生活を学ばせ、良いしつけを身につけさせねばならないと考えた[277]。

吉益亭子は渡米直後から眼を悪くし、上田悌子も健康がすぐれなかったので、二人は 10 月末、帰国することになった。これを機会に他の 3 人は別々の家庭に預けられた。捨松はニューヘーヴンのレナード・ベーコン（Dr.Leonard Bacon）に、繁子はフェアーヘーヴンのジョン・アボット（John S.C Abbott）に預けられた。そして、7 歳の梅子は、ランマン夫妻が引き取り、1 年間の予定のところが、10 年余りにも

[276]亀田帛子、『津田梅子 ひとりの名教師の軌跡』、双文社出版、2007 年、20-21 ページ。
[277]山崎孝子、前掲書、69 ページ。

及ぶことになる[278]。そのため、ランマン夫妻は梅子の第 2 の父母となり、7 歳の梅子は 18 歳までランマン家からの影響を存分に受けたとも言える。

梅子は町のコレジエト・インスティチュート（Collegiate Institute）に入学した。この学校の校長が Miss Stephenson という人物だったためスティブンソン・セミナリ（Stephenson Seminary）と呼ばれていた。1 学級の生徒の数は 7 人から 10 人位までで、全生徒数は 100 人程度の小さな私塾であった。普通住宅を校舎に当て、少人数の学級で指導するという教育方法をとっていた。これは後に、梅子が私塾を開いた際に用いた方法となる。

1878 年（明治 11 年）梅子は 13 才でスティブンソン・セミナリを卒業した。そして、秋にはアーチャー・インスティチュート（Archer Institute）に進学した。この女学校も生徒の数が 100 人程度の小規模な私立学校で、中流家庭の女子が学んでいた。この学校はワシントン市内、マサチューセッツ街のトマス・サークル（Thomas Circle）という広場に面していたが、ジョージタウンから通うには、徒歩で約 1 時間かかった。梅子は鉄道馬車で通学した。梅子はここで普通学科のほかに心理学・天文学・英文学・フランス語・ラテン語などを学び、音楽・絵画も習った。この頃には梅子はかなりの程度ピアノが弾けたようになっていたようである。ある年の卒業式にヘイズ大統領夫人が出席した際、梅子はピアノの演奏を行った。また、梅子は読書が好きで、ワーズワース、バイロン、テニスン、ロングフェロー、ブライアントなどの詩を読み、シェークスピアの作品もすでにそのころ読んでいたといわれる[279]。

梅子達 3 人に開拓使から帰国の用意をするように知らせてきたのは 1881 年（明治 14 年）彼女が 16 才の春だった。ヴァッサー・カレッジ（Vassar College）で勉強中であった山川捨松と、アーチャー・インスティテゥートをまだ卒業していない

[278]津田塾大学、前掲書、18-19 ページ参照。
[279]同上書、27-28 ページ参照。

梅子は1年の延期の願いを出し、許可を得た。永井繁子はヴァッサー・カレッジで音楽の勉強中だったが､健康状態もあまり良くなかったことから秋に先に帰国した。

繁子が帰国した年1881年（明治14年）の翌年、北海道開拓使は廃止された。その年の6月日本では新橋・日本橋の間に鉄道が開通し、また東京に6輌の鉄道馬車が初めて走った。

1882年（明治15年）7月山川捨松と津田梅子は優秀な成績で学校を卒業し、帰国の途に就くことになった。

帰国後梅子を最も苦しめたのは日本語の学習であった。帰国の船で書いたランマン夫人宛の書簡では、日本語を勉強したい意欲を次のように示している。

1882年11月12日付の書簡（抜粋）

> 日本語を話すパーサーは、私が自分の言葉を知らないことで私をからかっています。私は少し勉強しようとしましたが、船中では「とても困難」です。私は、いくつかの文章を学びましたが、そんなに多くはありませんでした。この冬は、日本に着いたらすぐに、私は仕事と自分自身を日本語の学生として着実に設定する必要があります。[280]

また、梅子の日本語能力は捨松と1年早く帰国した繁子と比べるほとんど日本語が話せない状態になっていたといわれる。それだけではなく、彼女は着物があまり似合わないと二人の友人に言われていた[281]。

梅子の日本語問題は父仙と姉の琴の影響もあったものと考えられる。仙は若い頃蘭学と英語を学び、アメリカを訪れた経験があったため、英語が話せた。姉の琴は海岸女学校（青山女学院）を出て、英語で普通の会話ができた。仙と琴は梅子の通

---

[280] Umeko Tsuda. *The Attic Letters: Ume Tsuda's Correspondence to Her American Mother*. (Weatherhill, 1991), 10.

[281] 1883年1月6日付の書簡より。Ibid., 30-31.

訳を努めていた[282]。

しかし、津田梅子はランマン夫人に宛てた書簡で彼女は日本の作法やプレゼントあるいはお土産の文化の違いについて次のように述べている。

1882 年 11 月 23 日日付の書簡（抜粋）

> 日本のやり方はとても奇妙です。アメリカの家では朝一人が出かける時に形式はなく、彼らは「行ってきます」、あるいは「出かけます」と言いますし、あるいは言葉もなく出て行くこともできます。しかしここでは私が訪問や買い物しに出かける時に、家のみんなは戸口まで出てお辞儀して、「サヨナラ」を言います。父か母が出かけるときも私達皆で見送りに出なければならないし、お客様のときも、そうしなけれればなりません。父の昔からの使用人やまたは父に世話になった人達は私に敬意を払っていつも土産として飴やケーキを持ってきます。これは恐ろしい慣習です―それはとてもお金がかかります。でも私が叔母の家やどこかへ行く時に、同じことが起こります。[283]

津田梅子は外国から帰国した日本人がなぜ中々書簡を書けないのかの理由について、次のように述べている

> 人びとはのろまで、何をしても活気がなく、いい逃ればかりする怠惰な人種、時間の価値という観念は全くない。実際彼らは時計も持ち合わせていない。（亀田帛子翻訳）[284]

梅子はアメリカでは自分が男性であればどれ程良かったかといつも思っていた。そのような梅子からすると日本では女性はアメリカよりもはるかにかわいそうな立

[282]津田塾大学、前掲書、29 ページ.
[283] Umeko Tsuda, 19.
[284]亀田帛子、前掲書、69 ページ。

場に置かれているように見えた。一方で、彼女は日本の女性の地位を向上させようとしても日本女性は自分の立場に満足していたためその地位を向上させようがないとなげいている。

また、梅子はアメリカの「レディー・ファスト」文化に対して強い感銘を受けていた。例えば、男性が女性に席を譲り、感謝の気持ちを表す時に帽子を脱ぎ、乗り物を乗る際女性は先で最後には男性が乗るということだった。もし東京の路面電車では男性が女性のために座席を譲った場合、可笑しい光景になると彼女は書簡に記している。このような日本の男性の態度を繁も「無礼」だと思ってはたが、彼女は梅子には日本のやり方に慣れるように進めた[285]。

津田梅子は自分が感じる多くの不満をホストファミリーであったラマン夫妻に吐き出した。しかし、彼女の日本批判の書簡を他の日本人に見せないで欲しいと彼女はランマン夫妻にお願いした。

1882 年 12 月 7 日付の書簡（抜粋）

> 私の日本に対する批判をあざ笑うかも知れませんので、私の書簡を日本人に見せないで下さい。ここ私の半外国の家でも彼らは多くのアメリカのやり方と概念が奇妙だと思っていて、特に女性といくつかの慣習の違いです。[286]

彼女が書いた書簡の文章では、所々日本人のことを「they」（彼ら）、「their」（彼らの）、あるいは「these people」（この人達）と表現した。それはまるで梅子が日本人ではないように思われる表現であった。

1882 年 11 月 23 日付の書簡（抜粋）

> 私の言葉があの人達に理解されないことがとても大変です。でも私には琴と父がいるので不平を言ってはいけませんが、すべてのものが初めて見ると不思議

[285] 1882 年 12 月 14 日付の書簡より。Umeko Tsuda, 24.
[286] Ibid., 23. （下線は筆者記入）

に思えるのは自然なことと思います。[287]

このように津田梅子はアメリカから日本に帰国した時、言葉が通じず、日常生活の習慣全てが違うことなどで日本社会に順応するのに困難を覚えたようである。しかし、彼女にとって何よりも困った問題は仕事が見付からなかったことであった。当時の日本では上流層の女性の仕事は非常に限られていたのである。

[287] Ibid., 18.（下線は筆者記入）

第 2 章　津田梅子の思想

第 1 節　津田梅子の日本観

梅子は、アメリカ人の家庭に引き取られ、1872 年から 1882 年まで学校に通った。梅子は当初は幼かったが、英語をおぼえるのは早かった。10 年間のアメリカ滞在で彼女はアメリカ女性として育ち、母国語である日本語の使用は困難となっていた。アメリカで受けた教育や文化、習慣などは彼女に大きな影響を与えた。日本の文化、日常生活の習慣など日本の全てがアメリカとは異なっていた。

既述したように日本では文明開化（西欧化）が進んだ。しかし、文明開化（西欧化）はこの時代はまだ貴族階級にしか浸透していなかった。例えば帰国後、津田梅子が身につけたドレス、アクセサリーなどの西欧的なものはまだ珍しかったため、周りの日本人の見せ物になったという。また、日本の家、家具などもアメリカとは大きく違っていた。

1882 年 11 月 23 日付の書簡（抜粋）

> 私の衣服は、何度も何度も見られました―私の身の回りのものがすべて物珍しく見られたということで驚かれたと思います、帽子やリボンや何でも。ある日の午後にいつものように見世物になっているのを知って驚くと思います。[288]

梅子は日本の文化、自然、礼儀作法、服装などについては高く評価をし、それをランマン夫人に語っていた。たとえば着物について、彼女は以下のように書いている。

1882 年 11 月 23 日付の書簡（抜粋）

> お金持ちでも貧しい者も着ている物はほとんど変わらず、みな美しく、柔かい、

[288] Ibid., 18.

外国人の眼にはとても美しく映る布地でできています。（古木宜志子訳）[289]

また上記の書簡をみると、前節に述べたようにこの書簡の文章の中でも津田梅子は自分を意味する表現として「外国人の眼」（the foreign eye）と書いていた。それは、彼女が日本人ではなく外国人であることを意識していた表れでもあった。

梅子はアメリカ社会では男性が女性に対して日本に比べるとはるかに親切であるとアメリカを評価していた。しかし、一般的には日本の礼儀正しさの方がアメリカよりも優れていると梅子は誇りに思っていたと書簡に書いていた。

1883 年 2 月 20 日付の書簡（抜粋）

丁寧さに関しては心からのものであっても見せかけであっても、日本が優れていて、私はその事実を誇りに思っています。[290]

帰国直後に梅子は捨松と一緒に黒田清隆を訪問した。彼女達は女子留学を担当した黒田から仕事の話来るものと期待していた。津田梅子と同じ船で帰国した留学した男性の場合は留学年数が少ないにも関わらず次々とポストについていた。一方、彼女らには仕事を与えられる見込みもなかった[291]。

アメリカに留学の時、ホームシック[292]を表さなかった梅子も、帰国後この点ではランマン夫人に弱音を吐いていた。梅子は次のように述べる。

1883 年 3 月 27 日付の書簡（抜粋）

政府が私に何をしてくれるのか彼に聞きいたところ、彼は心配しないで待っているように言いました。私が教えることを、彼は全く期待していないと思いますが、とにかく彼は私には何も言わず私の気を逸らそうと、気にしないように

---

[289]古木宜志子、前掲書、69 ページ。
[290] Umeko Tsuda, 46.
[291]古木宜志子、前掲書、74-75 ページ参照。
[292]ランマンの『米国残留日本人』によれば、津田梅子は全くホームシックをしていなかったよう、と彼女の仲間は、彼女が日本を離れてから、彼女は悲しくはなかったと言っていた。Charles Lanman, 50.

と言いました。そして、私が教職に就きたいと言うと、ああ、彼は、待つようにと、何度も何度も言いました。[293]

梅子は国費留学生としてアメリカに派遣されたからには、国のために何か恩返ししなければならないと考えていた。亀田帛子の『津田梅子ひとりの名教師軌跡』によれば父仙は「梅子一人が使ったお金で、日本では贅沢をして優に一家族を養える。国がそれ支払ってくれる以上、働いてその負債を返さなければならない」[294]と帰国直に梅子に言った。彼女も留学した自分の責任に対して次のように述べている。

1883 年 2 月 26 日付の書簡（抜粋）

私はアメリカには戻りません。もしそう出来たとしても。なぜならここは私の祖国であり、故郷ですから。そして私はここにいる義務があります。私は日本に居たいのです。[295]

1883 年 12 月 28 日付の書簡（抜粋）

よく皆さんにもう一度会いたい、アメリカへ戻りたい、と心ひかれますが、今と違う状態になって欲しいとは思いません。と言いますのも、私は役に立たなければいけないと感じているからです。（古木宜志子訳）[296]

1883 年 4 月 11 日付の書簡（抜粋）

自分は日本が好きだ。日本を離れることは考えられない。アメリカへはまた旅行者として行くことはあっても、もうアメリカに住むことはないだろう（亀田帛子訳）[297]

---

[293] Umeko Tsuda, 53.
[294]亀田帛子、前掲書、69 ページ。
[295] Umeko Tsuda, 47.
[296]古木宜志子、前掲書、78-79 ページ。
[297]亀田帛子、前掲書、70 ページ。

このようにして梅子はアメリカへのホームシックを乗り越えて、祖国日本に対する意識を高めていった。彼女の日本に対する祖国の強い思いを確立させたのは自分をアメリカに留学させてくれた明治政府に対する恩返し（責任感）からなるものと考えられる。

しかし、このような責任感とは別に、梅子が祖国の日本の自然や文化への愛着が心の奥底にあったことは既に述べた通りである。

以上述べてきたように津田梅子にとって、日本は全ての点でアメリカ的基準から見て劣っていた。とりわけ梅子の関心の対象は日本女性の置かれた状況にあった。このことは、アメリカにおける彼女の友人であるアリス・ベーコンが梅子の協力の下で出版した『明治日本の女たち』の中で日本女性を批判的に描いている点にもこのことは強く表れている。それはアメリカ人女性のあり方に比較してはるかに劣る日本人女性の生活を描いたという点で彼女の批判はサヒードのいうオリエンタリズム[298]的性格を持つものであった[299]。しかし、ベーコンは日本女性を批判的に見る一方で、日本人女性優れた点や日本社会の伝統的価値観の優れた点についても客観的に観察する努力もしており、アメリカ人的価値観から一方的に批判する書物が一般的であった中ではこの書物は当時としてははるかに優れた内容であったと評価できるとも考えられる[300]。

従って、梅子が多くの点で日本を批判したにも関わらず、彼女がアメリカに結局戻らなかった大きな理由は、アメリカでは梅子自身がアメリカ人によってオリエンタリズムの眼差しにさらされることに耐えられなかったこととも考えられる。その結果、梅子は日本に止まって女子教育者としての道を歩むことを選択する

---

[298] エドワード・W・サイード （今沢紀子訳、板垣雄三・杉田英明監修）『オリエンタリズム』平凡社、1986 年。

[299]砂田恵理加、「白人女性とオリエンタリズムーAlice M. Bacon の明治日本の女たち」、『国士舘大学教養論集』60 号、2010 年、4 頁。

[300]アリス・ベーコン、矢口祐人・砂田恵理加訳、『明治日本の女たち』、みすず書房、2003 年。

第2節　津田梅子の宗教観

津田梅子はクリスチャンであった。しかし、彼女は生まれた家庭環境によってクリスチャンになったという訳ではなかった。アメリカに留学していた時の梅子は、日曜学校に毎週通うこととなった。このような環境の中で、梅子はある日突然にランマン夫妻に、洗礼を受けたいと申し出した。ランマン夫妻が梅子にキリスト教を勧めた訳ではなかった。彼女がクリスチャンになったのは学校や家庭の環境が自然に梅子に影響を与えた結果によるものと思われる。

ランマン夫妻は聖公会（Episcopal Church）に所属していたが、梅子をどこかの教派に所属させたくないと判断し、森と相談の上、ランマンの友人であった、ペリンチーフ(Octavius Perinchief)牧師によってオールドー・スウィズ教会(Old Swedes Church）で洗礼を受けることになった。この教会はフィラデルフィアの西北ブリッジポート（Bridgeport）にあり、正式には、Christ Church, Upper Merion と称し、教派属さない独立教会であった。ペリンチーフ牧師は最初、梅子に小児洗礼を授けさせるつもりであったが、梅子の応答があまりに立派であったため大人の洗礼を授けることになった。1873年7月13日当時9歳であった梅子は洗礼を受けた[301]。

以下はその洗礼記録である。

洗礼　1873年7月13日　教会にて

ウメ・ツダ

1864年1月1日（旧暦の1月25日）日本に生まれる。

証人　チャールス・ランマン、同夫人

立会人　フランク・ホイットール夫人、ペリンチーフ夫人、レベッカ・レイン嬢ほか。

信者登録簿に記入

[301]津田塾大学、前掲書、23ページ。

私は、プロテスタント聖公会の慣例に従い、成人洗礼の法式にのっとり、信者自身の全き応答を得て、洗礼を執り行った。

（署名　0.ベリンチーフ）」[302]

ランマン夫人宛の最初の書簡の中では、梅子は日本におけるキリスト教徒の立場について不安を感じていた。日本社会ではきっとクリスチャンとしての梅子を受け入れられる環境にないものと予想していた。そのために、なるべく目立たず、敵を作らず、できるだけ日本社会に合わせて彼らの慣習ややり方に従うことが大事だとデイヴィス夫人[303]は梅子に次のように提案している[304]。

1882 年 10 月 25 日付の書簡（抜粋）

デイヴィス夫人は私達がクリスチャンになったことついてアリス・ベーコンにたずね、そして私達のことをすべて知りたがっていました。そして彼女は喜んでいました、日本での私達の立場がどんなに大変か分かっていました。敵を作ってはいけないし、周りの人の好みに逆らってもいけなくて、できるだけそれに従わなくてはなりません。・・・[305]

しかし、津田一家が日本人でありながら梅子と同じくクリスチャンになったことが何より神の祝福だと彼女は思っていた。家族がクリスチャンではない捨松と比べると、自分にとっては気持が楽で、とくに捨松のように家族からの宗教に対する反対がないことは梅子にとって何より安心できることであった。

1882 年 10 月 25 日付の書簡（抜粋）

みんなとても親切で思いやりがあります。神に感謝します。何はともあれ、ク

---

[302]吉川利一、前掲書、329－330 ページ。

[303]デイヴィス氏は京都の同志社に教えるために日本に戻って来た宣教師であり、デイヴィス婦人は彼の奥様である。

[304]Umeko Tsuda, ３.

[305] Ibid., ３.

リスチャンの家に帰って来られたのは嬉しいことです。食事の前には感謝のお祈りをし、朝食の後には日本語で聖書を読み、賛美歌を歌い、お祈りします。クリスチャンでない家族を持つ人より、私は何と運がいいでしょう。(大庭みな子訳)[306]

1882 年 10 月 25 日付の（抜粋）

日本で自分の家族から反対の気持ちや軽蔑を向けられている捨松よりも、私はとても楽です。少なくとも私は自分の家庭のなかでは宗教の理由で低くみられることはないからです。[307]

日本では家から近いということから梅子は「The English Shiba Church」に通っていた。それは彼女が住んでいるところから近いという理由からであった。しかし、彼女は毎週教会に行けないことをランマン夫人に告白している。その後、彼女は教会でお祈りする前にバイブルクラス（Bible class）に通っている。

1883 年 3 月 18 日付の（抜粋）

英国教会はここから近いし、他の教会は遠く離れているため、私は今のところそこに行き続けようと考えています。私は毎週欠かさず日曜日に教会に行っていないことを告白しなければなりませんが、しかしその代わりに、午前中にバイブルクラスがあり、夕方にはお祈りの会があるので、私は日曜日を忘れたのではないと思います。教会に行くとき、私は９時の聖書の会に間に合うように急がなければなりません。[308]

明治期の西欧化の中で日本ではキリスト教の信者が少しずつ増え始めていた。1883 年（明治 5 年）に東京で日本全国からののキリスト教の集会が行われた。1878

[306]大庭みな子、『津田梅子』、朝日新聞社、1990 年、9 ページ。Ibid., 3-4.
[307] Ibid., 3-4.
[308]Umeko Tsuda, 50.

年（明治 10 年）には洗礼を受けた日本人はほとんどいなかったと思われるが、1883 年になると日本のクリスチャンは 1300 人に達していた。また、ある日梅子は友人の繁とその夫の瓜生氏と共に大きな公園で行われた東京のクリスチャン集会に参加した。その集いには数百人も集まっていた[309]。

日米通商条約は 1858 年（安政 5 年）に締結され、その全 14 条内、宗教上に関する規定が第８条として設けられた。それは、日本にいるアメリカ人が自ら信仰しているキリスト教の活動や拝堂を居留地に置くことも認めるという内容だった。日米通商条約第８条によれば、

「日本に在るアメリカ人自ら其の国の宗法を念じ礼拝堂を居留地の内に置くも障りなし。並に其建物を破壊し、又はアメリカ人宗法を自ら念じずるを妨ぐることなし。アメリカ人、日本人の堂宮を毀傷することなくまた決して日本神仏の礼拝を妨げ、神体、仏像を毀るあるべからず」[310]と規定する。

このような規定が入った結果、日本に急激に宣教師が増加するようになり、キリスト教が日本の社会で受け入れられて行くこととなったと思われる。日本に派遣された宣教師が日本の社会で成功するためには宣教師の性格や態度といった個人的能力によるところが大きかった、また、宣教師達が日本語を取得することにより、日本人に容易に近づくことができるとハリスは考えていた[311]。

しかし、津田梅子が帰国した頃の日本に派遣された宣教師は上記のハリスの見解とはほど遠かった。宣教師は日本語だけではなく、日本の文化も勉強せずに、日本人に対して人種差別的な態度を強く持つ者が見られた。また、アメリカに帰った宣教師が日本の悪口や間違った情報をアメリカに広げる原因を作った。梅子はアメリカ人宣教師について書簡で次のように述べている。

---

[309] 1883 年 5 月 13 日付の書簡より。Ibid., 68.
[310]高谷道男、『ヘボン』、吉川弘文館、1986 年、42 ページ。
[311]同上書、44 ページ。

彼らはアメリカのものがすべて勝っていると考え、我々日本人を軽蔑しきっている。日本のものを全く好まない。日本の果物には手を触れず、日本のうちでは食事もしない。日本人のうちへ行っても靴を脱がず、日本人を当惑させる。ワシントンの中国人がドレスにこだわるのと同じではないか。(亀田帛子訳)[312]

また、「私は東京にいる宣教師達に失望しています。あの人達は自分の宗派や独自の特別なやり方についてうるさいばかりです。ソーパー氏もそのうちの一人です。彼の親しい友人である父も、彼のことをそのように言いました...。(1882 年 12 月 14 日付の書簡より)[313]

津田梅子はアメリカの典型的なクリスチャン家庭であるランマン家で 11 年間育てられた。アメリカの典型的なクリスチャン家庭の環境の中で育てられた梅子にとってはキリスト教への関心はかなり早い段階で芽生えたと考えるのが自然であろう。しかし一方で、梅子は彼女と接触した多くの宣教師達が日本人である彼女に軽蔑的態度を取って見下したことに強く失望し、強い調子で彼らを非難している[314]。その意味では、日本人であった梅子は他のアメリカの子供達より比較的客観的にキリスト教を見る立場にあったとも考える。

結局、梅子は生涯を通してクリスチャンであったが、宗派にとらわれることはあまりなかった。梅子のクリスチャンとしての信仰は厳格というよりはかなりおおらかなものであったといわれる[315]。そのため、梅子の言動あるいは思想はキリスト教に反するところが多いと他のクリスチャンには見えたといわれる[316]。

---

[312]亀田帛子、前掲書、70 ページ。
[313] Umeko Tsuda, 25.
[314]Ibid., 51.
[315] 亀田帛子、前掲書、242 ページ。
[316] 同上書、180 ページ。

第 3 節　津田梅子の結婚観

梅子が帰国と間もなく梅子より先に帰国していた繁は、海軍武官瓜生外吉と結婚した。瓜生外吉は 1875（明治８）年に海軍学校を卒業し、1877 年に海軍省によってメリーランド州アナポリスのアメリカ合衆国海軍兵に入学した。繁は瓜生氏とは彼女のホストファミリーであるアボット家の娘ミス・エレンの紹介で知り、アメリカで結婚の約束をしていた[317]。

二人ともクリスチャンであるため、結婚式はキリスト教の牧師によって静かに行われた。二人の共通点はクリスチャンだけではなく、アメリカ帰りというもそうであった。結婚式で二人が着用した服装は繁が洋装で、新郎は海軍軍服だった。また、結婚式後のディナーも西欧式で行われ、ウェトレスでさえもドレスを着ていた。生粋の日本人である二人には非常に面白い光景であったと梅子は書簡に書いている。1882 年 11 月 27 日付の書簡（抜粋）

> これから繁の結婚についての話をします・・・式は７時に行われ、近しい親族と、セラタ氏とアーウィン氏と私達が参加してとても静かな結婚式でした。何もかもが不思議に入り混じり合っていて、こんな結婚式は、過去にもなかったし、これからもないでしょう。生粋の日本人の新郎新婦の二人ともが、最初は洋装でした、新郎は海軍の軍服です。日本人の牧師が日本語で式を執り行いました。 簡単な儀式が終わって、私達は洋式のディナーをしに階下に降りました。ウェトレス達は正式の洋装をしていて、すべてが整っていました。[318]

梅子は「繁子は本当にかわいくて、幸せそう。二人は本当にすばらしいカップル」[319]と繁の結婚式を絶賛だった。

繁の結婚式から約１年後、続いて捨松が結婚することとなった。相手は、当時陸

---

[317]亀田帛子、前掲書、71 ページ。
[318] Umeko Tsuda, 22.
[319]亀田帛子、前掲書、72 ページ。

軍中将であった大山巌であった。彼は 40 歳で、妻とは死別して３人娘がいた。梅子が捨松の婚約を知ったのはまだ婚約が公開される前の 1883 年 3 月 24 日のことであった。その日、吉田清成公使邸へ招かれた後に梅子の家に泊まった時に婚約の話を梅子に話した。この話を聞いて梅子は非常にショックを受けていた[320]。

梅子がショックを受けた理由は以下の通りに思われる。

梅子がアメリカから帰国して４ヶ月後、三人（梅子、繁、捨松）で集まって、話し合った機会があった。その時の話題は、三人が置かれている立場であり、「いつもと同じ、私達の重大な責任と、それを果たす可能性の不確かなこと」[321]であった。梅子は三人が「運命共同体」にあるとを感じていた[322]。

特に捨松は、アメリカにいる時には結婚せずに、アリス・ベーコン[323]をアメリカから呼び寄せて、梅子と協力して学校を作ることについて三人（梅子、捨松、アリス）その計画について話し合った[324]。梅子は捨松の結婚に裏切られたような気持ちになると共に、一緒に学校を作る夢が遠ざかったことに大きな失望を感じたのである。

梅子は書簡では捨松の結婚を祝福して、喜んではいたが、捨松の結婚の決意に対して「本当に幸福」であるのかどうかについて疑っていた。梅子は捨松の結婚はどうしても恋愛結婚とは思えなかった。結婚が決まってからでも二人は数回しか会ったことがなかった。梅子は書簡で次のように述べている。

1883 年 3 月 27 日付の書簡（抜粋）

> もちろん、この縁組には愛は考えられません。捨松が結婚を決めた時に二人はお互いに短い間しか会ったことがなかったのです・・・もちろん、結婚は愛の

---

[320]同上書、74 ページ。
[321]古木宜志子、前掲書、86 ページ。
[322]同上書、86 ページ。
[323]Miss Alice Mabel Bacon は同留学生の山川捨松の世話を引き受けたレナード・ベーコンの娘であった。1858 年コネチカット州ニューヘーヴァン生まれた。
[324]同上書、86 ページ。

ためではなかったことに悲しみを禁じ得ません。しかし彼女が日本で愛によって縁付くことはほとんどできませんでした。[325]

梅子は捨松の結婚が幸福ではなく、社会的地位、富、権力が決め手になったであろうと考えた[326]。

また捨松は、繁と違って、クリスチャンと結婚しなかったことも彼女の疑問を深めた。クリスチャンでもない人と結婚するというのは、梅子にとって信じられないことであった[327]。

二人の友人が結婚したことを機に、津田梅子は彼女の結婚観について書簡で語るようになる。

梅子の結婚観は恋愛結婚が基本であり、御見合いなどによる日本式の結婚については想像さえできなかった。梅子はそのような結婚をするよりもむしろ、独身でいたいと強く思っていた。

1883 年 1 月 16 日付の書簡（抜粋）

日本では大抵の人が恋愛結婚というものを潮笑し、それを何かこわいもののように考えているが、自分は事情が変わらない限り、むしろ一生独身でいようと思う（亀田帛子訳）[328]

アリス・ベーコンの『明治日本の女たち』によれば、日本では、女性は 16 歳になると結婚する者が多い。相手（男性）を断る権利はあるが、結婚を断ることは難しい[329]。たとえ梅子の父が彼女の結婚を望まなくても、明治の日本の社会においては結婚をしないということは一般的ではなかったのである。

---

[325] Umeko Tsuda, 55.
[326]1883 年 6 月 19 日付の書簡より。Ibid., 81.
[327]亀田帛子、前掲書、74 ページ。
[328]同上書、75 ページ。
[329]アリス・ベーコン（矢口祐人・砂田恵理加訳）、『明治日本の女たち』、みすず書房、59 ページ。

18 歳になった津田梅子はランマン夫人や友人の二人から繰り返し結婚を勧められた。このような周囲からの圧力に対して、梅子は、強く抵抗する。独身でいることが家族の負担になり、不孝であるという世間の通念の圧力に負けて「便宜的な結婚」、「強いられた結婚」をしないためには女性は自立しなければならないと考えた[330]。梅子は結婚に対して拒否を示すのではなく、「恋愛無き結婚」を拒否したのである。[331]

梅子はアメリカでの女性の自由な生き方に共鳴し、女性の生きる目的は結婚と子育てにあるという日本の伝統的な考えには反発していた。彼女の結婚観は恋愛結婚が基本であり、そのような相手に出会わないならば、生涯独身で自由に生きた方がよいという考えであった。そしてその自由な時間を日本における女子教育に捧げたいと考えていた[332]。結局、梅子は死ぬまで独身を通すことになる。

[330]古木宜志子、前掲書、92 ページ。
[331]同上書、90 ページ。
[332] 亀田帛子、前掲書、76 ページ。

第 3 章　津田梅子の女子教育観

第 1 節　津田梅子から見た日本女性

アメリカ留学から帰国後、津田梅子が身をもって知ったことは、日本における女性の地位の低さであった。また、梅子が帰国して自分が体験したことは女性には中々仕事が見付からなかったことである。梅子は日本での女性の地位の低さには強く批判したが、その原因のすべてが男性のせいではないと考えていた。男性は母親、姉妹や自分の妻に甘やかされた結果、彼らは女性に対して優越的であることを当然のことと考えるようになったのである。しかし、それよりも女性が自分の地位の低さに気付かずに、その状況を改善を求めず現状を受け入れていることが問題だと梅子は考えた。梅子は次のように述べる。

1883 年 5 月 23 日付書簡（抜粋）

> 私の気持ちは日本の女性達に注がれています。彼女達も咎められるべきですが、彼女達の置かれた地位に考えるにつけ、怒りに燃えます。日本の男性（が横暴なの）は彼らのせいではありません。甘やかされ、自分の姉妹や母親、やがては妻達に君臨するように育てられるからです。それでも女性はよくなることを期待していないのです。
>
> あゝ、ランマン夫人。あなたに私の気持ち分かろうはずもありません。アメリカでも、日本でも、日本の女性がそれで満足しているということは誰にも理解できません。外国人が彼女達を助け、そのために働き、同情しても、彼らは私とは違うのです私は彼女達の同砲だからです。（古木宜志子訳）[333]

津田梅子の書簡集では以下の通りに記された。

---

[333]古木宜志子、前掲書、93-94 ページ。Umeko Tsuda, 69.

また、別の書簡では同じような内容の文章があった。それは、以下の通りである。1882 年 12 月 7 日付の書簡（抜粋）

> ああ、女性はひとつだけではなく多方面の生き方をしようとすると、最も苦しい人生になります。アメリカにいる時でさえ、私はよく自分が男であったらいいのに、と思いました。ああ、日本ではもっと強くそう思います。可哀そうな、可哀そうな女性達。あなた達の地位を高めるために何かをしたいと私はどんなにか思っていることでしょう。しかし、彼らがとても満足していて、もっと良くすることを考えていない時に、なぜ私はしなければならないのでしょうか？しかし、私は、10 年前に比べ彼らが日本の妻の扱いに関してだいぶ違うと聞いています。[334]

梅子の日本女性の置かれた状況についての観察では、確かにアメリカと比べると日本の女性の地位が低いのであるが、しかし、帰国した 1882 年の 10 年前と比べると日本の男性の自分の妻に対する態度がかなりよくなってきているように見える。

帰国 1 年後の 1883 年（明治 16 年）梅子は帰国した留学生のひとりとして彼女が渡米したとき、岩倉具視の副使であった伊藤博文と再会した。伊藤は梅子に若い教育者として有名であった下田歌子（当時 29 歳）を紹介した[335]。

下田歌子は19歳で宮中に召し出され、7年間女官として宮中に生活を送っていた。当時政府顕官であった伊藤博文は宮中出入りの間に才女の下田歌子のことを知るようになっていた。桃夭女塾の設立は近代日本にふさわしい女流階級の教育が要望されていた時に当たり、明治政府の高官達が歌子に女子のための塾を開くように提案したことによる[336]。歌子は女塾を開く決意をし、1881 年（明治 4 年）麹町一番町に「桃夭女塾」を設立した。当時、東京にやや高級な女塾としては桃夭女塾、跡見花蹊の

---

[334] Ibid., 23.
[335]津田塾大学、前掲書、30 ページ。
[336]亀田帛子、前掲書、87 ページ。

塾（1875 年創立）しかなかったため、名流婦人達が多くこの塾に入門した[337]。

伊藤博文との再会によって梅子の人生はその後大きな展開を始めることになる。父の仙は政府に呼ばれた。直ちに梅子のポストを用意するという内容であった。仕事がもらえたらアメリカでの留学という明治政府によって彼女に与えた負債を返済できそうだと梅子は喜んだ[338]。

上記で述べている学校とは「桃夭女塾」であった。西欧化された時代に貴族階級の女子を預かっていた歌子は英語も教えたいと思い、歌子は伊藤を通し、梅子をその塾の教師にと望んだ。その結果、同年梅子は桃夭女塾で英語を教えることになる。一方、そこでは梅子は歌子から国語を習った。伊藤は歌子に梅子を英語の教師に採用するように求めたのである[339]。

伊藤はさらに梅子を英語教師として自分の家に招いた。伊藤は「梅子自身のため、日本のため」である[340]と梅子を説得した。梅子は永田町 2 丁目の伊藤官邸に移った。そこでは、梅子は伊藤の妻の通訳をしたり、伊藤の娘に英語を教えたりした。梅子は伊藤家に滞在中に多くの政界上層部のエリートに接し、人間関係を広める機会を得[341]た。

1884 年（明治 17 年）、梅子は家族の事情により伊藤家の家庭教師を辞めた。伊藤は梅子を翌年、創立される華族女学校に推薦した[342]。

華族女学校はもともと学習院女子部として、1877 年（明治 10 年）設けられていたが、女子部は 1871 年明治天皇の華族の勧学の勅諭に刺戟されて、1875 年（明治 8 年）「華族勉学所」として設立された。後に、華族勉学所は「華族学校」と改称さ

---

[337]山崎孝子、前掲書、107 ページ。
[338]1883 年 11 月 20 日付の書簡より。Umeko Tsuda, 106-107.
[339]山崎孝子、前掲書、109 ページ。
[340]1883 年 12 月 18 日付の書簡より。Umeko Tsuda, 114. 古木宜志子、前掲書、101 ページ。
[341]山崎孝子、前掲書、107-108 ページ参照。
[342]同上書、112 ページ。

れ、1877 年神田校舎に移った[343]。

華族学校の生徒は８歳から 15 歳まであり、健全な華族の女子であることが明確に華族女学校の規則に書いてあった。また、士族平民入学も可能であった。この学校の教育方針は女子のための学術芸術を教えることであった。その華族女学校規則の第一章は以下の通りである。

「華族女学校規則

第一章　通則

第一条　本校は皇后宮の令旨に依りて建設し宮内省の所轄とす

第二条　本校に入学の生徒は華族の女子にして、年齢８年以上 18 歳以下に在る体質健全なの者たるへし

但し本校の都合に依り氏族平民の女子と雖も入校許すことあるへし

第三条　本校の教旨は　倫を本とし女子に適当したる学術技芸を教授するに在り」[344]

津田梅子の書簡によれば、入学試験は 1884 年 9 月 24 日に行われた。漢文と数学、他の学科はすべて少しずつ試験をし、桃夭女塾の生徒はほとんど全員入学試験受けたという。

1885 年 9 月 25 日付の書簡（抜粋）

昨日は、下田夫人の女学生達を含む百人以上の女生徒達が、全員ここに来て、漢学と数学と、そしてすべての科目について少しの試験を行いました。[345]

女性教員は、下田歌子、梅子の他に、桃夭塾時代から教えていた師範学校出身の

[343]同上書、114 ページ
[344]亀田帛子、前掲書、93 ページ。
[345] Umeko Tsuda,221.

堀江善子、フランス語を担当する小鹿島筆子、裁縫を担当する渡辺政子（梅子のいとこ）その他二人を合わせて７名であった。先生の服装は、学監の下田歌子は宮廷服、梅子はドレス、他の先生方は着物に紫色の袴であった[346]。

梅子は華族女学校校長大島圭介から英語教師に適当な外国人を招きたいという相談を受け、アリス・ベーコンを推薦した。当時アリスはヴァージニア州ハンプトン市（Hampton）の解放奴隷やネイティブ・アメリカンなどを教育する特殊施設学校で教えていた。梅子の推薦にこたえてアリスは１年の約束で華族女学校講師を引き受けた。梅子は彼女と麹町紀尾町に家を借り一緒に住んでいた[347]。

こうして帰国から約３年後、やっと念願の仕事をすることができた。ようやく国への恩返しができ、また、留学前に皇后から授かったお沙汰書に書かれた約束を果たすことができた。

津田梅子が華族学校で教えている頃から、日本では女子教育や女性の地位などの女性問題が社会の中で大きな関心を集めるようになっている。女性問題のための集会が開かれるようになり、梅子が属する日本婦人教育会ではそのテーマで週１回の集まりをもつようになる。そこでは、メンバー全員が交代でテーマを選んで話をするという活動を始まった[348]。

第２節　津田梅子の女子教育観

文部大臣森有礼の教育強化と国家統制の政策の計らいで、1886 年には帝国大学令、小学校・中学校・師範学校令が続いて発布された[349]。しかし、当時華族学校の設立の経緯を見てみると、知的のある女性を育てるのではなく、社会的地位のある女性に与える教育は社会にふさわしい女性を育てることであった。梅子は人形のように

[346]亀田帛子、前掲書、95 ページ。Umeko Tsuda, 221-222.
[347]山崎孝子、前掲書、119 ページ。
[348]亀田帛子、前掲書、104 ページ。
[349]古木宜志子、前掲書、108 ページ。

可愛いが、知的好奇心があまり高くない華族学校の学生に失望した。彼らに知性が加えれば、日本女性を指導できるという梅子の期待は裏切られた[350]。

梅子はそのような気持ちを持ちながら華族学校の英語教師をつとめていた。英語の教師になってから３年目を迎えたときに、梅子は自分に才能があるなら伸ばせるだけ伸ばしてみたいと考えた。アリス・ベーコンはその気持ちに対して、最度留学をすすめた[351]。

1888 年 8 月 6 日付の書簡（抜粋）

> 私は将来にあと一、二年できればそれより長く学問の後半の課程をとることができればとよく考えます。今ならば、私の精神は帰国したときよりもずっと進歩すると思いますし、学問をというものをもっと正しく評価できると思います。私は長くは仕事を離れられませんが、もし私は教師という仕事に滴するように、しばらくの間純粋の学問できるなら、どんなにすばらしいでしょう。・・・・私は本当により深い学問の必要性を感じているのです。（亀田帛子訳）[352]

上記は梅子の友人であるクララ・ホイットニー（Clara Whitney）[353]に記した梅子の留学希望であった。クララはフィラデルフィアの知人のウィスタ・モリス（メアリ・モリス）夫人に伝え、梅子のブリンマー大学(ブリンマーカレッジ―Bryn Mawr College）留学が決まった[354]。その間の事情は 1888 年 10 月 5 日付の書簡に記されている[355]。

梅子からの留学の希望の書簡を受けるとブリンマーカレッジの学長のローズ

---

[350]同上書、108 ページ。
[351]山崎孝子、前掲書、121 ページ。
[352]亀田帛子、『津田梅子とアナ・ハーツホン―二組の父娘の物語―』、双文社出版、2007 年 13 ページ。
[353]クララの父ウィリアム・コグスウェル・ホイットニーは東京に開設された商法講習所（一橋大学の前進）の教師として来日、梅子の父仙と親しい間柄であった。同上書、13 ページ。
[354]同上書、13 ページ。
[355] Umeko Tsuda, 318-319.

（James E.Rhoads）は梅子の留学のために、授業料免除や寮の一部部屋を与えた。そして、1889 年梅子は華族女学校に在官ままブリンマーカレッジに 2 年の予定で留学へ出発した[356]。

ブリンマーカレッジはフィラデルフィアの西北の小さな町ブリンマーに位置し、Joseph W.Taylor により創立された。創立者は熱心なクェーカー[357]教徒であり、教育方針もその線に沿っていた[358]。当時、ブリンマーカレッジの学生数は約 150 人であり、厳格な教育、地味な学風で世に知られていた。そのころのアメリカの東部には有名な女子大学としてヴァッサー・カレッジ（捨松・繁子の母校、1865 年開校）・ウェルズレーWellesley(1875 年開校)・スミス Smith(1875 年開校)・ブリンマーカレッジ（1885 年開校）などがあったが、ブリンマーカレッジはもっとも創立浅い大学であった[359]。

2 年と限られた留学期間であったので、大学は選科生となり、梅子は生物学を専攻することになった[360]。

この再度の留学期間では梅子は新たに自分の目標を決意した。それは、日本における女性の地位の低さに対して女子の高等教育の開拓をしないといけない、梅子は自分の生涯の事業は、その分野にあるのではないかと考えた。梅子の決意は単なる思いつきや希望的な夢という段階を超えて、10 年後の私塾の創立のきっかけとなった。

選科生であった梅子は生物学の 3 ヵ年の過程をかなり早く終えた。梅子の留学期間 2 年の半年は教育・教授法の研究に当てられていたので、梅子は州立オズウィゴ

---

[356]山崎孝子、前掲書、122 ページ。
[357]クェーカー（Quaker)キリスト教プロテスタントの一派である。人は神からの啓示を直接受け得ると説く。17 世紀の中頃、当時のキリストの儀式化神学化に反対したフォックス(G.Fox 1624-1691)によってイギリスに起こり、ペン（W.Penn 1644-1718）によってアメリカで盛んとなった。
[358]津田塾大学、前掲書、35 ページ。
[359]吉川利一、前掲書、156 ページ
[360]同上書、157-158 ページ。

（Oswego）師範学校に学ぶことを決めた。オズウィゴはオンタリオ湖東南の小さな町であり、オズウィゴ師範学校はペスタロッチ[361]の主義に基づいて開発的な教育をしているので有名であった[362]。

このオズウィゴ滞在では梅子は自ら女子高等教育のために学校を開く決意はしたが、それはまだ遠い先であった。さしあたりの仕事として、自分が帰国した後、かわりの留学生を送るために、なんとか、3－4 千ドルの資本が集められないと考えた。そして奨学金募集のために必要な活動や募金を考えた。梅子は募金の方法をモリス夫人に相談し、さらにモリス夫人は資金を集めるのなら 8 千ドルほど集めて、その利子で 3－4 年ごとにひとりの留学生を送るようにしたら良いと勧めた。そして、モリス夫人は奨学金募集のために委員をつくり、「日本婦人米国奨学金」（American Scholarship for Japanese Women）という名で募金を開始した。梅子は募金のためにフィラデルフィア・ボストンなどで日本女性について、特にその教育の必要について講演して回った[363]。

梅子は日本の女子教育や留学の必要性について講演をした。明治維新以来、飛躍的な発展を遂げた男子教育に比べて、女子教育はほとんどいっていいほど開けていないこと、時代につれて女性も変らぬならないこと、女性も独立の仕事につき得るだけの教育を受けねばならないこと、幸いなことは女性に男性への盲従的依存を強いてきた仏教と儒教とは衰えて、キリスト教の進出が見られること、この際日本女性に米国で学び得る道が開かれるなら、彼女達は外国人が日本人を教えるよりも、はるかに有能適切な教師となって帰国し、後進の教育に尽くすことが出来ると思うこと、そのためには日本女性が米国で大学教育を受けることを講演で述べた。さらに梅子は、当時日本に欠けていた二つのことが、キリスト教と教育とであり、女性

[361]Johann Heinrich Pestalozzi（1746－1827 年）はスイスの教育家ルソーの影響を受け、孤児の教育・民衆教育の改善に尽くす。人間性陶冶の基礎は家庭および小学校教育にあるとし、児童の自発的活動を重視する直感的を唱導する。また、社会改革は教育によってなされると主張した。
[362]山崎孝子、前掲書、131 ページ。
[363]津田塾大学、前掲書、38 ページ。

が男性と同などの教育を受けるのでなければ国民の本当の進歩は望みがたいと梅子は考えた[364]。

また、留学からの帰国後日本の女子教育について梅子は次の通り語った。日本では教育を受けた婦人の数が少ないことと、女子に高等教育を授ける学校が存在しないこと、小学校卒業後、3－4年の女学校はあるけれどまだまだ数が少ない。ミッションスクールの卒業生もいるが、婦人大衆の中ではきわめて数少ないであり、しかも全国各地で組織立って仕事を出来る段階ではない。日本では、教育の段階においては、梅子にとっては女子教育がもっとも身近な問題であった。梅子は教育を受けたキリスト者婦人の数を増やすことを切望した。日本の官公立学校では宗教教育を行うことが許されず、最良の学校の卒業生すら聖書の教えに無知であり、一方ミッションスクールの卒業生は少数で、彼女達は大体日本の知識階級の娘であるが、富める階級や支配階級の娘はほとんどいないので、たいした影響力も指導力も持ち得ないのだと梅子は考えた[365]。

梅子はさらに学研究を続けたいという希望を持ち、留学期間を1年延期した。ブリンマーでの生活とさらにオズウィゴの勉学を合わせた、梅子の3年の留学期間は1892年に終わった。在学中の2年半の間に歴史・生物・英文学・科学・経済学・哲学を学んだがその成績は全て優秀であり、特に生物学・化学において優れていたことを示し、また英語の読み・書きともみごとで、英語を教えるのに最適であることローズが学長は梅子の証明書に記した[366]。

留学から帰国した後、華族女学校で教授をし、明治女学校の高など科でも教えながら、私塾の設立の準備の日々を迎えた。設立への準備において成瀬仁蔵[367]が第10

---

[364]山崎孝子、前掲書、134-135ページ参照。
[365]梅子がThe Far East誌に書いた一文より。同上書、158-159ページ。
[366]同上書、137ページ。
[367]成瀬仁蔵（1858－1919年）は山口生まれ、明治・大正時代の教育家である。山口県　教員養成所卒。キリスト教を信仰し、1890－94年アメリカに留学し、帰国後梅花女学校長となった。1901年東京目白に日本女子大学を創立した。女子教育に一生をささげた。

議会閉会直後に貴衆両院議員･多数の名士･多くの新聞記者を帝国ホテルに招いて、第一回創立披露会を開き、初めての女子大学設立の計画を一般に公表した。

梅子は、来日したブリンマー留学での友人のアナ・ハツホンに私塾設立の計画を打ち明けた。梅子はその頃すでに英語教員検定試験委員の一人に任命されていたが、女性にその試験に応ずるだけの準備をする学校がないこと[368]を残念に思っていた。外国人の設立したミッションスクールでは英語は教えても、日本のことがらの勉強が不十分になりがちな欠点があるから、この際、どうしても日本人の手で英語を十分に教える学校を創立する必要があると梅子は考えた。また、英語の勉強を通して西欧のものの考え方を学ぶことが女性にとっても大切なことである[369]と考えた。

私塾設立の忙しい準備の中、梅子はまた渡英・渡欧というチャンスを得た。そのきっかけは、梅子が日本の代表としてデンヴァー議会という米国コロラド州の首都デンヴァーで開催される万国婦人連合大会へ出席することであった。大会終了後、英国の知名婦人達に招かれて渡英した。この旅は梅子に英国と米国とを比較する機会を与えた。梅子の日記によれば、たとえば英国の召使いの行き届いた心の配り方に感心したが、米国人は人当たりがよくあたたかいのと比べて、英国人は何となく固苦しいく冷たいという印象を与えたことを感じた。当時梅子が接したのは主に英国の貴族階級であった。

この英国滞在で梅子はオクスフォード大学の聴講生ともなった。聴講した科目とはシェークスピア、エリザベス朝の散文作家、歴史、論理などであった。

第 3 節　津田梅子と女子英学塾の設立

梅子の渡英・渡欧は 1 年余にも及んだ。その 1 年で日本の女子教育は少しずつ整えられるようになり、学校の数も増加し、整備を充実する段階に入っていた。梅子

[368]当時、東京女高師には英文科がなかった。同上書、155 ページ。
[369]同上書、155-156 参照。

が目指すのは女子高等教育であったが、そのための前段階としての女子教育を普及することが必要であった。

1899 年 2 月、高など女学校令[370]が発布され、8 月には私立学校令が発布された。女子教育に関する法令が整えられ始めた一方で、文部省訓令第 12 号により（1899 年 8 月発布）、官立学校における宗教教育が禁止され、ミッションスクールが受難期を迎えた。

19 世紀末までに創立されたミッションスクールは 30 校もあった。1870 年（明治 3 年）、横浜に創立された「キダーさんの学校」（後にフェリス・セミナリーと名付けられ、フェリス女学校の前身）が初のミッションスクールであったが、翌年には同じく横浜に共立学校、1874 年（明治 7 年）には海岸女学校（後の青山女学院）、1875 年（明治 8 年）には神戸女学院・平安女学院、1876 年（明治 9 年）女学院、1877 年（明治 10 年）には立教学院・同志社女学校、1879 年（明治 12 年）には活水女学校など、外国文化の流入が早かった横浜・神戸・長崎などの港町を拠点として、全国各地に外国人宣教師によるミッションスクールが生まれた[371]。

そして、官公立の女学校といえば、1872 年（明治 5 年）に東京女学校が創立されたのが最初であり、1885 年（明治 18 年）に華族女学校が創立された。この学校が創立されるまでには全国での学校数がわずか 9 校であった[372]。

そして、1899 年（明治 32 年）には官公私立の公認された高など女学校は 37 校であった。ミッションスクールは法令外であり、この数に含まれないものが多かったから、ミッションスクールが数においても官公立圧倒するだけの力を持っていたことがわかる[373]。

高など女学校令が各府県で発布されてから、高など諸学の数は飛躍的に増加した。

---

[370]高など女学校令は各府県が公費をもって必ず 1 校以上を設けねばならないことを規定したこと。
[371]山崎孝子、前掲書、171-172 ページ参照。
[372]同上書、172 ページ。
[373]同上書、173 ページ。

1900 年（明治 33 年）には官公私立を含めて 52 校となり、1901 年（明治 34 年）には 70 校を及んだ。しかし、文部省訓令第 12 号によるミッションスクールの圧迫は教育普及の目的が国家主義的な色彩に統一されていく過程を示している[374]。

1900 年、梅子は私塾の設立のため華族女学校の教授を辞職した。アリス・ベーコンと梅子が明治女学校の高など科で教えていた際、教師のひとりであった桜井彦一郎とともに私学の開校を迎えた。桜井は幹事として創立の事務を担当した。彼は私塾に「女子英学塾」という名をつけた。書類を整え、1900 年 7 月設立を東京府知事に申請した。当時梅子は 36 歳になっていた。

図 17. 女子英学塾の最初の校舎（麹町一番町）

出典：津田塾大学『津田梅子と塾の 90 年』、津田塾大学、1990 年、26 ページ。

[374]同上書、173-174 ページ。

塾の設立の目的、根本的な方針は6章から成る「私立女子英学塾規則」の第1章に書かれている。

「第1章　主旨

第1条　本塾は婦人の英学を専修せんとする者、並に英語教員を志望するものに対し、必要な学科を教授するを目的とする。但し教員志望者には文部省検定に応ずべき学力を修得せしむ。

第2条 本塾の組織は、主として家庭的の薫陶を旨とし、塾長および教師は生徒と同居して日夕の温育化に力め、又広く内外の事情に通じ、品性高尚に体質健全なる婦人を養成せん事期す。但し生徒の都合により特に通学を許可する事あるべし。」[375]

また、梅子による塾設立の目的は次のような内容であった。

① 英語を目的とする教育を通して、女性の視野を広、識見を高め、豊かな教育を得させること。

② 文部省の英語教員検定試験に応じ得るだけの英語その他の学力を養うこと。

③ 立派に独立した職業につき得る女性を育てること[376]。

上記の目的は現在にいたるまで津田塾大学の建学の精神となっている。その建学精神とはAll-round women（全人教育）である[377]。また、古木宜志子の『津田梅子』では「完き女性」を「コンプリート・ウーマン」とも言っている[378]。

---

[375]津田塾大学100年史編纂委員会、『津田塾大学一〇〇年史資料編』、ぎょうせい、2003年、48ページ。

[376]山崎孝子、前掲書、180-181ページ。

[377]津田塾大学サイト http://www.tsuda.ac.jp/about/tsuda/index.html

[378]古木宜志子、前掲書、155ページ。

図 18. 津田塾大学

出典：東京の小平市津田町にて（2005 年 7 月による現地調査の写真）

吉川利一の『津田梅子』は、津田梅子の教育方針を以下の通りに分析している[379]。

その第 1 は優れた少数の人材を集め周到な個性教育を実施することにあった。大規模の学校で多数の学生を教える場合には十分その成績を挙げるのは難しいというのが彼女の教育観であった。真の教育は生徒の個性に従って、各々別々の取り扱いをしなければならない、人々の心や気質はその顔の違うように違うと梅子は強調した。少人教育こそ梅子の目指す教育目的を実現する手段であった。

第 2 は英語教育を通して西欧の新しい思想を広めることにあった。新しい時代に適応すべき婦人を養成するためには、まず彼らの眼を開かねばならぬ、つまり伝統的社会の日本では近代を目指すためには西欧化が必要である。英語教育の長所はここにある。英語は世界的言語であり、世界の重大な問題でも英語で語らぬものはないと考え、政治、経済、外交、文学、世界的思想などは総じて最も多く最も広く英語によって伝えられる。従って、英語を学ぶことは世界的言語を知ることと考えら

[379]吉川利一、前掲書、274-280 ページ参照。

れたのである。

第 3 は意志やその判断力を訓練して、新時代に適応すべき有為の婦人を養成することであった。意志や判断力の訓練を欠くならば婦人の活動を必要とする将来の社会で到底十分な仕事が出来ないと考えられる。

第 4 は男女の教育程度を接近させるために女子教育を強化することである。明治維新以来男子の教育は比較的早く発達したが、女子教育は男子の教育と比べると遅れていた。日本国民の半数は女性であり、数の上から考えても女性の向上は大切であるし、また社会の真相を考えると堅実な家庭、健全な社会には教養ある婦人が必要ではないかと思われる。少なくとも女子教育は男性の教育とほぼ同じ程度としなければならない。

第 5 は女子の社会的活動の範囲を新しく開拓したことである。塾を創立した当時は有職婦人が社会で働くということはまだ一般に考えられなかった。しかし欧米の状態をみれば、日本においても、将来そのような状況が生じると考えられたのである。女性はできる限り社会の先頭に出て、社会のあらゆる分野において活躍することが新しい時代の流れであると考えたのである。幸福を家庭の営み女子の教育に当たることは女性の自然の務めであるが、才能があり学職がある婦人は社会公益のためにその能力を役に立てる必要があるとした。

学則第 2 章によれば、設立当初、入学できる学生は 15 歳以上の女子であった（第３条）。また、学科は本科と選科にを大別された（第 2 条）。本科の修学期間は３年間であった（第 4 条）[380]。

女子英学塾の授業は以下のカリキュラム表にみられる。

[380]津田塾大学 100 年史編纂委員会、前掲書、48 ページ。

表 6. 女子英学塾設立時のカリキュラム表

学科課程表																		
学年	第1学年						第2学年						第3学年					
学期	1学期		2学期		3学期		1学期		2学期		3学期		1学期		2学期		3学期	
必修科	英語	5	英語	5	英語	5	英語　講読	5	英語　講読	5	英語　講読	5	講読	5	講読	5	講読	5
	読方		読方		読方		文法		文法		文法		英文学		英文学		英文学	
	作文		作文		作文		和文英訳		和文英訳		和文英訳		作文	3	作文	3	作文	3
	会話		会話		会話		英語　英訳	2	英語　英訳	2	英語　英訳	2	修辞学		修辞学		修辞学	
	英語	5	英語	5	英語	5	作文		作文		作文		英文	3	英文	3	英文	3
	読方		読方		読方		英文学(散文)	3	英文学(散文)	3	英文学(散文)	3	学史		学史		学史	
	作文		作文		作文		心理学	3	心理学	3	心理学	3	英語	2	和訳	2		
	会話		会話		会話		(国語)		(国語)		(国語)		教授法		英訳			
専修科	国語	3	国語	3	国語	3	英文学	2	英文学	2	英文学	2	英文学	2	英文学	2	心理学	2
	作文		作文		作文		(詩)		(詩)		(詩)		(詩)		(詩)		(英文)	
	漢文	3	漢文	3	漢文	3											英文学	2
	古代史	2	古代史	2	古代史	2	歴史	2	歴史	2	歴史	2	歴史	2	歴史	2	(詩)	
	(英文)		(英文)		(英文)		(英文)		(英文)		(英文)		(英文)		(英文)		歴史	2
	近代史	2	近代史	2	近代史	2											(英文)	
	(英文)		(英文)		(英文)													

備考　必修科に専修科を加へて一週の授業時数凡そ 15、6 時とす例へば第 1 学年に於ては必修科 10 時間の上に本人の学力に困り塾長と協議の上専修科中 2 科目を選ぶべきが如し

出典：津田塾大学 100 年史編纂委員会『津田塾大学一〇〇年史資料編』、ぎょうせい、2003 年、48 ページ。

上記のカリキュラムを見てみると設立当初、第 3 学年を除いて 1 学期から 3 学期の必修科と専修科の授業は同じであった。第 3 学年では専門的な英語が加わった。必修科においては第 1 学期には英語教授法、2 学期には和訳と英訳、そして第 3 学期にはそのような授業がなくなった代わりに専修科には心理学（英文）の授業があった。

第三部　国民形成期のインドネシアにおけるカルティニの業績に関する評価―津田梅子との比較を手がかりとして―

第一部と第二部で検討してきたように、オランダ領東インドと日本という遠く離れた地域で生まれたカルティニと津田梅子は、教育の先駆者として両国で高い評価を受けている。19 世紀後半という東アジアでの国民形成期に西欧教育の洗礼を受けた二人の間には多くの点で共通性が見られる。他方、二人が生まれた祖国が置かれた歴史的状況の違いによって、両者はその後各々の国で異なった役割を果たしていくことになった。本章ではカルティニと津田梅子がどのような点で共通性を持ち、またどのような理由で異なった思想を持つに至ったのかについて検討する。そのことによって、カルティニがインドネシア社会においてどのような役割果たしたのかについて考察する。

第 1 章　カルティニの時代背景

イスラムのジャワ進出とほぼ同時期、インドネシアの各島々ではポルトガル、スペイン、イギリスといった西欧（キリスト教）の力が及ぶようになる。17 世紀初頭に入ると、オランダ東インド会社（VOC）がこの地域全体の交易の独占を目指して、この地域を間接的に支配するようになる。

しかし、19 世紀に入るとオランダ東インド会社が植民地経営の失敗で破産したため、オランダ本国による直接的な植民地経営に転換された。1830 年代に始まったオランダの植民地政庁による強制栽培制度と徴税請負制という収奪体制はジャワの農民に苛酷な労働を強いた上、彼らをさらに貧困な状態に追い込むこととなり、農民層からの反対運動が激化するようになる。

このよう中で莫大な利益を得たオランダは、ジャワの北部海岸の植民地都市（バ

タヴィア―現ジャカルタ、スマラン、スラバヤなど）を中心に道路、鉄道、住宅街の整備を行った。また、オランダ本国は、VOC が交易の独占を図っていた全域を直接に植民地として支配することにより、オランダ領東インドの成立を目指した。この植民地国家完成の過程は、ヒンドゥー・ジャワ王国の伝統の強い内陸部と国際主義性格の強い北部海岸地方という二つの異なった政治的・文化的世界を解体し、オランダ領東インドという新しい政治空間に再統合するという過程であった。この空間で始まった人々の移動・交流・文化の流通は、オランダ語で modern（モデルン、近代的）と呼ばれた新しい時代のスタートであった。しかし、オランダによる支配の下にあった原住民は強制労働と極貧の状況に置かれたままであった。

19 世紀の後半、ヨーロッパで自由主義の風潮が広まるようになると、オランダの植民地政策に対する批判が強くなる。その結果、20 世紀に入るとそれ迄よりは原住民に植民地政策の範囲内で一定の配慮が行われる倫理政策に転換される。しかし、農民の困窮した立場には本質的な変化はなかった。それにもかかわらず、この倫理政策の登場は、結果としてオランダの意図（植民地体制の安定と強化）とは全く逆の方向でインドネシアの民族意識を目覚めさせる機能を果たすことになる。まさに、この歴史的な大転換期に、その役割を果たすもっとも適した存在として登場したのが、ジャワの貴族の娘であったラデン・アジェン・カルティニという少女であった。

第 2 章　現代インドネシアにおけるカルティニの位置づけに対する論争

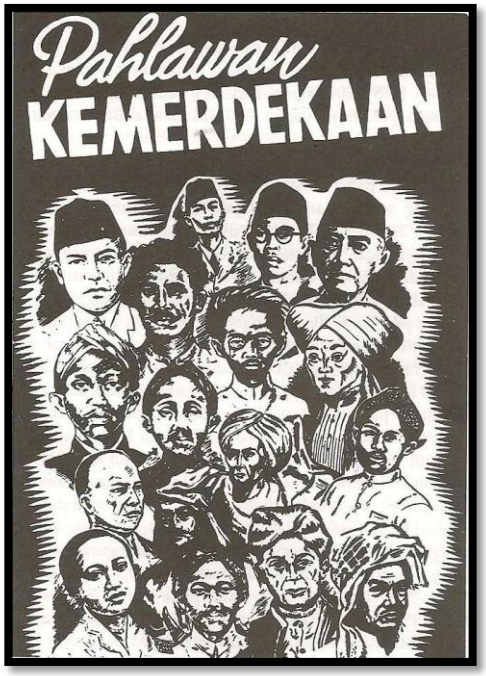
カルティニがインドネシア女性のシンボル的な存在となっているのは、彼女の「女性解放の英雄」としての位置によるものである。カルティニの誕生日である 4 月 21 日は「カルティニの日」として祝日とされ、この日は各地で数多くの記念行事[381]が行われている。

独立後インドネシアは国民統合のために、独立運動を闘った人達を英雄として公

[381] 幼稚園、学校、行政府などで、民族衣装を着用し、様々な大会を行う風習がある。

式に顕彰してきた[382]。建国の父であるスカルノは「国民的英雄達を尊重しない国家は矮小な国家であります！国民的英雄を記念し、敬意を払う国家のみが偉大な国家となるのであります！（舟知恵・松田まゆみ訳）」[383]として、11 月 10 日を「英雄の日」として制定した。

図 19．1953 年の独立英雄のパンフレットの表紙



（下段の左側にカルティニの姿が見られる。）

出典：Dennys Lombard, “Nusa Jawa Silang Budaya Bagian I: Batas-batas Pembaratan”, (Gramedia Pustaka, 2005), 243.

1953 年の英雄の日を祝う独立運動英雄祝賀儀式に際して発行されたパンフレットの表紙（図 19）に、カルティニは唯一の女性英雄として載せられている[384]。それから 11 年後の 1964 年 5 月 2 日付の大統領決定書第 108 号に基づいて、スカルノは

[382]1965 年までに独立運動の英雄として 30 人の英雄が公認された。スハルト体制（1975 年）においてはこの 30 人の英雄は 84 人に増加した。Denys Lombard, *Nusa Jawa 1*, 242-244.
[383]シティスマンダリ・スロト、舟知恵・松田まゆみ訳、前掲書、357 ページ。
[384] Denys Lombard, *Nusa Jawa 1*, 243.

カルティニを「婦人の解放者」としてインドネシアの国家独立英雄として定めた。同年８月３日、スマランでカルティニを国家独立英雄に列する式典が行われた。カルティニの息子である R.M.スサリット（R.M.Soesalit）[385]がすでに 1962 年に死去したため唯一の孫である R.M.ブディ・スティア・スサリット[386]とカルティニの妹であるカルディナに決定書が授与された[387]。

これ以降、カルティニに対する尊敬は大きな広がりを見せるようになる。例えば、「我が母カルティニ」という歌が国歌の作者である W.R.スプラットマンによって作られ、学校や少年団などで必ず唱われなければならない歌となっている。また、カルティニの画像がインドネシアの紙幣（図 20）に表示されたりもした[388]。

図 20.カルティニが表示されたインドネシアの紙幣

さらに、現在においてもカルティニについては必ず学校の教科書に掲載されている。

しかし、他の英雄の殆どが独立戦争を戦った英雄であったことに対して、カルティニは他の英雄と比較して貢献が少ないのではないかとして、近年批判が強くなっている。またイスラム教徒の中からもカルティニの女性観について批判が多い。

たとえば、2010 年 4 月 21 日付の Jakarta Post 紙では「高校生がカルティニはク

---

[385] R.M.スサリットはディポネゴロ第３師団長を務めたこともある陸軍少将であった。
[386]ブディ・スティア・スサリットは、現在既に死去した、がジャカルタ在住で、５名の子供がいる。
[387]シティスマンダリ・スロト、舟知恵・松田まゆみ訳、前掲書、357。
[388]1953 年に発行された５ルピアーと 1985 年に発行された１万ルピアー紙幣であった。

バヤを着た伝統的な女性の姿」をした存在に過ぎないと意見が紹介されたり、あるいは「カルティニは悲劇な人生を歩んだ R.M.A.A ソスロニングラトの娘である。彼女は一夫多妻を批判したが、最終的に父の言う通りの結婚を受けた」として批判されている[389]。

また、2012 年 4 月 21 日付の Republika 紙ではカルティニよりも独立戦争で闘った女性達は多勢いた。オランダ人支配者を追い出すという点でカルティニの役割は大きくなかったのではないかという疑問を主張されるようになっている。同じ記事では、「カルティニの日は西欧の女性尊重主義者達に利用され、婦人解放はイスラムにおける女性の在り方に反したものである」というイスラム教徒からの強い批判も掲載されている[390]。

また、カルティニはオランダの倫理派と交流があったため、彼女は支配者であるオランダによって作り上げられた英雄とみなす人も多い。

インドネシアの女性英雄は現在では 12 名に増えている。その中に、カルティニと同時にスカルノによって認定された英雄が 2 名いる。彼女達はチュッ・ニャッ・ディン(Cut Nyak Dien)とチュッ・ムティア(Cut Meutia)であり、二人共武器を執ってオランダ軍と闘った英雄である。また、西ジャワのスンダ地方のデウィ・サルティカ (Dewi Sartika) という女性は女学校を設立し、西スマトラではラフマ・エル・ユヌシア(Rahma El Yunusiah)もイスラム教の女子教育を設立した。優れた女性の英雄はカルティニばかりではないが、なぜカルティニだけが「カルティニの日」を設けるほどの重要人物とされたのかと、他の英雄女性のいる地方から不満が出されている。

以上のようなカルティニに対する批判も前提にしながら、カルティニがインドネ

---

[389] Jakarta Post 、2010 年 4 月 21 日。
http://www.thejakartapost.com/news/2010/04/21/is-celebrating-kartini's-day-still-relevant-today.html

[390] Republika, 2012 年 4 月 21 日。

シアの歴史の中でどの様な位置にあり、どの様な役割果たしたのか考察を行う。とくに、日本の先駆者として大きな業績を残した津田梅子との比較を通して、地域研究の視点から評価を試みたい。

第 3 章　女性の地位をめぐるカルティニの思想と行動　―津田梅子との比較を通して―

まず、カルティニの女子教育活動の原点である女子教育について検討する。

カルティニと津田梅子の両者の成長における共通性として、西欧教育を受けることについて家族から応援があったことがあげられる。そのため、二人とも小学校のレベルから西欧人と共に西欧式教育をオランダ語と英語の違いはあるが外国語によって学んだ。その結果二人の外国語（オランダ語・英語）のレベルは非常に高かった。会話はもちろん「読み書き」という点でもかなり高いレベルにあった。

また､二人とも 19 世紀後半という西欧帝国主義全盛の時代における自由主義思想やその価値観の影響をうけることとなった。西欧式教育を受けた彼女達に、特に大きな影響を与えたのが女性の地位の低さに対する強い意識であった。両者とも自国の女性達が男性に対して一段と低い地位にあることを強く批判した。

このことは同時に自分達の祖国が、西欧に比べて遅れているという認識に結び付いていく。女性の地位についての問題は二人にとって大変重要な要素であった。二人とも自分の祖国の男性をこの点においては高く評価していない。カルティニは彼女がもっとも尊敬し、開明的で西欧文明の理解者であった自分の父に対してもその女性観に強い疑問と批判を持っていることを友人に宛てた書簡の中で書いている。とくに、一夫多妻というジャワの伝統やイスラムの教義について、カルティニは数多くの強い批判を書き残している。結婚は二人にとっては男女が平等な立場に立った恋愛によって成立しなければならないものであった。それ故に、このような考え

をもった二人は祖国の社会では西欧かぶれと見られる傾向にあった。

二人にとって、女性の地位を向上させるためには、何よりも女性の経済的な自立が前提となる。そして、そのためには女性も男性と同じように教育を受けることが必要とされる。両者とも女性が教育を受けることで社会が西欧社会のように発展すると考えた。それが二人が女学校の設立に大きな意味を見いだした理由であった。

両者に共通している重要な点は、祖国の発展への強い思いである。二人とも自分達の国が西欧に比べて遅れているにも関わらず、祖国の伝統や文化に強い愛着を持っている。二人が白人による人種差別的な態度を強く批判したのも、そのような祖国への気持ちの表れと思われる。とくにカルティニがこの点について何度も強く批判しているのは、カルティニがオランダ領東インドという植民地で支配を受けていた「原住民」に対する支配者オランダ人からの強い人種差別（原住民は猿と呼ばれていた）であった。

また、この両者が優れた人格者であったことは、彼女達自身が自らの国における貴族主義的身分制に対して強い批判精神をもっていたことから明らかである。

この二人のアジアの女性は、既述した如く、その能力において西欧社会から高く評価されたという点でも共通している。カルティニと津田梅子との間には細かな点で差異があったとしても、その本質的な点では既に述べたように多くの共通性を指摘することができる。それは、19 世紀後半という近代化がようやく始まったアジアの伝統社会において女性の置かれた状況に共通点があったためであるとも考えられる。

西欧における「女子教育」や男女の地位についての実情を知った二人にとって、二人が属する国において女性が置かれた状況の改善が遅れた祖国を発展させるために最も重要なことであった。そして、二人はほとんど同じような思いから女学校を設立することになる。その経緯については既に述べた通りである。

現在カルティニと津田梅子は女子教育や婦人解放の先駆者として、インドネシア

と日本で各々高い評価を受けている。とくにカルティニはインドネシアにおいては婦人解放の先駆者として国家英雄の地位を与えられている。

以上述べてきたように、カルティニと津田梅子との間には19世紀末の女子教育の先駆者としてその思想を中心に共通する部分が多い。しかしながら二人が育てようとした女子教育の芽は、全く異なった道を歩むことになった。津田梅子が求めた女学校設立の夢は、アメリカ留学で体験した高いレベルの女子教育の実現であり、彼女が設立した小さな英学塾はその後津田塾大学という日本を代表する女子大学へと発展を遂げ、多くの優秀な人材を送り出している。

一方、カルティニの設立した女学校は、彼女が25才で死去した後わずか数年で消滅した。なぜ津田梅子と同じように女性の地位向上のための女子教育の実現という高い理想と強い意志で設立したカルティニの学校はその後発展することなく消滅する運命をたどることになってしまったのであろうか。その理由は以下のような点にあると思われる。

（1）カルティニの結婚と死

ジャワの結婚制度に反対していたカルティニであったが、1903年にレンバン県知事のラデン・アディパティ・ジョヨ・アディニンラットと結婚した。ジャワの伝統的な結婚の在り方を批判していたカルティニが、何故その伝統に従って結婚したのか、以下の点のような理由があったからだと思われる。

第1は、結婚相手であった知事はHBS（ヨーロッパ人中学校）を卒業した後、オランダのワーヘニンゲンの農業高等学校で教育を受けたという当時として珍しい留学経験者であったことである。彼は高等教育を受けた者として教育を重視し、ジャワ社会の進歩に対して強い情熱をもつと共に、カルティニの抱く理想に全面的に賛成した。彼がカルティニがジュパラで設立した学校をレンバン知事邸で開いてその地方のプリヤイ（原住民官僚）の娘達を教えたいという、カルティニの希望を受け

入れたことが結婚に至った最大の要因であったと思われる。

第２は、多くのプリヤイがその娘をそれまで独身であったカルティニや彼女の妹に託すことを躊躇していたが、結婚することによってこの問題が解消され、より多くの親が娘を安心して預けられるようになるので、開設した女学校の発展が強く期待できるとカルティニが考えたことである。

第３は、知事の娘より知事の妻としての方が社会的影響が大きいため、カルティニは「自分の翼が折られず、逆に大きく強くなれるためはばたける」と自分の理想や夢が結婚によって実現できると期待した点にある[391]。

しかし、カルティニがレンバンに引っ越したので、発展しつつあったジュパラの女学校は妹などに任せられた。当時多くのプリヤイがカルティニの下で娘達を女学校に入学させる希望を強く持っていたが、引っ越したため、止むなく断らざるを得なかったのである[392]。

しかし、最大の原因はカルティニの急死で、学校経営の中心的な人物がいなくなり、また女学校の発展とその教育に情熱を傾ける人物がいなくなってしまったことである。カルティニの妹達にそこまでの情熱を期待することは無理であった。彼女達は優れた教育者であった姉の協力者に過ぎなかった。

(2) プリヤイ階級の生徒と教育言語

カルティニが設立した学校はいくつかの点で大きな問題を抱えていた。

ジャワの封建的慣習に対してジャワの女性達が抵抗できなかった最大の理由は、離婚を恐れたことにあった。貴族階級の女性はその生活のすべてを夫に依存していた。彼女達は働いた経験がなく、教育も受けた事がなかったため自立する方法を全

---

[391] 1903 年付、オーフィンク・スール夫人宛カルティニの書簡。Kartini, *Surat-surat Kartini*, 341-342.

[392] 1903 年付、オーフィンク・スール夫人宛カルティニの書簡。Ibid., 344.

くもたなかった。それ故に、カルティニが目指した女子教育は「職業教育」であった。

しかし、カルティニが設立した学校に通ってきた生徒はジャワ社会の最上級階級の娘達であり、そのため教育言語は王族内でのみ通用するクロモ（最上級のジャワ語）であった。これはカルティニが批判するジャワの封建的な慣習のひとつであった。なぜカルティニは自分が設立した学校にプリヤイの娘達を預かり、また教育言語としてクロモを採用したのかについては以下のように考えられる。

当時のジャワの一般庶民の女性には教育を受ける習慣は全くなく、ジャワ社会は女性が学校に行くことで有益な結果（たとえば職業）に結び付く様な社会ではなかった。一般庶民の女性は男性と共に畑で働き、あるいは家族をサポートする立場にいたため教育の必要性がなかった。そのため、とくに、商業的発達がまだ進んでいなかったジュパラ地方ではカルティニの学校に通えるのはプリヤイの娘達しかいなかったのである。

また、クロモを教育言語としたのは、プリヤイが娘を安心してカルティニに託せるようにするため、カルティニが妥協した結果であったと思われる。しかし、プリヤイの娘のみ受け入れたことで、女学校の発達は閉ざされることとなった。それは、彼女達が 12 歳になると、カルティニ同様、ピンギタン期に入らなければならないため、カルティニが亡くなった後、生徒が激減し、そのため自然的に解消していく結果となった[393]。

第二部で論じたように、日本においては江戸時代に既に寺子屋という学校を中心に女子も教育を受ける機会は身分を超えて全国に広がっていた。カルティニと津田梅子の置かれた状況は、近代化の背景にあった伝統社会のあり方において、全く異なっていたのである。

---

[393]1905 年 11 月 14 日付、アベンダノン夫人宛の妹ルクミニの書簡。Joost Cote (ed. and trans.). *Realizing the Dream of R.A. Kartini Her Sisters' Letters from Colonial Java*, (Ohio: KILTV Press, 2008), 117.

(3) どこからも学校設立の支援を得られなかったこと

カルティニはオランダによる植民地支配の中で、例外的に現地のヨーロッパ人学校（小学校）に入学を認められた。そしてそこで学んだ結果として彼女はジャワの因習やイスラム教と日常的に孤独な戦いすることを強いられた。彼女の能力に理解を示し、留学を進めた倫理派のオランダ人達は、原住民である少女が見事なオランダ語を話すことに関心をもっていたが、彼女に対する協力はオランダの植民地支配に大きな影響を与えないということが前提にあった。

オランダの倫理主義者達にとっては、カルティニという優秀な原住民の少女の存在は、オランダの植民地政策で近代的な西欧型教育制度を導入したことの成果としての宣伝として意味を持つものであった。オランダ植民地政庁は決して西欧型教育を原住民全てに浸透させようとはしなかったのである。カルティニにオランダへの留学をすすめ、そしてその実現の可能性が高まると反対に転じたのも同じような理由からであった。オランダの植民地政策は原住民の教育の拡大には保守的であり、消極的であった[394]。

そのため、カルティニの学校、資金援助をしようという意見も一部にはあったが、実現するには至らなかった。後に、植民地政庁の高官であったアベンダノンは『カルティニ書簡集』を発行する。その収益を消滅しつつあったカルティニ学校に注いだ。しかし、それは原住民女性のための学校というよりは、オランダによる植民地支配の正当化を讃えるためにカルティニの名前を利用したモデルスクールしか過ぎなかった。一方、原住民側では、子供の教育に強い関心を持っていて、財力もある協力者は、当時のジャワの地域社会では殆ど存在しなかったと思われる。特に、プリヤイが設立した女学校がそのような存在と接点をもつことは困難なことであった。

[394]山本信人、「インドネシアのナショナリズム」『東南アジア史 7 巻』、岩波書店、2002 年、163-164 ページ。

津田梅子が明治政府による国費留学生として 11 年もの長期間アメリカで教育を受け、学校設立に当っては友人や明治政府の有力者あるいはアメリカのキリスト教団体などから支援を受けたことと比較すると、カルティニの置かれた状況は大変過酷なものであった。

（4）カルティニ学校とイスラム社会

カルティニが女学校の設立を行ったジュパラやレンバンはイスラムの強いジャワの北部海岸地方であった。そして、そのような社会で彼女はイスラム教の教義である「一夫多妻」についても強い批判を行っていた。

1900 年８月、アベンダノン夫人宛の書簡（抜粋）

> ・・・けれども情けないことには、この山なす大きな邪悪に立ち向かう力の足らぬこのわたし、しかも――おお神様、なんて残酷な！――イスラムの宗教がこれを庇護し、この邪悪の犠牲者たる女性自身の愚かしさによって護られているという実情なのです！ああ、「一夫多妻」と呼ばれているこの悲惨な現状を打破して運命の打開に力を尽くさなければならぬ時期は、遠い将来に待つより他はないでしょう。口先では強く「いや！」といいながら、本心はいく千度この言葉を脅かすかしれません。（早坂四郎訳）[395]

このような彼女のイスラムに対する考え方は、当時女子教育の重要性を認めない現地の圧倒的なイスラム社会からのカルティニとその学校に対する批判が行われていることになった。そして、この批判はカルティニの理想を受け継いだ妹達にも向けられたのである。

このした宗教からの批判は、脱亜入欧を目標としていた日本においては津田梅子にも英学塾にも全く見られないものであったろう。

[395]カルティニ、早坂四郎訳、前掲書、37 ページ。

(5) カルティニ学校とオランダ派イメージ

プリヤイのカルティニがヨーロッパ人学校で教育を受け、オランダ語を自由に話し、植民地支配者であるオランダ人達と交流する姿に対して原住民から見たイメージはどのようなものであったのか。オランダ領東インドという植民地国家においてはプリヤイはオランダ型教育を受けオランダ語を操る原住民官僚として植民地支配の重要な役割を果たしていた。カルティニは原住民の立場からそのようなプリヤイの在り方やオランダの植民地支配に対して強い批判をもっていたのであるが、カルティニと接触のない一般庶民にはそのことは理解されてなかった。庶民にとってはカルティニのイメージは西欧かぶれのプリヤイ女性であった。このようなカルティニのイメージは現代のインドネシアにおいても今なお一部の人々からカルティニへ批判として語られている。アベンダノンが編集したカルティニ書簡集『闇を通して光へ―ジャワ人のための故ラデン・アジェン・カルティニの思考―(Door Duisternis Tot Licht: Gedachten Over en Voor Het Javaansche Volk van Wiljen Raden Adjeng Kartini)』の中にカルティニのオランダによる植民地政策批判の書簡が、意図的に入ってないこともその影響があるものと思われる。付録 2 の表における※印の書簡はオランダによる植民地主義の内容が強かったため、その書簡集から省かれたものと思われる。このような理由によりカルティニが設立した女学校はその後発展することなく消滅する結果となった。

津田梅子が設立した英学塾が津田塾大学へと大きく発展したのと比較するとカルティニを女子教育の先駆者と位置付けるのには問題がない訳ではないと思う。しかし、植民地支配の下にあったインドネシアで政府からの援助や支援団体もなく、留学の夢も果たせなかった少女が、高い理想と情熱と祖国への愛によって、多くの困難を乗り超えて女子教育の伝統の全くないインドネシアで最初の女学校を設立して女子教育の芽を生み出したことは、インドネシア共和国にとってはカルティニを女

子教育の先駆者と呼ぶに相応しい大きな業績であると評価できると思う。

第 4 章　カルティニと民族意識の芽生

カルティニと津田梅子との間の根本的な差異は、カルティニの生まれた祖国がオランダ領東インド帝国という植民地であった点にある。植民地下においては「白人の優越と威信」[396]の下で全ての権力はオランダ人に占められていた。カルティニの家族のようにプリヤイとして原住民の最上位に位置する者も、決してオランダ人の上に立つことは許されなかった。また、オランダ人達がこの植民地で１～２年で大金を手に入れて帰国して行ったにも関わらず、オランダ領東インドのことを「おぞましい猿の国」と呼んでいたことをカルティニは強く批判している[397]。

1900 年 1 月 12 日、ステラ宛の書簡（抜粋）

> オランダ人は私達ジャワ人の愚かさを笑いものにするのが好きですが、私達が勉強しようとすると、それを妨げ、敵対的態度をとるのです。・・・私達はヨーロッパ人と同じ学問的、文化的水準に達したいのです。（舟知恵・松田まゆみ訳）[398]

また彼女はオランダ領東インド政庁の最大の収入源であったジャワ農民へのアヘンの売買についても強く批判する。

1899 年 5 月 25 日、ステラ宛の書簡（抜粋）

> ・・・私達の民衆に、阿片がどれほど大きな不幸をもたらしているが言葉では表れません。・・・ジャワの阿片を吸う者が多ければ多いほど、政庁の銭箱は太るのです。蘭印政庁にとって阿片の売上げは最大の収入源です。住民の福

[396]シティスマンダリ・スロト、舟知恵・松田まゆみ訳、前掲書、100 ページ。
[397]同上書、108 ページ。
[398]1900 年 1 月 12 日、ステラ宛の書簡より。同上書、105-106 ページ。

利などどうでもいい・・・大事なのは政庁が大儲けをすることだというわけです。・・・(舟知恵・松田まゆみ訳)[399]

このような 20 才になったばかりのカルティニによるオランダ領東インド政庁の植民地支配に対する直接的な批判は、このような発言をそれまで全くすることがなかった原住民、しかもその最上位にある知事の娘の発言として、オランダにとっては衝撃的なものであったと思われる。

まさにこのようなカルティニの主張の根幹は、カルティニが自己の社会を愛し、その社会を貧困と混乱から、あるいは苦しんでいる原住民をオランダという植民地主義者による人種差別と搾取から解放するための民族主義的な抵抗であったといえる[400]。

1900 年頃まではまだカルティニのように、今日的な理解では民族性と言うものについての意識を持っている者はほとんどいなかった。この点についてカルティニはまさに先駆者であった[401]。

カルティニと津田梅子の比較で取り上げたように、原住民に対する多くのオランダ人の不平等な態度は彼女の失望感を招き、抵抗感を抱かせるようになった。それがカルティニの「民族的意識」の萌芽となった。カルティニは他の民族指導者達よりも何年も早く、民族の優れた本質、価値、特性、文化などに気付いた。そのことは彼女が死去した後の 1911 年､アベンダノンが編集したカルティニの書簡集である『闇を通して光へ--ジャワ人のための故ラデン・アジェン・カルティニの思考―(Door Duisternis Tot Licht: Gedachten Over en Voor Het Javaansche Volk van Wiljen Raden Adjeng Kartini)』に掲載されている書簡にも表れている。また、カルティニの精神を燃し続ける上でカルティニの姉妹は重要な役割を荷なった。

---

[399]同上書、109 ページ。
[400]同上書、110 ページ。
[401]シティスマンダリ・スロト、舟知恵・松田まゆみ訳、前掲書、110 ページ。

カルティニの活動の影響を受けた青年知識人達[402]を中心として 1908 年 5 月 20 日にブディ・ウトモ（Budi Utomo―英徳会）[403]と呼ばれる民族主義団体が誕生した。この団体の設立日である 5 月 20 日は「民族覚醒の日」（Hari Kebangkitan Bangsa）として現在インドネシアの祝日になっている。この日がインドネシアの民族(国民)の統合の自覚が生まれた最初の時点である[404]。

カルティニ書簡集が刊行されて以来、オランダ領東インドの知識階層でも多くの人がこの内容に影響を受け、カルティニの名前は民族運動の進展に伴って急速に広がって行った。カルティニは武器を取って支配者であるオランダと戦ったという意味の英雄ではないが、ペンと思想を武器としてオランダの植民地支配と古いジャワの因習や宗教と闘ったのである。

最初にアベンダノンによって発行されたオランダ語版のカルティニの書簡集には『闇を通して光へ』という書名が付けられた。インドネシア語版では『夜を終えて光明へ』というタイトルになっている。また、第二次世界大戦で日本が敗戦し、日本軍人の早坂四郎がスラバヤの捕虜キャンプに収容された。彼はそこで偶然この書簡集（インドネシア語版）に出会い、夢中になって読んだという。彼は 2 ヶ月をかけて、暗い電灯の下でノート 9 冊にこの本を書き写して、誰にも気付かれないように日本に持ち帰った。帰国後彼はこれを日本語に翻訳して出版（河出新書）することになる。その他に、日本語訳では『暗黒を越えて』（牛江訳）がある。早坂四郎訳の日本語版にインドネシア共和国初代大統領スカルノが「歓迎のことば」を寄せた。そこでスカルノはカルティニを「インドネシア民族の中に生まれた女性の地位の向

---

[402]カルティニの精神が「ヨン・ジャワ」運動の周囲に集う知識的少年達に影響をする。ここここで言う「ヨン・ジャワ」は 1903 年、カルティニが先鞭をつけ、知識的青年の集うところとなったジャワ青年運動のことである。従って、1915 年に設立され、1918 年にソロの会議でその名称を「ヨン・ジャワ」と改めた団体のことではない。同上書、340 ページ。

[403]クスモ、グナワン、マングンクスモという 3 人の STOVIA（原住民医学校）の学生が設立した民族主義団体である。インドネシアの歴史においては初めて民族の覚醒を生み出す団体である。

[404]同上書、274 ページ。

上と民族独立の先駆者」として彼女を高く評価している。

19 世紀末から 20 世紀初頭というインドネシアがまだ植民地支配の下にあった暗黒の時代のなかで、将来の「インドネシア」民族の独立を夢見たひとりの少女カルティニは、男女の性別を越えてまさにスカルノが高く評価した通りその先駆者としてインドネシア人の誇りである。ひとりの日本人軍人であった早坂四郎の心を熱くした理由もそこにあったものと思われる。

英語版などの多くの書名は、単に『カルティニ書簡集』となっている。

「闇」「暗黒」「夜」ということばは当然カルティニが批判したジャワの伝統社会やイスラム社会を意味したものと推測できる。当然アベンダノンというオランダ領東インド植民地政庁の高官によるこの本の出版において考えられた「光」とはオランダの植民地支配の正当性を指していると考えられる。しかし、オランダはジャワの闇としての伝統社会やイスラムと闘い、それを光で照らすような政策は全く取って来なかった。カルティニはオランダの植民地支配を原住民社会の最大の暗として闘ったのである。カルティニが求めた光は「女子教育による女性の解放」であり、「原住民の民族意識の覚醒」であり、「独立の達成」であると思われる。その意味ではカルティニが求めた光はインドネシア共和国の誕生によってまだ充分ではないとしても基本的には実現したといえる。

カルティニの女学校は結局形として残ることはなかった。しかし、その努力の中で学校設立以上のものを彼女はなし遂げた。それは、既に何度も述べて来たインドネシアにおける「民族意識の覚醒」である。カルティニは、学校設立自体を目的として活動したのではない。ジャワ伝統社会の中において、女性として生きることから生ずる矛盾・困難、あるいは不平等を体験し、それを克服しようとしたのである。彼女は父親の理解という僥倖に恵まれ、教育を受けることができたが、その幸運を自分だけのものとすることなく、同じような環境の中に取り残されている同胞に広めようとしたのである。

学校を作るという目的は死によって達成されなかったが、彼女のこの希望は、インドネシアの中に継承され、民族独立の原動力となった。

カルティニは女性自立のための学校教育を行うという点については津田梅子と軌を一にするものがあるが、その後夫々の社会に残したものは別々の形のものとなった。

参考文献

カルティニに関する文献

日本語文献

1. 石井米雄・高谷好一・土屋健治など監修『東南アジアを知る辞典』、平凡社、1997年。
2. エドワード・W.サイード『オリエンタリズム』、平凡社、1997年。
3. エドワード・W.サイード『文化と帝国主義』、みずず書房、1998年。
4. 加藤博編『イスラムの性と文化』、東京、東京大学出版会、2005年。
5. カルティニ著、牛江清名訳『暗黒を超えて（若き蘭印女性の書簡集)』、日新書院、1940年。
6. カルティニ著、早坂四郎訳『光は暗黒を越えて』、河出新書、1955年。
7. 海後宗臣・中新・寺崎昌男『教科書でみる近現代日本の教育』、東京書籍、1999年。
8. 口羽益生「ジャワ人の世界観」『東南アジア研究』第２巻１号、京都大学東南アジア研究センター、1964年。
9. シティスマンダリ・スロト、舟知恵・松田まゆみ訳、『民族意識の母カルティニ伝』、井村文化事業社、1982年。
10. 白石隆『海の帝国―アジアをどう考えるか』、中公新書、2001年。
11. 白石隆「インドネシアの近代における「わたし」--カルティニの ik とスワルディの saya（特集〈インドネシア国民の形成〉--故土屋健治教授を偲んで)」『東南アジア研究』　第34巻1号、京都大学東南アジア研究所、1996年。
12. 染谷臣道『アルースとカサール現代ジャワ文明の構造と動態』、弟一書房、 1993年。
13. 竹井十郎「ジャワ人と教育」『南方圏研究会』、文成社、1943年。

14. 竹井十郎『インドネシアン　印度の實體』、東京、岡倉書房、1941 年。
15. 田中館秀三『南方文化施設の接収』、東京、大洋号印刷所、1944 年。
16. 土屋健治追悼集刊行会『時間の束をひもといて―追悼土屋健治』、太平印刷社、1996 年。
17. 土屋　健治『カルティニの風景』、めこん、1991 年。
18. 土屋健治『インドネシア―思想の系譜』、勁草書房、1994 年。
19. 土屋健治「ジョグジャカルター中部ジャワにおける都の成立と展開」『東南アジア研究』第 21 巻 1 号、1983 年 6 月。
20. 土屋健治「インドネシアの社会統合」『アジアにおける国民統合』、東京大学出版会、1988 年。
21. 土屋健治「カルティニの心象風景（東南アジアの世界像<特集>）『東南アジア研究』　22（1)、京都大学東南アジア研究所、1984 年。
22. 土屋健治・平野健一郎・山影進、岡部達味、『インドネシアの社会統合- フロンティア空間についての覚え書き―アジアにおける国民統合歴史･文化･国際関係』、東京大学出版会、1988 年。
23. 土屋健治・白石隆編『東南アジアの政治と文化』東京大学出版会、1984 年。
24. 田子内進「植民地期インドネシアにおけるラジオ放送の開始と音楽文化:『NIROM の声』が描く音楽化」『東南アジア研究』44 巻 2 号、2006 年 9 月。
25. 富永泰代「カルティニの風景」土屋健治」『史学雑誌』101（10)、山川出版社、1992 年。
26. 富永泰代「カルティニの著作と追悼記事について--19 世紀末ジャワとオランダにおいてカルティニはどのように認識されていたのか」『史林』76（4)、史学研究会、1993 年。
27. 富永泰代「カルティニの『世界認識』の形成過程--カルティニの読書体験についての一考察」『南方文化』18 号、天理南方文化研究会、1991 年。

28. 富永泰代「『ジャワ人に教育を』--1903 年 1 月にカルティニが記した覚書」『南方文化』14 号、天理南方文化研究会、1987 年。
29. 富永泰代「女性解放思想史講座（67）カルティニ--インドネシア共和国の『国家独立英雄』」『女も男も』78 号、労働教育センター、1999 年。
30. 東亜研究所『蘭領印度史』、東京、岩波書店、1942 年。
31. 戸津正勝「インドネシアにおける民族文化と国民統合－バティックの変容過程を中心として－」『教育論集』第 28、国士舘大学教養学会、1989 年。
32. 戸津正勝・小川英文、「インドネシア、ジャワ島、ジョグジャカルタ特別州、コタグデの伝統工芸」『国士舘大学宗教・文化研究所紀要第 11 号』、1993 年。
33. 永積　昭『インドネシア民族意識の形成』東京大学出版会、1996 年。
34. 平野健一郎・山影進・岡部立味・土屋健治『アジアにおける国民統合』、東京大学出版会、1988 年。
35. 服部美奈『学位請求論文「インドネシアにおけるイスラム改革運動の中の女性：ディアナ・プトリの社会史」』、頸草書房、2002 年。
36. 早坂四郎（訳）、「カルティニ、ラデン・アジェング」の手紙－2－」『月刊インドネシア』75 号、日本インドネシア協会、1952 年。
37. 別技篤彦「ラーデン・アジェン・カルティニの思想における国土と民族－インドネシア民族運動史の序章－」『史苑』24（2）、立教大学史学会、1963 年。
38. ベネディクト・アンダーソン、白石隆・白石さや訳『想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行』、書籍工房早川、2008 年。
39. ベネディクト・アンダーソン、中島成久訳、『言葉と権力』、日本デタースクール出版部、1995 年。
40. 松本由香「インドネシアの服飾にみるナショナル・デザインの創造--建国の母カルティニの事例を中心として」『風俗史学』29 号、日本風俗学会、2005 年。
41. ジョン.D.レッジ、 中村光男（訳）『インドネシア歴史と現在』、サイマル出版

会、1984 年。

英語文献

1. Adam, Ahmat B. *The Vernacular Press and the Emergence of Modern Indonesian Consciousness (1855-1913)*. Ithaca New York: Southeast Asia Program Cornell University, 1995.
2. Anderson, Benedict. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. London: Verso, 2006.
3. Blackburn, Susan. *Women and State in Modern Indonesia*. Cambridge: Cambridge University Press, 2004.
4. Coedes, G. *The Indianized States of Southeast Asia*. The University Press of Hawaii, 1971.
5. Cote, Joost. *Letters from Kartini: Indonesian Feminist, 1900-1904*. Victoria: Monash Asia Insititute Monash University, 1992.
6. ----------. *Realizing the Dream of R.A. Kartini—Her Sisters' Letters from Colonial Java*. KITLV Press Leiden, 2008.
7. ----------. "Raden Ajeng Kartini and Cultural Nationalism in Java", In B. Bagchi, E. Fuchs and K. Rousmaniere (eds), Connecting Histories of Education: Transnational and Cross-Cultural Exchanges in (Post)Colonial Education, Berghahn Books, 2014.
8. Day, Clive. *The Policy and Administration of Dutch in Java*. London Mac Millan, 1904.
9. Geertz, Clifford. *The Religion of Java*. Chicago and London: The University Chicago Press, 1976.
10. ----------. *Agricultural Involution: The Process of Ecological Change In*

Indonesia, University of California Press, 1963.

11. ----------. "Islam Observed Religious Development in Morocco and Indonesia", Chicago and London: The University Chicago Press, 1971
12. Gouda, Frances. *Dutch Culture Overseas-Praktik Kolonial di Hindia Belanda, 1900-1942*. Serambi Ilmu Semesta, 2007.
13. Grever, Maria., Waaldijk, Berteke. *Transforming the Public Sphere: The Dutch National Exhibition of Women's Labor in 1898*. London: Duke University Press, 2004.
14. Hall, D.G.E. *A History of South-East Asia*. Hongkong: Macmillan Education, 1987.
15. Kartini, Raden Ajeng, *Kartini, The Complete Writings 1898-1904*, Edited and translated by Joost Cote, Monash University Publishing, 2014.
16. ----------. L*etters of Javanese Princess, Raden Adjeng Kartini*. Translated by Agnes Louise Symmers, with a foreword by Hildred Geertz, New York: The Norton Library, 1964.
17. ----------.*Letters of Javanese Princess, Raden Adjeng Kartini*.Translated by Agnes Louise Symmers, with a foreword by Hidred Geertz, Hongkong: Heinemann Educational Books, 1976.
18. ----------. *Letters of Javanese Princess, Raden Adjeng Kartini*. Translated by Agnes Louise Symmers, introduction bySartono Kartodirjo, Jakarta: Oxford University Press, 1976.
19. Kartodirdjo, Sartono, "Bureaucracy and Aristocracy: The Indonesian experience in the XlXth century," ArchipelVolume 7 (1974): No. 1.
20. Mudzar, M.Anto., Alvi, S. S, Sajida., Sadli, Saparinah., Shihab, M.Quraish.*Women in Indonesia Society*. Sunan Kalijaga Press, 2002.

21. Padmo, Soegijanto, “Java and the Making of Nation”, Humaniora Journal, Volume XII, No. 2, Yogyakarta: Gadjah Mada University, 2000.
22. Ricklefs, M.C. *Polarizing Javanese Society: Islamic and Other Visions (c. 1830-1930)*. National University of Singapore Press, 2007.
23. Rutherford, Danilyn, “Unpacking a National Heroine: Two Kartinis and Their People”. Indonesia, no. 55, Southeast Asia Program Publications, Cornell University, 1993.
24. Said, Edward W. *Orientalism*, Penguin Modern Classic, London, 2003.
25. ----------. *Culture and Imperialism*. Vintage Books, New York, 1993.
26. Scott Boys, Henry. *Some Notes on Java and Its Administration by the Dutch*. Allahabad: The Pioneer Press, 1892.
27. Steenbrink, Kare. *Dutch Colonialism and Indonesian Islam: Contacts and Conflicts, 1596-1950*. Amsterdam: Rodopi B.V., 1993.
28. Subadio, Haryati, “Kartini a Modern Women and yet a Child of Her Time”, Jakarta: The Indonesian Quarterly Vol. VI (1978): No.2
29. Sutherland, Heather. *The Making of Bureaucratic Elite: The Colonial Transformation of Javanese Priyayi*. Singapore etc: Heinemann Educational Books (Asia), 1979.
30. Sutherland, Heather, “The Priyayi”, Indonesia, No. 19, Cornell University, Southeast Asia Program Publications, April 1975
31. Taylor, Jean Gelman, “Educate the Javanese”, Indonesia Journal Vol.17, 1974.
32. Tsuchiya, Kenji, “Kartini’s Image of Java’s Landscape”, Southeast Asian Cultural Studies, Volume 25.
33. van Niel, Robert. *The Emergence of the Modern Indonesian Elite*. The Hague:

W. van Hoeve Publishers, 1970.

34. Veldhuisen, Harmen C. *Batik Belanda 1840-1940: Dutch Influence in Batik from Java History and Stories*. Jakarta: Gaya Favorit Press, 1993.
35. Watson, C.W. *Of Self and Nation: Autobiography and the Representation of modern Indonesia*. Honolulu: University of Hawaii Press.
36. Miyake, Yoshimi, "Javanese Kings, Dramas, and Women," Kyoyokiso Kyoiku Kenkyu Nenpo, Akita University (2007): 45-51.

インドネシア語文献

1. Alisjahbana, S. Takdir, "Kebesaran dan Tragedi", dalam *Satu Abad Kartini*, Jakarta: Sinar Harapan, 1979.
2. Arsip Nasional Republik Indonesia, "Ikhtisar Keadaan Politik Hindia-Belanda tahun 1839-1848", Jakarta: Arsip Nasional R.I, 1973.
3. _____, "Laporan Politik Tahun 1837" Staatkundig Overzicht Van Nederlandsch Indie 1837, Jakarta: Arsip Nasional R.I, 1971.
4. Abdullah, Taufik et al, "Dari Samudra Pasai ke Yogyakarta", Jakarta: Yayasan Masyarakat Sejarawan Indonesia dan Sinergi Press, 2002.
5. Anderson, Benedict, "Mitologi dan Toleransi Orang Jawa", Jogjakarta: Jejak, 2008
6. Bachtiar, Harsya W. "Kartini dan Peranan Wanita dalam Masyarakat Kita", dalam Satu Abad Kartini, Jakarta: Sinar Harapan, 1979.
7. Boomgard, Peter, "Anak Jajahan Belanda: Sejarah Sosial dan Ekonomi Jawa 1795-1880", Jakarta: Djambatan, 2004.
8. Buchori, Mochtar, "Evolusi Pendidikan di Indonesia, Dari Kweekschool sampai ke IKIP: 1852-1998", Yogyakarta: Insist Press, 2007

9. Dahlan, Aisyah, “Inspirasi Kartini di Kalangan Muslimat”, dalam *Satu Abad Kartini*, Jakarta: Sinar Harapan, 1979.
10. Depdikbud (Editor oleh Dra. Sri Sutjianingsih, Sutrisno Kutoyo, “Sejarah Pendidikan DIY”, Yogyakarta: Depdikbud, 1982.
11. Departemen Pendidikan dan Kebudayaan R.I, “Pendidikan Indonesia dari Jaman ke Jaman”, Jakarta: BP3K, 1973.
12. Dri Arbaningsih, “Kartini dan Sisi Lain: Melacak Pemikiran Kartini Tentang Emansipasi Bangsa ”, Jakarta: Penerbit Kompas, 2005.
13. _____, “Gagasan Emansipasi “Bangsa” dalam Surat dan Nota Kartini (Sebuah Kajian Refleksi Etis)”, Disertasi Program Studi Ilmu Filsafat Jurusan Ilmu-ilmu Humaniora UGM.
14. Peter Boomgaard, “Anak Jajahan Belanda: Sejarah Sosial dan Ekonomi Jawa 1795-1880”, Jakarta: Djambatan, 2004.
15. Fitriyanti, “Rohana Kuddus: Wartawan Perempuan Pertama Indonesia”, Yayasan d’nanti, 2005.
16. Clifford Geertz, “Involusi Pertanian Proses Perubahan Ekologi di Indonesia”, Jakarta: Bhratara Karya Aksara, 1983.
17. Dewantara, Ki Hajar, “Bagian Pertama: Pendidikan”, Majelis Luhur Persatuan Taman Siswa, 2004
18. Dewantara, Ki Hajar, “Bagian Kedua: Kebudyaan”, Majelis Luhur Persatuan Taman Siswa, 2004
19. H.J de. Pigeaud Graaf, TH, “Kerajaan Islam Pertama di Jawa: Tinjauan Sejarah Politik Abad XV dan XVII”, Grafiti, 2003.
20. Hadiz, Liza, “Perempuan Dalam Wacana Politik Orde Baru: Pilihan Artikel Prisma”, Jakarta: Pustaka LP3ES Indonesia, 2004.

21. Hakeem Husein et.al., (A.H Jemala Gembala penerjemah), "Membela Perempuan: Menakar Feminisme dengan Nalar Agama", Jakarta: Al-Huda, 2005.
22. Houben, Vincent J.H., "Keraton dan Kompeni: Surakarta dan Yogyakarta 1830-1870", Bentang, 2002.
23. Husken, Frans, "Masyarakat Desa dalam Perubahan Zaman: Sejarah Diferensiasi Sosial di Jawa 1850-1980", Jakarta: Grasindo, 1998
24. Jacques, Frits G.P., "Surat-surat Adik R.A. Kartini", Jakarta: Penerbit Djambatan, 2005
25. Jurnal Perempuan, "Jurnal Perempuan vol.44 Pendidikan Alternatif untuk Perempuan", Yayasan Jurnal Perempuan, 2005.
26. Kartini, Raden Ajeng (Sulatin Sutrisno penerjemah), "Surat-surat Kartini: Renungan Tentang dan untuk Bangsanya", Djambatan, 1981.
27. _____(Sulastin Soetrisno penerjemah), "Kartini Surat-surat kepada Ny. Abendanon-Mandri dan Suaminya", Jakarta: Penerbit Djambatan, 2000
28. Kartini, Raden Ajeng (Vissia Ita Yulianto penerjemah), "Aku Mau...: Feminisme dan Nasionalisme Surat-surat Kartini kepada Stella Zeehandelaar 1899-1903", Kompas, 2004.
29. Kartodirdjo. Sartono, "Kolonialisme dan Nasionalisme di Indonesia pada Abad 19 dan Abad 20", Lembaran Sedjarah, No.8, Juni 1972
30. Kartodirdjo. Sartono, "Pengantar Sejarah Indonesia Baru: 1500-1900, Dari Emporium sampau Imperium, Jilid 1", Jakarta: Gramedia, 1988
31. Katopo, Arsitides Katopo, "Bunga Rampai Karangan Mengenai Kartini", Jakarta: Sinar Harapan, 1979.
32. Keesing, Elisabeth, "Betapa Besar Sebuah Sangkar: Hidup, Suratan, dan Karya Kartini", Jakarta Djambatan, (Hoe Ruim Een Kooi Ook is; Leven en

Lot Van Kartini en Haar Werk), 1999.

33. Koentjaraningrat, “Kebudayaan Jawa”, Balai Pustaka, 1984.
34. Kuntowijoyo, “Raja, Priyayi dan Kawula: Surakarta 1900-1945”, Ombak, 2004.
35. Lombard, Dennys, “Nusa Jawa Silang Budaya Bagian I: Batas-batas Pembaratan”, Gramedia Pustaka, 2005.
36. _____, “Nusa Jawa Silang Budaya Bagian II: Jaringan Asia”, Gramedia Pustaka, 2005.
37. _____, “Nusantara Jawa Silang Budaya Bagian III: Warisan Kerajaan-kerajaan Konsentris”, Gramedia Pustaka, 2005.
38. Montolalu, L.R., “Kartini dalam Pers Tempo Doeloe”, dalam *Satu Abad Kartini*, Jakarta: Sinar Harapan, 1979.
39. Multatuli, “Max Havelaar”, Yogyakarta: Narasi, 2008
40. Mulyana, Slamet, “Kesadaran Nasional: Dari Kolonialisme sampai Kemerdekaan, Jilid I”, Yogyakarta: LKiS, 2008
41. Mulyana, Slamet, “Kesadaran Nasional: Dari Kolonialisme sampai Kemerdekaan, Jilid II”, Yogyakarta: LKiS, 2008
42. Munti, Ratna Bantara., Anisah, Hindun, “Posisi Perempuan dalam Hukum Islam di Indonesia”, Yogyakarta: LKiS, 2005.
43. Mustopo, Habib, dkk., “Sejarah untuk Kelas 2 SMA”, Jakarta: Yudhistira, 2005.
44. Nas, Peter J.M “Kota di Indonesia” dalam Kota-Kota Indonesia: Bunga Rampai, Gajah Mada University Press, 2007
45. Nas, Peter J.M., Pratiwo, “Jawa dan de Groote Postweg, La Grand Route, The Great Mail Road, Jalan Raya Pos” dalam Kota-Kota Indonesia: Bunga

Rampai, Gajah Mada University Press, 2007.

46. van Niel, Robert, “Sistem Tanam Paksa di Jawa”, LP3ES, 2003.
47. Pane, Armijn, “Habis Gelap Terbitlah Terang”, Jakarta: Balai Pustaka, 1968.
48. Pramoedya Ananta Toer, “Panggil Aku Kartini Saja”, Jakarta: Lentera Dipantara, 2003
49. _____, “Jalan Raya Pos Jalan daendels”, Jakarta: Lentera Dipantara, 2003
50. Poesponegoro, Marwati Djoened., Notosusanto, Nugroho, “Sejarah Nasional Indonesia III”, Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Jakarta: Balai Pustaka, 1993
51. Rambe, Hanna, “Sekolah Kartini”, dalam *Satu Abad Kartini*, Jakarta: Sinar Harapan, 1979.
52. Reksonegoro, Kardinah, “Kepeloporan Tiga Saudara Mengangkat Harkat dan Martabat Wanita”, Dinas Pariwisata Kabupaten Rembang.
53. Ricklefs, M.C., “Sejarah Indonesia Modern”, Gadjahmada University Press, 2005.
54. Salam, Solichin, “R.A. Kartini 100 Tahun (1879-1979)”, Jakarta: Gunung Muria, 1979
55. Sastroatmojo, Suryanto, “Tragedi Kartini”, Yogyakarta: Narasi, 2005.
56. Schenk M.G., Munar, Sundari, “Meneropong Dunia: Gerakan Wanita di Dunia”, Jakarta: Djambatan, 1950
57. Schever, Savitri Prastiti, “Keselarasan dan Kejanggalan: Pemikiran-pemikiran Priyayi Nasionalis Jawa Abad XX”, Jakarta: Pustaka Sinar Harapan, 1985.

58. Schoten, Elisabeth Locher, "Etika yang Berkeping-keping: Lima Telaah Kajian Aliran Etis dalam Politik Kolonial 1877-1942", Jakarta: Djambatan, 1996.
59. Sharma, Arvind., (Ade Halimah penerjemah), "Perempuan dalam Agama-agama di Dunia", Suka-Press UIN Sunan Kalijaga, 2006
60. Shirozi, "Politik Pendidikan", PT. Raja Grafindo Persada, 2005
61. Soebadio, Haryati, "Peranan Kartini untuk Masa Depan", dalam *Satu Abad Kartini*, Jakarta: Sinar Harapan, 1979
62. Soekanto, "Sekitar Jogjakarta, 1975-1825 (Perjanjian Gianti Perang Diponegoro)", Djakarta dan Amsterdam: Mahabarata, 1952
63. Soekarno, "Sarinah: Kewajiban Wanita dalam Perjuangan R.I.", Jakarta: PT.Idayu Press, 1984.
64. Soekarno, "Wanita Indonesia Selalu Ikut Bergerak dalam Barisan Revolusioner!: Amanat Presiden Soekarno pada Upacara Pembukaan Kongres ke-10 Kongres Wanita Indonesia, 24 Juli 1964", Departemen Penerangan RI
65. Soeratman, Ki, "Kartini dan Pendidikan", dalam *Satu Abad Kartini*, Sinar Harapan, 1979.
66. Soeroto, Sitisoemandari, "Kartini Sebuah Biografi", Djambatan, 2001.
67. Sri Suhanjati Sukri, Ridin Sofwan, "Perempuan dan Seksualitas dalam Tradisi Jawa", Gama Media, 2001
68. Dra. Sri Sutjiatiningsih, Kutoyo, Sutrisno, Sejarah Pendidikan Daerah Istimewa Yogyakarta", Departeman Pendidikan dan Kebudayaan Yogyakarta, 1982
69. Steurs, Cora Vreede-De, "Sejarah Perempuan Indonesia: Gerakan dan Pencapaian", Jakarta: Komunitas Bambu, 2008

70. Steurs, Cora Vreede-De, “Kartini: Fakta & Fiksi”, dalam *Satu Abad Kartini*, Jakarta: Sinar Harapan, 1979.
71. Sumarthana, T.H, “Tuhan dan Agama dalam Pergulatan Batin Kartini”, Jakarta: Pustaka Utama Grafiti, 1993.
72. Suryomiharjo, Abdurrahman, “Alam Gagasan Kartini”, dalam *Satu Abad Kartini*, Jakarta: Sinar Harapan, 1979.
73. Tempo, “Gelap Terang Hidup Kartini”, Jakarta: KPG, 2013
74. Toety, Adhietama, “Noblege Oblige” dalam *Satu Abad Kartini*, Sinar Harapan, 1979.
75. Wadud, Amina, “Qur’an Menurut Perempuan: Meluruskan Bias Gender”, PT. Serambi Ilmu Semesta, 2001.
76. Widiastono, Tonny D., “Pendidikan Manusia Indonesia”, Kompas, 2004.

津田梅子に関する文献

日本語文献

1. 阿井景子『「不如帰」の女達』、文藝春秋、1991 年。
2. 青山なを『明治女学校の研究』、慶応通信、1982 年。
3. 麻生誠「女子高等教育の座標」『教育社会学研究』、東洋館出版社、1987 年
4. 阿河尚之「本で読み解く日本人のアメリカ観（第 6 回）津田梅子－最初の帰国の女子」、『外交フォーラム』（10）8、都市出版、1997 年。
5. アリス・ベーコン（著）、矢口祐人、砂田恵理加（訳）『明治日本の女たち』、みずず書房、2003 年。
6. 淡野安太郎『明治初期の思想―その特性と限界』、勁草書房、1967 年。
7. 木本尚美「女子教育に影響を与えた明治期の留学生--家政教育を中心」『大学教育学会誌』、大学教育学会、2005 年。
8. 石井寛治『近代日本出発』、小学館、1989 年。
9. 石井寛治『開国と維新』、小学館、1992 年。
10. 石川松太郎（執筆者代表）『日本教育史』、玉川大学出版部、2001 年。
11. 石附実『西欧教育の発見』、福村出版、1985 年。
12. 伊藤節子「明治女子教育論史小考」『歴史教育』5（1）、日本書院、1957 年。
13. 稲田正次『明治国家形成過程の研究』、御茶の水書房、1996 年。
14. 犬塚孝明『海国日本の明治維新』、新人物往来社、2011 年。
15. 犬塚孝明『明治国家の政策と思想』、吉川弘文館、2005 年。
16. 犬塚孝明『森有礼』、吉川弘文館、1986 年。
17. 梅根悟（監修）、世界教育史研究会（編）『世界教育史大系 34 女子教育』、講談社、1977 年。
18. 大塚桂『明治国家と岩倉具視』、信山社、2004 年。
19. 大島啓子「親子で学ぶ日本の偉人（9）津田梅子--日本女子教育の開拓者」『祖

国と初年』317 号、日本協議会、2005 年。
20. 大庭みな子『津田梅子』、朝日新聞社、1990 年。
21. 小河織衣『女子教育事始』、丸善、1995 年。
22. 川本静子・亀田帛子・高桑美子『津田梅子の娘達ひと粒の種子から』、ドメス出版、2001 年。
23. 亀田帛子『津田梅子とアナ・C・ハーツホン―二組の父娘の物語―』、双文社出版、2007 年。
24. 亀田帛子『津田梅子　ひとりの名教師の軌跡』、双文社出版、2005 年。
25. 海後宗臣・仲新・寺島昌男『近現代日本の教育』、東京書籍会社、2008 年。
26. 久野明子『鹿鳴館の貴婦人大山捨松―日本初女子留学生―』、中央公論社　1988 年。
27. 黒岩比佐子『明治のお嬢さま』、角川学芸出版、2008 年。
28. 国立教育研究所『日本近代教育百年史 3』(学校教育 1)、文唱堂、1974 年。
29. 斉藤元一『人物日米関係史―万次郎からマッカーサーまで―』、成文堂、1999 年。
30. 坂本多加雄『明治国家の建設：1871－1890』、中央公論社、1999 年。
31. 桜井役・土屋忠雄『女子教育史』、日本図書センター、1981 年。
32. 佐藤誠実・仲新『日本教育史１』、平凡社、2004 年。
33. 佐藤誠実、仲新『日本教育史２』、平凡社、2004 年。
34. 清水孝子「津田梅子との Attic Letters に見る異文化受容」『日本文理大学紀要』29 (2)、日本文理大学、2001 年
35. 鈴木由紀子『女達の明治維新』、NHK 出版、2010 年
36. 砂田恵理加「白人女性とオリエンタリズム--Alice M. Bacon の『明治日本の女たち』」、『國士舘大學教養論集 』(68)、國士舘大學教養学会、2010 年。
37. 砂田恵理加、「『内側』からの風景--Alice M.Bacon と『明治日本の内側』」『アジア・日本研究センター紀要 』(4)、国士舘大学アジア・日本研究センター、2008 年。

38. 世界教育史研究会『女子教育史』、講談社、1977 年。
39. 関口敦仁（中村修也監修）「学校教育と伝統化」『文明開花の日本改造』淡交社、平成 19 年。
40. 菅谷よし子、「津田梅子の生き方－ライフコース分析」、『宮城学院女子大学研究論文集』、76 号、宮城学院女子大学紀要集委員会、1992 年。
41. 高梨健吉『幕末明治英語物語』、研究社出版、1980 年。
42. 高橋裕子『津田梅子の社会史』、玉川大学出版部　2002 年。
43. 高橋裕子「わが大学史一場面--日本の近代化と大学の歴史津田塾大学の源流と『女性文化』--津田梅子を支えたアメリカの女性達」『大学時報』51（284）　日本私立大学連盟、2002 年。
44. 高谷道男『ヘボン』、吉川弘文館、1986 年。
45. 田村貞雄『形成期の明治国家』、吉川弘文館、2001 年。
46. 津田梅子、津田塾大学（編）『津田梅子文書』、東京、津塾大学、1984 年。
47. 津田塾大学『津田塾大学 100 年史資料編』、津田塾大学、2003 年。
48. 津田塾大学『津田梅子と塾の 90 年』、津田塾大学、1990 年。
49. 寺坂有美「明治女子留学生の入信に関する一考察―津田梅子の場合」『大正大学大学院研究論集』25 号、大正大学、2001 年。
50. 寺沢龍『明治の女子留学生―最初に海を渡った五人の少女』、平凡社、2009 年。
51. 遠山茂樹『明治の思想とナショナリズム』、岩波書店刊、1992 年。
52. 東海大学外国語教育センター『日本の近代化と知識人』、東海大学出版会、 2000 年。
53. 永井秀雄『明治国家形成期の外政と内政』、北海道大学図書刊行会、1990 年
54. 名倉英三郎編『日本教育史』、八千代出版、2000 年。
55. 西川長夫、松宮秀治（編）『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』、新曜社、2002 年。

56. 日本女子大学女子教育研究所『明治の女子教育』、国土社、1967 年。
57. 浜野潔『歴史人口学で読む江戸日本』、吉川弘文館、2011 年。
58. 林竹二『森有礼―悲劇への序章』、筑摩書房、1986 年。
59. 古木久美「日本における女子英学の先駆者，津田梅子--その生涯と業績」『Immaculata』6 号、ノートルダム清心女子大学英語英米文学研究会、2002 年
60. 古木宜志子『津田梅子』、清水書院、1992 年。
61. ママトクロヴァ・ニルファル「女子英学塾における教育実践の成果に関する一考察 -津田梅子のねらいと初期卒業生の進路-」『早稲田教育評論』25 巻 1 号、早稲田大学大学院教育学研究科、3 月 2011 年。
62. ママトクロヴァ・ニルファル「津田梅子の教育思想の特質に関する一考察 ： 女性の自立と地位向上をめぐる視点から」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要：別冊』、早稲田大学大学院教育学研究科、3 月 2010 年。
63. 三好信浩『日本教育の開国』、福村出版会社、1986 年。
64. 宮城栄昌、大井ミノブ編著『日本女性史』、吉川弘文館、1971 年。
65. 文部省『学制百年史（記述編・資料編共)』、帝国地方行政学会、1981 年。
66. 文部省『学制百年史資料』、帝国地方行政学会、1981 年。
67. 吉川利一『津田梅子』、中公文庫　1990 年。
68. 堀松武一、入江宏、森川輝紀、『日本教育史』、国土社、1985 年。
69. 山住正巳、『教育の体系』、岩波書店利行、1991 年。
70. 山崎孝子、『津田梅子』、吉川弘文館、1962 年。
71. 山城 英美「女子高等教育と英語教育における津田梅子の貢献」JACET 全国大会要綱 37、一般社団法人大学英語教育学会、9 月 1998 年。
72. 芦沢由美、戸田徹子「異境への帰国--津田梅子書簡に見る日本」『山梨県立女子短大地域研究』2 号、山梨県立女子短大地域研究会、2002 年。
73. 横田澄司「女性の地位向上に情熱を傾けた津田梅子--椙山女学園「人間論」の

講義ノート」『社会と情報』7 (2)、椙山女学園大学生活科学部生活社会科学科、2003 年。

74. 望月洋子『ヘボンの生涯と日本語』新潮選書、1987 年。

75. R. P. ドーア、松居弘道訳、『江戸時代の教育』、岩波書店、1971 年。

76. 脇田春子・林玲子・永原和子『日本女性史』、吉川弘文館、1987 年。

77. 渡辺 崇子「新渡戸稲造の欧米留学と女子教育観の形成過程--津田梅子との比較を通して」『基督教學』 (45), 北海道基督教学会、 2010 年。

英語参考文献

1. Bacon, Alice Mabel. *Japanese Girls and Women*. The Riverside Press Cambridge, 1902.

2. Department of Education Japan. *History of Japanese Education Prepared for the Japan-British Exhibition, 1910*. Department of Education, 1910.

3. Furuki, Yoshiko. *The White Plum, A Biography of Tsuda Ume Pioneer in the Higher Education of Japanese Women*. Newyork: Weatherhill, 1991

4. Johnson, Linda L. "Evangelists for Women's Education: The 'Civilizing Mission' of Tsuda Umeko and Alice M. Bacon." *International Christian Univesity Publications 3-A Asian Cultural Studies 38*, (2012): 1-16.

5. Kinuko, Kameda. "Umeko Tsuda.Tsuda College and the Bryn Mawr Connection." 国際関係学研究 (24) 津田塾大学(1997)

6. Rose, Barbara.*Tsuda Umeko and Women's Education in Japan*. Yale University Press, 1992.

7. Umeko, Tsuda, *The Writings of Umeko Tsuda*, edited by Tsuda College University. Tokyo: Tsuda College University,1984.

8. Umeko, Tsuda, *The Attic Letters, Ume Tsuda's Correspondence to Her American Mother*. Edited by Yoshiko Furuki, et.al. New York Weatherhill, 1991.

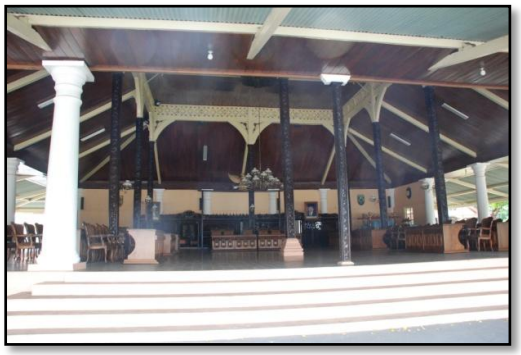
付　録

ジュパラ（現地調査）

カルティニのジュパラの実家の木彫の出入り口

左）は男性用の出入り口であり、（右）は女性用の出入り口である。ジャワの伝統的な習慣では女性は自由にお客様の前に現れないため、外の様子などを見るために女性用の出入り口の彫刻に穴があけられた。この出入り口の彫刻はレプリカで、当時の本物はカルティニが結婚した時に父のお祝いとしてレンバンへ持っていた。

ペンドポ（Pendopo）ジャワの伝統的な客室



現在、カルティニの実家はジュパラの知事邸として使われている。このペンドポは現在町の女性たちのジャワ舞踊の練習やとして使われている

カルティニの家の中の様子

ジュパラの知事邸で、現在では控え室と客室として使われている。

カルティニの部屋の中の様子

現在は、この部屋のみが知事邸として使われていない。家具は本物ではなく、本物の家具はジュパラのカルティニの博物館に置いてある

ジュパラ知事邸の裏

(上)現地調査によると、昔カルティニは知事邸の裏にある村の娘たちをここで教養した。(下)村の娘たちはこの裏から出入りした。

カルティニが植えたクナンガの木

この木は知事邸の裏側に育てられ、現在に至るまでまだ残られた。

カルティニ学校

現在、この建物は公務員の夫人協会の事務所として使用されている。

知事邸にある井戸

知事邸に昔からあった井戸である。現在でも使用されている。

ジュパラにおけるカルティニ博物館とその陳列品

カルティニ博物館の外観

カルティニ博物館建設の碑文

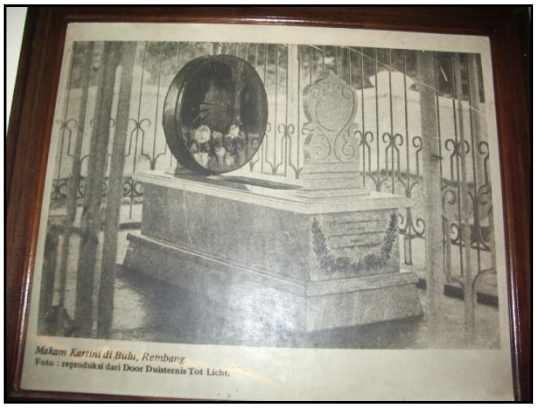
博物館前のカルティニ胴像

博物館の模写の写真展示

Sepotong dinding ukiran kayu di kabupaten Japara. Yang berdiri berbaju putih ialah Bupati Sosroningrat. Dinding ini ada dua belah dengan pintu di tengah. Kedua belah itu dibawa Kartini waktu pindah ke Rembang, sekarang masih di kabupaten Rembang. Pintunya tertutup, tersimpan di lain tempat.

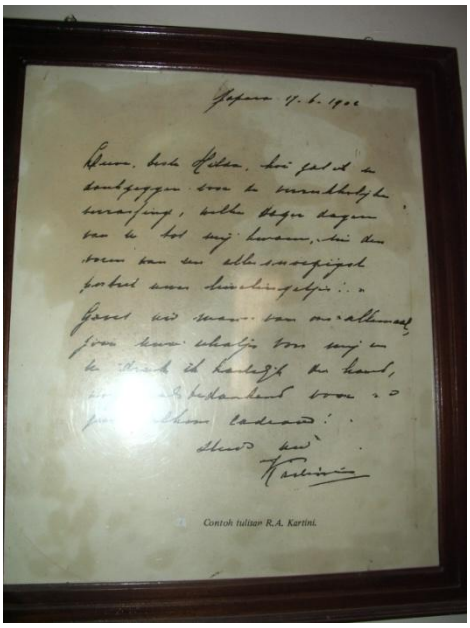
Di Pendopo Kabupaten Japara, Bupati R.M.A.A. Sosroningrat beserta keluarga menjamu tamu-tamu bangsa asing.

Lukisan R.A. Kartini dengan cat minyak.



Makam Kartini di Bulu, Rembang
Foto : reproduksi dari Door Duisternis Tot Licht.

カルティニの手書きの模写



クレーン・スヴェニンゲンとカルティニの模写

カルティニと妹が描いた絵の模写

博物館の中の様子とその陳列品

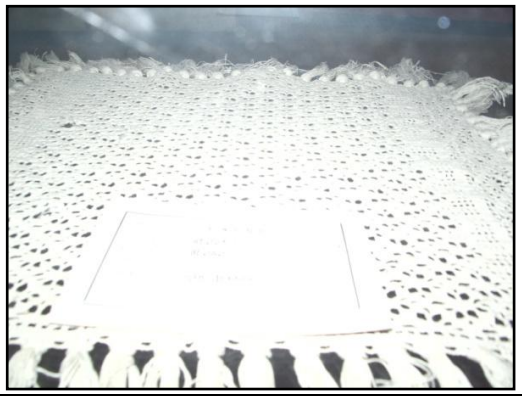
Desa Mayong yang telah membuat sejarah.

R.A. Roekmini Santoso, masih muda menjadi janda. Dengan tekun belajar sendiri dapat lulus ujian Lager Akte Nederlands di Surabaya, dan boleh mengajar bahasa Belanda di semua kelas dari H.I.S. di Kudus. Ia hanya meninggalkan satu putera.

R.A. Soelastri beserta suami, R.M. Tjokrohadisoeroo, yang menurunkan Prof. Soekardono S.H., Guruhoeur U.I., Jakarta.

DILARANG MAIN
RUANG KERJA R. KARTINI

博物館の中の様子とその陳列品



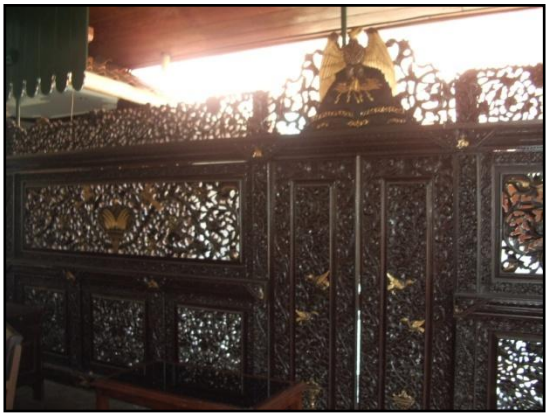
ジェパラにおけるカルティニの記念日とその行事

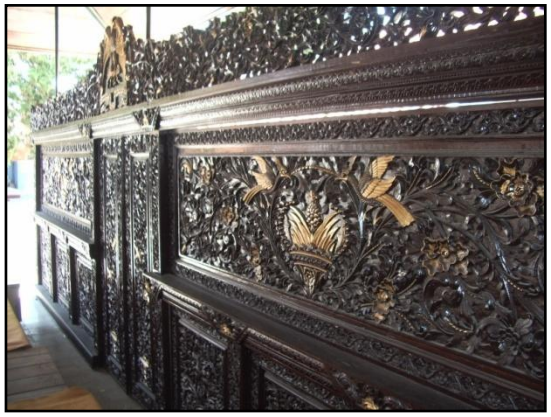
レンバン（現地調査）

レンバンの旧知事邸

結婚後、カルティニがこの知事邸に引越し、住んでいった。現在、レンバン県のゲストハウスとして使用されている。前の建物は公聴会や来客を待遇するためのプンドポ（右写真）が現在、会議やセミナーなどとして使用されている

ジェパラから持ってきた彫刻の出入り口





この出入り口は結婚後、カルティニの父からのプレゼントとしてジェパラから持ってきたものである。この彫刻の出入り口は本物である。現在もまだ使用されている

昔カルティニが住んでいた知事邸の一部の部屋

カルティニ学校

カルティニが学校として使用されていたたてものである。現在、レンバンのボーイスカウトの事務所として使用されている

レンバンにおけるカルティニ博物館とその陳列品

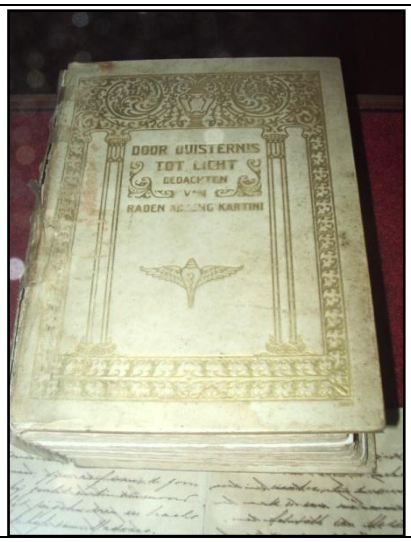
カルティニ博物館の玄関

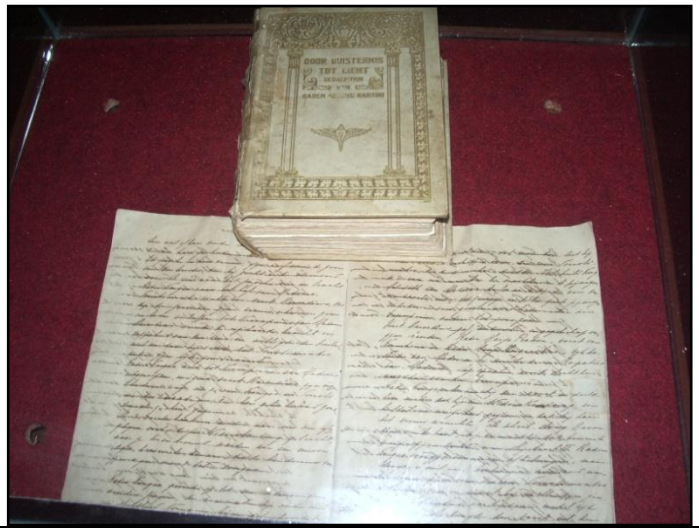
レンバンにあるカルティニの博物館の建物はカルティニが実際に住んでいた建物である。この博物館は旧知事邸のすぐ裏に位置している。

博物館の入り口と入場券の販売

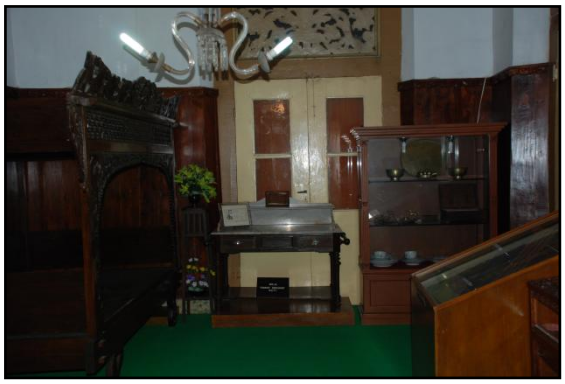
ファン・デフェンテルが集めたカルティニの手紙「暗黒を越えて」

とカルティニの手紙の実物

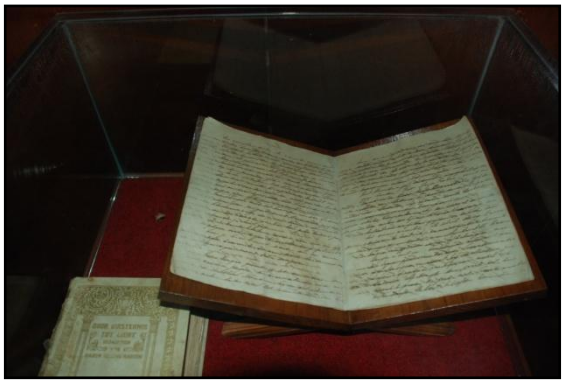


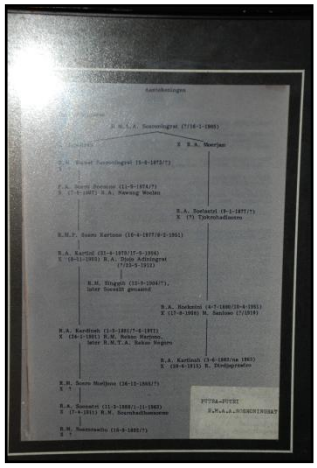


カルティニの寝室とバスルーム



博物館の陳列品（アルバム、写真、等）





博物館の陳列品（カルティニの遺品）

MEJA RIAS
R.A KARTINI

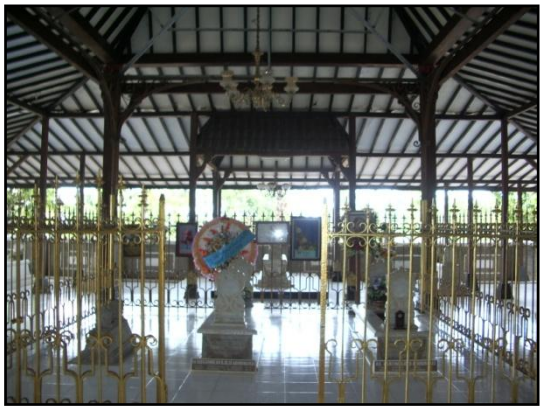
BAJU R.A. KARTINI

GAWANGAN BATIK
RA KARTINI

MEJA
TEMPAT MERAWAT
BAYI

HASIL KARYA LUKISAN
R.A. KARTINI

カルティニの墓



カルティニは夫ジョヨアディニングラット知事の側に埋葬された。カルティニと彼女の家族の墓所はレンバン市内からおよそ 17 キロ離れているところにある。この墓所で、毎年、4 月 21 日のカルティニの日を期に内閣大臣や政府の官僚を始め、多くの国民が訪れて、墓参りをした。

カルティニの書簡集における内容とその分類

分類項目 / 年月日	西欧近代自由主義[405]	植民地政策の批判[406]	真の信仰について[407]	イスラムの批判[408]	ジャワ社会・文化の評価[409]	ジャワ社会・ジャワ伝統文化の批判[410]	祖国のあるべき方向性[411]	男女平等[412]	教育のあり方[413]
1899 年 5 月 25 日	○	○		○		○	○	○	○
1899 年 8 月 18 日	○	○				○			
1899 年 11 月 6 日	○	○	○	○		○	○		○
1899 年 11 月									
1900 年 1 月 12 日	○	○			○	○	○		○
1900 年元日	○					○	○	○	○
1900 年 8 月 13 日									
1900 年 8 月 1 日				○		○		○	
1900 年 8 月 1 日						○		○	
1900 年 8 月 3 日※								○	
1900 年 8 月 23 日	○	○		○		○		○	○
1900 年 8 月	○						○		○
1900 年 10 月 7 日	○							○	
1900 年 10 月	○		○						
1900 年 11 月 1 日							○		
1901 年 1 月 9 日	○						○	○	○
1901 年 1 月 21 日	○							○	○
1901 年 1 月 31 日									
1901 年 3 月 19 日			○						
1901 年 5 月 20 日	○							○	○
1901 年 7 月 10 日	○					○	○		○

[405]西欧による進歩主義、自由主義、科学・技術、自然科学思考、文化的啓蒙などの価値観が含んでいる
[406]オリエンタリズムによる人種差別、植民地政策、西欧人による行為に対する批判
[407]真の信仰についてカルティニが思っていた宗教・信仰の有様
[408]コーランの暗唱、一夫多妻、男女関係などイスラムの実践に対してカルティニの批判的な考え
[409]カルティニが思っていたジャワ人・ジャワ文化の素晴らしさ
[410]身分制、ジャワ結婚制度、ジャワ人の愚かな性格などに対する批判的な考え
[411]カルティニが表明した自己帰属、ジャワ民族の意識、東インドの理想的な国家の在り方
[412]社会における女性の位置付け、男女平等、女性解放など男女関係についての内容
[413]教育に関する夢、理想的な教育、教育の実行とその状況に関する内容

1901 年 8 月 1 日						○	○	○	○
1901 年 8 月 8－9 日									
1901 年 8 月 10 日									
1901 年 8 月 19 日						○	○		
1901 年 8 月	○			○		○	○	○	○
1901 年 9 月 4 日									
1901 年 9 月 30 日						○	○	○	
1901 年 10 月 11 日	○				○	○	○		○
1901 年 11 月 29 日						○			○
1901 年 12 月 31 日	○						○	○	
1902 年 1 月 3 日	○						○	○	○
1902 年 2 月 15 日									
1902 年 2 月 28 日					○				
1902 年 3 月 14 日						○			
1902 年 3 月 21 日									
1902 年 3 月 27 日※	○					○	○	○	○
1902 年 4 月 8 日	○								○
1902 年 5 月 17 日	○			○					○
1902 年 5 月 27 日※							○		○
1902 年 6 月 10 日	○						○		○
1902 年 6 月 21 日※	○						○	○	○
1902 年 7 月 12 日	○						○		
1902 年 7 月 15 日							○	○	
1902 年 7 月 18 日			○						
1902 年 7 月 21 日	○		○				○	○	○
1902 年 7 月 28 日									
1902 年 8 月 8 日									
1902 年 8 月 10 日			○			○			
1902 年 8 月 15 日					○		○		
1902 年 8 月 15 日			○		○				
1902 年 8 月 17 日			○						
1902 年 8 月 20 日	○	○			○	○			
1902 年 9 月 2 日								○	
1902 年 9 月 24 日									
1902 年 10 月 4 日	○						○	○	○
1902 年 10 月 27 日	○	○	○	○		○	○		○
1902 年 11 月 21 日									
1902 年 11 月 21 日					○		○		
1902 年 12 月 12 日			○						
1903 年 1 月 3 日									
1903 年 1 月 27 日							○		○
1903 年 1 月 31 日			○				○		○
1903 年 2 月 1 日					○				

1903 年 3 月 9 日					○		○		
1903 年 3 月 21 日※						○		○	○
1903 年 4 月 25 日	○							○	○
1903 年 6 月 7 日					○				
1903 年 6 月 27 日									
1903 年 7 月 4 日									○
1903 年 7 月 5 日	○		○						○
1903 年 7 月 7 月									
1903 年 7 月 24 日							○		○
1903 年 8 月 1 日							○	○	
1903 年 8 月 8 日									
1903 年 8 月 25 日	○				○		○		○
1903 年 10 月 19 日									
1903 年 11 月 3 日									
1903 年 11 月 7 日									
1903 年 12 月 11 日	○					○			○
1903 年 12 月 16 日					○		○		
1904 年 3 月 6 日									
1904 年 4 月 10 日	○						○	○	○
1904 年 6 月 8 日					○				
1904 年 8 月 10 日			○						
1904 年 8 月 24 日			○						
計	32 ヵ所	7 ヵ所	14 ヵ所	7 ヵ所	13 ヵ所	22 ヵ所	34 ヵ所	26 ヵ所	35 ヵ所

出所：Door Duisternis Tot Licht のインドネシア語版からの日本語訳「『光は暗黒を超えて』、早坂四郎（訳）、河出新書、昭和 30 年」と「『暗黒を越えて（若き蘭印女性の書簡集）』、牛江（訳）、日新書院刊、昭和 15 年」を基に作成

※「シティスマンダリ・スロト、『民族意識の母カルティニ伝』、舟知恵、松田まゆみ（訳）」からの手紙による。

ジャワにおける非オランダ語の新聞・雑誌出版の年表（1900 年～1913 年）

（※空欄にはデータ不明）

No.	発刊	廃刊	新聞・雑誌名	発刊地
1	1899 年 5 月	1914 年	Taman Pengadjar	スマラン
2	1899 年 6 月	1903 年 9 月	Hoekoem Hindia（後に Taman Sari に改名）	バタヴィア
3	1899 年	1924 年	Sinar Djawa	スマラン
4	1900 年	1902 年	Pewarta Prijaji	スマラン
5	1900 年 4 月 15 日	1901 年 3 月	Soerat Chabar Soldadoe	バタヴィア
6	1900 年 7 月 4 日	1903 年 8 月	Primbon Soerabaja	スラバヤ
7	1900 年	1906 年	Bintang Semarang	スマラン
8	1900 年 10 月		Aneka Warta	バタヴィア
9	1901 年	1925 年	Bentara Hindia	バタヴィア
10	1901 年 4 月 1 日	1907 年	Li Po	スカブミ
11	1901 年 4 月 15 日	1903 年 12 月 1 日	Bandera Wolanda	バタヴィア
12	1901 年 10 月 1 日	1903 年	Warna Sari	ボイテンゾルク
13	1902 年 1 月		Sien Po	ソロ
14	1902 年 8 月	1904 年	Pengadilan	バタヴィア
15	1902 年	1915 年	Taman Pewarta	ソロ
16	1902 年	1933 年	Warna Warta	スマラン
17	1903 年	1906 年 12 月	Kabar Perniagaan	バタヴィア
18	1903 年 1 月 15 日	1904 年 12 月 15 日	Taman Pengatahoean	バタヴィア
19	1903 年 5 月 6 日	1912 年	Ho Po	ボイテンゾルク
20	1903 年 8 月 17 日	1903 年 10 月	Soenda Berita	バタヴィア

21	1903 年	1910 年	Soerat Keliling	バタヴィア
22	1903 年	1910 年	Soerat Brita Kepoetoesan Hoekoem	バタヴィア
23	1903 年 10 月 1 日	1914 年	Taman Sari	バタヴィア
24	1903 年 11 月 12 日	1910 年 12 月	Darmo Kondo	ソロ
25	1903 年		Browiyoto	ソロ
26	1903 年 4 月 1 日		Pewarta Soerabaja	スラバヤ
27	1904 年 2 月 23 日	1909 年	Ik Po	スラバヤ
28	1904 年 6 月 6 日	1906 年 6 月	Sinar Betawi	バタヴィア
29	1904 年	1910 年	Ilmoe Tani	バタヴィア
30	1905 年 1 月	1910 年	Bintang Batavia	バタヴィア
31	1905 年 9 月		Pewarta Theosofie	バタヴィア
32	1905 年	1920 年	Tiong Hoa Wi Sien Po	ボイテンゾルク
33	1906 年	1910 年	Pewarta Hindia	バンドン
34	1906 年	1919 年 12 月 31 日	Djawi Hisworo	ソロ
35	1906 年 7 月 1 日		Seng Kie Po	バタヴィア
36	1907 年	1917 年	Pantjaran Warta	バタヴィア
37	1907 年 2 月 15 日	1919 年	Soeloeh Peladjar	ヴェルテフレーデン
38	1907 年	1909 年	Bintang Moekti	バンドン
39	1907 年	1912 年	Medan Prijaji	バンドン
40	1907 年 1 月 2 日	1930 年 6 月	Perniagaan	バタヴィア
41	1907 年 4 月	1910 年	Soeloeh Keadilan	バンドン
42	1908 年	1918 年	Tjahaja Timoer	マラン
43	1908 年 5 月 22 日		Bintang Pagi	スマラン
44	1908 年 1 月		Pedomoan Prijaji dan Anak Negri	バタヴィア

45	1908 年 7 月 1 日	1913 年	Poetri Hindia	バタヴィア
46	1908 年 11 月 15 日	1914 年 2 月 2 日	Sinar Tiong Hoa	ブスキ
47	1909 年		Djawa Kong Po	スマラン
48	1909 年 5 月		Sri Pasoendan	バンドン
49	1909 年		Hoa Toh	バタヴィア
50	1909 年 7 月 1 日		Boemipoetra	ヴェルテフレーデン
51	1909 年 5 月 1 日	1911 年	Pewarta S.S.	ボイテンゾルク
52	1909 年 9 月		Soeling Hindia	ランカスビトゥン
53	1909 年 12 月	1938 年	Djawa Tengah	スマラン
54	1910 年 1 月		Pamor	スマラン
55	1910 年 3 月		Chabar Evolutie	ボイテンゾルク
56	1910 年 5 月 15 日		Kemadjoean	ボイテンゾルク
57	1910 年 7 月 1 日	1913 年 3 月	Boedi Oetomo	ソロ
58	1910 年 10 月 1 日	1960 年	Sin Po	バタヴィア
59	1911 年		Bintang Tjirebon	チレボン
60	1911 年 7 月	1912 年	Pewarta Pegadaian	バンドン
61	1911 年 7 月		Tjahaja Hindia	バタヴィア
62	1911 年 7 月 15 日		Minggoean Persekoetoean	バタヴィア
63	1911 年 1 月	1933 年	Darmo Kondo	ソロ
64	1911 年 9 月 2 日		Asja	スラバヤ
65	1911 年 12 月 5 日	1912 年 3 月	Sinar Pasoendan	バンドン
66	1911 年 12 月		Soeara Keadilan	バンドン
67	1911 年		Pedoman	スマラン
68	1911 年		Militair Djawa	ジョグジャカルタ

69	1912 年	1915 年	Sarotomo	ソロ
70	1912 年 4 月 2 日	1942 年	Kaoem Moeda	バンドン
71	1912 年 7 月		Poesaka Doenia	ヴェルテフレーデン
72	1912 年	1914 年 9 月 19 日	Hindia	バタヴィア
73	1912 年 8 月 3 日		Hoa Pit	バタヴィア
74	1912 年 9 月 30 日		Tjahaja Minahassa	ジョグジャカルタ
75	1912 年 10 月	1914 年 2 月 2 日	Sinar Tiong Hoa	チレボン
76	1912 年	1917 年 9 月 30 日	Tjahaja Pasoendan	バンドン
77	1912 年 12 月 5 日	1923 年	Oetoesan Hindia	スラバヤ
78	1913 年 1 月 15 日		Sia Hwee Po	スラバヤ
79	1913 年 3 月 6 日	1914 年	Hindia Sarikat	バンドン
80	1913 年	1922 年	Panoengtoen Kemadjoean	バンドン
81	1913 年 4 月 1 日		Anak Negri	ボイテンゾルク
82	1913 年 4 月		Pewarta Boedi Oetomo	クディリ
83	1913 年 5 月	1914 年 7 月 27 日	Penghibur Djocdja	バタヴィア
84	1913 年 10 月 1 日	1924 年	Sinar Djawa	スマラン
85	1913 年 10 月		Bok Tok	スラバヤ

参考：

Adam, Ahmat B., ”The Vernacular Press and the Emergence of Modern Indonesian Conciousness (1855-1913)″, Southeast Asia Program, Cornell University, New York, 1995

カルティニの手紙の分析表

年	月　日	宛先	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1899年	5月25日	ステラ	0	0	0	0	0			0	0	0	0
	8月18日	ステラ	0	0	0	0	0			0	0	0	0
	11月6日	ステラ	0	0	0	0	0			0	0	0	0
	11月	オーフィンク夫人	0	0	0	0	0			0		0	0
1900年	1月12日	ステラ		0	0	0	0			0		0	0
	1月13日	ステラ	0								0		
	初頭	オーフィンク夫人	0	0	0	0	0			0		0	0
	8月	オーフィンク夫人	0	0						0		0	0
	8月13日	アベンダノン夫人	0	0					0	0		0	0
1	8月	オーフィンク夫人	0	0	0	0	0			0		0	0
2	8月	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			0
	8月	アベンダノン夫人			0	0	0						
	8月23日	ステラ	0	0	0	0	0			0	0	0	0
	9月5日	アベンダノン夫人	0										
	9月23日	アベンダノン夫人 (Visiting Cards)						0	0				
	9月24日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	10月7日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0		0	0
	10月	オーフィンク夫人	0	0	0	0	0			0		0	0
	11月1日	アベンダノン夫人	0	0				0	0	0		0	0
	11月2日	オーフィンク夫人	0	0						0			
	12月21日	アベンダノン夫人	0					0	0				
1901年	1月1日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	1月9日	ステラ	0	0	0	0	0			0	0	0	0
	1月21日	アベンダノン夫人		0	0	0	0			0			0
	1月31日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			0
	2月5日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	2月21日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	3月8日	アベンダノン夫人	0					0	0				

	3 月 12 日	アベンダノン夫人（ポストカード）	0					0	0				
	3 月 19 日	アドリアニ博士	0	0	0	0	0			0			
	3 月 22 日	アベンダノン夫人（ポストカード）	0					0	0				
	3 月 23 日	アベンダノン夫人（ポストカード）	0					0	0				
	4 月 16 日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	5 月 20 日	ステラ	0	0	0	0	0			0	0	0	0
	5 月 23 日	アベンダノン夫人	0					0					
	5 月 25 日	アベンダノン夫人											
	6 月 6 日	ヒルダ・デ・ボーイ	0	0	0	0	0		0	0			0
	6 月 6 日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	6 月 10 日	アントン教授	0	0	0	0	0			0		0	
	6 月 21 日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	7 月	アベンダノン夫人	0					0	0				
	7 月 12 日	デ・ボーイ氏	0							0			
	8 月 1 日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			0
	8 月 8〜9 日	アベンダノン夫人	0	0				0	0	0			0
	8 月 10 日	アドリアニ博士	0	0						0			0
	8 月 19 日	ヒルダ・デ・ボーイ	0	0	0	0	0			0			0
	8 月	ヴァン・コール夫人	0	0	0	0	0			0			0
	8 月 21 日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	8 月 27 日	アベンダノン夫人						0	0				
	9 月 4 日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0		0	0
	9 月 21 日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	9 月 25 日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	9 月 30 日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			0
	10 月 7 日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	10 月 11 日	ステラ	0	0	0	0	0			0	0		0
	10 月 18 日	アベンダノン夫人	0	0				0	0	0			

	10月24日	ステラ（11日の続き）	0								0		
	11月20日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			
	11月24日	アベンダノン氏	0					0	0				
	11月29日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0				0
	12月21日	アベンダノン夫人						0	0				
	12月31日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0			0			0
1902年	1月3日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			0
	1月10日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	2月15日	ステラ	0	0						0	0		0
	2月15日	アベンダノン夫人			0	0	0						
	2月18日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			
	2月28日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			0
	3月5日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			
	3月14日	ステラ	0	0	0	0	0			0	0		0
	3月21日	ヒルダ・デ・ボイ	0	0	0(29日)	0(29日)	0(29日)			0			0
	3月27日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			0
	4月8月	アベンダノン夫人	0	0				0	0	0			0
	4月22日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	4月27日	ヴァン・コール夫人	0	0						0			
	4月30日	ファン・コール氏	0							0			
	5月17日	ステラ	0	0	0	0	0			0	0		0
	5月26日	ヒルダ・デ・ボイ	0	0	0	0	0			0			
	6月10日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			0
	6月17日	ヒルダ・デ・ボイ	0	0	0	0	0			0			
	6月21日	ファン・コール氏	0	0						0			0
	7月12日	オーフィンク夫人	0	0	0(21日)	0	0(21日)			0			0
	7月15日	アベンダノン夫人	0	0			0	0	0	0			0
	7月18日	オーフィンク夫人	0	0						0			0
	7月21日	ファン・コール夫人	0	0						0			
	7月25日	アベンダノン夫人（ポストカード）	0					0	0				

	7 月 27 日	ファン・コール夫人	0										
	7 月 28 日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			0
	8 月 8 日	エディ・アベンダノン		0						0			0
	8 月 10 日	ファン・コール夫人	0	0						0			0
	8 月 10 日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	8 月 15 日	ステラ	0	0	0	0	0			0	0		0
	8 月 15 日	エディ・アベンダノン		0						0			0
	8 月 15 日	アベンダノン氏			0	0	0						
	8 月 17 日	エディ・アベンダノン	0	0	0	0	0			0			0
	8 月 20 日	ファン・コール夫人	0	0	0	0	0			0			0
	8 月 24 日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	9 月 2 日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			0
	9 月 11 日	アベンダノン夫人（ポストカード）	0					0	0				
	9 月 12 日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	9 月 15 日	アベンダノン夫人	0	0				0	0	0			
	9 月 22 日	アベンダノン夫人	0	0				0	0	0			
	9 月 24 日	アドリアニ博士	0	0						0			0
	10 月 4 日	アントン教授	0	0						0			0
	10 月 8 日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	10月 11 日	アベンダノン夫人（ポストカード）	0					0	0				
	10月 11 日	ステラ	0	0	0	0	0			0	0		0
	10月 12 日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			
	10月 27 日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			0
	11 月 7 日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	11月 13 日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	11月 20 日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	11月 21 日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			0

	11月21日	エディ・アベンダノン	0	0	0	0	0			0			0
	11月	ファン・コール夫人	0										
	12月4日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	12月12日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			0
	12月23日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	12月30日	アベンダノン夫人	0					0	0				
1903年	1月3日	ファン・コール夫妻	0	0						0			0
	1月14日	アベンダノン氏	0	0	0	0	0	0	0	0			
	1月15日	アベンダノン氏	0					0	0	0			
	1月17日	ファン・コール夫人	0	0	0	0	0			0			
	1月25日	アベンダノン氏	0	0				0	0	0			
	1月27日	エディ・アベンダノン	0	0	0	0	0			0			0
	1月31日	エディ・アベンダノン	0	0						0			0
	2月1日	アベンダノン氏	0	0	0	0	0	0	0	0			0
	2月4日	アベンダノン氏	0					0	0				
	2月17日	アベンダノン氏	0					0	0				
	3月4日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			
	3月9日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			0
	3月21日	ファン・コール夫人	0							0			
	3月30日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	4月27日	シホーフ総督	0										
	4月19日	アベンダノン氏	0	0				0	0	0			
	4月25日	ステラ	0	0	0	0	0			0	0		0
	5月14日	アベンダノン氏	0	0				0	0	0			
	5月18日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	5月29日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	6月7日	アベンダノン夫人	0	0				0	0	0			0
	6月22日	アベンダノン夫人（ルクミニから）	0					0	0				

	6月27日	アドリアニ博士	0	0						0			0
	7月4日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			0
	7月5日	アドリアニ博士	0	0						0			0
	7月7日	アベンダノン夫人		0				0	0	0			0
	7月9日	アベンダノン夫妻	0					0	0				
	7月10日	アベンダノン夫妻	0					0	0				
	7月14日	アベンダノン夫妻	0					0	0				
	7月15日	アベンダノン夫人（ルクミニから）	0					0	0				
	7月24日	アベンダノン夫人	0	0				0	0	0			0
	7月	オーフィンク夫人	0										
	8月1日	ファン・コール夫人	0	0	0	0	0			0			0
	8月1日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			0
	8月4日	アベンダノン夫人（ポストカード）	0					0	0				
	8月8日	アベンダノン夫人（ポストカード）	0	0	0	0	0	0	0	0			0
	8月14日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	8月24日	政府	0							0			
	8月25日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			0
	8月	アベンダノン夫人							0				
	9月14日	アベンダノン氏	0					0	0				
	10月	アベンダノン夫人	0					0	0				
	10月19日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			0
	10月22日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	11月3日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			0
	11月7日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			0
	11月17日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	12月11日	アベンダノン夫妻	0	0	0	0	0	0	0	0			0
	12月16日	アベンダノン夫妻	0		0		0	0	0	0			0
1904年	3月6日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			0
	4月10日	アントン教授夫妻	0	0	0		0			0			0

	4月17日	アベンダノン夫人	0					0	0				
	6月8日	アベンダノン夫人	0	0				0	0	0			0
	6月28日	アベンダノン夫人			0	0	0						
	6月30日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			
	7月17日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			
	8月10日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			0
	8月24日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			0
	9月7日	アベンダノン夫人	0	0	0	0	0	0	0	0			0
	9月25日	アベンダノン氏（カルティニ主人より）	0					0	0				

1 Kartini (Edited and translated by Joost Cote, "Kartini: The Complete Writings 1898-1904", Monash University Publishing, 2014.

2 Kartini, "Door Duisterrnis Tot Licht: Gedachten van Raden Adjeng Kartini", 'S-Gravenhage, 1912.

3 Kartini (Translated by Agnes Louise Symmers), "Letters of Javanese Princess: Raden Adjeng Kartini", The Norton Library, 1964. (Translated from Dutch)

4 Kartini (Translated by Agnes Louise Symmers), "Letters of Javanese Princess: Raden Ajeng Kartini", Oxford University Press, 1976. (Translated from the Original Dutch)

5 Kartini (Translated by Agnes Louise Symmers), "Letters of Javanese Princess: Raden Ajeng Kartini", Heinemann Educational Books (Asia) Ltd, 1976. (Translated from the Original Dutch)

6 Kartini (Translated by Joost cote, "Letters from Kartini: An Indonesian Feminist, 1900-1904",Monash Asia Institute Monash University, 1992.

7 Kartini (Terjemahan Sulatin Sutrisno), "Kartini: Surat-suratkepadaNy. R.M.Abendanon-MandridanSuaminya", Penerbit Djambatan, 2000. (Translated from Brievenaan mevrouw R.M. Abendanon-Mandri en haarechtgenoot met andere documenten, F.G.P. Jaquet 編集)

8 Kartini (Terjemahan Sulatin Sutrisno), "Surat-surat Kartini: Renungan Tentang dan untuk Bangsanya", Djambatan, 1981. (Translated from Door Duisternis Tot Licht 4th)

9 Kartini (Terjemahan Vissia Ita Yuliato), "Aku Mau…Feminisme dan Nasionalisme: Surat-surat Kartini kepada Stella Zeehandelaar 1899-1903", Kompas, 2004. (Translated from On Feminism and Nationalism: Kartini's Letters to Stella Zehandelaar 1899-1903, by Dr. Joost Cote)

10 カルティニ（牛江清名）『暗黒を越えて（若き蘭印女性の書簡集）』、日新書院刊、昭和15年、(84通)

11 カルティニ（早坂四郎）『光は暗黒を越えて―カルティニ―』、河出新書、昭和30年、(82通)

ジャワ歴史年表

年代	歴史事項	備考
８世紀頃	サイレンドラ（Sailendra）王朝の成立	中部ジャワ南部のクドゥ盆地を基盤にあった。大乗仏教信仰で栄えた王国は短命（8 世紀中頃～832）であったもののその後に続くジャワ王朝の元祖に位置づけられる。王国の最大の偉業はボロブドゥール寺院の建立である
732 年～932 年	（古代）マタラム王国の時代	ジャワ島のサイレンドラ王国とほぼ同時期に同じジョグジャカルタ周辺にマタラム（Mataram）王国も存在した。碑文によれば 732 年にサンジャヤ（Sanjaya）王が即位しマタラム王国の開祖となった。マタラム王国はヒンドゥー教を国教としていた。プランバナン寺院は最も優れたマタラム王国の文化遺跡である。マタラム王国は以降のジャワのヒンドゥー諸王朝の始祖であり、ヒンドゥー文化の影響はその後イスラム教に改宗したイスラム王朝にも引き継がれてきた。ヒンドゥー的色彩の強い宮廷の存在はジャワ王朝の伝統となり、宮廷文化として現在にいたるも宮廷舞踊などにかいま見ることができる。
928 年	クディリ王朝の成立	シンドック（Sindok）王の時、マタラム王国は突如として中部ジャワから東部ジャワに移転したため、以降はクディリ王朝と称される。クディリ王朝は４代目ダルマワンサ（Darmawangsa）王(在位 991-1016)の頃、東部ジャワを基盤に国際交易に進出し、マラッカ海域に覇権を打ち立てていたスリウィジャヤ王国と対抗するようになり、ジャワ王国の覇権はスマトラ島やバリ島にも拡大した。ダルマワンサ王によって法典が編纂され、サンスクリット語のインド文化はジャワ語に翻訳され、ジャワ文化が成立した。
1222 年	シンガサリ王国の誕生	始祖ケン･アンロックはクディリ王国を滅ぼし、シンガサリ王国の創始者となった。シンガサリ王国の最後となるクルタナガラ（Kertanagara）王(1268-92)はジャワ島外への膨張政策を採り、スマトラ島のムラユ王国(→258)征服のため遠征軍を派遣し、ジャワの王威は外島に拡大した。一方でクルタナガラ王はヒンドゥー教と仏教を混合し密教にした。その傾倒ぶりは今日もシンガサリ寺院遺跡に仏教・ヒンドゥー教芸術の栄華の痕跡を留めている。

1293 年～1527 年	マジャパヒト王国	歴代のジャワ王朝の中でも特筆に値するのが、マジャパヒト（Majapahit）王国(1293-1527)である。ラデン･ウィジャヤが創設し、クルタラージャサ王と名乗った。３代目の女王の後、４代目に息子ハヤム･ウルク（HayamWuruk）が即位し、ラージャサナガラ（Rajasanegara 在位 1350-89）王と称した。マジャパヒト王国はラージャサナガラ王の頃がその黄金時代の頂点であった。強力な海軍のもとに海陸大帝国ともいうべきその版図はマレー半島からフィリッピンの南部に及んだ。ここにジャワ王朝はジャワ島という枠を抜け出した東南アジア島嶼部に君臨する帝国時代を築いた。ジャワの法典が整備されジャワ文学が形成されたのもマジャパヒト王国の時代である。ワヤン、ガムランなどジャワ独特の芸術が振興しジャワ文化が確立された。数多くのヒンドゥー教寺院も建設され、パナタラン寺院がその代表である。その後、ジャワ島はイスラム教に改宗したためヒンドゥー寺院(チャンディ)は荒れ果てているが、トロウラン遺跡になおその栄華を偲ぶことはできる。後世のオランダ植民地という異民族支配の下で澎湃(ほうはい)としておこるインドネシア民族意識において、ジャワ古代王朝のマジャパヒト王国の存在の事実と栄光の記憶が、インドネシアの統一と領土の正当性のよりどころとなった。スカルノ大統領の格調高い演説にもマジャパヒトの名はしばしば引用された。マジャパヒト王国の衰退は内紛もあるが、東南アジアを取り巻く状況の変化である。交易の中心はイスラム教を奉じるマラッカ王国に移り、イスラム教の影響がジャワ島に及んだ。
1365 年	ナーガラクルターガマが完成	古ジャワ語の韻文叙事詩『デーシャワルナナ Desawarnana（地方の描写）』（通称『ナーガラクルターガマ Nāgarakertāgama（聖なる教えによって完成された王国））』が完成させた。
1520 年～1560 年初頭	ドゥマック王国	ドゥマック王国が誕生した。 ドゥマックは中部ジャワ北岸のジャワ海に面する港市である。ジャワ島でいち早くイスラム化の波が及び、１５世紀後半にムスリム華僑がこの町を建設したと伝えられている。建国者であるラデン･パタの母の影響でドゥマック王国には中国文化の影も見える。ラデン･パタは西部ジャワではバンテン王国およびチルボン王国の勢力拡大を助け，ジャワ海北岸一帯にイスラム教を普及させた。そしてまた東方に対しては 1527 年にトゥバンを征服し、以後 1545 年までの間に東部ジャワの大半を占領した。ドゥマック王国２代目トルンガナ（Trenggono）王の死は内紛をもたらし、ドゥマック王国が衰退してきた。ドゥマック王国の退潮に伴い交易の中心はジュパラに移った。ジャワの王権はイスラム教を奉じ

		るものの、所在箇所は海岸部から中部ジャワの内陸部へ移転した。後継のマタラム王国は内陸の農業基盤の王国であった。ジャワ勢力が海岸地域から撤退することにより、パシシルには新興のオランダ東インド会社が進出してきた。
1528 年-1584 年	パジャン王国	ドゥマック王国２代目トルンガナ（Trenggono）王は義理の息子のジョカ･ティンキル（Joko Tinggir）を中部ジャワの内陸部を統治させた。彼はパジャン（Pajang）王国と名乗り、ソロ近くに王宮を建設した。　ジョカ･ティンキルの家臣、パマナハンはマタラムの地を得て独立しマタラム王国の元祖となった。
1580 年代	マタラム王国が成立	スラカルタのパジャン国とジョグジャカルタのマタラム国は中部ジャワの農業を基盤に輩出した新興勢力であった。マタラム王家始祖スノパティの父パマナハン（Pemanahan）はマジャパヒト王国の代官としてジョグジャカルタの南郊のコタ･グデ付近で勢力を築き、イスラム教に改宗していた。スノパティ（Senopati？-1601）の時代にマタラム国がパジャン国を併合して中部ジャワを統一しマタラム王国を創立した
1596 年	ジャワで最初のオランダ商人の到着	バンテン港にハウトマン（Houtman）船長の率いるオランダ商船が到達したのは 1596 年であり、この 1596 年はインドネシア歴史において重要な意味をもつ。1510 年代のポルトガル船以来、ヨーロッパからの船は馴染みになっていたが、ここにオランダ船の到着が銘記されるのは同船以来、オランダがこのインドネシアの地に進出する契機になったからである。ハウトマンの率いる 4 隻の艦隊はマダガスカル島からインド洋を横切ってスンダ海峡に達した。ポルトガルの支配するゴア（インド西南岸）、マラッカを避け、直接ジャワ島に至るインド洋横断の新航路である。
1602 年	VOC の設立	東インド会社の正式名は「総オランダ特許東インド会社」であり、VOC（De VreenigdeNederlandseOost-IndisheCompagnie）として知られる。会社に対して 21 年間の有効の特許状が下付されアジア貿易の独占が認められた。株式会社であるが、その権限は条約締結、自衛戦争の遂行、要塞の構築、貨幣の鋳造などを含み、あたかも独立国家のように強大なものであり国家の中の国家であつた。会社の株式は 7%を重役が所有し、残りは一般に公開された。取締役 60 名（後に 73 名）から選ばれた 17 名が最高決議機関であった。17 名は資本金比例で都市に割り当てられ、アムステルダムが 8 名を占めた。彼らはレヘントといわれる都市貴族的門閥に属しており、会社の幹部であるとともに議会の有力者であり、会社が民主的に進化する途は閉ざ

		していた。交易実務は選ばれた総督に任せられた。
1603 年	バンテンで VOC 最初の拠点	最初の拠点として、バンテン港で拠点を設けた。
1613 年～1645 年	第 3 代マタラム王スルタン・アグンの統治	勢力を飛躍的に拡大した新マタラム王国は１６世紀末に中部ジャワの農業経済力を基盤に、衰退期にさしかかっていたジャワ北岸のドゥマック、ジュパラなどの交易都市を勢力下に置き、東部ジャワの内陸部にも影響を及ぼした。スルタン･アグン王は矛を転じてジャワ各地に遠征し、ジャワ島は再び統一され、マタラム王国の覇権は近隣の島々に及んだ。
1619 年	バタヴィアの改名	バンテン王国の掣肘を逃れるため、90km 東のチリウン河口のジャカトラの地に転進し自らの拠点を築いた。1618 年、河口の入口に倉庫と建物を築き砦にした。チリウン川に沿って町並みを区画し、バタヴィア（Batavia）と改名した。VOC はバタビアを拠点としてアジア、アフリカの交易との独占を許された。最盛期の VOC はインドネシア以外にはセイロン（スリランカ）、台湾、ケープ（南アフリカ）に領土を有し、タイ、日本、イラン、イェーメン、広東に商館を構えていた。
1628 年～1629 年	バタヴィア攻撃	スルタン・アグンが 2 度にわたってバタヴィア城を攻撃したが失敗に終わった。
1674 年～1680 年	トルノジョヨの反乱	マタラム王国の弱体化がはじまる。アマンクラット 1 世はジャワ史上有名な暗君である。王は中央集権を強引に進めたことから地方貴族の不満を招き、マドゥラ島のトルノジョヨ王子が反乱した。第５代マタラム王アマンクラット 2 世(1677-1703)は VOC の援助でトルノジョヨの反乱を鎮圧した。以降、ジャワ王室は VOC の介入を許し、請われるままにジャワ海沿岸の貿易商権を VOC に切り売りした。

1686 年～1706 年	スラパティ反乱	バリ人奴隷の VOC 軍人であったスロパティ（Suropati）は VOC の横暴に叛旗を翻した。その頃、VOC によって廃嫡されて憤慨していた前国王アマンクラット 3 世と合流して東部ジャワを制覇する勢いにまで拡大しパスルアンに王国をたてた。スロパティは 1706 年に VOC・ジャワ王国連合軍との戦闘で戦死し、アマンクラット 3 世は 1708 年に捕らえられた。スロパティの息子ラクマッド（Rachmad）と部下はなおも VOC とジャワ王室に抵抗し、1708 年にマランで捕らえられた。
1703 年～1708 年	マタラム王国第一次継承戦争	第６代マタラム王アマンクラット３世(1703-08)は反 VOC 言動のため、VOC に嫌われて退位させられ、パク･ブウォノ（Pakubuwono）1 世(1704-19)が就いた。憤懣やるかたないアマンクラット３世は折からのスロパティの VOC に対する反乱に合流するが、1708 年に捕らえられた。
1719 年～1723 年	マタラム王国第二次継承戦争	パク･ブウォノ 1 世に次いでアマンクラット４世(1719-26)の即位に対して王族の大部分が反対し、反乱を起こした。VOC の武力で鎮圧した。第二次継承戦争である。VOC は武力で鎮圧した。VOC は資金と武力援助の見返りを王室に要求したが、王室には国土以外に何も無かった。 継承戦争で貧乏になった王室は VOC に借金の担保としてジャワ海沿岸の商権と領土を差し出した。ジャワ北海岸の領土は次第に蚕食され、1746 年に全パシシル（北部海岸）の権益は VOC にゆずられた。ついでに王国の人事任命権も VOC に与えた。1749 年には後継者問題が暗礁に乗り上げ、王は死の前に王国そのものを会社に譲渡した。
1740 年	バタビアの紅河事件	反乱を計画するの VOC によって疑われ、バタビアの華僑の大虐殺のこと。約 10,000 人の華僑が殺害され、華僑の住宅基地が燃焼された。
1749 年～1757 年	マタラム王国第三次継承戦争	パク･ブウォノ２世の死去に伴う新王パク･ブウォノ３世(1749-88)の継承に対して先王の弟のマンクブミ（Mangkubumi）が他の王族と組んで対立した。両軍は王都の激しい争奪戦を繰り返した。当初は新王側についた VOC であるが、反乱の鎮圧に調停を乗り出し、1755 年の協定を結んだ。
1755 年	ギヤンティ（Giyanti）和議	VOC はマンクブミとギアンティ（Giｙanti）条約を結びマタラム王国は《スラカルタ家》と《ジョクジャカルタ家》に分割され、領地は両者が衡平になるよう分けられた。由緒ある国王の称号もスラカルタ家は「ススフナン」、ジョクジャカルタ家は「スルタン」と分かち合った。
1757 年	サラティガ（Salatiga）条約	マンクブミとともに王家に反乱したパク･ブウォノ２世の甥のマス･サイド（Mas Said）はこのサラティガ（Salatiga）条約でマンク･ヌゴロ（Mangkunegoro）侯と名乗り、ススフナン家から独立した。

1778 年	Koninklijk Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen（バタヴィア学術協会）設立	この協会はオランダ東インド会社の経済活動に資するすべての情報の収集という目的として設立されたが、19 世紀以降オランダ植民地政府に引き継がれ、オランダ東インド諸地域の考古学や歴史の遺品、伝統工芸品や美術品が精力的に収集された。
1799 年	VOC の解散	破産状態になった VOC は解散し、会社の直轄地は「オランダ(蘭)領東インド(Dutch East Indies)」としてオランダ国が直接支配する植民地となった。
1808 年～1811 年	ダーンデルスの統治	ダーンデルスは 1808 年に総督に任命された。主要な任務はジャワ島をイギリス軍の攻撃からから守ることであった。
1810 年	De Groote Postweg が完成	ジャワ島で 1000 キロを超える「郵便道路」が西端の Anyer から東端の Panarukan まで建設された。
1811 年	イギリスの支配	英国のインドのカルカッタにあった英東インド会社はラッフルズの提言のもとに、1811 年、インドの軍隊を動員してバタビアを占領し、蘭領東インドは英国の支配下に入った。
1812 年	パクアラマン王宮の成立	イギリスによってジョグジャカルタ王宮が分割された
1814 年～1855 年	Besluiten Regerings 法の実施	
1815 年	ロンドン条約	イギリスがインドネシアの支配地域をオランダに返還した。
1817 年	ボゴル植物園の開設	西ジャワのボゴルにあり、110 Ha の地域に 1 万種を超える熱帯植物が収集され、栽培された。
1824 年	Nederlandsche Maatschappij 『オランダ商社』が設立	オランダ領東インドからの生産物を運ぶための装置であり、イギリスの勢力を対抗するために設立された。
1825 年～1830 年	ディポヌゴロ戦争（ジャワ戦争）	ディポヌゴロ王子はオランダが道路建設のため行った土地収用をめぐる宮廷内の紛争をきっかけに反オランダを明らかにした。オランダとしては王族を舐めていたが、ディポヌゴロ王子の言動に不安を感じたオランダ側の先制攻撃で戦争が始まった。ディポヌゴロ王子はオランダの植民地支配に対して立ち上がり、1825～1830 年にジャワ中部から東部で戦われ、「ジャワ戦争」といわれる。被支配者であるジャワ人が王族を指導者として、支配者であるオランダと戦った反植民地闘争である。
1830 年	「強制栽培制度」が実施開始	最初に東インド会社が直轄地として入手した西ジャワのプリアンガンで農民にコーヒーの栽培を試験的に実施させてよい成果を得た。オランダはプリアンガン方式としてジャワ島全体へ拡大した。本格的な実施は 1830 年、東インド会社を引き継いだオランダ東インド総督になったヨハンネス・ファン・デン・ボス（Bosch）によって始められた。この制度は 1870 年代ま

		で実施された。
1843 年～1850 年	ジャワ各地に飢饉が起った	
1850 年	Natuurkundige Vereeniging in Nederlandsche Indie 『オランダ東インド博物学協会』が設立	
1854 年～1926 年	Regerings Reglement 『蘭印統治法』の実施	
1855 年	Bromartani 新聞が発刊	ジャワにおける最初のジャワ語新聞であった。スラカルタで発刊された。
1856 年	バタヴィアーボゴール間の電信回線の敷設	
1857 年	バタヴィア―スラバヤ間の電信回線の敷設	
1860 年	『マックス・はーフェラール』が出版された	オランダの小説家ダウェス・デッケルが植民地官使として西ジャワで勤務した体験をもとにムルタトーゥリという筆名で発表した小説。この小説は 19 世紀半ばのオランダ植民地官使と原住民首長の過酷な収奪の実態を描いたものとして、オランダ本国に深刻な衝撃を与え、当時の植民地政策である強制栽培制度を廃止に導く一つの契機となった。
1870 年	『農業二法』の実施	この法律の実施することによって、1900 年まで民間企業が数多くジャワに進出し、いわゆる自由資本主義の時代になった。
1871 年	スマラン―クドゥン・ジャティの鉄道が開通	
1873 年	バタヴィア―ボイテンゾルク鉄道が開通	
1879 年	カルティニが生まれる	4 月 21 日に北部海岸の港町ジュパラで生まれた。
1881 年	電話会社が設立	

1882 年	スマラン―ジュアナ・ブロラ鉄道が開通	
1884 年	スマランとスラバヤに電話回線が敷設	
1888 年	Koninklijke Paketvaart-Maatschappij (KPM)開設	国営船運送会社の開設
1897 年	スマラン―チレボン鉄道が開通	
1899 年	『名誉の負債』が表われた	この人道主義は C.Th. ファン・デフェンテルの考え方で、オランダは強制栽培の時代に東インド諸島の富を奪い取ったのであるから、名誉にかけて返済すること、すなわち、オランダの国庫より植民地の財源に援助を与え、東インド諸島の住民の福祉を増進する義務があるとする主張であった。
1900 年	華人商人の協会である中華商会『Tionghoa Hwee Kwan』の設立	
1901 年	マレー語のローマ字化	Van Ophuijsen が考えたマレー語の表記が正式に使用されるようになった。それ以降、マレー語の表記ではアラブ語の文字が使用廃止になり、ローマ字化になった。
1901 年～1937 年	『倫理政策』の実施	オランダの進歩的思想の下院議員ファン･デーフェンテル（van Deventer 1857-1915）がその主導者であり、オランダはジャワ農民に対して“名誉の負債”を負い、植民地住民への倫理的責任とであり、道徳的義務があるというものである。1898 年に即位したオランダのウィルヘルミナ女王が 1901 年議会開院式で宣言した。オランダの財政的援助は農業開発を援助し、原住民のために保険・教育のサービスを提供することとなった。
1905 年	イスラム商業同盟（Sarekat Dagang Islam）の結成	華僑は同郷や同族の会館を設立し団結していたのに対して、プリブミはバラバラであることが経済的に立ち遅れの原因であるとしてプリブミの団結を訴えた。サマンフディ（Haji Samanhudi 1868‐1956）はソロの富裕なバティック業者によって 1905 年、ソロにイスラム商業同盟が発足し、ボイコットという手段で横暴な華僑の要求を退けた。

1908 年	Budi Utomo 結成	最初のジャワ人の民族主義団体。ワヒディン（WahidinSudirohusodo, 1857-1916）医師は教育の必要性を説き原住民の優秀な青年のために奨学金制度を呼びかけ、王室の一族やプリヤイに賛同者をえた。ワヒディン自身はジャワ文化を愛好するジャワ的人格者であった。若い医学生ストモ（RadenSutomo 1888-1938)はワヒディンの影響を受け、ブディ・ウトモ(Budi Utomo）を組織し、1908 年 5 月 20 日に第 1 回大会を開催した。ブディ・ウトモとはジャワ語で「最高の英智」という意味である。
	原住民学校及び人民の図書普及委員会の成立	原住民社会の文化向上を目標に、オランダ植民地政府が設立した委員会
1912 年	東インド党（IndischePartij)結成	オランダ領東インドの政治団体。ジャーナリストのダウエス・デッケル、ジャワ人の医師チプト・マングンクスモ、ジャワ人貴族の出身スワルディ・スルヤニングラトという 3 人の民族主義指導者が発起した。
	イスラム同盟（Sarekat Islam)結成	イスラム教徒であるとの自覚から発した連帯としてイスラム商業同盟は 1912 年に「イスラム同盟（SarekatIslam=SI）」に発展した。インドネシア人という概念のなかった当時においてはイスラム教を軸にして始めてジャワのみならず外島の原住民の結集が可能となった。
	ムハマディヤ結成	インドネシアのイスラム改革を目指す社会団体。以来、今日に至るまでイスラム社会の近代化を推進する団体として様々な活動を続けている。
1914 年	インド社会民主同盟（ISDV)結成	中部ジャワ、スマランで、スネーフリート（Sneevliet）やバールス（Adolf Baars）らオランダ人と欧亜混血児によって、東インド社会民主主義同盟（IndischeSociaal-DemocratischeVereniging、略称 ISDV）が設立された。翌 1915 年には『自由の声 Het VrijeWoord』（オランダ語機関紙）を発行して、社会主義思想の宣言に努めた。東インド共産党の前身である。
1914 年	国際植民地博覧会の開催	ジャワ島スマランに「KolonialeTenstoonstelling 1914」が開催された。フランスから独立した 100 周年を記念として開催され、日本、オーストラリア、アメリカなどが参加した。
1917 年	バライ・プスタカ（BalaiPustaka）の設立	文化事業局として欧米の書籍の収集と西欧文学作品のマレー語への翻訳の他、東インド各地の民話、年代記などの収集と出版を行った。
1918 年	オランダ領東インドに国民参議会（Volksraad)開設	オランダは倫理政策の一環として 1918 年に国民参事会（フォルクスラート Volksraad）を発足させた。国民参事会は総督の諮問機関であり議決機関でない。発足当時の議員の割当てはヨーロッパ人 20 名、原住民 15 名、外来アジア人（華僑）3 名であった。1931 年に定員を従来の 38 名から 60 名に増員して半数を原住民（インドネシア人）に割り当てた。オランダ語と並

		んでムラユ語を国民参事会の討論の公用語とした。高まる民族主義の声にオランダは倫理主義をかなぐり捨ててスカルノ、ハッタ、シャフリルを逮捕し流刑にしたが、一方では協調路線の穏健な民族主義者を国民参事会に登用し民族主義運動を弱くした。
1920 年	東インド共産党結成	アジアの最も早く創立した共産党。20 年代前半は労働運動を軸に活動し、独立を望む民衆に影響力を与え始めた。1924 年にインドネシア共産党に改名した。
1922 年	タマン・シスワ開設	ジャワ島ジョグジャカルタで、スワルディ・スルヤニングラトを指導者として設立された民族主義的な私立学校。タマン・シスワは「学童の園」を意味する。植民地の教育と教育理念に対抗するものとして、各地の人々に広く受け入れられ、1930 年代半ばには 200 以上のタマン・シスワ学校がジャワ、スマトラ、スラウェシ等に設立された。
1926 年	インドネシア共産党の武装蜂起	武装革命への道を求め、1926 年から 1927 年にかけて、ジャワやスマトラ各地で起きたが、たちまちオランダに鎮圧され、党は非合法化された。
1926 年	ナフダトゥル・ウラマの結成	東ジャワの中小都市および農村部にあるイスラム塾（プサンとレン）の主宰集団を中核として結成されたイスラムの代表する政党・社会団体。
1927 年	インドネシア国民党結成	スカルノを党首として結成された民族主義政党。インドネシアの統一と団結、インドネシアの独立を掲げ、それ以前にイスラム同盟やインドネシア共産党が主導した運動に参加した人々を再結集すると共に各地の政治団体と各種の政党の大同団結を図った。
1928 年	第 2 回インドネシア青年会議	10 月 28 日、第 2 回青年の集いが催された。【青年の誓い（SumpahPemuda】として決議された内容は次の有名な 3 ヶ条である。１．我々インドネシア青年男女はインドネシア国というただ一つの祖国を持つことを確認します。２．我々インドネシア青年男女はインドネシア民族というただ一つの民族であることを確認します。３．我々インドネシア青年男女はインドネシア語という統一言語を使用します。
1939 年	インドネシア政治連合（GAPI－GabunganPolitik Indonesia)結成。第 1 回インドネシア人民大会	ジャカルタにおいて結成された諸政党の統一体で、パリンドラ、ゲリンド（インドネシア人民運動、パスンダン（スンダ人連盟）、ミナハサ同盟、インドネシア・イスラム同盟党、インドネシアイスラム党、インドネシア・カトリック党の 7 団体がこれに加盟した。この連合はオランダがインドネシア自治政府の成立を認めることを前提として、インドネシア人民をオランダ支持に向けて導くことを骨子とする「ガピ宣言」を出した。
1942 年	日本軍のジャワ占領	1942 年 3 月 1 日、日本軍がジャワ海海戦を潜り抜け、西部ジャワのバンテ

		ン湾、中部ジャワのエレタン、東部ジャワのクラガン岬の３方面からジャワ島に上陸した。日本軍の進撃を止めるものはなく、3 日ボゴール、6 日バタビア、７日スラバヤ、レンバン、チラチャップを占領した。
1944 年	ジャワ奉公会の設立	日本軍政の工作の一環として軍政協力者を動員するために作られた大衆組織である。スカルノを総裁とされ、下は村落レベルに至るまで広範なネットワークを築いた。この団体は、軍当局が住民を統制し、かつ動員するためのパイプとして重要な役割を果たした。
1945 年	インドネシア独立宣言	8 月 17 日にジャカルタでスカルノ・ハッタを代表として、インドネシアの独立宣言が行った。

出所：

石井米雄、高谷好一、土屋健治等監修、『東南アジアを知る辞典』、平凡社、1997 年

平野健一郎、山影進、岡部立味、土屋健治、『アジアにおける国民統合』、東京大学出版会、1988 年

G. Coedes, “The Indianized States of Southeast Asia”, The University Press of Hawaii, 1971.

Lombard, Dennys, ″Nusa Jawa Silang Budaya 1: Batas-batas Pembaratan″, Gramedia Pustaka Utama, 2005.

Ricklefs., M.C., ″Sejarah Indonesia Modern″, Gadjah Mada University Press, 2005.

津田梅子とその歴史年表

年	月	津田梅子の一生	年	日本と近代教育歴史事項
1864 年	12 月	3 日、江戸牛込南町（現在の東京都新宿区内）に父・津田仙と母・初の次女として生まれる。		
			1865 年	薩摩藩士・森有礼ら 19 人がイギリスへ留学する
1867 年	1 月	津田仙が幕府の使節団に加わり、アメリカにわたる。		
			1868 年	福沢諭吉が塾を慶応義塾と改名した。
				江戸が東京と改める
1869 年		津田仙が東京築地の「ホテル館」に勤める		
1871 年	1 月	津田仙が「ホテル館」を辞め、都内の農園でアスパラガスやイチゴなどの栽培を始める	1871 年	文部省を置く
	11 月	梅子が北海道開拓使が決めた五人の女子留学生の一人として、岩倉具視ら政府の使節団とともにアメリカに向かう。		廃藩置県
1872 年	1 月	梅子らがサンフランシスコに到着	1872 年	学制が定められ、全国に小学校が創られはじめた
	2 月	ランマン夫妻の家に預かれる		
1873 年	1 月	津田仙がウィーン万国博覧会に出席する		
	7 月	キリスト教の洗礼を受ける		
1874 年	6 月	梅子が学芸会で詩を暗唱し、地元の新聞にのった		
1875 年	1 月	仙と母・初がキリスト教の洗礼を受けた	1875 年	同志社英学校が開かれた。
1876 年	1 月	津田仙が東京麻布に学農社農学校を創った	1876 年	クラーク、札幌農学校の指導者として来日
			1877 年	西南戦争
				東京大学が開かれた
1878 年	9 月	津田梅子がワシントンのアーチャー・インスティチュート（今の高校にあたる女学校）に入学	1878 年	地方三新法によって全国統一の本格的な地方自治制度が確立した。
1882 年	6 月	アーチャー・インスティチュートを卒業した		
	8 月	捨松と共に帰国した		
1883 年	11 月	伊藤博文と再会	1883 年	陸軍大学校開設。鹿鳴館開館。
	12 月	伊藤家に住み込み、通訳兼家庭教師と		

		なった		
1884 年	2 月	桃夭女塾で英語を教える。下田歌子から国語を習った。		
	6 月	伊藤家を出る		
1885 年	9 月	華族女学校の教授補になった。	1885 年	初めて内閣が成立し、伊藤博文が総理大臣、大山巌が陸軍大臣、森有礼が文部大臣となった
1886 年		同大学で教授となった	1886 年	小学校令が定められ、保護者が児童に教育を受けさせる義務うぃ初めて明らかにした。
1888 年	6 月	アリス・ベーコンが華族女学校講師として来日し、梅子と暮らし始める。		
1889 年	7 月	華族女学校の教授のまま再びアメリカへ行く	1889 年	大日本帝国憲法が発布された
	9 月	ブリンマー大学へ入学する。生物学を専攻。アナ・ハーツホンと出会った。	1890 年	「教育勅語」が定められた
1891 年	1 月	オズウィーゴー師範学校で教師法を学ぶ。		
	8 月	モリス婦人を委員長として「日本婦人米国奨学金」の募金開始、この募金のため梅子は講演を行ったり、懇親会に出席したりする。		
	9 月	ブリンマー大学に戻り、研究を続ける		
1892 年	6 月	ブリンマー大学選科を修了し、8 月に帰国した。		
	9 月	華族女学校の教授に戻った。		
			1894 年	日清戦争勃発
			1895 年	下関講和条約調印
1898 年	5 月	女子高等師範学校の教授兼任となる		
	6 月	万国婦人連合会に出席するために、渡辺筆子とともに横浜を立つアメリカのデンバーへ行く。		
	8 月	ヘレン・ケラーを訪ねる		
	11 月	英国の名流婦人らの招待を受け、イギリスにわたり、各大学などを見て回る。		
1899 年	4 月	イギリスを立ち、アメリカへもどる。	1899 年	2 月・高等女学校令公布
	7 月	日本へ帰国		8 月・私立学校令公布
1900 年	4 月	梅子が学校設立を助けるためにアリス・ベーコンが来日	1900 年	教員免許令公布
	7 月	華族女学校および女子高等師範学校の教授を辞する		東京女子医学校開設
	7 月	20 日・女子英学塾の創立を東京府知事に申請		

		26 日・私立学校令により、女子英学塾の設立認可。東京市麹町区一番町 15 番地（現在の千代田区一番町）の借家を校舎にあてる		
	9 月	11 日・入学試験を行い、入学者 10 名		
		14 日・開校式を挙げる。教員、生徒、来賓等 17 名参列		
		17 日・授業開始		
1901 年	4 月	塾を同区内の元園町に移す	1901 年	日本女子大学校が開設
1902 年	4 月	アリス・ベーコン米国へ帰国		
	5 月	アナ・ハツホンが来日、塾の講師となった		
1903 年	2 月	塾を同区内の五番町に移す。元園町校舎は寄宿舎となった	1903 年	専門学校令が定められる
	4 月	第 1 回卒業式を行い、8 名卒業生を出す。		
1904 年	3 月	専門学校令による専門学校の認可を受ける	1904 年	日露戦争が勃発
	9 月	民法第 34 条により社団法人女子英学塾の設立を許可される		
1905 年		塾の卒業者は無試験で英語科教員の免許を得ることが文部省から認められる。		
1907 年	1 月	欧米視察旅行のため横浜出港	1907 年	義務教育 6 年制が開始、小学校が 6 年間となる
	9 月	ワシントンでルーズベルト大統領に会う		
1908 年	1 月	欧米視察旅行を終え、帰国		
	4 月	津田仙、71 歳で亡くなった		
1909 年	8 月	母・津田初 69 歳で亡くなった	1909 年	伊藤博文が暗殺された
1913 年	5 月	世界キリスト教学生大会に出席するため、アメリカへ行く		
	11 月	日本へ帰国	1914 年	～1918 年まで　第一次世界大戦
1917 年	5 月	梅子が初めて入院する		
1919 年	1 月	塾長を辞任する決意		
1922 年	11 月	女子英学塾、小平に新しい土地を買う		
1923 年	9 月	関東大震災で五番町の校舎が全焼	1923 年	関東大震災
	9 月末	アナ・ハツホンが塾の資金を集めるため、アメリカに行く		
1929 年	8 月	津田梅子 64 歳で亡くなった		
1932 年	5 月	小平の新校舎が完成		
1933 年	7 月	女子英語塾が津田英学塾と改称		
1948 年	3 月	津田塾大学となる		

出典：津田塾大学、『津田塾六十年史』、1960 年